平成28年度広域科学教科教育学研究経費報告書

国際化時代を視野に入れた歴史・文化・教育に関する戦略的研究

研究代表者　石井正己

平成29年（2017）3月発行

平成28年度広域科学教科教育学研究経費報告書

国際化時代を視野に入れた歴史・文化・教育に関する戦略的研究

研究代表者　石井正己

平成29年（2017）3月発行

目　次

漂流者と回遊魚シイラをめぐる生態民俗ー漂流記、難船絵馬ー　橋村修　3
韓国の教科書と昔話　金廣植　12

特集　アジアの歴史・文化・教育

翻訳における異民族の文化受容についての思考
　ーモンゴル族の本森(ベンセン)・烏力格尓(ウリゲル)を事例にー　巴特尓　22
『官話指南』の編者について　楊鉄錚　26
通州師範学校と日本人教習ーその活動と評価についてー　劉佳　35
李太郎の北京　范文　44

特集　日本の文学

「夢浮橋」の論理ー『源氏物語』末部における文と「浮橋」をめぐってー　水野雄太　54
『太平記』三種神器考ー「似せ物」をめぐってー　安松拓真　61

国語・日本語教育史における神話教材のイデオロギー　石井正己　68
帝国日本が編纂した内国植民地の教科書
　ー『北海道用尋常小学読本』『沖縄県用尋常小学読本』ー　石井正己　71
井上通泰と柳田国男～兄弟の絆～　石井正己　78
井上通泰の華麗な人脈　石井正己　82

編集後記　96

凡例

一、現代では不適切な表現と考えられる言葉があるが、歴史的な意味を考慮して残した。
一、論者が旧漢字で引用した表記があるが、便宜上、新漢字を使ったところがある。
一、敬称は省略した場合が多い。
一、行間が狭いため、振り仮名を漢字の後に（ ）で入れた場合がある。

漂流者と回遊魚シイラをめぐる生態民俗
―漂流記、難船絵馬―

橋村修

1　はじめに

海上で操作不能に陥った漂流者が、その極限状況のなかでどのような行動をとるのか。そこには、絶望感と悲壮感があるが、わずかな可能性を求めて必死に動こうとする漂流者の姿が垣間見える。本稿では、極限状況の漂流者の海上における行動について、漂流絵馬や漂流記を取り上げ、自然と人との関わり（特に魚）に注目する。この課題は生態民俗学的な観点からも重要な論点ではあるが、十分な研究があるとは言えず、資料収集、調査の段階にあるので、本稿では資料紹介をおこない、考察展開は今後の課題としたい。

20 世紀のノルウェーの人類学者で探検家でもあるトール・ヘイエルダールの『コン・ティキ号探検記』には、大西洋や太平洋を漂流するコン・ティキ号の周りにやってくる魚のことが記録され、とりわけシイラやトビウオのことを詳しく記している。神宮滋は、『秋田領民漂流物語ー鎖国下に異国を見た男たちー』（神宮 2006）の「第 1 章　享保十年能代の三郎兵衛、万太郎、朝鮮国へ漂流」のなかで、「9 月 6 日昼夜の大雨風は前日と同じでした。朝の内橋船が吹き返され、前のように海に入りましたが、昨日の通りで助かりました。機引網がすれ、水へ入った処へ三尺ほどの鰤が喰付きましたので、船へ引き上げ脇差で切って、十四人で給べました。この機引網を上帯の先へ結付け、海へ入れ置きましたら、又々右のような鰤が喰付きましたので、同じく給べました」（「朝鮮国え漂流の次第水主申口」）（抄訳）と紹介し（21 頁）、この部分について「船に寄り付いた「ぶり」や「しいら」を食べて飢渇をしのいだ話は他の漂流記にも見える。これらの海魚は漂流者の命の恩人と言ってよい。」と解説している（28 頁）。

筆者は、回游魚のシイラを縁起のいい魚、聖なる魚としてとらえる地域が国内外に存在することを明らかにしたが、その理由を考える一環として、太平洋や大西洋の探検記、漂流記などの記述にシイラがよく登場し、漂流者が救われた記述が一部にみられることを指摘した。しかし、その具体的な事例の紹介は課題としていた（橋村 2009：127 － 143 頁）。そもそも、漂流者と魚との関係を示した研究は皆無であり、まずはそれを示す資料を提示する必要があるものと思われる。そこで、本稿では、漂流者と魚（特に回遊魚のシイラ）との関わりを示す国内外の漂流記や探検記にみられる記述を紹介していく。日本近世の漂流記については、『日本庶民生活史料集成　第 5 巻　漂流』の解説で石井謙治が当時の船が荒天時にどのような対応をしたのか、漂流を始めた際の行動などについて紹介している（石井 1968：869 － 884 頁）。

2　国内の近世期の漂流記にみえる回遊魚

次頁の写真 1（上）は金刀比羅宮に明治期に草戸村から奉納された船絵馬である（須藤 2009）。船の海難を描き、船の中で人々は必死に祈っている。右上の御幣は金毘羅様を示し、海難船を救いに来ている様子である。このような構図は、「難船絵馬」とも呼ばれることもあり、明治期の船絵馬に多く見られるという。写真 2（下）は 1843 年作成とされる地中海マルタのメリッハの教会にある絵画である（A.H. J .Prins　1989）。嵐の中を進む船の左上にマリアが描かれている。ヨーロッパでも古くから海上における危難をマリアもしくはある特定の聖人の加護で奇跡的に逃れた船乗りが感謝の念をこめて教会に絵馬（Ex-Voto　Marins）を奉納したという。プリンスはマルタ各地にある教会に奉納された絵馬に注目し、民俗学的な視点も加味しながら、詳細に分析をおこなっている。この絵馬の船を和船にして、マリアを金毘羅の御幣にすれば、写真 1 の難船絵馬ともなろう。このような構図の「絵馬」が洋を超えてなぜ存在していたのか興味深い問題であるが、日本とヨーロッパの比較文化の視点からの学術的な解明は十分におこなわれていないようだ。

こうした信仰の側面も注目しつつ、以下では日本列島の近世期の漂流記にみられる漂流者と魚との関係をみていきたい。

史料の下線は、筆者が本稿の議論で重要と思われる部分にひいたものである。『南海紀聞』をみて

いこう。これは、ミンダナオ島周辺の島に漂着し、スールー海域で奴隷生活を送り、帰国した人物の体験記録である。1764（明和元）年、日本近海で漂流を始めた際に、「此の洋中も鰤猫面の類多ければ、（猫面唐名詳ならず。大和本草曰、しいら、又名くまびき、筑紫にて猫つらと云。）種々の巧思を以て釣たるに其中には四尋に及鰤などをも釣ければ、此にて食物の助を得たり、…」とある。「鰤」、すなわちシイラを「猫面」と筑紫の呼び名で表現している。それを釣り上げて漂流者の食物となっていることがわかる。江戸末期と推測される年不詳の『紀州口熊野漂流噺』（石井謙治所持本）には、「洋中に漂ひ居候内、鰤、しゐら等、大小四十本釣取、又凡五百貫（本のママ）目程も有之ぶり壹本突取…色々と命を繋ぐ…」とある（（『日本庶民生活史料集成　第5巻　漂流』収録版）。

Plate 24
Panel offered to Our Lady by the crew of the speronara "S. Francesco di Paola" after a storm, 9 December 1843.
(38 x 26 cm) Artist unknown
Serial Nr. 25.37 Sanctuary of Our Lady
Class V Mellieha

次に池田寛親『船長（ふなおさ）日記』を取り上げる（『日本庶民生活史料集成　第5巻　漂流』収録版）。これは、三河国新城の菅沼家用人池田寛親（ひろちか）（藍水）の著した尾張船督乗丸（1200石）の漂流記で、1822（文政5）年に完成したもので、1813（文化10）年旧11月江戸から復航中遠州灘で遭難し、484日間の漂流を経てカリフォルニア沖で英国商船に救助され、米国、ロシアを経て1816（文化13）年帰国したが、その沖船頭重吉の体験談に基づいて著された。これには日本近海の太平

洋において、「八月廿日頃には、二人共に魚を釣りに出るやうになりたり、互いに歓び、日々魚を釣、暑気強き故釣りと其儘食せされは、少しの間にも忽ちくさる、しひと鰹とどうやくといふ魚のみめなれたる形にて、其外は何共しれぬ魚斗也」とある。「しひ」はシビ（鮪）、「どうやく」は十百とも書き、シイラの土佐や紀州での異名である。『海外異聞』は兵庫の船が相模國浦賀をでて漂流してアメリカに至る動きを記したものである。1841（天保 12）年 8 月には「翌壬寅の春…海の静かなる時は、常に帆を縫う針を曲げ、鹿の角、或ひは松の木の節などにて、餌に似たる形を作り、鰤、九万匹の類ひを釣りて、是を食す。」とある。「九万匹」（くまびき）はシイラである。

上記のように、船の操舵ができなくなり、漂流が開始された後、飢えにより船の周囲に寄りつく魚を何とかして捕ろうとする行為は、各漂流記にみられる。1838（天保 9）年 11 月に仙台領唐丹港沖で遭難した越中富山の長者丸が米国の捕鯨船に救助された記録『時規物語』では、1839（天保 10）年 3 月初めに「船のほとりへ青鰤（はまちなりといふ）多く寄候へども、捕べくやう無之に付、竿の先へ壹尺計の釘（船中に釘大小品々貯おき申候）をつけ、夫に二三寸の釘を折違にくくり付、かへりとなし、是にて折角突候處、折々突留候事有之、其節いづれも早速生にて喰候處、うまき事此上なく覚申候。」とある。釘を用いて釣針をこしらえている。

1841（天保 12）年の秋から太平洋を漂流した千石船の栄寿丸の船頭の記録である『東航紀聞』では「風波穏なりし日は、牛角もて魚を釣獲て粮にしたりし。（牛角は熊野の海にて鰹魚を釣るに用ゆ。偶此ものを携ありて用ゐしなり。然るに牛角は大魚に噛破られ、其後は舩釘を斜にして鳥毛を交えて釣針にせり。）其の魚は鰤、飯（はまち）、鰯（しいら）、藻魚等なりし。」とある。牛角、舩釘と鳥の毛を用いて釣針を作っている。

次に『加能漂流譚』所収の加賀藩（現在の石川県）領からの漂流者の記録をみていこう。「皆月村彌三兵衛異国へ漂着の次第口書」（『加能漂流譚』1938 年所収）である。捕った魚を使った調理法や料理がうかがわれる。

「此末（12 月末）の食物日々乏敷相成候に付、魚釣相初度候へ共，左様の道具迚も無御座に付、帆針を曲げ、根付に相用候鹿の角有之候に付、切碎餌代りに仕、持合居糸に付け、船垣の竹の先きに結付、海中へ下げ置候へば、鰯或は鮪抔取得申に付、引上げ右芋と一つ鍋に入、右の内へ米少々宛加へ粥に焚、給罷在申候。併右鰯等釣れ不申日は、船板裏に付候しぶと申貝を取、同様芋と交焚き粥に仕、兎角給延し申儀専一に仕罷在申候。勿論風波強儀は少も止不申、今こそ命の終敷と存候事間々有之儀に御座候。」「四月上旬より五月へ至、鰐・鰯・鰹・鮪等其外小魚共船の四方を囲み候故、兩人にて余程釣取申に付、櫓へ上げ干立、扨潮を汲取釜にて煮立候へば、少々塩山来申候故、前段干立候魚共塩漬に仕、悉く干立貯置き、其後の食用に仕衰敷露命を繰ぎ、昼夜相過申候。」

皆月村は能登国鳳至郡に位置し、現在は石川県輪島市域に入っている。この記述から、鹿の角を疑似餌で船にぶら下げておいたところ、シイラなどが釣れたこと、また長く魚が釣れない状況が続くなかで、船に寄ってきた鰐（サメ）や鰯（シイラ）などをつかまえ、塩漬けにして保存食として残そうという努力などがわかる。

「天保三年壬申八月　塵濱村清兵衛バタンへ漂着の次第口書」（『加能漂流譚』1938 年所収）（清兵衛　當辰 27 歳。）を紹介する。漂流時の必死の祈りと魚との関係がうかがわれる史料である。

「10 月 23 日　又々大荒。…初帆切候砌より、イソベサマと相唱候鰐二ツ船に付居候躰に御座候へ共、何も心付不申、沖にて汐上げ候時、イソベサマと心付、右は伊勢大神宮の御使神と申候て、江戸渡海仕候者は甚だ信仰仕、難船仕候節は毎もイソベサマを相頼、無事を祈申儀に御座候。イソベサマ斯様に船御守乍被下、波風も強く日々大荒仕、且船邊へ近付不被下儀、何れ船中不浄の品積受居申にて可有之と、段々相しらべ候へ共、左様の物も無御座内…長持の内重々穿鑿仕、不残打明相しらべ候處、一指の内馬具少々有之、必此品にて可有之と存、取出し打捨申候。都て江戸海にては馬と申事甚だ嫌ひ申儀にて、右故斯様に打續大荒等仕候儀と其節何れも存居申候。其の後はイソベサマ日々船邊に付居、高波に相成候へば表と艫とを囲ひ、波を除け、其長さ十四五尋にも相成居、風波も無之時は、一尺四五寸の小鰐に相成、船端に常に付居被申候。其内私共、魚共給候はゞや抔と咄合候所、其の日イソベサマ沖より多くの魚共追廻し來、船の邊しいら・こゝり鯛・ちん鯛・鰹・其外見馴不申小魚共追廻被申候故、捕申度候へ共、釣針とても無御座、いかにも多く集り居候に付、帆縫上候六寸計の鈎人々所持仕候を曲げ、其の儘投げ込み候處、未だ魚にも屈不申内より飛付々々、暫時の間に魚多く捕申候。何も打寄料理仕、生の儘食申候。其の後日々小魚四ツ頃より夕七ツ頃迄船の邊へ被追寄候に付、少泙候日は打寄、此頃の疲を休め居申候。捕上候しいらの頭等イソベサマへ上候へば、心能く受被申候。此後金の御幣下り候頃、イソベサマ付被居申候へ共、其の後何方へ参候哉、相見不申候。」（24－25 頁）

これは、加賀藩領の能登国羽咋郡塵濱村（現在の石川県羽咋市西部）の清兵衛の乗った船が漂流し、

フィリピンのバタン諸島にたどり着く記録である。日本近海で嵐に遭遇し、漂流していた 10 月 23 日（年不詳）の記録である。祈り続けて、伊勢大神宮のお使いである「イソベサマ」（小鰐とありサメのことか）を招くことができた。「イソベサマ」に追い廻されたシイラ等の魚が船にやってきて、それらの魚を捕って食べて救われたこと、御礼として「しいらの頭等」をイソベサマに差し上げたことなどが記されている。シイラが飢えに苦しんでいた漂流者の食糧となり、彼らを救うことにつながったこと、「イソベサマ」への御礼として鰹（カツオ）など数ある魚のなかからシイラの頭が選ばれていたことは、シイラの聖性を考える上で、極めて重要な記述である。なお、塵濱村に近い羽咋郡富来村では江戸時代からシイラ漁業が盛んにおこなわれており、清兵衛はシイラの存在をよく知っていた可能性がある。

なお、「イソベサマ」やサメについては、1850（嘉永 3）年 11 月 24 日の漂流の様子を記した『漂流記』に次のような記載がある。『漂流記』は、アメリカへ漂流したジョセフ・ヘコ（播州彦蔵）が文久 3（1863）年に刊行した。

「廿四日　西風和らかなり。凡五時頃と覚る時分、遙に見るに、舟に向ひ来るもの有り。是を見て或ハ云ふ。伊勢国磯部明神の我々を助け給はんか為に乗り給ふならんと。是に少しく心を慰め、皆々見るうちに、次第に近寄、其形ちをミれハ、大なる鰐鮫二疋並び來り、見るも中々恐ろしく、若今是か為に船砕けなは、忽ち彼の魚の食とならんと恐怖し、又は泣涙せるものも有し。然るに幸ひに大魚何れへか行けん、遂に形ミへすなりけり。」

ここでは磯部明神である「大なる鰐鮫」が恐ろしい存在として扱われている。前の能登羽咋郡塵濱村清兵衛の事例では「小鰐」であった「イソベサマ」が大変敬われていることと対照的である。

日本近世の漂流記にみられる魚（特にシイラを中心に）との関係を示すいくつかの記事を紹介してきた。ここまでで言及できることとして、次の点を指摘しておきたい。日本列島の近海で嵐に遭遇し、船の操舵ができない状況に陥り、漂流を始めた。その段階で飢えをしのぐために船の下に集まる魚、とりわけシイラを釣るために、鹿角や牛角、舩釘で針を作って捕獲しようと試みる。その魚の回游を「イソベサマ」などに祈願し、うまくいけば、お礼としてシイラの頭を捧げ、継続して回遊するように祈願している。漂流者と魚との関係は、日本の近海で漂流してからすぐに始まり、シイラに飢えを救われる傾向があるようだ。シビやカツオ、シイラなど馴染みの魚をみて安心する様子もうかがわれ、魚がまだ日本近海にいる判断基準になっていることも推測される。

次に 1944 年 12 月 1 日に鹿児島県志布志を出港した内之浦行き連絡船嵩山丸（22 名乗船）が 42 日間漂流し、米軍にサイパン近くで撃沈、唯一生存した男性（良二氏）へのインタビューをもとにした記録である。シイラが登場する。

「船のまわりを泳いでいる魚はたいていいつもシイラだった。鹿児島ではマンビキと言い、大きいものは 1.5 メートルを超える。海上を流れているものに寄ってくる性質があり、これを利用したのが玄界灘の「シイラ漬け漁」だ。孟宗竹でイカダを作って一ヵ月ぐらいほっておき、シイラのすみかになったところを一網打尽にするのである。（中略）シイラの、こんな茶目っけのある仕種は良二も経験した。船腹の板が一枚割れていて海水が流れ込むので、その穴をふさごうと詰め物を手に、船べりへ身を乗り出した。その頭を数匹がこつんこつんと突っつくのである。びっくりして大声を上げたら、近くにいた連中があわてて彼の腰のベルトをつかみ、引き起こそうとした。ところがベルトが塩水につかってもろくなっていて切れてしまった。反動で良二はドボーンと落ちた。さすがのシイラたちも驚いたか、ぱっといなくなった。」（南日本新聞社編 2010：82 頁）

「漂流物にシイラが集まるのは、そこにプランクトンが発生し、プランクトンを食べるために小魚が集まるからだ。シイラはこの小魚が目当てだ。その漂流物は、ときに死体でもあるわけで、そんな光景を目撃した人の言い伝えから、シイラを忌み嫌うところもある。（中略）しかし地獄の使者であろうと生きるか死ぬかの瀬戸際だ、タブーなど考えている余裕は嵩山丸にはない。食えるもの何でも取って食わなければならぬ。機関長の北村今朝義が舫い竿を持ってきて、木幡がこしらえた釣り道具を結び、見当をつけて海へ投げ込んだ。針は返しもついていない不格好なしろものだったが、そこは器用な木幡、ねじり具合に独特の工夫をこらしている。たちまちぐぐっと手ごたえがきた。引き揚げると、長さ 1 メートルものシイラだ。船上に歓声が上がる。北村はたて続けに 6 匹を仕止めた。釣り上げる北村の技術は、さすがに年季が入っていて頼もしい。しかし、このシイラという魚、奇妙な習性を持っていることが間もなくわかった。いつも船のまわりに群れてはいるのだが、朝と昼では魚体の色が違う。朝は鮮やかな緑色、昼は銀色。釣れるのは緑色のとき、それも早朝だけで、昼間はエサに見向きもせず、名人北村さえ釣り上げることはできないのである。釣った魚の料理役も、もっぱら北村だった。嵩山丸に限らず、どんなに小さな船でも客船には台所がついていた。交代で毎晩船員が泊まり、自炊する。北村は昼はたいてい船でおかずをこしらえた。それもほとんど毎日魚だから、さ

ばくのはなれている。（中略）シイラは鮮魚のままでは特有の臭みがあって肉は水っぽく、鹿児島ではほとんどが塩干物にされる。ところが、実はこの「水っぽさ」が漂流者に何よりもありがたい。飲み水の代用品になるのである。ボンバールによると、シイラの水分は78.9パーセント（マグロは58.5パーセント）もある。彼は漂流の途中、釣り上げたシイラの肉を刻んでシャツに包み、しぼって水分を確保した。」（南日本新聞2010：82 － 85頁）

漁業関係の遭難の内容でシイラを取り上げた文学作品として新田次郎の『珊瑚』（新潮社、1978年（昭和58年文庫化））がある。この小説は、五島列島の明治期のサンゴ捕りの様子を描いている。「「海難に会った者は、波にもまれて着物を剥がされ、真裸になって死んでいた。その腐爛死体をまんびきの群れが食い荒らしていた」などという話が伝えられた。まんびきはこの地方の呼名で、しいらという魚のことである。この遭難以後しばらくは福江島の人たちは、この魚をいっさい口にしなかった。」（文庫版 307 頁）。新田は、シイラを死人との関係で嫌われた存在の魚として描いている。死体に付く点はエビスとしての評価もあり、さらに検討すべきである。

３　海外の太平洋・大西洋の漂流記にみえる回遊魚

第二次大戦後のアメリカやヨーロッパで出版された太平洋大西洋の漂流記にも魚が出てくる。まず、太平洋や大西洋で漂流実験を実施したノルウェーの人類学者ヘイエルダールによる『コン・ティキ号探検記』（1947年）をみていこう。

「1週間ほどして、海は前よりも静かになった。そして、緑色…海の上にひとり残された最初の日から、筏のまわりの魚に気づいていた。しかし舵をとることで一生懸命だったので、魚釣など考えてもみなかった。…」

「われわれはいま南赤道海流の中にあって、ガラパゴスの南、ちょうど400海里のところを、西の方に動いていた。（略）波が上がると、ウミガメの下の水の中に、緑色や青や金色の光が見えた。そしてウミガメが、シイラと生きるか死ぬかのたたかいのまっ最中であるということを発見した。たたかいはあきらかに、まったく一方的だった。12匹から15匹の大きな頭をした、派手な色のシイラが、ウミガメの首とひれを攻撃して、あきらかにそれを疲れ果てさせようとしていた。というのは、ウミガメは頭と水かきを甲の中へ引っ込めたまま、何日もまっすぐに浮いていることはできなかったからである。」（337頁）

「魚のうちで、いちばん筏にくっついて離れなかったのはシイラとブリモドキだった。初めのシイラがカヤオ港外の海流の中でわれわれといっしょになったときから、航海中ずっと筏のまわりに大きなシイラが何匹も身をひるがえしていない日は一日もなかった。なにが彼らを筏に引きよせたのかはわからないが、たぶん自分の上の移動する屋根の影に隠れて泳ぐことができることに魅力があったのか、それともすべての丸太と舵オールからぶら下がっている海藻とフジツボの菜園で何か食物が探せるからだったのだろう。最初はなめらかな緑色のぬるぬるが薄くおおっただけだったが、やがて海藻の房は驚くほどの速さで成長していき、しまいにはコン・ティキ号が波の間をヨタヨタと進む姿はさしずめ顎ひげをはやした海神そっくりというところだった。その緑の海藻の中には、ちっぽけな雑魚どもと密航者のカニのお気に入りの場所があるのだった。シイラは、あざやかな色をした熱帯魚で、英語では同じく「ドルフィン」というイルカ、歯のある小型クジラとまちがえてはいけない。シイラはふつう長さ1メートルから1メートル40センチ、両側が平べったくて頭と頸がおそろしく高かった。われわれは長さ1メートル40センチ以上、頭の高さ34センチ以上もあるやつを捕まえた。シイラはすばらしい色をしていた。水中では青と緑に光っていたが、それを捕まえると、ときどき不思議な光景がみられた。この魚が死ぬと、だんだん変色して黒い斑点のある銀灰色になり、最後には銀白色になった。これが4、5分続くと、やがてもとの色がゆっくりとまた現れた。水中でも、シイラはときどき色を変えた。そして何度もわれわれは銅色をした魚を見た。しかしあとでそれは古なじみのシイラであるということがわかった。シイラはきげんがよいときには、平らな横腹を下にしてひっくり返り、ものすごい速さで泳ぎ、それから空中にとび上がって、パチャンという音を立てて海に落ち、両側に水をはね上げた。水の中へ落ちるが早いか、またとび上がる。そして波のむこうに見えなくなるのだった。しかしきげんが悪いとき、たとえばわれわれが筏の上に引っ張りあげたようなときには、かみついた。そういった1匹がある日トルシュタインの足にかみついた。国へ帰ってから、シイラは人間が海水浴をしていると襲いかかって食べてしまうという話を聞いた。これはあまり光栄な話ではなかった。われわれは毎日シイラのあいだで海水浴をして、すこしも特別な興味を示されなかったからである。しかし彼らは恐るべき猛魚だった。われわれは彼らの胃の中にヤリイカとまるごとのトビウオを見つけたからである。トビウオはシイラの大好物だった。水面の上で何かがはねをあげると、トビウオではないかと思ってそれを目がけて盲滅法に突進した。眠い朝の時間、よくわれわれは小屋

の中から目ばたきをしながらはい出して、半分眠ったまま海のなかへ歯ブラシをつけた。すると 13、4 キロもある魚が稲妻のように筏の下から飛び出してきて、歯ブラシのにおいをかぐので、われわれはとび上がってすっかり目がさめてしまうのだった。また筏の縁で静かに朝食を食べているとき、シイラがとびあがって横しぶきのすごく猛烈なやつをはねとばしたらしく、そのために海水がわれわれの背中を流れたり、食物のなかへはいったりした。ある日、晩飯を食べていたとき、トルシュタインが釣のほら話のなかでいちばんすごいやつを地で行った。彼は突然フォークを置いて、海の中へ手で突っ込んだ。そしてみんながポカンとしているうちに、水が泡立って大きなシイラがわれわれのあいだに転がりこんできた。トルシュタインは、静かに滑りすぎていく釣糸の端をつかんでいた。そして反対の端には、エリックが 2、3 日前に釣りをしていたときに釣糸を切ったシイラが、まったくろうばいして、ぶら下がっていたのだった。シイラが筏のまわりや下に 6 匹か 7 匹グルグルしながらついてこない日は一日もなかった。荒れた日には 2、3 匹のこともあった。と同時に、その翌日には 30 匹から 40 匹も現れるかもしれなかった。原則として、もし晩飯に生魚が食べたかったら、あらかじめ 20 分まえに炊事当番に予告しておけば十分だった。すると炊事当番は短い竹の棒に糸を結びつけ、釣糸にトビウオを半分つけた。たちまちシイラが 1 匹現れて、頭で水を切って泳ぎながら針を追っかけ、そのあとからもう 2 、3 匹がつづくという調子だった。あやなすのにまたとない魚で、とりたてだと肉はしまっておいしく、タラとサケの合いの子のような味がした。それは 2 日間悪くならなかった。」（348 － 350 頁）。「われわれは墨のようなこのイカ墨で、航海日誌を 1、2 ページ書いた。それからヤリイカの赤ん坊をシイラたちを喜ばすために海の中へ投げた。」（355 頁）。「われわれはきわめておとなしく始めた。食べきれないほどたくさんのシイラを、いとも簡単に捕まえた。だれでもやるたのしみを食物をむだにすることなしに続けようとして、シイラとわれわれ自身のおたがいのたのしみのために、釣針なしのこっけいな魚釣を思いついた。余ったトビウオをひもに結びつけて水面に投げる。シイラが水面に飛んできて魚を捕まえる。それから引っ張り合いだ。みごとなサーカスが演じられる。というのは、1 匹のシイラが口を放すと、その代わりにまた 1 匹やってくるからだ。われわれはおもしろかったし、シイラたちも最後には魚を手に入れるというわけだった。」（382 頁）（ハイエルダール（水口志計夫訳）「コン・ティキ号探検記」『世界ノンフィクション全集 1 』筑摩書房、1960 年。本文中の頁数はこの文献による。）

次に『たった二人の大西洋』 （1950 年）の記述を紹介する。ここでは、イルカ（dolphin）をドラド（＝シイラ）とポーパス（＝哺乳類のイルカ）に区分して用いている。

1950 年 8 月 10 日「ときおりさざ波がたつかとみると、それは幾マイルにわたって浮遊する海藻で、いまやわたしたちの家族じみてきたイルカが、それとみとめてよろこんでたわむれかかった。ハリフォックス出発の数日後、湾流にジープをのりいれた最初の日から、このイルカたちは、日がな夜がな、わたしたちを護衛するようにつきまとい、いまではもう、一頭ずつどれがどれと見わけられるほどだ。イルカは、ふだんはジープのうしろや周囲で漫然と泳ぎまわっている。流木や海藻がただようのをみつけると、しばらくそっちのほうへいって、海藻についている小さなカニなんかがパクついてくるらしい。ふつうには同じく「イルカ」と呼ばれているが、別の種類のイルカがあらわれると、わたしたちの一族のイルカはおじけづいてジープの下に退避する。「ドルフィン」（海豚）という英語は、全然違った二種類の生物を同時に意味している。ひとつは魚で、ポルトガル語で「ドラド」というやつ。もうひとつは「ポーパス」といったほうが通りがいい哺乳動物だ。わたしたちの親戚は「ドラド」のほうで、青や緑のかげをおびた銀色の肌は、たとえようもなく美しく、おまけに泳ぎの速さときたら無類だ。凪いだ日など、私は罐詰の空罐を力いっぱい遠くにほうる。するとジムやジョーやチャーリー（わたしがイルカ（シイラ）につけた名前）はからだを横にして、上になった片目で空中をとぶ罐を追い、さっと泳いでいって、罐がおちるところにさきについて待ちかまえているから、えらいものだ。わたしたちの「ドラド」はトビウオが大好物で、これはのちに、太平洋でもおなじだということを、目撃によりたしかめた。トビウオたちのためには、まことにお気の毒だ。」8 月 12 日「イルカ（シイラ）がまたついてくる。きれいで、とても人なつこい。… 12 日も、夜 11 時ごろになって東の微風が吹きはじめるまで、海面は鏡のように静かだった。午後、わたしははじめて釣糸を投げてみたが、たちまちイルカ（シイラ）がひっかかった。当然抵抗するだろうと思いのほか、飼主が投げたステッキをくわえてくる犬のように、自分からのこのこ甲板にあがってきた。思うに、きっとそのイルカは、おしまいまでただの遊びか、ちょっとした悪ふざけだと思っていたに違いない。護衛のイルカの数は 2、30 尾にもふえて、それぞれつけた名前の主も見わけがつかなくなってしまったが、家族同士のような感情にかわりはなかった。そのイルカを釣り上げて、私はまるで兎罠におばあさんをひっかけたような罪悪感に責められた。が、とにかくこの機会に天然色写真で記念撮影だ。エリノアはエンジンをとめ、ジョージつまりそのイルカを一刻も早く水にもどしてやろうと、大急ぎで支度した。しかし

結果はむなしく、ジョージはわたしの腕のなかで死んでしまい、わたしはすんでのことに声をあげて泣きださんばかりの心境だった。いまは亡きジョージは、おそらく生物史上ズボンのために命を失った唯一のイルカ（シイラ）だろう。二週間ほど、私は同じ半ズボンをはいたきりで、片足のほうは完全にほころびてしまっていた。だが、カメラのレンズが、やがてそのカメラでとった写真が文明社会の人々の目にふれるだろうということを意識させるまでは、そんなことはちっとも気になりはしなかった。ほころびたほうをマストのかげにかくすようにしてポーズをとったが、そればかりではまにあわない――結局ズボンをはきかえざるをえず、そのために時間が長引いたことが、ジョージの命取りとなった。甲板にあがって死ぬまでのあいだに、イルカの肌の色はシャトルーズにもどり、最後に銀灰色となった。二人とも新鮮な肉に飢えていたので、わたしは死んだイルカの片身を切身につくり、それをエンジンの排気管にまきつけて焼いた。外側はなま、内側はこげついてしまったが、芯だけはちょうどころあいに焼け、エリノアはガツガツむさぼり食った。わたしはだめだった。なまの肉片をかんでみたが、かたくて脂こくて、とうてい初心者むきではない。なまぐさい味が、一日じゅう鼻についてたまらなかった。イルカの肉がエリノアをひきつけたのは、かならずしも鮮度ばかりではなかった。ビスケットと乾ブドウとナツメヤシの実のほか、わたしたちの食糧はすべて罐詰で、ほとんど歯ごたえというものがなかった。心身の疲労からくる一種の麻痺状態のなかで、わたしたちは無意識に歯ごたえのある肉に飢えていたのだ。飢えというものは、栄養学的というより、むしろ感覚的なものだ。」（374 － 378 頁）

フランス人のアラン・ボンバール『実験漂流記』は、1952 年アラン・ボンバールが海の魚とプランクトンだけを食べ、海水と雨水で渇きをしのぎ、単身で「異端者号」と名づけたゴムボートで大西洋横断漂流に成功した漂流記である。ここでボンバールは、漂流を沖の漂流と沿岸の漂流に区分している。以下では、シイラなどの回遊魚の登場する箇所を紹介する。

「10 月 25 日の土曜日、たくさんの魚がそばに近よってきたので、痛手をおわせ、急ごしらえの小鈎にひっかかってぴちぴちはねているのをみて、これでやっと食物が手にはいったことをよろこびながら、水から第一尾目の魚としてシイラをひきあげた。ぼくはこれで助かった。食物と飲料を得たばかりでなく、餌と釣針までさずかったのだ。というのは、鈎型の鰓蓋のうしろに、有史以前の古代人の墓で発見されるような、すばらしい天然の釣針がみつかったのだ。どうやって使うかを、ぼくはくふうしてみた。これで最初の釣竿はできたわけだ。これからは毎日、食物と飲料にはたっぷりありつけるだろう。飢えと渇きがどんなものだったかは、知らなくてすむだろう。これこそ、漂流者としてのぼくの立場のなかで、もっとも漂流者らしくないものであった。」

「10 月 29 日　ここ数日来、もう一隻の船影すらみえない。きのう、カナリア諸島以来最初のサメをみたが、すぐに姿を消した。シイラとはすっかり仲よしになった。ぼくをとりまいている世界のなかで、これだけ親しい友となったので、シイラのことについては、しょっちゅう話すことになるだろう。夜、ふと目をさますと、ぼくはこの魚の美しさに心うたれる。シイラの群は、ぼくの航跡と平行に、海の夜光をうけて、明るい帯のように、ながながと跡をひいて泳いでゆく。」

「11 月 2 日　海の隣人たちとのつきあいがはじまってきた。ぼくをとりまく海の一家族とぼくはすぐに仲よしになった。その一家というのは、五、六尾のシイラと一羽のウミツバメなのだが、このウミツバメはパリでみられるスズメぐらいの大きさで尻尾に白い斑点がついた黒いちっぽけな鳥だが、毎日 4 時に、きまって挨拶をしにやってくるのだ。この大海原のただなかに獲物をあさりに、いったいぜんたい、どうやってこの長距離をとんできたのか、不思議でならない。毎日この小鳥は、後方からやってきて、水上をちょこちょこ 4 歩ばかり歩き、日が沈む頃姿を消すのだ。シイラのほうはずっと忠実で、24 時間中ぶっつづけにぼくのそばにいる。それにぼくは、はっきりと一尾々々の見分けがつくのだ。最初の日、釣ろうとしてぼくはシイラに傷をつけたのだが、その傷がまだそのままふさがらないで開いたままになっているのだ。これでみると、魚類は人間と同じように海水では傷の癒着がわるいことがわかった。一尾のシイラは背の後方三分の一のところに、百スー銅貨の大きさの卵型の裂傷をおっている。もう一尾は側面の鰭の下が傷ついている。こうしたぐあいに、ぼくが識別できるのが全部で五、六尾いるので、それぞれ名前をつけてやった。いちばんでかいのがシイちゃんだ。彼女は正確にぼくについてくるが、二度とつかまえられないように、注意おさおさおこたりない。それでも近くにいて、ボートの下の安全地帯にいるときには、ときどきこっちをチラッとみたり、とりとめなくぼくをみるために横に向きをかえたりする。風が凪いで、スピードがあまりでないときには、スウッと近よってきてゴム・フロートを尻尾でたたき、どうしてこんなにノロノロしているのかをたずねてでもいるかのようだ。新顔もきまって姿をあらわすが、ぼくが釣りあげようとするのはこの連中だ。これには一本に鈎がたくさんついている釣針をつかいさえすればいい。それを糸か細紐にむすびつけ、毎朝テントのうえでつかまえたトビウオを餌としてくっつけるのだ。これでトビウオが水に

沈むまえに海面をかすめてとんでいるように水面をサッとひっぱると、シイラがいっせいにとびついてくる。それっ、1 尾つかまった！ 新顔はどれもこれもこの計略にひっかかってつかまるが、古参連中はぼくのことをよく知りぬいていて、この手にはのってこない。」

「11 月 3 日　かつてコン・ティキ号の一乗組員の寝袋にもぐりこんだヘビサバ（ジェンピリュス）に遭遇。この日 11 時 10 カイリばかり先を船が通過。」

「11 月 5 日　サメはあいかわらずしょっちゅうやってくる。ぼくはすっかりなれっこになったが、実にいやらしいやつだと思う。なんと臆病なんだろう！鼻をコツンと軽くなぐりつけただけで逃げてしまう。まずサメがやってきたとしよう。やつは鼻づらをボートのどこかにゴツンゴツンとぶつける。ぼくは櫂をとって、頭を思いきり強くたたいてやる。すると、やつはもう二度とこんなめにあわされないように、いちもくさんに海の奥ふかく逃げてしまうのだ。大きなサメが姿をみせるとシイラたちは用心深く遠ざかっていくのがつねだから、ざまあみろとおもしろがっているにちがいない。ぼくを心から尊敬していることは、異端者号をとりまくシイラの数が、ますます多くなってきたのをみても明らかだ。シイラはこのように終始忠実であったが、パイロット魚のほうは、その後、ぼくがアラカカ号に遭遇したころには、すっかりぼくを見すててしまっていた。この魚は、実際のところは、だらしのない日和見主義の連中で、いちばん強いと思ったものと行をともにすることにしているのだ。」

「11 月 5 日の水曜日、夢幻劇のような光景をまのあたりにみた。ぼくはこれまでにもトビウオの群れにはずいぶんお目にかかった。たいがいはスイスイととんでいるだけだが、シイラに襲撃されると、波濤の頂きのうえを思いきり大きくとぶ。連中の尻尾が海面をかすめているあいだに、彼らは翼をほんとうにバタバタさせて、攻撃してくる相手の目をくらますために、風にさからって新しい飛躍をする。ところがシイラのほうも実にたくみで、背の鰭を海面にだしながら、トビウオが海中にとびこんでくる瞬間を待ちうけ、この連中が安全な海だと思って水にはいった瞬間、大きくひらいた口にパクリとやられてしまうのだ。」

「11 月 6 日　勇敢なシイラの群が傷ついたサメに殺到し、臓腑を寸断し、がつがつ食いあさる。主客転倒というところだ。…ぼくにはもう、ひとつの声、ひとりの人間しかいない。それはぼく自身だ。ぼくはもう、自分をとりまいている動物とおなじような動物になった。ぼくの気持も反応も、彼らのものと、ますますそっくりになってくるだろう。おなじものを食べ、どちらもトビウオをもとめているのだから。いつものウミツバメが、4 時の会合に、きちんと毎日やってくる。シイラたちは、ぼくの子分だ。ぼくらはおなじ日ざしをたえしのんでいる。夜、ぼくが帆かげでいこうように、連中は日中ボートのかげにきている。」

「11 月 8 日土曜　「鳥の大編隊みゆ」けれども、いちばん近い陸地は 1000 カイリのところだ。・・・親しいシイラどもはかたときもぼくをはなれない。とくにでっかいシイちゃんは、絶対に釣られまいとしながらついてくる。（ラジオきこえなくなくなる）」

「11 月 9 日　トビウオはもう食べない。ぼくのぐるりにいるシイラをとるのにおあつらえむきの餌だし、それにもういかにも食べあきたのだから。」

「11 月 16 日　出発以来ボートのまわりに群をなしていた魚は、おどろくほど忠実にあとをついてきた。最初のころ傷つけたヴェテランどもは、その失敗に用心ぶかくなって、いつもぼくの手のとどかないところにいた。毎朝、それらの連中は海の深みから浮びあがってきて、疑いぶかそうにぼくをじろりとひとにらみして、ぼくからはなれたところを平行に泳いでくるのだった。こうした魚には日ましに親しみをおぼえ、そばにいてもらうことがたいせつになってきた。というのは、ぼくは一尾々々見分けがつくばかりでなく、他の魚がきてくれることを保証してくれるものだったからだ。新米の魚はずるい同類がいることをすっかり安心して、ぼくのまわりを群れをなして遊泳していたから、つかまえるのは朝飯前の仕事だった。専門家たちはボートの底に生簀をとりつけ、そのなかに魚をしまっておくようにすすめてくれた。このような方法が実際に必要かどうかは、これでおわかりになるだろうし、ぼくの食糧棚があとからついてきてくれるのだから、そんな措置をとる必要はまったくなかった。四方八方からぼくをとりまく忠実な道づれは、ぼくのほうへトビウオをおいやってくれた。トビウオがやってくると、シイラはこれを追いちらしにかかるのだが、トビウオはおどろいてとび、ボートの帆という、いつも張ってある罠にぶつかるのだった。こうしたぐあいで、毎朝ボートのうえで平均 5 尾をひろうことができた。」

1982 年、イギリスからカリブ海に向かうミニ・トランザット・レースに参加したが難破、ゴム製救命イカダで 2 月～ 4 月の 76 日間漂大西洋を漂流したスティーブン・キャラハンの『大西洋漂流 76 日間』では、イカダにシイラがついてきて、時にはひっくり返そうとしたりする面倒な存在ではあるものの、次第に親しみがわき、ずっとついてくるシイラに対し、漂流者は愛情さえ持つようになる。シイラに名前を付けるなど、擬人的に扱っている。こうした動きは、先の『コン・ティキ号探検記』

『実験航海記』などとも重なる。

4　まとめ

本稿では、日本と地中海の 19 世紀の難船絵馬を紹介したうえで、漂流記録にみる人と魚との関わりについて、それに関係する国内外の漂流記録の紹介をおこなってきた。日本では江戸時代末期の漂流記、欧米では 20 世紀以降の漂流記、実験記録をとりあげたので、時代や地域、文化の背景も大きく異なることになり、比較をおこなうにはかなり問題点のある事例の列挙ともいえる。しかし、時代や洋をこえて、漂流を開始し、沖合に流されていく段階でほぼ出てくる魚として、数ある魚のなかでもシイラの存在がみえてきたことは否めない事実であろう。

その理由は何か。鹿児島県志布志やボンバールの漂流実験などから、シイラはマグロよりも水分の多い魚であることが指摘されていた。これは漂流者にとってありがたいことであった。そして食用でもあった。また、長い漂流のなかでずっとついてくるシイラをペットのように名前をつけている例もあった。人の生存に不可欠であり、さらに日々の苦しい漂流の中での癒す存在としての魚の姿も垣間見ることできる。

信仰、精神世界の面ではどうであろうか。シイラとセットになって、シイラが追うトビウオやシイラが追われるサメなどの組み合わせもみえてきた。シイラが追うトビウオについては、大西洋や太平洋の海外の事例に多くみられる。また、サメについては、日本の近世では多くみられ、シイラなどの魚を船近くに追い込む小さなサメを「イソベサマ」として敬う聖なる側面や、一方で漂流者が磯部明神として呼んだ大きなサメに恐怖感をいだく事例も見られた。イソベサマにも安堵感と恐怖の両義的な意味合いのあることがうかがわれる。両義性という点では、シイラについても日本では漂流者にとっての救いの魚と、死体につくので忌み嫌うという２つの面を併せ持っていた。大西洋横断の漂流記では、救命ボートやイカダを壊そうとする行為と、親しみを抱かせる顔のような対照的な面を見出せる。こうした傾向の妥当性については、シイラやサメ、トビウオのみならず、さまざまな魚やホンダワラなどの海藻類等と漂流者との関わりについて、その遭遇する海の場所をおさえながら検討することで明らかになっていくのではないだろうか。本稿では史料資料の紹介を優先的におこなった。生態民俗学的な分析と考察は別稿でさらに検討を深めていきたい。

文献・資料（史料）

【文献】
・石井謙治「漂流船覚え書」『日本庶民生活史料集成　第５巻　漂流』三一書房、1968 年、869 － 884 頁。
・神宮滋『秋田領民漂流物語ー鎖国下に異国を見た男たちー』無明舎出版、2006 年。
・須藤功『大絵馬ものがたり』農山漁村文化協会、2009 年。
・橋村修「南西諸島の回遊魚の民俗」『南方文化』36、2009 年、127 － 143 頁。
・A.H.J.Prins ” IN PERIL ON THE SEA　Marine Votive Paintings in the Maltese Islands” Said,1989,206p.
【日本関係資料】
・『日本庶民生活史料集成　第５巻　漂流』三一書房、1968 年。
・「紀州口熊野漂流噺」（石井謙治所持本）（『日本庶民生活史料集成　第５巻　漂流』収録版）。
・池田寛親『船長（ふなおさ）日記』（『日本庶民生活史料集成　第５巻　漂流』収録版）。
・「皆月村彌三兵衛異国へ漂着の次第口書」（『加能漂流譚』石川県図書館協会、1938 年所収）。
・「天保三年壬申八月　塵濱村清兵衛バタンへ漂着の次第口書」（『加能漂流譚』石川県図書館協会、1938 年所収）。
・新田次郎『珊瑚』新潮社、1978 年（1983 年文庫化）。
・南日本新聞社編『戦火の漂流 42 日』光人社、2010 年（1984 年刊行の『良二、いま帰りもした』桐原書店を改題）。
【海外関係資料】
・トール・ヘイエルダール（水口志計夫訳）「コン・ティキ号探検記」『世界ノンフィクション全集１』筑摩書房、1960 年。
・ベン・カーリン『たった二人の大西洋』（1950 年）。アラン・ボンバール『実験漂流記』（1952 年）（日本語訳は、次の文献を参照した。石原慎太郎編『現代の冒険３　世界の海洋に挑む』文芸春秋、1970 年）。
・スティーヴン・キャラハン（長辻象平訳）『大西洋漂流 76 日間』（ADRIFT　Seventy-Six Days Lost at Sea ）早川書房、1988 年（1999 年文庫化）。

韓国の教科書と昔話

金廣植

1　はじめに

韓国の初等学校（日本の小学校にあたる）用国語教科書には数多くの韓国昔話が収録されている。それを反映して教科書に収録された児童向けの昔話＝伝来童話（またはイェンニヤギ（옛이야기昔話）、イェンナルイヤギ（옛날이야기昔話））集の刊行も次のように相次いでいる。

イサンギョ『教科書伝来童話』izlebooks、2011 年
金용준『1 年生教科書伝来童話』꿈으로크는아이、2011 年
李내경『教科書伝来童話』1、지경사、2013 年
홍건국『教科書中心の伝来童話』芸林堂、2013 年
『1 年生用教科書の中の伝来童話の選び読み』풀빛、2014 年
金진경『1 ～ 2 年生教科書伝来童話』トピ、2014 年
郭英美『教科書に出る口碑伝来童話』鷄林ブックス、2014 年
성원『初等学校論述向上のための教科書伝来童話』巨人、2014 年
조종순『1 年生が必ず読むべき教科書伝来童話』효리원、2015 年
カンソンウン他『書きながら読む教科書伝来童話』乙巴素、2015 年。
『教科書 我が伝来童話』全 100 冊、韓国ヘルマンヘッセ、2015 年
『改訂新版 教科書世界伝来童話』全 52 冊、韓国トルストイ、2016 年
신현신他『初等教科書から選んだ伝来童話』채우리、2016 年

解放後、韓国の初等国語教科書に昔話が本格的に収録されるようになったのは、第 5 次教育課程（1987 ～ 92）からである。1990 年前後、教育現場で伝来童話が注目を浴び、上記のような関連書が刊行され、関連研究も非常に多い。近年、韓国語教育及び昔話教育研究では、国際化・移民・国際結婚などで急激に進む多文化状況に伴い、韓国語・文化教育のツールとしての昔話に関心が高まっている (1)。本稿ではできる限り、初等教育向けの韓国昔話教育に限定して議論する。

【表 1】解放後韓国の教育課程及び初等国語教科書の発行

教育課程	題名/巻数	発行年	発行	備考
教授要目期 1945 ～ 54	初等国語教本 3 初等国語 12	1945 ～ 6 1946 ～ 9	朝鮮書籍印刷株式会社 朝鮮書籍印刷株式会社	
1 次 1954 ～ 63	国語 12	1955 ～ 9	大韓文教書籍株式会社 大韓教科書株式会社	初等国定化 3 年生まで純ハングル
2 次 1963 ～ 73	国語 12	1963 ～ 8	国定教科書株式会社	4 年 2 学期から漢字混用 1970 年ハングル専用
3 次 1973 ～ 81	国語 12	1973 ～ 4	国定教科書株式会社	国民教育憲章 (5 次まで)
4 次 1981 ～ 87	正しい生活 4,国語 8	1983 ～ 8 1984 ～ 9	国定教科書株式会社	統合教科書
5 次 1987 ～ 92	国語 36	1989 ～ 94	国定教科書株式会社 大韓教科書株式会社	話し・聞き 12 /書き 12/ 読み 12
6 次 1992 ～ 97	韓国教育開発院編, 国語 32	1995 ～ 8	国定教科書株式会社 大韓教科書株式会社	96 年から英語教科書 話し・聞き 8 /話し・聞き・書き 4/ 書き 8/ 読み 12
7 次 1997 ～ 2007	韓国教育評価院, 国語 30	2000 ～ 4	大韓教科書株式会社	自己主導的学習 話し・聞き 6 /話し・聞き・書き 6/ 書き 6/ 読み 12
随時改訂体制	韓国教員大学校・ソ	2009 ～ 10	（株）未来エン	聞き・話し 6 /聞き・話し

2007 改訂 2007 ～ 2009	ウル教育大学校国定図書国語編纂委員会, 国語 30			・書き 6/ 書き 6/ 読み 12
2009 改訂 2009 ～ 2015	ソウル教育大学校・韓国教員大学校国定図書国語編纂委員会, 国語/国語活動 48	2013 ～ 5	（株）未来エン	国語 24/国語活動 24
2015 改訂 2017 ～				

2　国語教育とイデオロギー

教授要目期から 1 次教育課程までは反共主義と国家主義が強く、2 次から 3 次までは国家主義的愛国論を強要し、4 次は国家発展主義のための教育を実現させようとした独裁の時代であった。国語教科書は、社会・道徳・国史などの教科と共に長い間国定教科書として発行されてきた。社会科に比べると、国家の介入は露骨ではなかったものの、国定教科書ということで国語教科書は国家の積極的な管理の対象であった。時には国家の声を直接に反映したが、時には間接的な方法で国家の意図を代弁してきた。このようなやり方は、植民地期から確認できる (2)。独裁政権下の教科書は、入試制度のよって支配体制が求める唯一の解釈を強要するのみならず、解釈方法において宗教の経典や教理の問答書よりも遥かに非理性的であった。また、反民族・反民主・反民衆的な性格を持ち、分断固着勢力の破壊的価値観を真理だと露骨的に強弁していた (3)。1 次から 4 次教育課程期の教科書には偉人の登場する頻度が高くなっている。その理由は独裁政権の不安的な足場を固めて、名分を示したいという目的が働いたといえる (4)。

国家イデオロギーのほかに、教科書における親 (5)、子ども (6)、挿絵 (7)、伝統（儒教）(8)、正典（カノン）化 (9) などの問題をめぐる様々な議論がなされている。1987 年以降の民主化によって国家イデオロギーは表面的には弱まりつつあるが、内在されたイデオロギーは残っている。多文化社会を目指すものの、その眼差しは主流韓国人の視点に留まっており、伝統的・韓国的価値（韓国の食べ物の優秀性・伝統文化の優秀性・ハングルの大切さ）を当為として強調している (10)。植民地期に抑圧されていた民族主義は、解放以降の分断状況下で肯定的に捉えられた背景がある。

民主化、社会変化が進んで急変する社会の中で、（伝統文化の再発見など）韓国昔話も本格的に取り上げられるようになる。初等教育向けの昔話であるため、昔話は教育的な配慮が施され、「伝来童話」として改変されて収録されるようになる。一般に「伝来童話」は、教育的意味合いも働き、教訓的な内容が目立つ。丁昭榮（チョン・ソヨン）は李元壽・孫東仁・崔来沃編『韓国伝来童話集』全 15 巻に収録された 402 話を三分類し、教訓智慧童話が 64.2 %、歴史英雄童話が 18.4 %、ファンタジー世界経験童話が 17.4 %だとする (11)。呂營澤（ヨ・ヨンテク）も伝来童話 182 話を分析して、機知型が 29.1 %、訓戒型が 28.0 %だと述べている (12)。

実際に教科書に収録された話の主題は、智慧が最も多く、次に報恩、ユーモア、勧善懲悪（禁欲）、孝行、自然物の由来、虚欲、友愛である (13)。また、2007 年改訂教科書には勧善懲悪、孝行、友愛、報恩を主題とした内容が大多数である (14)。では、実際に伝来童話がどのように収録されていったのかを確認してみたい。

3　国語教科書と伝来童話の収録

【表 2】各教育課程における伝来童話の収録話数

	教授要目	1 次	2 次	3 次	4 次	5 次	6 次	7 次	2007
金基昌		18	8	8	7	45			
金德洙		9	11	7	6	47	65	72	
金정이		8	8	8	7	48	78	67	
李경연	25	9	11	10	12	56	90	85	47

金基昌『韓国口碑文学教育史』集文堂、1992 年；金德洙「伝来童話の主題研究―初等国語 7 次教育課程を中心に」中部大学校大学院修士論文、2001 年；金정이「伝来童話教育に関する研究―第 7 次教育課程 初等学校教科書を中心に」高麗大学校教育大学院修士論文、2003 年；李경연「初等国語教科書의 옛이야기再収録に関する研究」光州教育大学校教育大学院修士論文、2014 年、10 ～ 16 頁を参照。

日本：昔話・伝説・世間話

韓国：説話（広い意味の説話）＝神話・伝説・民譚（口伝説話＝狭い意味での説話）＋伝来童話

韓国では口伝説話（近代）／文献説話（前近代）という分け方もある。本稿では民譚＝昔話として捉え、児童向けに改変された民譚＝「伝来童話」を中心に考察する。

【表 2】のように先行研究では、各教育課程に収録された伝来童話の傾向を分析するも、伝来童話の範囲がそれぞれ異なっており、違う話数となっているが、その傾向は確認できる。

「口碑伝承題材は、第 5 次教育課程期以降、急速に量的に拡大されると共に、特定の話を集中的に反復収録している。特に内容的に教訓性を帯びた題材を繰り返して収録している」(15)

また、【表 1】のように教科書の量の拡大によって 12 冊から 36 冊に増え、領域別分類によって同じ話が重複収録されるようになったことも働いたといえる。

「(第 7 次) 伝来童話の主題として最も多く強調されたのは「智慧」であり、全体の 43 %を占める」(金정이、74 頁)「学年別収録の不均衡及び重複収録、学習要素と主題の偏りの問題」

「第 5 次までは勧善懲悪と忠孝・報恩思想が著しかったが、第 6 次、7 次からは忠孝・報恩思想と機知・ユーモアが多く現れて、多様な内容を収録する方向に転換している」(金德洙、76 頁)「伝来童話の教育的価値（中略）人生の方向を提示し、韓国的情緒と価値観を形成」(金德洙、77 頁)

グローバル時代において「価値観の混乱を最小化して融合させるため」「伝統の価値観が反映されている伝来童話の教育的価値は非常に重要である。このような認識が広がった結果、国語教科書に伝来童話の収録話数が増加していると思われる」(金德洙、32 頁)

「伝来童話の中には我々の先祖の風習・慣習・生活・思想・信仰などが入っており、先祖の根強い力と慧眼、輝かしい智慧、素朴な夢などが溶け込められており、それを通して伝統文化を継承・発展させていくことができる」(심주현「初等国語教育における伝来童話 活用に関する研究 — 2009 改訂教育課程を中心に」高麗大学校 教育大学院修士論文、2016 年、94 頁；곽은미・추갑식「09 改訂国語科 成就基準を通した伝来童話 指導方向探索」『学習者中心教科教育研究』16、2016 年、31 頁)。

韓国の教科書は変わってきたが、まだ変わっていないところがあるとすれば、我が国の伝統社会の暮らしに対する価値観と規範が投影された昔話がある。「伝来童話は一般的に歴史性を帯びた文化の蓄積物として、民族的暮らしの形式を反映する親しんだ読み物」(張정호「韓国伝来童話の教育学的理解」『教育史学研究』23、2013 年、134 頁)である。また、伝来童話は長い間の人々の暮らしや経験によって口伝された普遍的真実を持つ昔話で、「歴史的形成過程を持っているので民族的、文化的特性、生活相、思想、価値観などを含む」(정대현「韓国伝来童話の倫理学的探求」梨花女子大学校大学院博士学位論文、1989 年、39 頁) (16)。

先行研究では、植民地期と教授要目期とを記していないが、植民地期も含めて主に取り上げられた伝来童話は【表 3】の通りである。

【表 3】4 回以上収録された「伝来童話」の目録

	伝来童話の題名	主題	植	教	1	2	3	4	5	6	7	07	09	計
1	フンブとノルブ（腰折れ燕）	禁欲	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	11
2	兎の裁判	智慧	○	○				○	○	○	○	○	○	8
3	仲のいい兄弟（へらない稲束）	友愛	○	○	○	○	○	○		○		○	○	9
4	三年峠	智慧	○	◎	○	○			○	○	○		○	9
5	韓石峰と母	努力	○	◎	○		○	○	○	○				8
6	黄喜関連の話	配慮	○	○				○	○	○	○	○	○	8
7	金の斧銀の斧	禁欲	○	○	○			○	○	○		○		7
8	瘤取り爺さん	禁欲	○	○					○	○	○			5
	金の砧銀の砧	禁欲									○	○	○	3
9	恩返しの鵲(キジ)	報恩	○	○					○	○	○			5
10	有名な裁判	智慧	○	◎							○		○	5
11	朴赫居世	歴史	○	◎							○			4
12	兄弟投金(兄弟と玉)	友愛	○						○	○	○	○		5
13	牽牛と織姫	愛	○							○	○	○		4
14	串柿と虎（古屋の漏り）	笑話	○							○		○	○	4
15	鼈主簿伝（猿の生肝）	智慧	○							○	○	○	○	5
16	樵と仙女（天人女房）	報恩			○	○				○	○	○	○	6
17	若返る泉	禁欲		○	○				○	○	○	○	○	7
18	日と月になった兄妹（天道さん金の網）	禁欲							○	○	○	○	○	5
19	殿様に大根と牛を捧げた人	禁欲						○	○	○	○	○	○	6

20	牛となった怠け者	勤勉				○		○	○	○			○	5
21	物は考えよう（二人の息子を心配する母）	智慧		○					○	○	○			4
22	鰲城と漢陰(柿の木)	智慧							○	○	○	○		4
23	青蛙	孝行		○				○	○	○				4
24	智慧のある子	智慧							○	○	○	○		4

各教育課程における教科書の初版（特に教授要目期）に基づいている。強調と下線は日韓の類話。「植」は植民地期における朝鮮総督府教科書、「教」は教授要目期。神話・伝説、古小説などは除いたが、解放前の教科書と関わる教材の一部は必要によって記した。本文は、テクストのみならず、聞き取りの教材、漫画、演劇などを含めた。

李경연「初等国語教科書の옛이야기再収録に関する研究」光州教育大学校教育大学院修士論文、2014 年;조희정・서명희「教科書収録 古典題材 変遷研究(1)—建国過渡期から第 7 次教育課程期まで文献題材を中心に」『文学教育学』19、2006 年；조희정・서명희『初等 教科書収録古典題材変遷研究(2)—建国過渡期から第 7 次教育課程期口碑伝承題材を中心に』『韓国初等国語教育』30、2006 年などを参照。

【表 3】のように解放後韓国の伝来童話収録は、植民地期との「連続性」が窺い知れる。それについては早くから言及されている。解放直後の教授要目期において、1940 年代前半に廃止されていた朝鮮語教育の再建のため、急いで韓国語教科書を作らざるを得なかった。その際に植民地期の『朝鮮語読本』とその他の作家の作品から適切な物を選び出し、新教科書の見地から適切な訂正を加えたのである (17)。

「教授要目期に収録された「朴赫居世」、「瘤取り爺さん」、「三年峠」、「仲のいい兄弟」は内容が同じである」（金基昌『韓国口碑文学教育史』集文堂、1992 年、56 頁）

金基昌（キム・キチャン）は朝鮮総督府第 3 期 6 年制用『朝鮮語読本』全 6 巻(1930 ～ 35 年)に収録された「朴赫居世」、「瘤取り爺さん」、「三年峠」、「仲のいい兄弟（へらない稲束)」と教授要目期の内容は「同じ」だとしている。しかし、「瘤取り爺さん」の内容は同じではない。植民地期との「連続性」を捉えるのは非常に重要であるが、その作業は実証的に検証しなければならない。

一方、金歓姫（キム・ホァンイ）は、次のように主張している。

「韓国解放以降の今日まで初等学校国語教科書に最も多く再収録された昔話の 10 種は、「兎の裁判」「仲のいい兄弟（へらない稲束)」「金の砧銀の砧」「樵と仙女」「三年峠」「韓石峰と母」「若返る泉」「日と月になった兄妹」「瘤取り爺さん」「黄喜（ファンヒ)」です。この中の半分（正確には「樵と仙女」「若返る泉」「日と月となった兄妹」を除いた七つ。なお、「金の砧銀の砧」は多く収録されていない—引用者注）は、日帝植民地期に『朝鮮語読本』類の教科書に収録された話です。（中略）「瘤取り爺さん」「三年峠」「物言う亀」は、同化イデオロギーの道具として活用された話です。（中略）それらの話の源流が韓国だとしても、その中に染み込んだ植民地残滓をなくして、韓国固有の話の姿を明かすのは簡単ではありません」(18)

【表 3】に下線を引いた話のように、植民地期には「フンブとノルブ（腰折れ燕)」「金の斧銀の斧」「牽牛と織姫」「串柿と虎（古屋の漏り)」「鼈主簿伝（猿の生肝)」など数多くの日韓類話が収録された。しかし、金歓姫は教材が収録された時期などを考慮せず、「瘤取り爺さん」「三年峠」「物言う亀」だけを問題にしている。

「フンブとノルブ」「兎の裁判」「仲のいい兄弟（へらない稲束)」「金の斧銀の斧」「三年峠」のように、植民地期から今日まで続けて収録された話がある一方、「韓石峰と母」「瘤取り爺さん」「恩返しの鵲(キジ)」「朴赫居世」のように、植民地期と解放直後には収録されたものの、近年は収録されていない話もある。前者にスポットを当てて植民地との連続性を、後者にスポットを当てて植民地との非連続性を強調するのではなく、教科書と共に、昔話集・伝来童話集との関わりを通した全般的な影響関係を捉える必要がある。第 3 期の『朝鮮語読本』は解放後の教科書に直接に影響を与えたが、日本語教科書『国語読本』は間接的な影響を与えたと思われる。

先行研究では、教科書・教育課程に関する東アジアの比較研究 (19) が行われてきた。伝来童話に関する研究に限れば、教科内容の成就基準（達成基準 achievement standard）を中心とした研究 (20)、指導方法における創意性 (21)、行動修正法 (22) などに関する多様な研究が進められている。

また、個別の昔話（伝来童話）を分析した研究も進められている。「瘤取り爺さん」(23)「兎の裁判」(24)「三年峠」(25)「仲のいい兄弟（へらない稲束)」「義犬」「兄弟投金」など (26) があるが、その多くは文献収集の限界もあって、限定的な時期の教科書分析に限られており、植民地期から今日までの全般的な分析には達していない。

本稿では、韓国教科書に収録された伝来童話と国民意識に留意して考察したい。

【表 4】現行教科書における「伝来童話」

	題名	単元の目的	頁	主題	備考、媒体
1-1 国語活動ㄴ	餅を食べる競争	正しい文章	118 ～ 121	笑話	テクスト
1-1 国語ㄴ	虎と兎	正しい文章	209 ～ 212	智慧	テクスト
1-2 国語ㄴ	虎と干し柿	想像力	245 ～ 248	笑話	テクスト,漫画
1-2 国語ㄴ	殿様に大根と牛を捧げた人	想像力	249 ～ 253	禁欲	テクスト
1-2 国語ㄴ	多才な五兄弟	想像力	254 ～ 259	智慧	聞き,漫画
1-2 国語活動ㄴ	塩の出る磨り臼	想像力	244 ～ 245	禁欲	テクスト
2-1 国語ㄴ	雄鶏と豚	面白さ	20 ～ 26	勤勉	テクスト
2-1 国語ㄴ	フンブとノルブ	順序別に	132 ～ 133	友愛	聞き
2-2 国語ㄴ	フンブとノルブ	対話力	53	禁欲	相槌,人形劇練習
4-2 国語ㄴ	フンブとノルブ	話の整理	7		漫画,重要な事件は？
5-1 国語活動ㄴ	ノルブ伝	内容の把握	12 ～ 19		演劇
2-1 国語活動ㄴ	チュンチの骨	感想の表現	250 ～ 261	友愛	テクスト
2-1 国語ㄴ	鼈主簿伝(鼈と兎)	話の中へ	276 ～ 277	智慧	漫画みて内容整理
3-2 国語活動ㄴ		話の表現	160 ～ 163		役割劇,準備実行
3-2 国語ㄴ		話の表現	189 ～ 206		演劇,気持ちの読み
2-1 国語ㄴ	日と月になった兄妹	話の中へ	298 ～ 302	禁欲	人形劇
2-2 国語ㄴ		楽しい人形劇	268 ～ 269		人形劇の種類
2-2 国語ㄴ	泥棒のパガジ物まね	面白い言葉	224 ～ 233	笑話	動物の物まね
2-2 国語ㄴ	小豆粥のお婆さんと虎	楽しい人形劇	270 ～ 273	笑話	人形劇,表現
1-1 国語活動ㄴ	樵と鹿	分かち書き	128 ～ 131	報恩	演劇,前半部のみ
2-2 国語ㄴ	樵と仙女	話を作る	134 ～ 135		漫画,次の場面は？
2-2 国語ㄴ	白頭山の長生草	話を作る	136 ～ 141	孝行	テクスト
2-2 国語ㄴ	仲のいい兄弟（へらない稲束）	楽しい人形劇	274 ～ 277	友愛	人形劇
2-2 国語ㄴ	牛となった怠け者	人形劇公演	278 ～ 281	勤勉	テクスト
3-1 国語ㄴ		表現	273 ～ 276		感想文,手紙,詩,漫画
3-1 国語ㄴ	トッケビを騙した農夫	感動	26 ～ 32	智慧	テクスト
3-1 国語ㄴ	若返る泉	内容の整理	112 ～ 115	禁欲	聞き, 漫画
3-1 国語ㄴ	兎の裁判	内容の整理	126 ～ 134	智慧	演劇
3-1 国語活動ㄴ	和僧の蜜壺	状況の理解	220 ～ 223	笑話	漫画,対話の表現
3-1 国語活動ㄴ	縫い物七つの自慢	状況の理解	224 ～ 243	笑話	テクスト
3-1 国語ㄴ		表現	278 ～ 281		感想文
3-2 国語ㄴ	屁こき嫁さん	面白さ	22 ～ 25	笑話	漫画
3-2 国語ㄴ	黒い牛と黄色い牛（黄喜）	聞き取り	110 ～ 112	配慮	聞き
3-2 国語活動ㄴ	粟一粒で婿入った男	面白さ	12 ～ 27	智慧	テクスト
3-2 国語ㄴ	有名な裁判	気持ちの理解	296 ～ 302	智慧	漫画
3-2 国語ㄴ	金の砧銀の砧	気持ちの理解	303 ～ 308	禁欲	漫画,兄弟譚
3-2 国語ㄴ	三年峠	気持ちの理解	309	智慧	漫画,人物の気持ち
4-1 国語活動ㄴ	不思議な壺	話の中へ	8 ～ 13	禁欲	テクスト
4-2 国語活動ㄴ	米の出る岩	文の考えの理解	76 ～ 81	禁欲	テクスト
5-2 国語ㄴ	透明人間になる冠	文の要約	248 ～ 252	禁欲	聞き,文の流れ
6-1 国語活動ㄴ	虎を獲ったパンチョギ	面談	68 ～ 77	孝行	テクスト
6-1 国語活動ㄴ	パリテギ姫	話の構成	154 ～ 161		テクスト
6-2 国語ㄴ	あの世にある倉庫	文学の香り	280 ～ 286		テクスト

6年生用の「パリテギ姫」は口伝神話、「あの世にある倉庫」は伝説であるが、参考までに追記した。

単元の目的

・面白さ、話の中へ

・人の気持ちの理解、想像力、話作り、表現力（主人公の気持ちを感じる、話す）、対話力、構成力

・聞き取り、話（内容）の整理、状況・内容の理解把握、正しい文章、文の理解・要約

それぞれの伝来童話を感想するよりは、言語能力向上のために伝来童話を手段として活用している。本質的価値・活用よりは手段的な価値・活用に重点をおいている。

4　教育課程と指導書における伝来童話

【表 5】韓国教育課程における国語科の目標

教授要目期 1946	国民としての道理と責任を自覚させ、我が国民性の図抜けた質と、長く築いてきた国文学の歩みを明かし、国民精神をたっぷり育成する。
1 次 1955	特に郷土と民族の伝統と現状を正確に理解させ、民族意識を昂揚して独立自尊の気風を育成すると同時に、国際協力の精神を育成する。
3 次 1973	国語に対する関心を高めて、国語と国語で表現された我が文化を愛して、延いては民族文化の発展に貢献せんとする心を持たせる。
4 次 1981	日常の国語生活を正しくして、国語を大切に思うようにする。 1 年生の内容、文字：イェンナルイヤギ（昔話）を楽しむ。
6 次 1992	国語科は国語の発展と民族の言語文化の創造に貢献せんとする志を立てて、正しい民族意識と健全な国民情緒を涵養する教科である。
7 次 1997	未来志向の民族意識と健全な国民情緒を涵養させて、国語発展と国語文化の創造に貢献ぜんとする志を立てるための教科である。
2007 改訂 2007	未来志向の民族意識と健全な国民情緒を涵養させて、国語発展と国語文化の創造に貢献せんとする志を立てるための教科である。 1 年生の内容、聞き：イェンナルイヤギ（옛날이야기昔話）
2009 改訂 2012	国語を創意的に使って国語発展と国語文化の創造に貢献せんとする志を立て，正しい国語生活を通して堅実な人格を形成し、健全な国民の情緒と未来志向的共同体意識を涵養する科目である。国語資料の例（初等学校 1 ～ 2 年生：イェンニヤギ（昔話）や童話、3 ～ 4 年生の書き：童話やイェンニヤギなど）
2015 改訂 2015	品格と個性のある国語を使って、国語文化を享受しながら国語の発展と国語文化の創造に貢献する能力と態度を育成する。 国語資料の例（初等学校 3 ～ 4 年生の文学：イェンニヤ（昔話）や創作童話など、文学：童話やイェンニヤギなど）

国家教育課程情報センターのサイトを参照。http://www.ncic.go.kr/mobile.kri.org4.inventoryList.do

○ 5 次教育課程以降、教師用指導書における伝来童話

崔雲植（チェ・ウンシク）・金基昌（キム・キチャン）『伝来童話教育論』（集文堂、1988 年）の影響が大きい。この本から抜粋して「伝来童話の教育的意義」を 6 つ指摘している。

①伝来童話は想像力の所産であるので想像力を養い、想像して作らせることで思考力を高められる。
②話し方と聞く能力などの言語能力を高める。
③韓国的価値観を涵養・深化する。
④興味を呼び起こして楽しさと共に教訓を与える。
⑤先祖の風習、慣習、生活、思想、信仰などが入っており、先祖の根強い力と慧眼、輝かしい智慧、素朴な夢などが溶け込まれており、それを通して伝統文化を継承・発展させられる。
⑥話者と聴者の人間関係が深まる、としている (27)。

また、「伝来童話の指導方法」として、①内容の理解、②内容に関する話し合い、③音読と朗読、④先祖の夢と浪漫、ユーモアと機知、生活の中から得た教訓、逆境を打ち抜く慧眼と勇気などを学ぶ家庭読書会の運営、⑤読書感想文、⑥印象に残った場面を描く、⑦主人公に手紙を書く、⑧立体朗読、即ち演じる事、⑨未完成のままの話を作ることを提示している（教育部『国民学校教師用指導書 国語 2-2』国定教科書株式会社、1995 年、240 ～ 241 頁）。

○教訓と興味のバランス重視

（義犬、餅の競争）「昔から伝わる話」子ども達は作品の内容を通して先人の暮らしと性格の智慧を学び、さらには自身の暮らしに必要な道徳的な教訓まで得られるだろう (28)。

（ドルイと虎，和僧を騙した智慧のある子）一方、子供から多様な反応を誘導して話に興味と関心を持つように誘導しなければなりません。あまりにも教訓的な示唆を探し出そうすると、話の感想も正しく伝わらず、興味もなくなる惧れがある（220 頁）。

題材としては事件の因果関係が明確であり、かつ教訓性を持っている伝来童話「金の斧」を撰び、話に対する興味を呼び起こし、続いて学習する読み方の単元と関連付けて読書指導を重ねられるようにした (29)。第 5 次・第 6 次教育課程は同じ考え方が確認できる。

○現行の教師用指導書

「国語」教科は韓国人の暮らしが染みている国語を正確で効果的に使う能力と態度を養い、国語を

創意的に使って国語の発展の国語文化創造に貢献しようとする志を立てて、正しい国語生活を通して堅実な人格を形成し、健全な国民情緒と未来志向的共同体意識を涵養する科目である (30)。

イェンニヤギの中には先祖の智慧が入っており、平凡ではない人物が展開する英雄譚が多い方である (350 頁)。「虎とホシガキ」は児童がよく内容を知っている親しみのある作品で、イェンニヤギの面白さと特徴を揃えている。特に、人ではなく虎が主人公なので、人物の概念を説明するのに適している (353 頁)。

イェンニヤギの特徴は、①口伝する話、②民衆の願望が込められた非現実的な話、③先祖の慧眼、機知、暮らしの智慧と教訓が込められている。(中略) イェンニヤギにはまさに先祖の暮らしと教訓が溶けている。即ち、勧善懲悪とか、孝行、報恩、友情、忠誠など我々が暮らしながら必ず守るべき礼節に対する話、暮らしの教訓が込められており、児童の心性を育てるにおいて役立つ。④イェンニヤギには「むかしむかし」のような決まり文句がある (愼憲綷 (シン・ホンジェ) (31) 他『児童文学と教育』博而精出版社、2007 年) (『国語』2 教師用指導書、2013 年、未来エン)。

あまりにも道徳的な教訓を注入する方向に流れないようにする(『国語』1 教師用指導書、2013 年、242 頁)。

ゲーテの格言「伝来童話の影響は人生を左右する」、イェンニヤギの題材の教授・学習過程：注意集中⇒反応⇒価値化⇒組織化⇒性格化 (人格化) (崔雲植・金基昌『伝来童話教育の理論と実際』集文堂、1998 年から抜粋、『国語』4 教師用指導書、2013 年、143 頁)。

イェンニヤギの面白さは、①民衆性、②教訓の明証性、③口伝の素朴・簡潔さにある (李五徳『童話をいかに書くか』2011 年より抜粋、『国語』4 − 2 教師用指導書、2014 年、67 頁)。

5　現行教科書における伝来童話

イソップ寓話「三頭の牛とライオン」(1 − 1)、「キツネとツル」(1 − 2)、「北風と太陽」(1 − 2)、「ウサギとカメ」(2 − 1)、「アリとキリギリス」(2 − 2)、「キツネとブドウ」(4 − 1) が収録されているが (32)、伝来童話が圧倒的に多い。そのほかに神話、伝説、創作童話、歴史童話、翻訳童話「こひつじクロ」(2 年、北アイランド作家のエリザベス・ショー)、「火曜日のごちそうはヒキガエル」(3 年、ラッセル・E・エリクソン)、「フランダースの犬」(3 年、ウィーダ) など。

【表 6】「三年峠」のテクスト比較

『普通学校朝鮮語読本』巻四第十、三年峠、1933、34 ～ 41 頁。4 年生用、原文は朝鮮語。	『初等国語教本』中、1946、71 ～ 76 頁；『国語』3 − 2、1953、24 ～ 28 頁。
昔ある片田舎に一老人がいました。ある日、市場から帰る途中、ある峠を越えようとして間違って石<u>につまずいて</u>転倒しました。この峠は三年峠という峠で、ここで一度倒れた人は、三年しか生きられないという話が伝わる峠なので、老人は思わず途方に暮れて (中略) ちょうどその時、この話を聞いて尋ねてきた者は、隣に住む少年でした。彼は老人の病室に入って見舞いをした後、 「三年峠でお倒れになったことなら、それほど心配なさる必要はありません。(中略)三年峠に行って、もう一度お倒れになれば結構です。(中略)」(中略)老人は(中略)非常に長生きしたそうです。 <u>皆さんはこのような話を聞くと、この世の中で昔から伝わる話の中には、信じられないことが多いことが分かるでしょう。信じられないことを信じるのが迷信です。鬼やトッケビがこの世にあると考えるのも迷信です。</u> <u>鬼やトッケビは、人々が作り出した話の中にはありえても、実際はいません。およそ迷信に溺れるのは、文明人としてはこの上ない恥です。</u>	昔ある片田舎に一老人がいました。ある日、市場から帰る途中、ある峠を越えようとして間違って転倒しました。この峠は三年峠という峠で、ここで一度倒れた人は、三年しか生きられないという話が伝わる峠なので、老人は思わず途方に暮れて (中略) ちょうどその時、この話を聞いて尋ねてきた者は、隣に住む少年でした。彼は老人の病室に入って見舞いをした後、 「三年峠でお倒れになったことなら、れほど心配なさる必要はありません。(中略)三年峠に行って、もう一度お倒れになれば結構です。(中略)」(中略)老人は(中略)非常に長生きしたそうです。

下線は筆者による。

「三年峠」は、1930 年代に朝鮮総督府が実施した農村振興運動の政策意図を反映する形で、迷信打破の教訓として再「発見」された側面がある (33)。【表 6】のように、朝鮮総督府教科書では迷信打破の教材としての側面が強いが、解放後の韓国教科書では、その関連部分が削除されており、評価できる。このように植民地期と解放後との「連続」という問題は、微妙なズレがあり、今後詳細かつ実証的な検討が求められる。また【表 7】のように「虎と干し柿」は、初等学校の低学年向けの笑話として頻繁に取り上げられてきた話である。①と②は朝鮮総督府編纂の日本語 (「国語」) 教科書であるが、解放後の韓国語教科書とのあらすじが非常に類似している。植民地期に「虎と干し柿」が繰り返

して収録され、今日の韓国昔話における固定化、パターン化に及ぼした影響も含めて、今後さらなる研究が求められる。

【表 7】「虎と干し柿」のテクスト比較

①『普通学校国語読本』巻一、1923、52 ～ 8 頁	②『初等国語読本』巻二「トラトホシガキ」1939、79 ～ 87 頁；『ヨミカタ』一ネン下、1942、68 ～ 73 頁	③『国語』2 ― 1、虎と干し柿、1953 改訂、65 ～ 70 頁、2 年生用、原文は韓国語。	『国語』1-2나「虎と干し柿」2013、245 ～ 247 頁、1 年生用、原文は韓国語
オクヤマ ノ オウキナ トラ ガ ハラ ガ スイタ ノデ、ムラ ヘ デテ キマシタ。（中略）コドモ ガ ナイテ イル。（中略）ヤマネコ ガ キタ（中略）ヘビ ガ キタ（中略）オウキナ トラ ガ マドノ ソト ニ キタ（中略）オカアサン「ソレ、ホシガキ。」 トラ「オヤ、ナキヤンダ ソ。（中略）」（中略）トラ ハ ニゲテ カエリマシタ。	オク山ノ トラガ、オナカガ スイタノデ 村へ 出テ 来マシタ。（中略）コドモノ 泣ク コエガ キコエマス。（中略）ヌクテガ 来タ（中略）山ネコ（中略）大キナ トラガ、マドノ 外ニ 来タ（中略）トラハ ビック シテ（中略）ホシガキ（中略）コドモハ、スグ 泣キヤミマシタ。（中略）トラハ、オク山ヘ ニゲテ 行キマシタ。	奥山に住む虎がおなかがすいて食べ物を探そうと人が住む村へ下りて来ました。（中略）子どもがアアンと泣き始めました。（略）ヌクテが来た（中略）山ネコ（中略）窓の外に虎が来た（中略）（虎は）びっくりしました（中略）干し柿（中略）子どもはすぐ泣きやみました。（中略）虎は急に恐くなりおなかがすいたことも忘れて逃げました。	むかしむかし、奥山にこわい虎が住みました。（中略）虎はおなかがすいてのろのろと村へドりて行きました。（中略）アアンと子供が泣き始めました。（中略）ヌクテが来た（中略）恐ろしい虎が来た（中略）虎は考えました。（中略）干し柿（中略）こどもはすぐ泣きやみました。（中略）虎は干し柿が怖くて一目散に逃げました。

ヌクテ（ヌクテー、勒犬）＝チョウセンオオカミ

6　終わりに

伝来童話の教育的有用性も少なくないが、時代錯誤的な限界もある（宋喜復「韓日初等学校国語教科書に収録された童詩と童話」『韓国文芸創作』16、2009 年、23 頁）。説話の持つ「民族文学や文化の精粋」のような抽象的価値やイデオロギーではなく、説話における固有な特徴と豊富な意味を探さなければならないであろう。このためには偏見やイデオロギーから抜け出した開かれた見解と多様な観点、新しい教育及び研究のパラダイムの開発が必要だ。（中略）民族的・民衆的だとしても必ず教育的・文学的に良いという根拠はない。説話教育研究者は、説話の教訓性に執着してきた（呉세정「説話教育研究の傾向検討と方向模索」『晴嵐語文教育』55、2015 年、81 頁）。

日本と韓国は単一言語、単一民族神話が根強いが、急速に進む多文化状況に真摯に向き合う必要がある。孫晋泰（ソン・ジンテ）（1900 ～？）は「世界的説話のすべての種類を我々が持っている」と指摘し、普遍的な説話学を明示し、開かれた東アジア説話学の未来を展望した (34)。しかし、今の韓国説話研究と教育は、普遍性よりも独自性・特殊性を強調する側面が強い。今後は、伝来童話＝昔話に求めてきた従来の特殊性・伝統的価値観と共に、人類の普遍性、共通的価値の比較研究・教育が求められる。

また日本では、平成 20 年度改訂の学習指導要領の国語科教育に「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」を取り入れ、「第 1・2 学年：昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること」を具体的に明示している。今後日韓における昔話研究・教育がより開かれた、対話・疎通の出来る教育に向かうのか注目していきたい。

注

1　金민정「伝来童話ストーリーテリングを活用した韓国語語彙学習指導方案」湖南大学校大学院修士論文、2016 年；李정희「伝来童話ストーリーテリングを活用した韓国語話し方教育方案研究」慶熙大学校教育大学院修士論文、2016 年；呉정미「説話を通した定住者対象の文化教育」『童話と翻訳』28、2014 年；朴선영「며느리説話を活用した韓国文化教育―女性結婚移民者を中心に」『韓国言語文化学』11、2014 年；조미래「多文化家庭学生の学習能力向上のための童話の読み方方案研究」湖南大学校大学院修士論文、2014 年；李오암「女性 結婚移民者의 文化適応ストレス考察と解消方案研究―伝来童話を活用した文化教育」韓国外国語大学校大学院修士論文、2013 年；安美英『古典説話を活用した多文化家庭の韓国文化教育』韓国文化社、2012 年；崔혜진「多文化時代の説話教育試論」『文学教育学』26、2008 年など。

2　金예니「国語と教育課程の変遷と教科書の具現様相」、姜珍浩他『国語教科書と国家イデオロギー』글누림、2007 年、54 頁。

3 尹九炳「民族教育と理念教育」、尹九炳編『教科書とイデオロギー』天池、1988年、6、9頁。第4次までの教科書は次の三つの側面において問題が多かった。1. 民族自主を歪曲する教育内容（アメリカ中心の世界観、植民地遺産の維持、開発（能率）イデオロギー）、2. 民主主義を歪曲する教育内容（保守的復古主義、全体主義、軍事主義）、3. 統一を阻む教育内容（冷戦イデオロギー、観念的統一）、57～72頁。

4 張英美「主体の消滅と権力のメカニズム」、姜珍浩他『国語教科書と国家イデオロギー』글누림、2007年、231頁；趙美淑「反共主義と国語教科書」『새国語教育』74、2006年；선안나「1950年代童話・児童小説 研究—反共主義を中心に」誠信女子大学校大学院博士論文、2006年；朴형준・閔병욱「1950年代 反共教科書の叙述戦略研究」『韓国民族文化』33、2009年。

5 徐명희「初等国語科教科書 題材に現れた父像の変遷」『열린精神人文学研究』7、2006年；金새봄「初等学校低学年 国語教科書の挿画分析—母像を中心に」東国大学校大学院 修士論文、2014年。

6 黄경현「教科書所載 伝来童話の子どもの特徴研究」『語文学研究』36、2008年；崔윤정「教科書の中の子ども像と国家の政策—教授要目期から4次初等国語教科書を中心に」『童話と翻訳』13、2007年。

7 李美淑「韓・日初等学校国語教科書の挿画に現れた社会・文化的価値観 研究」『日本學報』95、2013年；李美淑「韓・日中学校国語教科書の挿画に現れた社会像研究」『日本研究』63、2015年；朴기용「初等国語教科書に現れたトッケビ形相研究—日本鬼の形相との比較を中心に」『語文學』109、2010年。

8 趙美淑「教育課程と教科書 掲載小説 変遷研究」『겨레語文学』38、2007年。

9 崔은경「韓国童謡・童詩 正典化研究—初等教科書 収録作品を中心に」仁荷大学校大学院博士論文、2015年；朴淑子「解放後『国語』教科書と文学正典」『語文論叢』66、2015年；崔은경「教科書童謡・童詩 正典化研究」『文学教育学』45、2014年；張혜정「児童文学作品の中の環境イデオロギー分析—初等国語教科書を中心に」『環境教育』18-2、2005年。

10 李수진・李동배・Richard Raldauf「初等国語教科書に内在されたイデオロギー分析—1～4学年読み方教科書を中心に」『새国語教育』89、2011年、284～286、294～295頁。

11 丁昭榮『韓国伝来童話探索と教育的意味』亦樂、2009年、242～243頁。

12 呂營澤「伝来童話の研究」『国語国文学』27、1964年、196頁。

13 金미숙「教科書分析による説話指導方案」亜洲大学校大学院修士論文、2004年、29頁。

14 徐海淑『古典文学教育の現在と志向』文藝苑、2010年、45頁；徐海淑「説話教育の水準別適用と限界」『口碑文学研究』23、2006年、7～8頁。

15 조희정・서명희『初等 教科書収録 古典題材 変遷研究（2）—建国過渡期から第7次 教育課程期 口碑伝承題材を中心に』『韓国初等国語教育』30、2006年、415頁。

16 朴금숙「南北韓 初等国語教科書 収録 伝来童話比較 研究」『童話と翻訳』31、2016年、84頁。

17 朴鵬培『韓国国語教育全史』上、大韓教科書、1987年、581～587頁。

18 金欽姫「「樵と仙女」伝承が教えてくれた痛い教訓」『創批オリニ』13-2、2015年。

19 山本美千枝「日韓小学校国語教科書を比較して」『国語教育論叢』21、島根大学、2012年；朴정수「韓・日初等学校 国語科教育課程 比較研究」『韓国初等国語教育』46、2011年；강이숙「韓・日両国の初等学校'国語'教科書に現れた童話分析」木浦大学校教育大学院修士論文、2002年；崔수진「韓日教科書 挿画比較 研究—初等学校4年生国語教科書を中心に」釜山大学校教育大学院修士論文、1997年；李美淑「韓・日初等学校6年生国語教科書の語彙分布対照」『日本學報』99、2014年；宋正植・李美淑「『分類語彙表』の意味分類を活用した韓・日初等学校 低学年国語教科書語彙考察」『日本語教育研究』29、2014年；노경희・민경희「韓国と日本の初等学校教科書デザイン比較 研究—日本教科書の挿画と写真、編集を中心に」『韓国出版学研究』68、2014年；강연실「韓・日 初等学校 国語科教育課程における国語知識 関連要素比較 研究」『初等国語教育』13、2003年；朴금숙「南北韓 初等国語教科書 収録 伝来童話比較 研究」『童話と翻訳』31、2016年；조유리「中・韓初等学校 国語教科書 内容比較と分析」建国大学校大学院修士論文、2011年；왕우남「韓・中初等学校国語教科書に収録された象徴語の対比研究」忠南大学校大学院修士論文、2012年など。

20 곽은미・추갑식「09改訂国語科 成就基準を通した伝来童話 指導方向 探索」『学習者中心教科教育研究』16、2016年；곽은미「2009改訂国語教科書 伝来童話 収録様相 分析及び指導方向 探索」大邱教育大学校教育大学院修士論文、2015年；심주현「初等国語教育における伝来童話 活用に関する研究—2009改訂 教育課程を中心に」高麗大学校 教育大学院修士論文、2016年。

21 丁昭榮「伝来童話を活用した国語科教育の創意性 伸張 方案—初等学校3年生国語教科書を中心に」『韓国初等国語教育』31、2006年；진은숙「創意的思考啓発技法を活用した伝来童話 指導方案 研究」釜山教育大学校修士論文、2009年；金효선「伝来童話の改作様相と教授—学習方法論の考察」全北大学校教育大学院修士論文、2006年；宋英淑「初等学校伝来童話の効率的指導方案研究」大田大学校教育大学院修士論文、2002年。

22 이우진・손은남・박현린「伝来童話に現れた行動修正技法の類型分析—第7次教育課程初等教科書を中心に」『言語治療研究』24-4、2015年；林正重「初等国語教科書に現れた童話の主題変遷研究」『初等国語教育』11、2001年。

23 金容儀『瘤取爺と内鮮一体』全南大学校出版部、2011年；金廣植「植民地期朝鮮における民間説話「瘤取り」の考察」『Walpurgis』2017年。

24 김나래「初等国語教科書 収録옛이야기の妥当性 検証基準 研究—〈兎の裁判〉説話を中心に」春川教育大学

校教育大学院修士論文、2016 年。

25　三ツ井崇「「三年峠」をめぐる政治的コンテクスト―朝鮮総督府版朝鮮語教科書への採用の意味」『佛教大学総合研究所紀要』2008 年別冊；沈恩定「「三年고개」と「三年とうげ」比較研究」『日本學報』55、2003 年；신원기「韓・日初等学校国語教科書の説話教材考察」『韓国初等国語教育』41、2009 年；黒川麻実「日韓教科書教材に関する比較研究―民話「三年峠」に着目して」『広島大学大学院教育学研究科紀要　第一部』64、2015 年；全国国語教育実践研究会編『実践国語研究』別冊 No.174（「三年とうげ」教材研究と全授業記録）、明治図書、1997 年；金廣植「近代初期に報告された朝鮮民間説話「三年峠（三年坂）」の考察」『比較民俗学会報』37-2、2016 年など。

26　李愼成『韓国古典文学の現場と教材研究』寶庫社、2008 年。

27　教育部『国民学校教師用指導書 国語 2-1』国定教科書株式会社、1995 年、147 頁。第 6 次。

28　教育部『国民学校教師用指導書 国語 1-2』国定教科書株式会社、1989 年（1991 年版、214 頁）。

29　文教部『国民学校教師用指導書 国語 2-1』国定教科書株式会社、1989 年、110 頁。

30　『国語』2 教師用指導書、2013 年、未来エン、9 頁。

31　教育者の愼憲縡は、韓国教員大学教授で現行教科書の研究・執筆の責任者の一人でもある。

32　また『国語 教師用指導書』1 にはイソップ寓話「ライオンとネズミ」「よくばりな犬」の全文を紹介している。

33　三ツ井崇、前掲論文、285 頁。

34　孫晋泰『朝鮮民族説話의 研究』、乙酉文化社、1947 年、2 ～ 3 頁。

（東京学芸大学フォーラム　2016 年 11 月 19 日）

翻訳における異民族の文化受容についての考察
― モンゴル族の本森(ベンセン)・烏力格尓(ウリゲル)を事例に ―

巴特尓

1　モンゴル族の民間芸術の現状と表現研究

モンゴル族はながい歴史と文化の伝統をもつ民族である。民族の文化伝承において、古くから「口伝」の形に頼るほか、周辺異民族の文化影響や助けを借りながら伝わってきたと言える。とりわけ民間文学、芸術の領域では、この傾向が特に目立っている。

多民族国家である中国では、民間の説唱文学の領域には、数多くの民族説唱形式がある。これに関して不完全な統計ではあるが、現在中国には少なくとも 30 以上の民族が 80 種以上の説唱形式を有しているとされている (1)。様々な説唱形式の間には、多かれ少なかれ似通った特徴がある。例えば、モンゴル族、チベット族、漢民族の民間説唱をみると、説唱のプロセス、説唱の方式および内容の構成の特徴などの面では類似点が多くある。説唱芸術の構成において、民族が異なっても、民族芸術の伝播と発展の過程からみると、異なる民族の間に一定の影響と浸透関係があることは確実である。

本森・烏力格尓（BENSEN　ULIGER）はモンゴル族の伝統的な民間説唱芸術である胡仁・烏力格尓の一つの重要な説唱形式であるとともに、胡仁・烏力格尓説唱芸術発展の結果でもある。モンゴル語である「本森・烏力格尓」という言葉の字面からわかるように、これは「本森」と「烏力格尓」という二つの部分から構成される。「本森」とは漢字を当てて中国語を音読みにしたもので、「ノート」か「冊子」（綴じ本）の意味であり、「烏力格尓」とは「物語」の意味である。

モンゴル族は昔から「遂水草而迁徙」（水と牧草を求めて移動する）遊牧民族である。これと同じように、民族の文字の創造と使用の過程において、何度もの「変更」をした不安定な時期もあった (2)。そのため、現在に至るまで、自民族の文字によって記録された民族文献は極めて少ない。本森・烏力格尓に関する情報もやはりそうである。本森・烏力格尓の説唱形式がいつ、どのような歴史背景と条件のもとで伝承されてきたのか、文献記録が残されてなかったため、未だにはっきりとわからない。ただ、朝克図氏など多くの研究者は、18 世紀の初め頃に、モンゴル族が異民族の人物や歴史や文学作品を大量に翻訳し始めてから、このような本森・烏力格尓の説唱文学形式が出現したと考えている。

本論文はすなわち、異民族の作品を「軸」に、「翻訳」をテーマとし、翻訳された異民族文学作品が民間芸術の領域の中でどのように表現されているかという問題について論じる。

民族の説唱芸術は、本民族の生活背景や発展条件など多くの要素を組み合わせて成り立った。その多要素は、周辺民族との交流とその影響から切り離すことが出来ない。上に述べたように、モンゴル族の胡仁・烏力格尓の説唱芸術の発展は、大量に翻訳された異民族の作品と大きな関係があるということになる。翻訳の過程で、また異民族文化との融合の過程で進められることであるが、さらに一歩進んでいうと、これも一種の文化浸透であると考えるべきことである。

2　本森・烏力格尓の中の音読み漢語について

漢字で書かれた作品からモンゴル語に翻訳された本森・烏力格尓まで、数多くの漢文経典文学の著作がモンゴル族の人々によって自民族の中に押し広められた。これは文学作品の再度の創作といえよう。この再創作の過程の中で文の構造、修辞、ロジックなどが異なってくるのは必然のことである。このため、漢民族の本文から本森・烏力格尓の説唱になるまでの翻訳の「作業」の中に、再創作の過程が生じる。このように翻訳における異なる民族の言語の変換が一つの複雑な歴史の過程であるということは、いうまでもないのである。

現代に流行する胡仁・烏力格尓の説唱芸術の中の非常に大きな特徴は、すなわち漢民族の歴史人文物語を題材として展開されたものであるという点である。例えば、本森・烏力格尓の説唱芸人（「胡尓奇」）は『隋唐演義』『楊家将』など唐、宋時代の漢民族の物語を説唱内容の中心とするのが一般である。モンゴル族のこのような民間説唱芸術は主にモンゴル族と多民族の雑居している河北省、吉林省、遼寧省そして黒竜江省と東部内モンゴル地域を中心として分布している。

栄蘇赫、趙永銑主編の『モンゴル族文学』の中でも類似の観点が述べられている。「今に至るまで広く世に伝わる本森・烏力格尓や物語の〔本森〕の新作は、物語の内容素材と言語に一つの共同の特徴を持っている。つまり、内地の物語の口述に音読みの漢語を大量に使用している」とある。また「本森・烏力格尓を生み出した時代、その発生地である東南モンゴル地区では、蒙漢雑居の中で漢文、漢語に通じる人が次第に増えてきた。それに伴い、モンゴル族が内地の人文歴史文化を理解していくにつれて、モンゴル族の日常会話の中に比較的多くの音読みする漢語の語彙が浸透していった」と書いている。

本森・烏力格尓は胡尓奇が説唱に使用する翻訳された異民族の作品である。胡尓奇は烏力格尓を説唱するときに、「モンゴル語の漢語化」現象が普遍に存在している。例えば、モンゴル語に固有の呼称があるにもかかわらず、胡尓奇はわざと漢語の呼称をモンゴル語で音読みして説唱する。これはモンゴル族の胡仁・烏力格尓の説唱芸術の中に現れる興味深い現象である。

本森・烏力格尓の『苦喜伝』の前書きに次のように記述している。「職務、官府衙門、座騎、鎧、武器等の名称は一般に音読みの漢語語彙を用いる。例えば丞相、元師、先峰、尚書、翰林院、光録寺など職名、また鋭竜玉匹馬、海水蹄路馬、放天際矢、馬術など固有名称の呼称のようなものである。読者の便宜のために、詳細な訳を加えずに都督、喽啰、総兵などの習慣用法を用いる」とある。

胡尓奇の説唱の中でも上述のような特徴がよく見られる。著名な胡尓奇である扎那氏は説唱の中で、格律のよい中国語原文をなるべくモンゴル語へ訳さずに、原文の音読みの形をとりながら説唱に工夫していることが伺える。

上述したような例はとても多い。例えば、中国北京社会科学院の扎羅嗄氏は以下のように考証した。「…(前略)1816 年に増補「序」の哈斯宝による訳本『古今奇観』は、最も早く音読みする漢語の語彙を大量に使用した中国語小説のモンゴル語訳本である。『古今奇観』の翻訳の中には、比較的多くの音読みの漢語語彙がある。このことは、当時の土没特右旗（哈斯宝の故郷）において、蒙漢雑居の時期が長く続いたため、蒙漢両種類の言語の使用者が増加した。そのためすでに大量の漢語語彙が日常のモンゴル語の中に浸透していったことを証明している」とある。

どの民族にも、膨大な数の翻訳作品があることは確かであろう。翻訳の過程の中で、上述したように、「音読み」の方式はおそらく普遍的に見られる現象であろう。とりわけ、胡尓奇が本森・烏力格尓を説唱するとき、「音読み」の特徴は不変である。このような現象が出現する原因は何だろうか。本森・烏力格尓の説唱には、全体からみて顕著に「漢語化」の特徴が出現している。

それではこの長い歴史をもつ民族説唱芸術は、現在に至るまで発展してきて、民族的な特徴を失ってしまったのだろうか。無論、そうではない。胡尓奇は本森・烏力格尓を説唱するとき、モンゴル語の古文の使用を存続している。説唱の中の接尾辞、中国語でいう漢字の「之」「乎」「者」「也」などのような古い文体を使う特徴が残されてきた。これらの言葉はすでに日常生活では使われなくなっている。しかしながら、本森・烏力格尓の説唱芸術の中では使われ続けている。それは説唱芸術の中のこの民族言語の特徴が保護されていることを意味する。この点についても、白乙羅胡尓奇が収蔵している本森・烏力格尓写本『薛仁貴征東』を通じてはっきりと確認証明することができる。

3　本森・烏力格尓の題材からみる漢語化特徴

民族の説唱芸術について論述したところで、私たちは英雄叙事詩について語らなければならない。モンゴル族には世界の英雄として名声を博した英雄叙事詩の『江格尓伝』がある。説唱芸術として、英雄叙事詩の説唱と胡仁・烏力格尓の説唱は大きく異なっている。最も顕著な違いは、英雄叙事詩は純粋な民族の智慧の結晶であって、他民族に関する要素は含まれないという点がある。しかし、本森・烏力格尓の内容を構成する要素は範囲が広く、内地の過去の各朝代の治乱や戦争の物語、忠義を尽くす者と不忠を働く者とが争う物語、また神と悪魔が計略を用いて争う物語や社会問題に関する物語など様々である。ほかにも『三国志』『説唐三伝』などのような戦争物語、『封神演義』『西遊記』などのような神と悪魔が計略を用いて争う物語がある。『水滸伝』などのような英雄伝記物語、『済公伝』などのような社会問題を扱った物語が人々に好まれている。「本森」という語彙が外来語であるのと同じように、本森・烏力格尓も本来はモンゴル地区の物語を含むわけではなかったのである。

本森・烏力格尓の説唱は胡尓奇によって盛んに口述されたが、その内容はもともと帳面に書かれたものであった。「本森」は長編の叙事物語でもありうるし、単なる物語のあらすじでもありうる。胡尓奇は「本森」のあらすじを把握したうえで、自己の説唱才能を発揮して物語の説唱を盛り上げた。「現在把握されている本森・烏力格尓の篇目の絶対多数は、モンゴル語の手書きによる写本で伝わっている」というところで胡尓奇の意見は一致している。

モンゴル族の伝統的な英雄叙事詩は、19 世紀以来の生活が書かれた物語とは異なり、胡尓奇の口

伝による創作がもとになったものである。伝承の過程で写本に頼ることがなかったため、20 世紀に収集調査が始まる前に僅かの数の写本しかなかった。いわゆる本森・烏力格尓の説唱が「本森」に頼るのとは異なるものであった。実際には、すべての説唱芸人は「本森」を読むことを経験したことはない。胡尓奇が把握した物語の内容は、自分で筋書きを読み込む際に他人の解釈を頼りにすることを除けば、「師伝」或は他人をもって自己の筋書きの台本となす。しかしながら、この内地の物語を述べた作品は、おのずからモンゴル族の芸人が想像してきたものではなく、すでに広まっていた本森・烏力格尓の模倣、あるいは内地の似たような物語を模倣した作品がもとになったのであろう。しかし、モンゴル族の物語の「本森」の新作が体現してきた筋の粗い叙述方式およびプロットの重複、英雄に対する崇拝や出征を粗筋とした物語の素材は、モンゴル族の英雄叙事詩の痕跡を明確に示している。

このようにして、モンゴル族の伝統的な英雄叙事詩は、本森・烏力格尓の説唱活動の生産と発展によって、芸術の前提と群衆の基礎となった。逆に、本森・烏力格尓の説唱活動が推し進められたことは、モンゴル族の英雄叙事詩の伝統を豊かにしたことを意味する。

蒙漢雑居の局面が形成されてから、漢民族の古代歴史小説や演義物語がモンゴル高原に広まり、普通の一般庶民は教養があって思想が卓越した人に「先生巴格西」（先生の意味）という尊称を付け、常に彼らに物語本を訳すように頼んだ。この訳本はすべて中国古代の歴史書や伝統的な演義を記録した書籍であった。この活動の普及により、本森・烏力格尓の翻訳活動も高まりを見せていった。また、口述する胡尓奇の人数が増えたことは、無形の競争を招くことになった。このことはまた物語を説唱する演技の絶え間ない豊富さと技巧の向上と促進になった。本森・烏力格尓の発展は、モンゴル族のもう一つの種類の伝統の説唱芸術「朝仁・烏力格尓」（馬頭琴を使った英雄叙事詩の一種）が次第になくなっていくことにとってかわった。

上に述べたように、本森・烏力格尓の説唱活動は、モンゴル人を対象にしたとはいえ、物語の素材は漢民族の歴史や人物像を描いたため、モンゴル地区で漢民族の文化を再現したことになる。この状況も各時期の移民政策及び民族の自然的な融和と緊密に関係している。モンゴル族と漢民族の雑居の局面の形成と拡大、継続によって蒙漢両民族の交流を促進し、それは文化物質上の条件を豊かにしたといえる。

この短い論文を通じて、他民族の文化影響、つまり異民族の文化受容を軸とした「翻訳」をめぐって起こった「問題」を論点にして論述することを試みた。翻訳の過程でいかにしてモンゴル族の文化伝統を保護していくかということは、これからも真剣に思考すべき課題である。

注

1　モンゴル族の『江格尓』、チベット族の『格薩尓』、キルギス族の『瑪納斯』の 3 篇は中国少数民族の最も代表的な説唱文学作品である。このほか、また満族の『尼桑薩満』、エブェンキ族の『十五歳的阿拉泰・崇保尓夫』、ウイグル族『達斯坦艾里甫與塞乃姆』、ペー族の大本曲『白王的故事』、ダグール族の長篇烏欽『紹郎與岱夫』、カザフ族の冬不拉弾唱史詩『阿尓帕米斯』、トン族の『呉勉王』説唱など。

2　モンゴル文字の発展してきた歴史から、最初の回紇式モンゴル文字から、パスパモンゴル文字、阿里嘎里モンゴル文字（アヨゥシ・グシ、1586 年）、托忒モンゴル文字（ナダハイ・ジャムス、1645 年）、索永布モンゴル文字（ジャナバザル．1686 年）などの種類があげられる。

参考文献資料

1　漢文文献

席力図顧実苧吉 編著：『故事選』民族出版社、1986 年
参布拉諾日布 編:『蒙古胡尓奇三百人』内部資料、1989 年
符國棟 主編：『聴古人説書―宋明話本』中国三環出版社、1992 年
郝蘇民 著：『蒙古口承語言民俗』青海人民出版社、1994 年
楊恩洪 著：『民間詩神―格薩尓芸人研究』中国藏学出版社、1995 年
葛剣雄主編：『中国移民史』福建人民出版社、1997 年
呉同瑞 王文宝 段宝林 編：『中国俗文学概論』北京大学出版社、1997 年
色因 著：『蒙古遊牧社会的変遷』内モンゴル人民出版社、1998 年
李宵松 著：『胡尓沁説書』遼寧民族出版社、2000 年
仁欽道尓吉 著：『蒙古英雄叙事詩源流』内モンゴル大学出版社、2001 年
E.M. 梅列金斯基 著：『英雄史詩的起源』商務図書館、2007 年
胡士瑩 著：『話本小説概論』商務印書館、2011 年
標點者：朱太忙・校閲者：胡協寅『薛仁貴征東』大連図書供応社出版、刊行年不詳
繡像倣宋完整本：『薛仁貴征東』香港・祥記書局、刊行年不詳
文学芸術研究所編(内部交流)『烏力格尓曲調 300 首』明芸術集成執務室、成書年不詳

２-１　モンゴル語文献(1)
巴雅尔 編著：『蒙古秘史』内モンゴル人民出版社、1980 年
額尔登泰/烏雲達賚 校勘：『蒙古秘史』内モンゴル人民出版社、1980 年
薩岡切辰 著：『蒙古源流』内モンゴル人民出版社、1980 年
羅卜桑慈丹 著：『蒙古風俗鑒』内モンゴル人民出版社、1981 年
策・達木丁蘇栄/達・呈都 著：『蒙古文学概要』内モンゴル人民出版社、1982 年
金巴道尔吉 著:『水晶鑒』内モンゴル民族出版社、1984 年
朝克図 著：『胡仁・烏力格尔研究』北京民族出版社、2002 年
布仁巴雅尔 主編：『科尔沁民歌（上/下）』内モンゴル少児出版社、2005 年
２-２　モンゴル語文献（2）
[illegible]：『[illegible]』[illegible]、1982 年
[illegible]：『[illegible]』[illegible]、1988 年
３　日本語文献
ボリス・ウラジミルツォフ 著:『モンゴル社会制度史』日本国際協会、1937 年
米内山庸夫 著：『モンゴル風土記』改造社、1938 年
円仁 著：『入唐求法巡礼行記』平凡社、1970 年
桐生清次 著：『つぎの世は虫になっても』柏樹社、1981 年
E・O・ライシャワー 著 田村完誓 訳：『円仁唐代中国への旅』講談社、1999 年
藤井麻湖 著：『モンゴル英雄叙事詩の構造研究』風響社、2003 年
ジェラルド・グローマー 著:『瞽女と瞽女唄の研究』名古屋大学出版社、2007 年
烏居きみ子 著: 『土俗学上より観たるモンゴル』東京六文館版、2010 年
４　参考論文
参布拉諾日布/張虹：「胡仁・烏力格尔概観」『民族民間芸術探微』1986 年
簫啓慶：「論元代蒙古人之漢化」『国立台湾大学歴史学系学報』1992 年
白翠英：「蒙古族“本森・烏力格尔”探源」『内モンゴル民族師範学院学報』1998 年
何紅艶：『科尔沁蒙古族説唱文学研究』中央民族大学博士学位論文、2000 年
博特勒図：「胡仁・烏力格尔音楽的伝承与伝播」『内モンゴル師範大学学報』2001 年
巴莫曲布謨：「口頭伝統與書写伝統」『読書』2003 年
謝秀雲：「胡仁・烏力格尔在科尔沁地区発展的原因」『赤峰学院学報』2008 年
朝克図/趙玉華：「探析モンゴル族曲芸芸術“胡仁・烏力格尔”面臨的危機」『内民族大学学報』2008 年
松波尔：「「演義・演繹・演芸」一穆・布仁初古拉的抄尔及其蟒古思因・烏力格尔」『内モンゴル芸術』2009 年
額尔很白乙拉：『胡仁・烏力格尔的伝播学研究』中央民族大学博士論文、2010 年
楊麗芳/田艶秋 訳：「東モンゴル説書芸人与漢族説書芸人対英雄坐騎描述的比較」『内モンゴル師範大学学報』2010 年
５　モンゴル語文章
[illegible]：「[illegible]」『[illegible]』1958 年
[illegible]：「[illegible]」『[illegible]』1964年
[illegible]：「[illegible]」『[illegible]』1978 年
[illegible]：「[illegible]」『[illegible]』1980 年
[illegible]：「[illegible]」『[illegible]』1980 年
[illegible]：「[illegible]」『[illegible]』1981年
[illegible]：「[illegible]」『[illegible]』1981年
[illegible]：「[illegible]」『[illegible]』1988 年
[illegible]：「[illegible]」『[illegible]』1989 年
[illegible]：「[illegible]」『[illegible]』1989 年
[illegible]：「[illegible]」『[illegible]』1991年
[illegible]：「[illegible]」『[illegible]』1998 年
[illegible]：「[illegible]」『[illegible]』2000 年

『官話指南』の編者について

楊鉄錚

『官話指南』（以下は『指南』と略称）は 1882（明治 15）年に出版され、日本中国語教育に大きな影響を及ぼした中国語教科書である。『指南』の内容やテクストなどについては、すでに多くの先行研究があったが、『指南』の編者の呉啓太と鄭永邦についてはまだ研究されていない。

『指南』(1) の奥付に編者について「長崎県士族呉啟太　長崎県下長崎区爐粕町十九番戸　東京府士族鄭永邦　東京下谷区西黒門町貳番地」と書かれている。彼らは 2 人とも幕末に生まれ、明治時代に成長した唐通事の子弟であった。多くの唐通事が中国語を使う仕事から離れたのに対し、彼らは中国語を使う仕事に就き、北京留学中に『指南』を出版した。本稿は『指南』の編者である呉啓太、鄭永邦の歴史資料、家族墓を考察することにより、両編者の出身を明らかにしたい。

第1節　『指南』の編者呉啓太について

〔1〕呉啓太の家族

（1）家族墓地

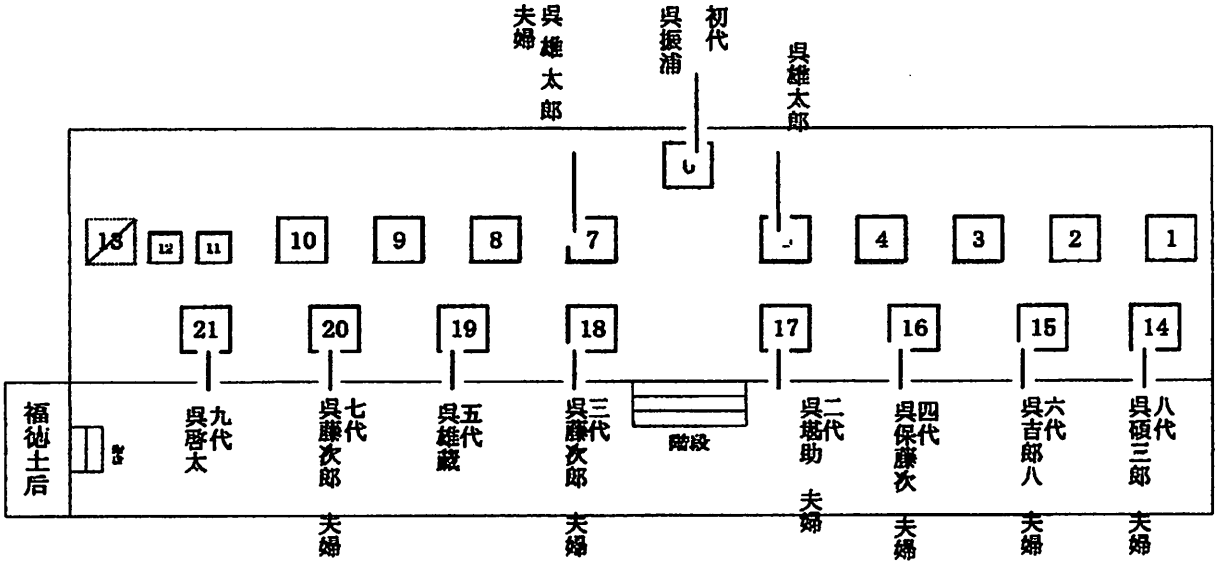


図 2　呉家（呉振浦を祖とする呉家）墓地の構造

呉啓太の家族墓地（図 1〔末尾参照〕、図 2）は長崎聖福寺 (2) の後山にある。お墓の山の中で、ほとんどのお墓が整備されているのに対して、呉家のお墓は木や草に隠れ、容易に入ることができない。聖福寺の住持は、すでにお墓参りする親族がいないとおしゃっている。

呉家墓地の先行研究については、渡辺庫輔 (3)（1901 － 1963）の未刊行の手書き資料『投化唐人墓碑録』(4) がある。図 2 はそれを参考して作成したのだが、階段を降りたところは倒れた木や葉っぱに覆われ、更にその上に草が生えているため、見られなかった。

墓碑の詳細は以下となる。

墓地の中心にある⑥は初代呉振浦のお墓で、墓碑銘によると、出身は福建省漳州府で、今見られる墓碑は 1826 年に 7 代の世孫呉藤次郎によって重修されたものである。1 列目の⑭－㉑は歴代家を継ぐ子孫の墓碑であり、⑥を中心に世代順に、左右羅列されている。①②③④⑧⑨⑩は他の親族のお墓で、順序は見られない。呉雄太郎のお墓が 2 基あり、⑤は呉雄太郎のお墓で、⑥は呉雄太郎と妻の夫婦墓である。図 2 の左上の⑪⑫は子どものお墓で、『投化唐人墓碑録』によると、⑫の隣に⑬もあるが、筆者は確認できなかった。

呉家の初代である呉振浦はいつ日本に来たか、また日本に来てから何の仕事をしていたかは分からないが、『訳司統譜』(5) に 3 代目の呉藤次郎から 8 代目までの記録が残っているため、3 代目から呉家は代々唐通事をしていたと分かる。また同資料によると、呉家の多くの先祖は小通事や稽古通事に過ぎず、7 代目の呉藤次郎（1789 − 1851）は家族の頂点に達し、呉家の最初の大通事過人となった (6)。

呉啓太のお墓（図 3）は呉家墓地の 21 番である。碑文によると、呉啓太は 1858 年生まれ、1895 年に亡くなり、享年 37 歳である。生前は外務大臣秘書官を担当し、勲 6 等を受章した。

図 3　呉啓太のお墓　2016 年 7 月長崎聖福寺にて筆者撮影　右は墓誌

（2）呉啓太の養父呉碩

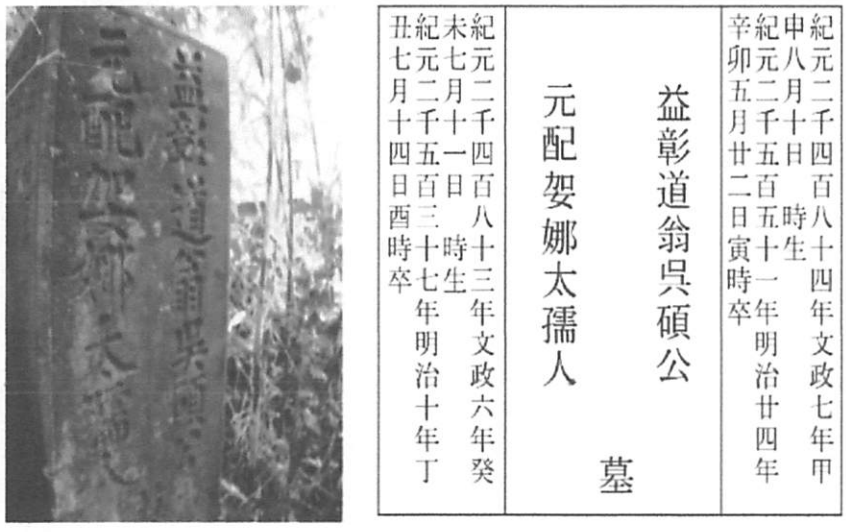


図 4　呉碩のお墓　右は墓誌

呉碩（呉碩三郎、潤平、（1824 − 1891）、図 4）は呉榮宗を祖とする呉用藏 (7) の子として生まれ、呉振浦を祖とする呉家の 7 代目呉藤次郎の養子として育てられた。『呉家系譜』(8) に呉碩について、「潤平　改名碩三郎　過房炉糟町呉氏婿養子　後碩ト改ム」と記録している。『史料摘録』(9) に呉碩の子として「啓太、大五郎、仙寿」を挙げている。お墓は呉家の家族墓地の 14 番である。

1859（安政 6）年横浜港開港の際に、呉碩は太田資政などとともに横浜港に赴き、通訳として活躍した。1868（明治元）年 2 月に、「於長崎当分の内通辯役被仰付」（筆者未見）という辞令で明治政府に徴され、1873（明治 6）年に外務省一等書記生となり、清国上海領事館に在勤した。その後北京や厦門領事館に転じ、1876（明治 9）年に再び上海領事館に赴任し、品川、安藤、河上、高平の 4 代の領事を補佐した。領事館の生字引きと称された (10)。

呉碩は唐通事の中で地位の高い呉藤次郎の養子であり、明治時代になると多くの唐通事と異なって、外交官という道を歩き始めた。

〔2〕呉啓太に関する記録

呉啓太の履歴書は見当たらないが、彼に関する記録は計 4 点見つかった。

資料 1.『対支回顧録』(11) に呉啓太に関する記述。

1934（昭和 9）年に東亜同文会内に対支功労者伝記編纂会を設け、2 年間をかけて、『対支回顧録』（上下 2 巻）を出版した。上巻は明治初年より満州事変までの日中両国の間に起きた重要事件の記録であり、下巻は事件の関係者の列伝である。編纂刊行に際して、外務省、陸軍省、参謀本部、在中日本大使館等の援助、協力を受けた。そのため信憑性が高いと考えられる。『対支回顧録』の「呉碩君、呉啓太君」という条目に呉啓太について以下のように記述している。

> 君の養子啓太君は、同族雄太郎の子で、君養うて家を継がしめた。明治十一年通辯見習となり、十四年外務書記生に任じ、北京公使館在勤を命ぜられたが、十八年官を辞し、更に官費留学生となり、白耳義ブラッセル大学に学び、カンヂターの学位を得て帰朝し、二十五年外務省試補となり、陸奥宗光外相となるや、抜かれて秘書官に任じ、日清役前後にかけて貢献する所多く、功に依り勲六等単光旭日章及び金円を賜ふ。二十八年十一月二十二日、病を以て逝く。享年三十八。正七位に敍せらる。

また、唐通事研究者や中国語教育研究者の研究より、呉啓太に関する記述もある。しかし、どちらとも詳細に欠けている。

資料 2.『唐通事家系論攷』(12) に呉啓太の家系に関する記録。

『唐通事家系論攷』は長崎唐通事家系研究の権威であり、著者の宮田安は呉振浦を祖とする呉氏家系を研究し、「（呉雄太郎は）碩三郎の養子であろう」と述べ、呉碩の子に 9 代目として「養子雄太郎、啓太、大五郎、仙寿」とあげている。

資料 3.『中国語学新辞典』に「官話指南」という条目に呉啓太と鄭永邦の情報が紹介されている (13)。

> 官話指南　呉啓太・鄭永邦著。二人ともに長崎通事の家に生まれ、のち、北京日本公使館の職員となった。外務省外務大書記官鄭永寧は永邦の父であり、同じく外務省の呉碩は、鄭永寧の兄であり、呉啓太の祖父である。（中略）この書は日本人の手になる最初の中国語会話書であるといえる。（尾崎実）

資料 4.『北京官話文法』(14) の記述。

> 当時支那語の大家としては外務省に鄭永寧（当時外務大書記官永邦、永昌の父）呉碩（鄭永寧の兄、呉啓太同大五郎の祖父）などが居った。何れも唐通事出身であった。

資料 5.『史料摘録』(15) にある呉家の家譜。

本資料に呉碩の子として「啓太、大五郎、仙寿」を挙げている。資料 2 の『唐通事家系論攷』は本資料を参考にした。

資料 1 と資料 2、3、4、5 とは矛盾するところがある。呉雄太郎をめぐって、資料 1 は呉雄太郎は呉啓太の実父で、呉啓太は呉碩の養子と述べているが、資料 2、3、4 は呉雄太郎は呉碩の養子や呉啓太は呉碩の孫であることを記録している。資料 5 は渡辺庫輔による家譜で、呉雄太郎の名が見られない。

前文で述べたように、呉家の家族墓地を考察したところ、呉雄太郎のお墓を 2 座発見した。1 座は呉雄太郎の単独のお墓で、もう 1 座は呉雄太郎の夫婦墓である。墓碑銘によると、呉雄太郎は 23 歳の若さで亡くなった。ちなみに、当時呉啓太は 2 歳であった。年齢からみれば、呉雄太郎は呉啓太の実父の可能性がある。しかし、資料 1 ～ 4 のうち信憑性の一番高いのは資料 1 だと考えられる。また、呉啓太の兄弟とされる呉大五郎の北京留学に関する資料は外務省資料『清国へ本省留学生派遣雑件第二巻』(16) に収録されている。そこに「上海総領事館〇書記生呉碩次子　呉大五郎」（図 5〔末尾参照〕）と書かれており、後ろに付いている 1883（明治 16）年 10 月 15 日付けの呉大五郎の履歴書 (17) に呉大五郎の年を「21 年 2 ヶ月」と記録していることから、呉大五郎は 1862（文久 2）年生まれ、呉啓太より 4 歳年下だと分かる。そのため、公式な資料では呉啓太は呉碩の長男だと判断できる。

呉啓太の学歴について、上記の 4 つの資料に記録がない。また『東京外国語学校一覧』の中国語専門の学生名簿にも呉啓太の名がないため、呉啓太は東京外国語学校に入らなかったと分かる。前文でも言及したが、『指南』の編者の住所に鄭永邦は東京と書かれているのに対して、呉啓太は長崎だったということから、呉啓太は 1878（明治 11）年の北京赴任までに長崎にいたと考えられる。東京外

国語学校の学生から北京公使館の通弁見習を選ぶのが普通だったと考えられるが、なぜ東京外国語学校に在学していない呉啓太が通弁見習として北京に派遣されたのだろう。それはおそらく、彼は唐通事の末裔のため中国語ができて、更に外交官である養父もいるから、普通の人と比べれば、外交官という道に進める機会が多いのだろう。

『外務省官費留学生徒規則制定ニ関する件』(18) に収録されている「覚書」、「外務省官費留学生徒規則　白耳義国ノ部」などによると、外交官を育成するため、1885（明治 18）年に日本政府は留学生をベルギーの大学に派遣する準備をした。公文書館蔵の資料「在白耳義国我外務省留学生彼ノ国官設大学校ノ試験ヲ通過セシモノハ本邦ノ試験ヲ用ヒス公使館書記官ノ資格ヲ有セシメント請フ聴サス」(19) に呉啓太のベルギー留学の記録が残っている。それによると、1887（明治 20）年 9 月に呉啓太と他の 3 人が採用試験に合格し、ベルギーに派遣することが決まったのである。卒業した後、日清戦争が起き、呉啓太は中国語で活躍していたが、それについての詳細が分からない。1895（明治 28）年に呉啓太は 37 歳で亡くなった。

第2節 『指南』の編者鄭永邦について

〔1〕鄭永邦の家族

（1）家族墓地

鄭永邦の父である鄭永寧は明治初期に長崎から上京し、東京に定住した。そのため、鄭家の家族墓地は長崎にあり、鄭永邦一族のお墓は東京にある。鄭家の家族墓地は長崎の崇福寺にある。その崇福寺は 1629（寛永 6）年に作られて、日本最古の中国式の寺院とされている。鄭永邦の祖父である鄭幹輔（1811 － 1860）は崇福寺竜宮門の建設の発願主である (20)。

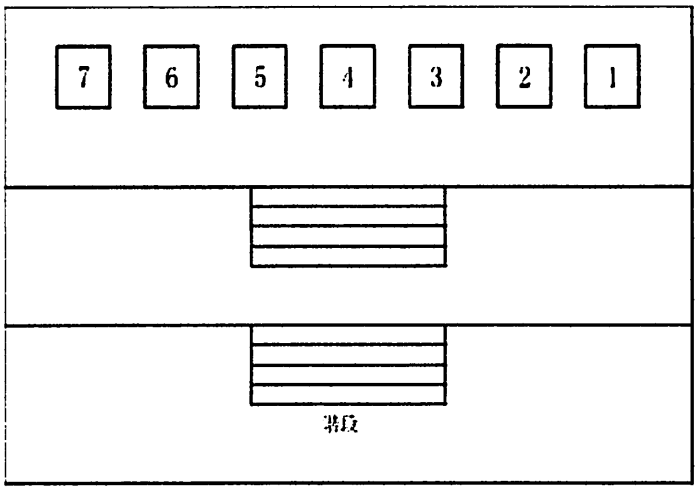


図 7　長崎崇福寺にある鄭家のお墓の構造

家族墓地（図 6〔末尾参照〕、図 7）に墓碑が 7 基あり、①に「鄭家之墓」と書かれており、昭和以降亡くなった一部分の親族がここに合葬されている。②は鄭永邦の祖父鄭幹輔のお墓で、⑦は鄭永邦の兄鄭永昌（1856 － 1931）(21) 夫婦のお墓である。鄭永昌が鄭家を継いだため、お墓は家族墓地にある。③－⑥は他の親族のお墓である。鄭幹輔以前の先祖のお墓は崇福寺には見当たらなかった。安田の研究によると、鄭家の始祖は鄭宗明で、1715（正徳 5）年に死去し、福建省福州府長楽県出身である (22)。

渡邊文庫未刊行の『訳司彙伝』(23) は鄭家の 9 世の子孫を挙げており、安田の『唐通事家系論攷』は鄭家の 8 世の子孫を挙げている。『訳司統譜』に彼らの職位の記録が残っている。それによると彼らは代々唐通事をしていたが、ほとんどは身分の低い稽古通事や小通事末席であった。鄭幹輔は鄭家最初の大通事であった。鄭幹輔の出世によって、鄭家は唐通事家族の頂点に至った。1858（安政 5）年に鄭幹輔は長崎奉行に建白して、唐通事も唐話のみに甘んずるべきでなく、英語を兼修すべきことを唱えた。長崎奉行はこの意見を入れ、翌年長崎碇泊中の米船に行き、米国人から英語を習うことを許した (24)。

鄭永邦一族のお墓は東京谷中霊園南側乙 4 号に位置する（次頁の図 8）。墓碑①に「鄭家之墓」と書かれており、鄭永邦と他の多くの親族がここに合葬している。隣の「墓誌」（図 9〔末尾参照〕）に鄭永邦の条に「開顕院永邦日進居士　大正五年八月二十日　鄭永邦　五十五才」と書かれている。鄭永邦の生卒は 1862（文久 2）年から 1916（大正 5）年ということが分かった。墓碑②の碑文に「寂」

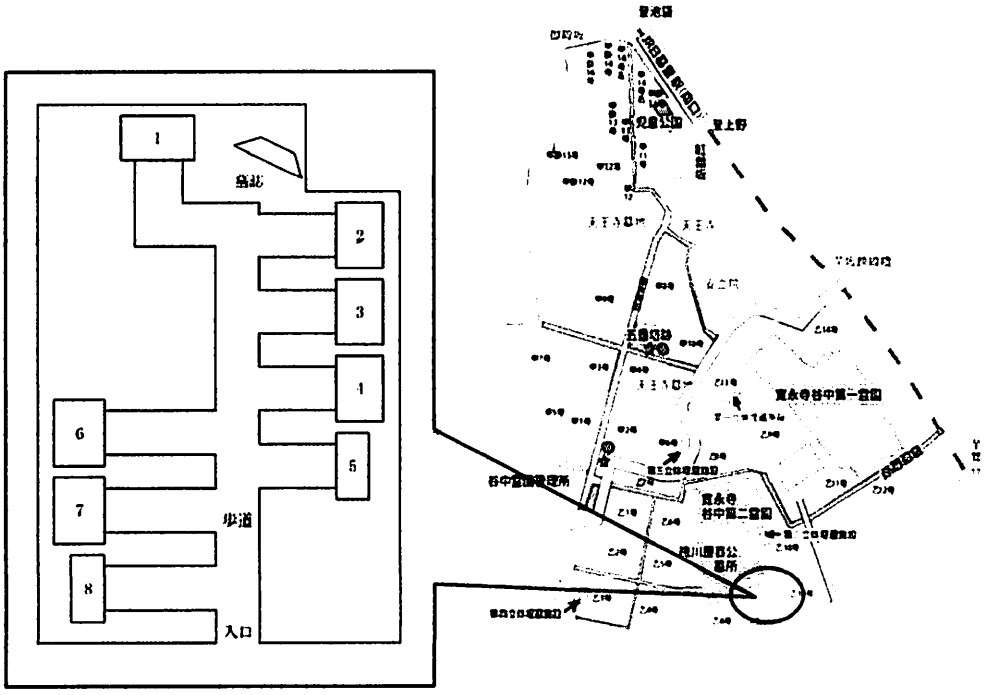


図 8　東京谷中霊園にある鄭家のお墓の構造と所在

の一文字しかない。墓碑④は鄭永慶夫婦のお墓で、そこから鄭永慶の生卒は 1859（安政 6）年から 1895（明治 28）年だと分かる。③⑤⑥⑦⑧は他の親族のお墓である。

（2）鄭永邦の父鄭永寧について

鄭永寧（呉右十郎）は呉榮宗を祖とする呉用藏の子として生まれ、鄭宗明を祖とする鄭幹輔の養子として育てられた。つまり、鄭永寧と呉碩は兄弟関係であり、呉啓太と鄭永邦は従兄弟関係である。呉榮宗を祖とする『呉家系譜』には、鄭永寧について「卯四郎　改名右十郎　過房鄭氏　永寧ト改ム」と記録している。『史料摘録』の家譜には、鄭永寧の子に「永慶、永昌（正六位勲五等領事　嗣鄭家　娶竹野氏為妻）、永邦（正七位勲六等公使館書記官）、女子（名虎嫁楊龍太郎）」と挙げている。ちなみに楊龍太郎は『官話指南』の発行者である。

鄭永寧のお墓について、『東亜先覚志士記伝　下巻』は「明治 30 年 7 月 29 日 69 歳を以て歿した。東京谷中墓地に葬った」と記録している (25)。しかし、彼の墓碑は長崎の家族墓地にも谷中霊園にも見られない。それゆえ、谷中霊園の鄭家墓地の②番―「寂」と書かれているお墓は鄭永寧のお墓の可能性がもっとも高いと考えられる。

1869（明治 2）年 2 月に、鄭永寧は一等訳官として東京に招かれ、翌年に 1871（明治 4）年の日清修好条約締結予備交渉のために、外務大臣柳原前光に随行し、天津に赴任した。鄭永寧は李鴻章を介して曽国藩の意中を探り、清国は日本と条約締結の意があると確かめた。『対支回顧録』はそれについて「無条約国に何等の公式資格なくして此の如き微妙なる内交渉を遂げ得たのは一に君の熟達した清語に負うものがあった」と評価している (26)。その後、鄭永寧は日本の対中外交に大きく貢献した。

鄭永寧は当時の地位のもっとも高い大通事鄭幹輔の養子であり、その後外交官という道に入った。呉碩の経歴と似ているといえよう。

〔2〕鄭永邦に関する記録

鄭永邦についての記録は 8 点見つかり、時間順に以下のように羅列する（次頁の表 1）。

資料 1 は呉榮一の口述によって作成されたものである。『呉家系譜』によると、呉榮一は鄭永寧の実弟の孫である。つまり鄭永邦は呉榮一の従叔父ということである。筆者は長崎晧台寺の後山にある呉家の家族墓地で呉榮一のお墓を確認できた。資料 2 は前述したように、日本政府や中国関係者の援助によって作成されたものである。資料 3 は「遺族、東京市渋谷区千駄谷三ノ五四九、鄭審一」によるものである。鄭審一のお墓は東京の鄭家の家族墓地にあり、鄭永邦や他の親族と合葬している。鄭永邦の息子である。よって、資料 1、2、3 は信憑性の高い資料だと考えられる。しかし、資料 1 は資

料 2、3 と相違するところがある。資料 1 では鄭永邦は鄭永寧の三男だと述べているが、資料 2 では鄭永邦は第二子で、「兄永昌と共に父永寧の膝下に教育を受け（た）」と記録している。資料 3 も鄭永邦は二男と記録している。

表 1. 鄭永邦に関する記録

	出版年月	書名	出版社
1	1919（大正 8）年 3 月	『大礼記念長崎人物伝』	長崎県教育会
2	1936（昭和 11）年 4 月	『対支回顧録　下巻』	対支功労者伝記編纂会
3	1936（昭和 11）年 10 月	『東亜先覚志士記伝』	黒竜会出版部
4	1953（昭和 28）年 11 月	『大人名事典』	平凡社
5	1969（昭和 44）年 10 月	『中国語学新辞典』	光生館
6	1981（昭和 56）年	『近代来华外国人名词典』	中国社会科学出版社
7	2001（平成 13）年	『日本人名大辞典』	講談社
8	2003（平成 15）年	『人物レファレンス辞典　郷土人物編』	日外アソシエーツ

年から見れば、鄭永昌と鄭永慶はそれぞれ鄭永邦より、6 歳、3 歳年長である (27)。鄭永慶は鄭永邦の兄の可能性がある。筆者は公文「本省員兵役関係雑件」(28) で鄭永邦徴兵関係の資料を見つけた。そこに「士族　永寧ノ三男」と書かれており、公的な資料で、鄭永邦は三男であることを確認できた。

記述がそれぞれ異なる理由は以下の 2 点だと考えられる。

①鄭永慶は 1888（明治 21）年に「日本最初の喫茶店」である可否茶館を経営していた。そのため、鄭永昌、鄭永邦と異なり、外交官ではなく、名が彼らほど知られていない。

②資料 1、3 の提供者の呉榮一、鄭審一 (29) が生まれる前に鄭永慶はすでに亡くなっており、彼らは会ったことがない。それによって記述が異なっている。

以上の分析から、鄭永昌は鄭永慶より 3 歳年上ということが明らかになった。しかし、『史料摘録』にある鄭家の家譜では、鄭家 4 兄弟の順番は「永慶、永昌、永邦、女子」となっており、鄭永慶のほうが年上というふうに書かれている。筆者の考察を通じ、「永昌、永慶、永邦、女子」に変えるべきではないかと思う。また、宮田の『唐通事家系論攷』は『史料摘録』を参考にしたため、同じように間違っており、鄭永昌のことを「永寧の第二子で、鄭家を継ぎ、外交官として活躍した。兄の永慶は東京でコーヒー茶館を経営した」と述べている (30)。

資料 4 は資料 3 に基づいたものである。資料 4 に鄭永邦の生年に「1862 年」、「文久 2 年 12 月 28 日」と挙げている。しかし、それに対して、資料 7 は「1863 年」、「文久 2 年 12 月 28 日」となっている。文久 2 年 12 月 28 日の西暦は 1863 年 2 月 16 日であり、おそらく資料 4 は西暦に換算しなかったために生じた間違いだと考えられる。資料 6 は中国で出版された資料で、序文によると、この資料は多くの資料を参照にし、考証せずに作成されたものである。資料 8 は「通訳」、「北京公使館書記官」という情報以外、「不明」であったため、参考にすることができない。

資料 1、2、3 に基き、筆者の考察を加え、鄭永邦の生涯を簡単に紹介する。

鄭永邦は文久 2 年 12 月 28 日（1863 年 2 月 16 日）に鄭永寧の子として生まれた。東京外国語学校を卒業後、1880（明治 13）年に通弁見習として北京公使館に留学した。留学中に、呉啓太とともに『指南』を出版した。鄭永邦は 1886（明治 19）年に公使館書記生となり、翌年 12 月に日本に戻った。1889（明治 22）年に朝鮮において日清露の勢力が争い、清国公使の権勢が朝鮮政府を圧倒したので、彼らと交渉するため、中国語通訳が必要とされた。こうして鄭永邦が書記官として京城に赴任することとなった。1890（明治 23）年 8 月に一旦帰国し、1893（明治 26）年 9 月に再び朝鮮に赴き、日清戦争の際に活躍していた。下関日清媾和談判の際にも通訳を担当した。1896（明治 29）年から 1906（明治 39）年まで北京公使館に在勤していた。1900（明治 33）年に、義和団の乱も起き、公使館の事務はすべて鄭永邦が担当した。中国語教育者の井上翠が『松濤自述』で鄭永邦について、「「北に鄭あり、南に御幡あり」とは、明治三十年ごろ支那語学界では口口に称賛したものです」と述べている (31)。1913（大正 2）年に国民政府に招聘され、袁世凱に重用されたが、1916（大正 5）年に胃癌 (32) のために東京で亡くなった。享年 54 歳。

〔3〕鄭永邦の中国語教科書

鄭永邦は『指南』を出版した後も数冊の中国語教科書を出版した。以下のようにまとめる（表 2）。

表 2. 鄭永邦の出版物

	出版年月	書名		出版社／出版者
1	1888（明治 21）年 12 月	『日漢英語言合璧』	呉大五郎、鄭永邦編	鄭永慶
2	1910（明治 43）年 8 月	『日漢英露四語合璧』	呉大五郎、鄭永邦著	島田太四郎
3	1916（大正 5）年	『生財大道』	鄭永邦訳	島田太四郎

書 1 は初心者向けの教科書で、左から右まで 3 列に分けて、順番に英、中、日 3 ヶ国語対照という形式で編輯されている。著者の呉大五郎は前文で述べたように、呉啓太の弟であり、鄭永邦とは従兄弟関係である。奥付を確認してみれば、本書の発行者は「鄭永慶　可否茶館主」であり、出版にあたって鄭永慶から援助をもらったのだろう。もともと中国語教科書の少なかった時代において、さらに英語を入れるのは珍しいといえよう。本書の成書について、序文に以下のように書かれている。

> 子等（筆者注：呉大五郎と鄭永邦）既に清語ニ通暁ス。亦応ニ英語ヲ兼修スヘシ。今ヤ英語ノ我東洋ニ於ル。通商ニ交際ニ最モ緊要ニシテ。之ヲ解スルニ非レハ。事ニ臨ミ甚ハタ不便多カラント。是ニ於テ乎。二氏奮励シテ英語ヲ学ヒ。而メ其得ル所ノ語言ニ一々清訳ヲ施セリ。蓋シ又其習熟スル所ノ清語活用ノ練磨ニ備ヘンガ為メナリ。既ニ〆日積月累。裒然小冊子ヲ成スニ至レリ。

英語は通商貿易において重要な言葉のため、著者はさらに英語を勉強する必要があると感じて、英語を勉強し、本書を出版したという内容であった。実は 1886（明治 19）年に、呉大五郎は北京公使館にいる留学生に中国語の他、英語の勉強を提唱した。彼は『北京留学生試験成績審査意見書』(33) で以下のように述べている。

> 清国留学生ニハ特ニ英学ノ一課ヲ添設スベシ蓋シ将来ノ東洋外交官領事等ハ其国語ニ熟達シ其国情ニ通暁スル留学生出身ノ者其選任ニ膺スルコトアルベシ然ルニ英学ダモ通セサレハ第一其職務上障礙ヲ生シ又各国人ト交際スルニ不便ナレバ其レヲシテ英学ヲ修メシムルモ亦必要ノ点ナリ

彼は英語学習を提唱していたため、本書は公使館にいる留学生や外交官を目指す学生が英語学習のために編輯したものだと考えられる。この本はその後東京高等商業学校附属外国語学校で使われていた (34)。書 2 は 4 ヶ国語の教科書である。

書 3 は鄭永邦の訳著で、中に 2 つの序文がある。1 つは宛平駱珣の序文で、もう 1 つは金国璞と黄裕寿の序文である。本書は 1916（大正 5）年に出版されたが、2 つの序文の落款はいずれも「光緒丁亥」（1887 年、明治 20 年）である。当時鄭永邦は書記生として北京日本公使館に勤めていた。序文に「璞等捧読再三愛莫能釈」という表現があり、本書を出版する際に金国璞らが校閲したのではないかと考えられる。

その後、鄭永邦は外交界で活躍し、中国語教科書を出版したが、日本中国語教育への貢献は『指南』に留まっていたといえよう。

まとめ

幕末において、日本社会の変動とともに、ほとんどの唐通事や唐通事の子弟は中国語から離れた。しかし、唐通事の末裔である呉啓太と鄭永邦は彼らと異なり、中国語を勉強しつづけ、さらに中国に留学に行き、中国語教科書『指南』を出版した。こうした一連のことができたのは彼らの家庭環境と深く関わっていると思われる。

また呉啓太、鄭永邦及び彼らの家族について考察し、公的な資料において、呉啓太は呉碩の長男だと判断できた。鄭永邦については、先行研究が間違っており、正しい兄弟の順番は「永昌、永慶、永邦、女子」であることを明らかにした。また、鄭永邦の西暦の生年月日は 1863 年 2 月 16 日だとはっきりした。

唐通事 3 家族の関係（図 10）は以下のようにまとめられる。

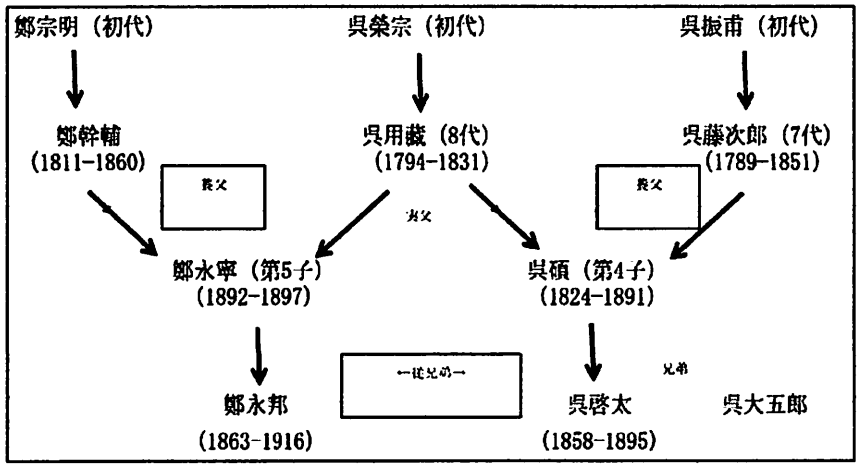


図 10　3 家族の関係図

呉啓太、鄭永邦の祖父は幕末に長崎唐通事の間で最も権力を持っている方であった。しかし、それにしても時代の動きを止めることができなかった。2 つの呉家が鄭家と養子をもらったり、送ったりすることは、唐通事家族が時代に淘汰されないため、団結しようとしていた証だと考えられる。その結果として、多くの唐通事家族が転業せざるを得なかったのに対して、呉啓太と鄭永邦の父は明治政府に招かれ、外交官となった。また、息子である呉啓太と鄭永邦は中国語を使う外交官である父がいたからこそ、中国語学習を続けられたと考えられる。2 人は他の唐通事の末裔と異なり、外交官という道を歩み、その後『指南』を出版した。

図版

図 1　藪の中の呉家の家族墓地
2016 年 7 月、長崎にて筆者撮影

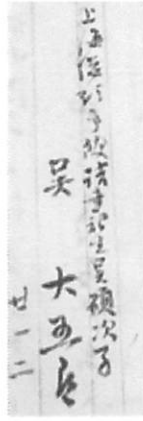


図 5　呉大五郎に関する記録

図 6　2015 年 9 月、長崎崇福寺にて筆者撮影

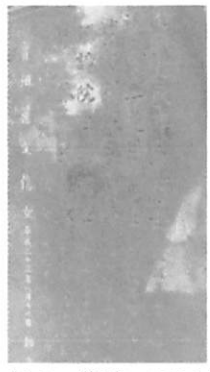


図 9　墓誌　2016 年 5 月、筆者撮影

注

1　本稿は国会図書館蔵本を参考にした。請求記号：5-191。1882（明治 15）年上海美華書館印。
2　1677 年に鉄心道胖（1641 － 1710）によって創立された。創立にあたって、母方の実家（唐通事）から多くの寄付を受けた。
3　渡辺庫輔（1901 － 1963）、長崎郷土史学者。
4　1963 年に県立長崎図書館が購入し、現在長崎歴史文化博物館の渡辺文庫に収録されている。1979 年に出版された宮田安の『唐通事家系論攷』も本資料を参考しにした。
5　頴川君平、1897 年 9 月。
6『訳司統譜』によると、7 代目の呉藤次郎は 1847（弘化 4）年 8 月に大通事過人になった。
7　呉用藏は呉榮宗を祖とする呉家の 8 代目で、小通事末席であった。呉榮宗は福建泉州府晋江県出身で、明末に動乱が起きたため、来日した。
8　筆者が参考した『呉家系譜』は、呉榮宗を祖とする 9 世子孫呉泰藏が 1837（天保 8）年に修訂し、1967（昭和 42）年に 12 世の呉鷹之助が加筆したものである。1995（平成 7）年に呉鷹之助の未亡人呉初枝が家譜の複写本を長崎県立長崎図書館に寄贈し、現在長崎歴史文化博物館に所蔵されている。呉碩は呉振浦を祖とする呉家の婿養子になったが、この家譜には名がまだ残っている。
9　長崎歴史文化博物館に所蔵されている渡辺庫輔の未刊行の資料である（請求記号：へ 13　311　1）。
10『対支回顧録　下巻』対支功労者伝記編纂会、1936（昭和 11）年 4 月、p.95。
11　下巻、対支功労者伝記編纂会、1936（昭和 11）年 4 月、p.96。
12　宮田安、長崎文献社、1979（昭和 54）年 12 月、p.785
13　光生館、1969（昭和 44）年 10 月、p.255。

14　何盛三、太平洋書房、1928（昭和 3）年 11 月、p.66。作者の何盛三は長崎の唐通事何家の養子で、善隣書院で教師をしていた。
15　長崎歴史文化博物館に所蔵されている渡辺庫輔の未刊行の資料である（請求記号：へ 13　311　1）。
16　所蔵：外交史料館、請求番号：6－1－7－1。
17　呉大五郎の履歴書によると、呉大五郎は明治 7 年に長崎勝山小学校に入学し、明治 8 年に卒業と同時に長崎英語学校に入学した。その後中国各地を遊歴し、明治 11 年に帰国した後、東京外国学校漢語科に入学した。明治 13 － 16 年外務省留学生として渡清した。
18　所蔵：外務省外交史料館。請求番号：6－1－2－12。
19　所蔵館：国立公文書館。『公文類聚・第 11 編・明治 20 年・第 5 巻・官職門五止・選叙任罷・官吏雑規・議会』に収録されている。請求番号：類 00292100。件名：在白耳義国我外務省留学生彼ノ国官設大学校ノ試験ヲ通過セシモノハ本邦ノ試験ヲ用ヒス公使館書記官ノ資格ヲ有セシメント請フ聴サス
20　宮田安『唐通事家系論攷』長崎文献社、1979（昭和 54）年 12 月、p.678。
21　鄭永昌は碑文に、「昭和六年十一月三日卒　行年七十七歳」と書かれているため、安政 2（1855）年生まれとなる。しかし、鄭永昌の生年月日について、『対支回顧録　下巻』では「安政二年十二月十一日生まれ」と書かれており、当時は旧暦を使っていたため、西暦に換算すれば、翌年の 1856 年 1 月 18 日となる。そのため、鄭永昌の生卒は 1856 年から 1931（昭和 6）年である。
22　宮田安、『唐通事家系論攷』長崎文献社、1979（昭和 54）年 12 月、p.671。
23　長崎歴史文化博物館に所蔵。
24　古賀十二郎『徳川時代に於ける長崎の英語研究』p.66（国会図書館デジタル資料）。
25　黒竜会、昭和 11 年、p.584。
26　下巻、対支功労者伝記編纂会、1936（昭和 11）年 4 月、p.33。
27　前文で鄭家のお墓を考察し、鄭永慶の墓碑に「明治廿八年七月十七日歿於米国華盛頓州沙土耳行年卅七歳」という碑文が残っており、生卒は 1859 年から 1895 年だと分かる。鄭永昌の生卒は 1856 年から 1931 年のため、鄭永昌は鄭永慶より 3 歳年長だと分かる。鄭永邦は文久 2 年生まれのため、鄭永昌と鄭永慶はそれぞれ鄭永邦より、6 歳、3 歳年長であることが分かった。
28　所蔵：外交史料館。請求記号：5－1－2－0－2－1－001。
29　鄭審一の碑文によると、鄭審一は 1964（昭和 44）年に 73 歳で亡くなった。そのため、鄭審一が生まれる前に、鄭永慶がすでに亡くなっていたと分かった。
30『唐通事家系論攷』の pp.682 － 683 を参照。
31　『中国語文資料彙刊　第 5 篇第 4 巻』不二出版、1995（平成 7）年 11 月、p.319。「御幡」とは上海にいた御幡雅文のことである。
32『大正過去帳　物故人名辞典』東京美術、1973 年。
33　所蔵：外務省外交史料館。『清国本省留学生派遣雑件』に収録。請求番号：6－1－7－1。
34 田中慶太郎は「出版と支那語」（『中国文学』第 83 号）で、東京高等商業学校附属外国語学校の中国語授業を回顧する時に「学校の教科書は「日漢英語言合璧」」と述べたため、本書は東京高等商業学校附属外国語学校で使われていたことが分かった。

通州師範学校と日本人教習
―その活動と評価について―

劉　佳

はじめに

通州師範学校 (1) は張謇 (2) により創立された中国の初めての師範学校である。1902 年に学校の建設工事が始まって、翌年の 2 月に講習科を設立し、4 月 27 日に開校式を行った。

通州師範は当時尋常師範と呼ばれ、小学校の教員を養成することを主な目的とした。この学校は通州地域で多くの教員や実業に必要とされる人材を養成しただけではなく、山西・甘粛などの省が送ってきた人材も育てあげた (3)。

張謇は積極的に日本人教習を招聘したが、日記などにもあまり記載がなく、かつまた南通において、日本人教習に関する伝記などもない。教育雑誌や報告書などに分散している記録が何点かあるが、系統になっていない現状である。中国の張謇研究者は日本人教習の貢献を肯定しているが、彼らの経歴、通州に来た経緯などについて、まだ不明のようである。

日本において、通州師範学校に勤めた日本人教習を触れた論文が 2 本ある。蔭山（1992）は、通州師範に雇われた日本人教習の活動を研究した (4)。金(2006)は木村の学歴と職歴を調べ、彼と通州の教育者孫鉞との交流を整理した (5)。しかし、上述の先行研究では、日本人教習の経歴、通州師範学校に招聘された経緯、帰国後の活動などについての詳しい記述がない。

師範学校の初期において、これらの日本人教習が重要な役割を果たして、師範学校の教育研究を推進し、師範生の教育能力の向上に大きく貢献したと言っても過言ではないが、彼らについての研究はとても少なくて、その功績も十分評価されていない。そこで、本稿では、通州師範学校に勤めた日本人教習、特に西谷虎二の通州に来た経緯、通州での教育活動を考察し、彼らが当時の通州教育界にどのように評価されたか、また、南通の近代教育の普及へどのような貢献をしたかを明らかにしたい。

第1節　日本人教習を雇う背景及び経緯

〔1〕時代背景

清末において、中国は半植民地になってしまい、有識者達が「救亡図強」を提唱し、社会改革を推進しはじめた。日清戦争で日本に負けた後、主流の風潮は日本に習って、日本が成功した経験を中国で生かすという方向性の模索であった。特に教育の面においては学校制度を日本モデルにしようとした時期である。この点について、阿部洋は以下のように述べている。

> 近代学校教育のめざましい発展こそが、日本の急速な国家発展の基礎となっているとの認識が中国側に生まれるのは、一八九四～五年の日清戦争の敗北を機とする「変法自強運動」の時期においてであった。そしてこの認識がさらに深まり、清朝政府が日本をモデルにして教育近代化の努力を本格的に推進するのは、日露戦争における日本の勝利が契機となっていた (6)。

1902 年「欽定学堂章程」の発布によりはじめて近代学校の制度が導入された。以後清末の 10 年間にわたり、小学堂から大学堂にいたる各段階の学堂（近代学校）を系統的に設立普及するための努力が全国的規模で展開されるが、この過程において、隣国日本の教育近代化の先行経験はつねに良き参考とされ、日本の教育が、制度、目的、内容、方法など、すべての面において模倣された。その意味で清朝末期は、まさに「日本モデル」の教育改革の時代であった (7)。

この時期において、日本人教習を雇うことも日本モデルの教育システムの導入と並行して進められた。

〔2〕通州の需要

周知の通り、当時の通州は伝統的農村であり、人口密度は高かったが、教育を受けた経験者の割合は極めて低かった。張謇は初等学校の設立により、このような状況を変え、人材を育成しようと図った。日本モデルの教育システムを南通へ導入しようとした際に、日本の近代学校制度、教育理念、先

進的教育方法などを学び、師範生の能力を向上させるため、張謇は日本人教習を積極的に招聘した。

1904 年 1 月に頒布された『奏定学堂章程』の「学務綱要」の節では、師範学校の外国人教員の招聘について、このように規定している。

省城師範學堂，或聘外國人爲教員，或輔以曾學外國師範畢業之師範生。外府師範學堂，則只可聘在中國學成之師範生爲教員 (8)。

（日本語訳）省城の師範学堂は、あるいは外国人を招聘して教員とし、あるいは嘗て外国の師範学校を卒業した師範生を以て補助とした。外府の師範学堂は、すなわち、中国で学んだ師範生を招聘して教員とした。

通州師範学校は私立の尋常師範学校であったため、『奏定学堂章程』によれば、本来は外国人教員を雇ってはいけなかったが、清朝が滅びる 1911 年まで、このような「違法」状態が 7 年間続いた。それは当時の清朝政府が全国をまとめて法令で管理する力に欠けていることと、張謇の個人的影響力が地方、及び中央政府に及んだ結果によるものであった (9)。張謇が日本人教習の重要性を認識し、法令違反をしてまでも、日本人教習の力を借りたいという決心を示したものとも言えよう。

〔3〕日本人教習の招聘について

開校してから通州師範学校に勤めた日本人教習は次の 7 名であった (10)。

名前	在校期間	担当科目	履歴
末造高俊	1903.3 ～ 1903.6	日文	東亜同文書院教授
吉沢嘉寿之丞	1903.3 ～ 1906.1	数学・理科	東京物理学校
遠藤民次郎	1904.1 ～ 1904.8	算術・外国地理	東京高等師範学校卒業
西谷虎二	1904.1 ～ 1914.12	日文・教育	文科大学漢学科卒業
木村忠治郎	1904.8 ～ 1911.1	理科・教授法	東京高等師範学校卒業
宮本幾次	1907.3 ～ 1909.1	測絵	中学校卒業
照井喜三	1908.2 ～ 1909.1	農科	農科卒業

表 1　通州師範学校に勤めた日本人教習一覧表 (11)

当時、日本人教習に支払う給料は中国人教員より遥かに高かったが、張謇は日本人教習が中国に必要な知識と技術を持っていることを認め、それを学ぶにはそれなりの代価を支払うのも当然のことだと考えていた。しかし、通州師範学校は政府からの支援を得ず、学校は大生紗廠の利益を流用し、かつそれに加えて、郷紳の寄付金によって運営されていた。ところが、資金不足の問題を抱えているため、通州師範の日本人教習の招聘は最初から難関であった。

1903 年日本において教科書疑獄が発生した。教科書疑獄とは、明治時代後半期に教科書採択をめぐっておこった贈収賄事件である。1902 年 12 月 17 日に金港堂、集英堂などの教科書会社が家宅捜査をうけ、県・郡視学官らが拘引されたのに始まり、翌 03 年 3 月まで県知事、県書記官、師範学校長、県会議長、教科書会社社長など 200 人近くが全国的に検挙された (12)。そして、贈収賄罪の判決を受けた教育者は日本の教育界から追放された。これは張謇に相対的安い賃金で高い技術を持っている日本人教習を通州に呼ぶ機会を与えた。従来中国において、道徳と能力の両面に優れた教師像が求められていたが、張謇はその基準を低くし、日本人教習の道徳面の欠点に目をつぶり、知識と技術だけに着目した。実際に、表 1 に示した遠藤、西谷、木村の 3 人はみな教科書事件で有罪の判決を受けた教師であった。

第2節　西谷虎二について

〔1〕通州師範学校に招聘される経緯

西谷虎二（1868 ～？）は鳥取県の士族 (13) であり、1894 年、東京帝国大学文科大学の漢文科を卒業した。卒業後、彼は教育界で活躍していた。同年、彼の書いた「宋学概要を読む」という評論が有斐閣の刊行した『哲学雑誌』、「中野逍遥子を悼む」が東亜説林社の刊行した『東亜説林』に掲載された。28 歳の時、山形県庄内尋常中学校長に任命され、年俸 800 円を下賜され (14)、翌年の 1897 年に、年俸 900 円を下賜された (15)。1901 年、彼は高等官五等に陞叙され、千葉県視学官正七位になった (16)。その後、千葉県視学官従六位に陞叙され、1902 年県立宮城県第一中学校に転任し、校長の職務を任ぜられて、年俸は 1500 円に上がった (17)。このように若くて重責を任せられたのは、西谷がどれほど優秀な人材であったかを示すものであったと言えよう。

しかしながら、1902 年 12 月 19 日に、「文部大臣稟議県立宮城県第一中学校長西谷虎二休職ノ件」を認可する指令案が出て (18)、1903 年 2 月、西谷が教科書事件収賄被告人となった予審は決定した。

彼は軽罪公判に移された。予審決定書により、彼の罪状は次の如くであった。すなわち、1901 年夏頃、西谷は東京金港堂出版の書籍採用の内嘱を受け、500 円を収受し、同年 11 月頃、同様の内嘱を受けて 500 円を収賄した、というものである (19)。

西谷虎二の写真（出典：『百年通師』）

同年の 3 月 13 日の審問では、西谷は収賄のことを否定した (20) が、1903 年 3 月 16 日、東京地方裁判所において、「被告を重禁錮三ヶ月に處し、罰金拾圓を附加す、収賄金千圓を被告より追徴す」(21) と判決が出された。西谷は控訴したが、有罪判決が確定したため、位記返上の処分を受けた (22)。

教科書事件に巻き込まれて、西谷の保証されている将来が見えなくなってきた。その後、彼は王仁乾 (23) の紹介により、通州師範学校に勤めるところになった。

〔2〕通州師範学校での教育活動

1904 年 1 月、西谷は通州師範学校に赴任した。彼は漢文科を卒業したが、中国語の発音が悪くて、学生は聞き取れなかった (24)。そのため、木村と同じように、主に筆談で学生や中国人教職員とコミュニケーションをしていた。

彼は日文、教育史、西洋史、世界史、論理学、英文などの授業を相次いで担当し、また高等小学校で体育の授業を兼任した。翰墨林書局は西谷の著した『英国史』を出版した。この本は彼の授業のノートをまとめたものと思われるが、1938 年日本軍の侵入によって、翰墨林書局の資料と書籍が殆ど失われたため、現在は見られない。

西谷と木村は師範生と共に寮に住んでおり、授業以外の時間に学生の日本語の指導をよくしたと思われる。本科 2 期生の生孫鉞は落合直文が書いた『中等教育日本文法教科書譯釋』を中国語に訳した。難問に遭った時に、孫鉞は西谷に教えてもらった。そして、完成した原稿に「謹呈西谷先生鑒定（謹んで西谷先生に呈して鑑定をお願いする）」を書いて、校閲を願った。西谷は細かくチェックして、赤ペンで添削し、眉批（ヘッダー）をたくさん書いた。かつ、わざわざ自分の名前を翻訳者欄から消した (25)。この本は 1905 年に翰墨林書局より出版され、通州の学生が日本語を学ぶ時の文法書となった。西谷の名前は残っていないが、彼の功績は記されている。孫鉞の遺物から、当時の原稿の一部が発見され、その添削は西谷によることが判明した。その原稿は現在南通博物苑で展示されている。

西谷の提唱により、1910 年通州師範学校の校友会が設立された。校友会と教育の関係について、彼は次のように述べた。

> （前略）愛校為公共心所發生。推之愛鄉愛國，胥是道也。故養成愛國之公共心，必自愛校始。養成公共心，即養成一已(己)團結之精神，即將來自治之精神。使中國人人有自治心，基乎此矣。日本各處，有校必有會，勢力之所及，即自治精神之所在。學校經費不足，由校友襄助。地方有宜改良者，其費亦由校友籌補。中國既有此會，社會之事，亦將由校友會中發出勢力，以為進行之計，而立自治之基矣 (26)。
>
> （日本語訳）愛校とは公共心を生じるものである。これを愛郷・愛国に推し広げるならば、みな「道」である。故に、愛国の公共心を養うためには必ず愛校から始めるべきである。公共心を養うのは、すなわち団結の精神を養成することであり、将来の自治の精神である。中国人にみな自治心を持たせる基はここにあるに違いない。日本において、各地に学校があれば必ず校友会があ

って、その勢力の及ぶところは、すなわち自治精神のある場所となる。学校の経費が不足している場合において、校友が助ける。地方に改良するべきことがあれば、その費用はまた校友が補った。中国において、すでにこの会があるため、社会のことも、また校友会の中から力を出し、進行　の計を作り、自治の基を立てるべきである。

つまり、学校の教育は学生の公共心と自治心を養い、学生の故郷と国への愛にも繋がっている。このような教育を受けて、愛郷・愛国心を持つ卒業生は将来国の前途を担い、母校と故郷に恩返しをする。校友会はこのような卒業生を集める組織であって、地方自治を推進する力になるのに違いないと、西谷は校友会の重要性を高く見ていた。勿論、校友会はこのように、民主と自治に深くかかわっていたが、よりはっきりとした役割を持っていた。それは通州の初級教育の普及と教育の研究を推進することであった。

校友会が設立された時、会則が作られた。これには「本會以親睦同校交誼研求教育進歩為目的（本会は同校生と親しく交際することと教育の進歩を求めることを目的とする）」とはっきり示されている。会務は庶務部、学芸部、交際部、通訊機関部によって運営される。第1次校友会の会長に選ばれたのは張謇であった。副会長の江謙は師範学校の監理であって、各部の部長及び事務員はほぼみな師範学校の卒業生であった (27)。

校友会雑誌は 1911 年から、8 年間刊行された (28)。雑誌には、毎回師範学校の行事や関連人物の写真が掲載されている。師範学校の沿革、重要な演説、報告、意見書、授業見学、学校管理などの報告、論文、さらに、師範学校の附属小学校の生徒が書いた文章、卒業生及び職員の名簿、各一覧表などのような図表が掲載されている。校友会雑誌を通じて、当時通州において、校友会の活動や教育現状、教育研究の趨向などが知られる。その内容からみると、卒業生の関係を固めて教育研究を進めるという目的は達成したと言えよう。

浙江省教育会が刊行した『教育週報』に、次のように通州師範校友会についての記事があった。

南通師範於日昨舉行第六屆校友會。先一日，敦請名人講演。盲啞教師演習教授，及啞人實地談話。（略）是晚又演活動寫真，直至夜十時始散。翌日開校友會，到會者數百人。各贈以校友雑誌一冊，陳述母校一年來之現狀，以為校友之紀念。誠盛舉也 (29)。

（日本語訳）南通師範は昨日第 6 回校友会を挙行した。その前日に、著名人に講演、盲唖教師に教授演習を、さらに盲唖人にその場で談話してもらった。（中略）その夜はまた活動写真を上演し、夜 10 時になってようやく終わり、解散となった。翌日、校友会を開いた。参加者は数百人だった。母校の 1 年間の現状を陳述した校友雑誌をみなに 1 冊ずつ贈り、校友の記念としてもらった。まことに盛挙であった。

浙江省からわざわざ記者を送ったのは、通州師範学校校友会の活動は通州県だけではなく、外部の注目を浴びた証明であろう。

西谷は通州師範学校に 11 年間勤めて、師範学校に尽くした。彼は様々な教育活動を行ったが、師範学校校友会の設立の提唱と参与は最も影響を残したことであると言えよう。

第3節　他の日本人教習

〔1〕木造高俊

木造は大学漢文専科得業士であり、1901 年 4 月から同年の 12 月 (30) まで東亜同文書院で「支那制度律令」という課目を担当していた (31)。彼は羅振玉の紹介によって、1903 年 3 月通州に来た。その時、通州師範学校はまだ正式に開校していなかったが、講習科の授業はすでに始まっていた。彼は当時の師範生に日本語を教えたが、張謇に通州師範の平面図の作成を依頼された (32)。

蔭山（1992）によると、木造は東亜同文書院の首席教授であり、同文書院では清国の諸制度及び律令、法学通論という科目を担当し、張謇が木造を通州師範学校の諸章程及び規則作成の実質的責任者として招いて、通州学務処の顧問に任用する予定とある (33)。

1903 年 6 月 24 日、張謇が日本で視察を行った時、兄の張詧の電報により、木造の自殺を知った。木造はその日に、あるいは前日に死んだと思われる。

得三兄讯，知通州师范教习木造以神经病自戕。日人在中国自戕者，约略记忆似有二三人。若在本国自戕者，见于各报，几无旬无之，了不足异。中国之人少见多怪，又鬼神祸福之说痼其脑筋，不知谣言当作何状 (34)。

（日本語訳）三番目の兄の便りを得て、通州師範の教習木造が神経病で自殺したことを知った。日本人が中国で自殺した者は 2、3 人いたように覚えている。もし日本で自殺をしたら、各新聞に見えて、一旬が経たないうちに、ほぼ静まって、怪しまなくなる。中国人は見聞が狭くて多く怪しんで、また、鬼神の説に縛られているので、噂はどのようであったかが分からない。

彼は自分が書いた年譜「嗇翁自訂年譜」で、改めて木造の死に触れた。

（略）师范日教员木造以日俄将战之忧，自戕死，遗书述故 (35)。

（日本語訳）師範（学校）の日本人教員木造は日露がすぐ戦争になることを心配して自殺し、遺書を残してその理由を述べた。

日本人教習について、張謇による記録はとても少なくて、かつ彼は態度をはっきり示したこともほとんどないが、大いに期待していた木造が自殺し、また、彼の自殺が通州で大騒ぎを起こしたことに失望し、不満を感じたことが考えられるだろう。

〔2〕吉澤嘉寿之丞

吉澤は富山の出身で、東京物理学校数学科の第20回生であり、1896年7月に卒業した(36)。彼は1903年3月通州師範学校に来て、数学と理科の授業を担当し、1906年1月に退職した。その間に、通州を出て、長期間職場に戻らなかったそうである。張謇は王国維への手紙で、「吉泽久不来甚不合信义」(37) と強く批判した。

吉沢の妻である森田政子は張謇の息子の保母として雇われて、1906年2月から通州私立女子師範学校に勤めた。1907年2月、吉澤夫婦は退職し、日本に帰った (38)。

〔3〕遠藤民次郎

1857年、遠藤は東京府士族の家庭に生まれた。1884年4月に東京高等師範学校の中学師範学科を卒業した (39)。1896年7月10日から島根県師範学校の教諭として勤めていた (40)。1898年7月18日、三級下俸を下賜された (41)。1899年5月19日から、学校長に選ばれて、1902年9月23日まで在職していた (42)。その後、彼は私立明治義会中学校 (43) の校長になって、1903年2月まで勤めた (44)。

教科書事件で彼は被告になって、1903年4月7日に「重禁錮三月に處し罰金拾圓を附加し収賄金五百圓を追徴」(45) というような宣告を受けた。同年の4月18日、賞勲局より、彼の明治27年従軍記章が被覆し、4月23日に宮内省から「位記返上致スヘシ」という指令が下った (46)。

1904年1月、遠藤は通州師範学校に赴任し、算術と外国地理の授業を担当していた。しかし、1年間も勤務せず、彼は同年の8月に通州師範学校を退職した。

〔4〕木村忠治郎

木村忠治郎（1869 ～ 1920）は愛媛県出身の平民であり、1893年に東京高等師範学校の理化学科に入学し、1896年3月に卒業した。1897年から、福岡県尋常師範学校の教諭となり、1900年4月から大阪府師範学校に移り、1902年3月まで教諭として勤めており (47)、同年の4月からは大分県師範学校に移動した (48)。木村も教科書事件に巻き込まれて、収賄の容疑で検挙され、「重禁錮三月十五日、罰金十五圓、追徴金二千二百五十圓」(49) の宣告を受けた。その後、日本でいられなくなった木村は東京高等師範学校長の嘉納治五郎の紹介で、中国に渡って、通州師範学校に勤めるようになった。

木村は1904年8月から1911年1月まで、通州師範に在職し、理科と教授法という科目を担当していた。

〔5〕宮本幾次と照井喜三

1906年9月、通州全土を測量して地図を作るため、張謇は通州師範学校で測絵科を設置したが、専門的教師を見つけられなくて、専科の授業は開設できなかった (50)。1907年3月、台湾土木工程局に勤めた技師である宮本は招聘されて、測絵の授業を担当した。1908年2月、建築人材を養成するため、通州師範で土木工科が設置された。宮本は主任に任命された。1909年1月、土木工科の学生が卒業した後、宮本は退職し、日本に帰った (51)。

1908年2月、照井は通州師範に招聘され、農科という科目を担当し、農科の主任を兼任した。1909年1月、彼は辞職して日本に帰った (52)。

第4節　日本人教習への評価

〔1〕張謇の評価

（1）優遇と信頼

通州師範学校の日本人教習について、張謇はあまり記録を残しておらず、彼らの功績をはっきり肯定したこともないが、彼らを優遇し、信頼した。

前述したように、張謇は日本人教習の技術と能力を認め、彼らを通州師範学校に招き、重要な仕事を任せた。そのために、中国人教員より高い給料を支払った。都の研究によると、契約時、西谷、遠

藤及び木村の月俸はそれぞれ100元、80元、120元であり、1905年以後、日本人教習の月俸は100元以上に増額され、西谷は150元に達した。もちろん、当時の中国の公立の師範学校などに比べて、この金額は低かったが、通州師範の中国人教習と比較してみれば、初期の中国人教員の平均月俸は40元であって、その中で最も高かった王国維と馬晋羲ですら70元に過ぎなかった(53)。

日本人教習について、張謇が師範学校の教職員に書いた手紙に、次のようなものがある。

送吉泽先生之车夫既不识路，又不明白，可恨。下次须择妥人，不可认便。吉泽此次大苦(54)。

（日本語訳）吉澤先生を送る車夫は道も知らないし、物事も知らない。本当に恨むべきである。今度は妥当な人を選んで、適当にさせるべきではない。吉澤は今回大変苦しんだ。

宫本至沪，可由沪账房派人送来。合同可正名契约书，至校，老弟代订。即以此为委托代表之据(55)。

（日本語訳）宮本が上海に着いたら、上海での会計所から人を派遣し、〔彼に〕送ってきてもらってよい。合同は契約書と改称してよい。学校に着いたら、私に代わって契約する。すなわち、これを委託代表の証明書とする。

給料だけではなく、張謇が残した記録の中、契約の段階から、彼が日本人教習を重視し、便宜を図って、大切にしていたことが垣間見える。

また、張謇はあまり家に客を招待しなかったが、日本人教習達を何度も家に誘った。彼らが退職した時にも、張謇は礼金を与え、感謝の意を表した(56)。

さらに、日本人教習に師範学校の教育指導、教授法の研究、校友会の設立などのような重要な仕事を任せたり参与させたりして、特に木村と西谷の2人に長期間の契約をし続けたことから、彼らを信頼していたことが知られよう。

（2）不満

張謇は日本人教習を尊敬し、優遇していたが、一方では、彼らにずっと不満や不信を持っていたのではないかと思われる。

上記の木造の自殺の件も吉澤と遠藤の契約違反の件も、張の反感を買ったに違いない。それだけではなく、その後、張謇は三（両）江師範学堂の日本人教習の軋轢を見てきた。

三（両）江師範学堂は1902年10月に、両江総督張之洞により、南京に開設された華中最大の教員養成機関であった。張謇と張之洞とは昵懇の間柄で、政治・教育・実業などにおいて、意見が近かった。南通での事業を起こす前に、張謇は張之洞の幕僚として、いくつかの重要な原稿を書き、三江師範学堂の創設にも参与した。張之洞は東亜同文書院に日本人教習の推薦を依頼し、該書院の教頭の菊池謙二郎を総教習とする日本人教習団11名が1903年6月に赴任した。ところが、1905年10月、菊池と他の日本人教習10名との間の対立が表面化した。張謇ら地元有識者は、教育指導に責任をもつ日本人教習の「怠慢」「不忠実」が三江師範学堂の不振を起こした最大の理由だと見なした。そのため、彼らを激しく非難し、江蘇学務総会会長張謇の名において、教習全員の解任を要求するに至った(57)。

張謇は「日本唯商德最下」(58)と言った。つまり、彼は日本において商業の道徳が最も低いと考えたのである。彼は『東遊日記』で、猛烈に商業道徳のない日本人を批判し、教科書疑獄に一言だけ触れたが、道徳に欠けているのは商人だけではなく、教師も同じであるように解釈できるのではないかと思われる。日本人教習について、彼の経験したことや見てきたことなどをまとめて考えれば、不信と不満を最初から抱えていたと言えよう。

〔2〕中国人教員及び師範生の評価

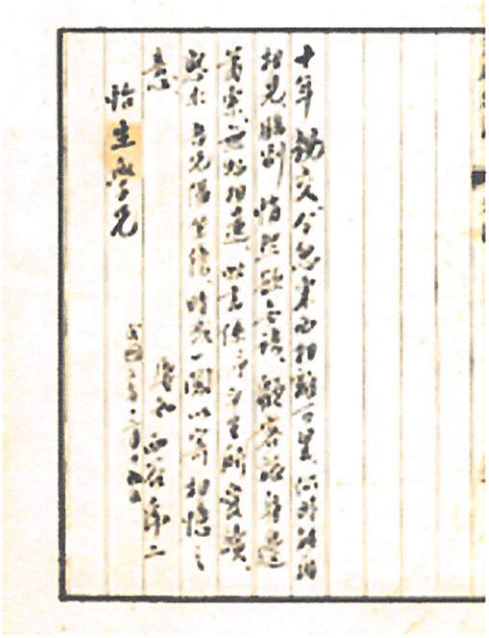
通州師範学校に勤めた日本人教習に対して、公的資料には、彼らへの評価がほとんど見られないが、多くの中国人教員と師範生に信頼され、尊敬されていたと言える。

前に述べたように、日本人教習が提唱した教育研究や校友会活動に、多くの師範学校の中国人教員が協力し、共に参加した。彼らの名前があげられることは少なかったが、その功績は中国人教員・師範生の実践したことによって、十分に評価を得たと言える。

木村が1901年に出版した『小学教授法要義』、及び西谷の授業講義『英国史』は中国語に訳され、翰墨林書局から出版された。これも学術の面において、2人の業績が認められた証明である。

張謇は木村・西谷を師範学校に迎えて、校内で最も環境のよい時孫堂（教師の宿舎）を手配した。しばらくして、2人は学生の宿舎に住んで、学生達と共に生活をするようになった(59)。言葉の壁があったものの、学生と長年にわたって、学習と生活を共にし、日本人教習と師範生の私的交流も深かった。西谷と顧公毅(60)の情も深かった。西谷は通州を去る前に、愛読書を顧に送り、別れの言葉を書いた。

通州師範本科 4 期生である孫杞 (61) は、恩師宮本幾次との交際について話した。1907 年、宮本は通州師範の測絵科の専任教師として雇われた。彼は中国語がほとんど分からなかったが、測絵科のすべての必修科目を担当した。宮本は学生のレベルに留意して、それぞれ課題を与えた。孫杞は勉強熱心で、宮本によく質問したため、宮本はそれに感動し、授業後も孫に個別指導をし、孫のノートと設計図を厳しく直した。孫杞は首席で通州師範を卒業し、江蘇省諮議局のビルを建てる仕事を任された。宮本が日本に帰った後の消息は不明であったが、孫杞は恩師のことを忘れなかった。そのため、『1995 中国建築業年鑑』は孫杞の項目に宮本の名前を入れた (62)。



西谷の顧公毅への贈言（通州師範学校所蔵）

（原文）十年親交，今忽東西相離万里，何時能再相見　臨別悄然欲無语，顧客旅身邊蕭索，無物相遣。此書係予平生所愛讀，懇求吾兄備坐傍，時或一阅以寄相憶之意。　　辱知 西谷虎二

怡生學兄

民國三年十二月十七日

（書き下し文）十年親しく交わり、今忽ち東西し、相離るること万里、いずれの時か能く再び相見えん。別れに臨み、悄然として語無からんと欲す。客旅を顧みれば、身辺蕭索、物として相遣す無し。此の書、予平生愛読するところに係る。吾兄に懇求す。座の傍らに備え、時に或いは一閲して以て相憶うの意を寄せん。

（日本語訳）10 年間親しく付き合って、今はすぐに遠く離れて、いつ会えるのでしょうか。別れる時、しょんぼりと無言で欲しい。客旅を顧みれば、物寂しくて、相残せる物がない。この本は私がいつも愛読しているもので、吾が兄（顧公毅）に懇ろにお願いして、席の隣に置き、時にもし読んでもらって、懐かしい思いを寄せるように。

不評であった日本人教習もいた。都によると、木造は厳しすぎて、よく学生を叱ったため、慕われていなかった。通州師範学校の 2 代目の校長に選ばれた江謙は木造の授業を何回か傍聴した後、聴講しないことにしたそうである (63)。

まとめ

通州においては、日本人教習についての記録や資料はとても少ない。1938 年日本軍が南通に侵入した際、燃やされたか、校舎を移転したときに紛失したか、文化大革命の時に処分されたか、いずれにせよ、分からない。日本においても、木村、西谷、遠藤に関する資料は若干あるが、他の教習はほとんど痕跡を残していない。現存の資料により、彼らの履歴と通州師範学校での活動をこれ以上はっきりさせることは不可能である。彼らは歴史を変えるような偉大な教育家ではなく、それぞれ汚点があって、張謇から公的に評価をされていない。ただ、このような普通の教育者達は、中国の教育システムが日本モデルにした時期において、通州師範に来て、当時の師範学校に最も求められている技術と制度をもたらして、通州の日本モデル化を推進し、貢献をしたことは評価されるべきである。

注

1 通州師範学校は幾度か改称し、民営から公立になって、1953 年江蘇省南通師範学校になった。1958 年、江蘇省南通女子師範学校（1906 年に創立された通州公立女子師範学校が前身校）と合併し、さらに、2005 年江蘇省海門師範学校（1906 年に創立された海門民立師範学校が前身校）と合併して、南通高等師範学校になった。そして、2014 年、南通師範高等専科学校に改称した（南通師範高等専科学校ホームページに掲載されている「南通師範高等専科学校沿革示意図」を参照 http://www.ntnc.edu.cn/Article/ShowArticle.asp?ArticleID=1702 2017/01/10）。

2 （1853 ～ 1926）、字は季直、季子、号は嗇庵。原籍、江蘇省通州（現在の南通市）生まれ、清末民初の大企業家、立憲派の重鎮、教育家、近代化の開拓者（山田辰雄編 『近代中国人名辞書』 財団法人霞山会 1995 年 p.1121）。

3 張孝若『民国叢書 第三編 南通張季直先生伝記』上海書店 1989 年 p.97

4 蔭山雅博「清末江蘇省における「日本型」学校制度の導入過程――張謇の活動を中心として――」『国立教育研究所紀要』第 121 集 1992 年 pp.1-16

5 金海蓮「張謇と日本―南通博物苑の創設をめぐって―」京都ノートルダム女子大学 https://www.notredame.ac.jp/ningen/graduate/study1/ronbun1.pdf 2015/12/13。

6 阿部洋『中国の近代教育と明治日本』福村出版株式会社 1990 年 p.15。

7 阿部洋『中国の近代教育と明治日本』福村出版株式会社 1990 年 p.14。

8 『奏定学堂章程』湖北学務処本 国立国会図書館所蔵。

9 朱嘉耀主編『南通師範学校史 第一巻・記事』南京師範大学出版会 2012 年 p.174。

10 張謇の息子の保母をした森田政子（1906 ～ 1907）の他、牛田千鶴子、竹内禎夫、東条良明、加藤将英の 4 人も通州私立女子師範学校招聘された可能性がある。ただ、南通では資料が残されていないため、彼らの履歴や教育活動などは不明である（南通師範学校の副校長である都樾の同意を得て、未公開の論文「風雲開張師範校」を参考にした）。

11 第 1 期（1911 年）から第 6 期（1916 年）までの『通州師範校友会雑誌』と『江蘇通州師範学校職員学生録』（光緒 29 年 4 月から宣統 2 年 9 月）を参照。

12 『大百科事典』4 下中邦彦編集・発行 平凡社 1984 年 pp.263-264。

13 『読売新聞』1903 年 2 月 15 日。

14 『官報』1896 年 10 月 5 日 p.46。

15 『官報』1897 年 5 月 19 日 p.230。

16 『教育界』第 1 巻第 1 号 東京金港堂書籍株式会社 1901 年 11 月 p.163。

17 『教育界』第 1 巻第 1 号 東京金港堂書籍株式会社 1902 年 10 月 p.291。

18 「文部大臣稟議県立宮城県第一中学校長西谷虎二休職ノ件」 『明治 35 年任免』巻 34 国立公文書館所蔵。

19 『読売新聞』1903 年 2 月 15 日。

20 『大阪朝日新聞』1903 年 3 月 13 日。

21 『読売新聞』1903 年 3 月 17 日。

22 『大阪朝日新聞』1903 年 6 月 9 日。

23 （1939-1911）、字は惕斎、日本で「凌雲閣」を開いて、中国の品物を取引していた。『無師自通東語録』を刊行した（王宝平「明治前期に渡日した浙江商人王惕斎の研究」山田奨治、郭南燕編『江南文化と日本―資料・人的交流の再発掘―』国際日本文化研究センター 2012 年 pp.341-344）。

24 孫模「通師日籍教師西谷虎二」『読雪斎文選』 南通市文学芸術界連合会 2011 年 p.89。

25 孫模「西谷虎二和孫子鈇」『読雪斎文選』 南通市文学芸術界連合会 2011 年 p.458。

26 西谷虎二「本会開会時之演説辞・其五本校教習西谷虎二先生」『南通師範校友会雑誌』第 2 期 翰墨林印書局 1911 年 pp.6-7。

27 「会則」『通州師範校友会雑誌』第 1 期 通州師範校友会学芸部編 翰墨林印書局 1911 年 pp.1-8。

28 現在南通図書館に保存されるのは校友会雑誌の第 1 期～第 8 期の 8 冊、及び 1923 年に刊行された『南通師範校友会彙刊』第 2 巻第 1 期、計 9 冊である。それ以外の年の校友会雑誌の出版状況は不明である。

29 『教育週報』第 137 期 浙江省教育会編集・発行 1926 年 pp.26-27。

30 上海東亜同文書院清水董三編『東亜同文書院創立二十周年根津院長還暦祝賀記念誌』東亜同文書院同窓会 1926 年 p.65。

31 「東亜同文書院職員及擔任課目」東亜同文書院 出版年不明（1903 年より前と思われる） 愛知大学図書館所蔵。

32 孫模「通師日籍測絵科教師宮本」『読雪斎文選』南通市文学芸術界連合会 2011 年 p.92。

33 孫模「通師日籍測絵科教師宮本」『読雪斎文選』南通市文学芸術界連合会 2011 年 p.14。

34 『東亜同文書院創立二十周年根津院長還暦祝賀記念誌』と松岡恭一・山口昇編『沿革史・下編東亜同文書院沿革史』（上海東亜同文書院学友会 1908 年 p.31）を見てみると、東亜同文書院の創立当時の教職員の名簿では、五十音順で教授の名前が並べられており、蔭山の首席教授という言い方は誤解だと思われる。また、『東亜同文書院職員及び擔当課目』により、木造が担当していた科目は「支那制度律令」であったことが分かる。

35 張謇が光緒 29 年 5 月 29 日（1903 年 6 月 24 日）に書いた日記（「柳西草堂日記」『張謇全集』編纂委員会編

『張謇全集』第 8 巻　上海辞書出版社　2012 年　p.554)。
36　『張謇全集』編纂委員会編『張謇全集』第 8 巻　上海辞書出版社　2012 年　p.1019。
37　東京物理学校編『東京物理学校五十年小史』東京物理学校　1930 年　p.213。
38　日本語訳：吉澤が長く来ないのは、甚だしく信義に合わない（「教育手牒」『張謇全集』編纂委員会編『張謇全集』第 3 巻　上海辞書出版社　2012 年　p.1421)。
39　朱嘉耀主編『南通師範学校史　第一巻・記事』南京師範大学出版会　2012 年　p.176。
40　『東京高等師範学校一覧　明治 30-32 年』東京高等師範学校　1911 年　p.199。
41　『島根県師範学校一覧　明治 40 年度』島根県師範学校　1911 年　p.149。
42　『官報』1898 年 7 月 18 日　p.239。
43　『島根県師範学校一覧　明治 40 年度』島根県師範学校　1911 年　p.148。
44　1906 年 3 月 31 日に廃止した（『官報』1905 年 12 月 23 日　p.771)。
45　『読売新聞』1903 年 2 月 15 日。
46　『読売新聞』1903 年 4 月 7 日。
46　『官報』1903 年 4 月 23 日　p.474。
47　『官報』1900 年 4 月 23 日　p.306。
48　『官報』1902 年 4 月 14 日　p.274。
49　『東京朝日新聞』1903 年 11 月 10 日。
50　孫模「通師日籍測絵科教師宮本」『読雪斎文選』南通市文学芸術界連合会　2011 年　p.93。
51　朱嘉耀主編『南通師範学校史　第一巻・記事』南京師範大学出版会　2012 年　p.15、17、176。
52　朱嘉耀主編『南通師範学校史　第一巻・記事』南京師範大学出版会　2012 年　p.176。
53　南通師範学校の副校長である都樾の同意を得て、未公開の論文「風雲開張師範校」を参考にした。
54　「教育手牒」『張謇全集』編纂委員会編『張謇全集』第 3 巻　上海辞書出版社　2012 年　p.1413。
55　「教育手牒」『張謇全集』編纂委員会編『張謇全集』第 3 巻　上海辞書出版社　2012 年　p.1425。
56　朱嘉耀主編『南通師範学校史　第一巻・記事』南京師範大学出版会　2012 年　p.178。
57　阿部洋『中国の近代教育と明治日本』福村出版株式会社　1990 年　pp.210-214。
58　5 月 22 日（1903 年 6 月 17 日）の日記（張謇『癸卯東遊日記』翰墨林書局　1903 年)。
59　孫模「桜之花長芬芳――記通師日籍教師木村」『読雪斎文選』南通市文学芸術界連合会　2011 年　P.96。
60　字怡生。通州師範学校の第 1 回目の本科生。卒業後、通州師範学校に 45 年勤め、南通教育界の重要な人物となる。
61　孫鉞の弟。字は支厦、中国近代の建築家。
62　孫模「通師日籍測絵科教師宮本」『読雪斎文選』南通市文学芸術界連合会　2011 年　pp.92-94。
63　南通師範学校の副校長である都樾の同意を得て、未公開の論文「風雲開張師範校」を参考にした。

杢太郎の北京

范　文

はじめに

木下杢太郎（1885 － 1945）は、1916 年 10 月から 1920 年 7 月まで、皮膚科教授として奉天の南満医学堂に勤めた。この 4 年間に、杢太郎は 3 回北京に渡った。勤務先の奉天とかなり様相の異なる北京は、杢太郎にどんな刺激と印象を与えたのか、彼の紀行作品、

「北支那雑話」（『新小説』第 22 年第 5 巻、1917 年 4 月 1 日）
「北京」（『帝国文学』第 24 巻第 4 号、1918 年 4 月 1 日）
「北京及び其附近」（『大観』、1921 年）
「支那南北記」（『改造』第 7 巻第 8 号、1925 年 8 月 1 日）

等を手がかりとし、なぜ杢太郎がそのように北京を見たのか、彼の経歴から明らかにしたいと思う。

1　木下杢太郎における北京の位置づけ

最初に、木下杢太郎は北京の位置づけに関してどのように考えているのかを、上記の書物からいくつかの記録をあげたいと思う。

〔1〕杢太郎の中の四大都市の一つ

「後年わたくしは世界を漫遊していろいろの珍奇を見たが、都會としてはクウバ島のハバナ、仏蘭西のパリイ、伊太利のシエナの他には、この北京が、最も特徴あるものとして長く鮮やかに記憶に残つてゐる。」(1)

この記録は、中国を離れて 4 年後に執筆した「支那南北記」にあるもので、北京は彼の記憶に残る四大都市の一つであることが分かる。その当時の杢太郎はヨーロッパ留学を終え、日本に戻った。アメリカ、南アメリカ、ヨーロッパを遊歴し、数多くの地域や町を訪ねた杢太郎の世界では、北京が重要な街の一つだと見なされている。

〔2〕北京イコール歴史書の中の中国

「わたくしは北京に至つて始めて、歴史的の背景を持って支那と云ふものの気分に浸ることが出来た。」(2)

杢太郎は 1916 年の 10 月から、奉天の南満医学堂で仕事をし始め、およそ 3 ヶ月後に初めて北京に行った。そこで、初めて彼が勉強した歴史的な背景を持っている中国に到着したという。つまり、杢太郎にとって、少なくとも奉天に比べて、北京は歴史の中の中国を代表できる街であった。

〔3〕文化の精髄に接することのできる町

「蓋して予の来燕の目的は畫と、陶と、劇とを見るべく、また些しの書籍を購ふ為めであつたのである。」(3)

「わたくしは沢山の支那の画論の本を集めて、そしてそれを系統的に造り直したいと云ふ欲望を心中に藏しています。それにはもつと沢山の本物の絵を見なければなりません。北京に居ればまだいろいろの便宜もありますが、此世界一の荒涼たる都会では何にも出来ません。」(4)

杢太郎は北京へ行けば、書籍も芸術品も容易に手に入れると考えている。つまり、北京を中国の芸術や文化の精髄に接することのできる街と見なしていることが分かる。芸術家である杢太郎にとって、芸術を大いに楽しめる、しかもさまざまな文化や中国の学問を勉強できるところであった。

以上の例から、杢太郎にとって、北京は、世界的に見ても重要であり、歴史的に、文化的にも格別な意義を持つ町であった。

2　杢太郎の目に映った北京

〔1〕杢太郎が見た北京

杢太郎は 1916 年 12 月 31 日朝 10 時初めて北京に着いた。その時は奉天に赴任して 2 ヶ月あまりであった。北京に行くことに関して、次のように述べた。

「北京は私の久しく見ることを欲して居た地である。既に奉天には数箇月在住して、多少の支那情趣は之に親しむことが出来たが、然し個個には、唯清朝の国家がまだ文化上の體裁を整へない、武力的勃興時代の遺跡を残すのみであるから、清朝興国の歴史に趣味を有するものには面白からうが、我々の如き、偏に文化の様式と文化の感情とを興味の對象となすものには、甚だ物足りぬ心地のする處である。死なれた夏目先生からの手紙にも「満州は上海などとは違ひ支那の本色は如何かと存候へども」云々の言葉があったから、私も早く北京を見て先生に誇りたいと思った。無論是れは純享楽的、観照的の見地からである。」(5)

杢太郎は北京に行くことを非常に楽しみにしていた。それは、奉天という地はあまりにも文化的に乏しく、そう考える前提には夏目漱石の影響もあったのである。

（1）1枚の絵葉書のような風景

杢太郎は京奉線の電車に乗って、奉天から、山海関、天津を経由して北京に行った。およそ 26 時間の長い乗車時間で、電車の中で「天下第一関」の山海関を眺め、乗客のアメリカ人、中国人と話をした。北京に到着後、日本人の宿引きに付いて、「扶桑館」に移動するが、駅を出た瞬間、衝撃を受けたように北京の風景に刺激されたようだ。

「北京」では、最初に北京駅を出た瞬間のことを詳しく記録した。

「それは兎に角、予の停車場を辭して、始めての歩を此都市に運ぶや否や、ゆくりなくも偶然の一事は予の心を駭かし、予の感情を全く支那的にした。それは一列の隊商が駱駝を追つて、高い城壁に沿うて行くのに遭遇したからである。予ははつと電撃の如きものを感じた。其瞬間予は北京といふものの感情の中にしやにむに押し込まれた。否、予は更に不思議なる異国情調の裡に追われたのであつた。始めて異境を踏んだといふ気分に予はなつた。（略）予は一国の首府に於いて既にさう云ふ、正しく外域聯係を暗示するものに出會つて、身は支那に在りと云ふよりも、寧ろ阿剌比亜夜話中に在りと考える方が適当であると思つた。金の創めて開き、而して清朝に於て榮えた此都は、いかにも蒙古的であり、異境的である。予は少時彼等隊商の群を見送つて、惘然として佇立したのである。」(6)

また、「北支那雑話」には次のように書いた。

「わたくしは北京に至つて始めて、歴史的の背景を持つて支那と云ふものの気分に浸ることが出来た。汽車から下りると、すぐ大きな城壁の下を、一隊の駱駝を率いた商人の列に出會つてまづ驚いた。」(7)

ここから、杢太郎は北京に着いた瞬間、今まで見たことのない風景に大きく刺激を受けたことが分かる。彼の目に映る北京は童話の領域に通じる都市で、異境的であった。それだけで、彼の気持ちを完全に中国的にさせた。

中国戦前絵葉書「北京城外運輸駱駝」（筆者所蔵）

これは日本の敗戦前、中国で発行された絵葉書で、北京城外運輸駱駝の様子を描いたものである。おそらく、李太郎が見て、刺激を受けたのはこのような風景だろう。

以上の2箇所とも、李太郎は1916年に初めて北京に行った時の気持ちの記録である。1920年8月27日、彼は木村荘八と共に北京に行った。その時の記録は次である。

「もう外城の城壁が視野に入りました。わたくしが三歳の時に郷里から伊豆の三島に往つたことがあります。その時の三島はすばらしい都会のやうに思はれたものです。その時わたしを背負つた子守がかう云ふ歌を唱ひました。「もうちつと行くと、明神さまの、お塔が見える。」その当時三島の明神に塔が立って居たかどうか知りません。神佛混淆の時代でしたから塔もあつたでせう。子供の時にはそれが「お魚」と解せられました。塔といふものの観念などがあらう筈はなかつたですから。同じやうな心持で私は北京の外城に挨拶します。幾度来ても北京の外城は特別な印象を與へます。「さあ、是れから先きが阿剌比亜夜話になるのだ。」と、さう告げるかのやうに。」(8)

4年後、彼はまた同じ風景で感動し、郷里のことを思い出した。子ども時代の李太郎にとって大都会であった三島に行く時の目印としていた塔のような存在としてこの城壁を思った。李太郎の紀行文では、同じところで何度も感動し、そこで感じたこと、思い浮かべたことを率直に記録することがよく見られる。これは、詩人であり芸術家である李太郎の特徴と言えよう。

(2) 町中の外国人の数、酒家と茶館

北京と奉天の大きく異なるところは、北京の異人が多いことである。李太郎が北京に着いた初日に訪ねた交民巷は今も当時も外国の公使館、外資の銀行が集中するところである。彼はそこで、傲慢な外国人とその数、彼らの衣裳に驚いた。

「次に驚いたことは、外国人が威張つてゐることである。」(9)

「街道にも異人が多く、孰れも小憎く思はれるほどに落ち付いた、傲慢の様子である。(略) それに外套の襟も立てないで、或者は外套も著ず派手な背広で、膝から下は靴下一枚の子供を連れて漫歩してゐる。殊に毛で身を被つた女人は(壯くて美しければ一層)見た目に快い。或者は真白の狐の皮で、帽もまた白い。或者は斑らの狐、或者はまた栗鼠である。」(10)

そのほかに、山猫の皮や、豹の皮を着る人々など、派手に着飾ってる者が多く、奉天の街の風景とは全く違った。そこで李太郎は、外国人及び彼らの派手な服装により、異国の雰囲気が感じたことに気付いた。ここは本当に北京であるのか、中国ではなく、遠い異国にいるのではないか、という感じである。

北京の街角では、茶館と酒屋が昔からごく普通に庶民の生活に浸透している。情報を交換し、鳥を鳴き合わせ、長く話し合うところである。

「私は然し北京の茶館を愛します。日本でも近来カフェなどが出来ました。それは東京近来の殖民地的生活に適応するまでですが、支那では之は伝統的に、深く民衆生活に根を張つてゐます。支那の小話には、よく茶館での事件が出てゐます。」(11)

「北京と其附近」で、李太郎は茶館での注文の仕方、その場で使う中国語について綿密に書いた。茶館ではお茶の葉を持っている客と持っていない客が2種類あり、李太郎はお茶の葉を持ってなかった。店でお茶の葉を選ぶことになり、彼は中国語で対応できたことが嬉しかった。

酒屋も彼にとっては西洋のバーのような存在で、北京で見た酒屋のお酒の種類や店の様子を描いた。

「唯酒肆は西洋のバアのやうで、或は梅魁酒、或は紹興酒等を薄い素焼の盆に満たして、ブフェエの上で売るのは、ちよつと日本で見られない圖であつた。」(12)

〔1〕他の文学者が見た北京の町

(1) 伊藤整

伊藤整(1905 − 1969)は小説家、詩人、文芸評論家、翻訳家である。1939年10月1日発行の雑誌『セルパン』第105号に、紀行文「北京」を掲載した。李太郎と同じ詩人である伊藤整の目に北京はどう映ったのか。

「城壁、薄墨色で、上部にぎざぎざのある高い城壁が人家の上に聳えてつらなつてゐるのが見え出すと、その城壁の中途にある汽車をとほすためにあけられたやうな門をくぐつて中へ入つて行く。」(13)

「しかし歩く人も、車夫も、自分等はもう幾代もこの街に住んでゐるので、どれぐらゐの歩調でどの側を歩けばいいか、ちやんと心得ているといつたさまである。(略) 人々がその伝統的な雰囲気のなかで安んじて歩いてゐるさまは、明治中期頃の東京がかうもあつたらうかと思はれる。

かういふ調和はどこか現代の日本にもあるとふと思つた。」(14)
伊藤整は城壁と街の人々を意識したが、大した感動はなかった。また、北京の街の様子を見て、明治中期頃の東京を思い出した。

（2）吉川英治
吉川英治（1892 － 1962）は小説家である。
木村毅編集の『支那紀行』に、吉川氏の北京についての文章がある。
「私はそれ迄、暗灰色の空の一部であると思つてゐた窓外のものが、驚くべく大きな高い壁だつた事に気がついた。（略）東洋といふ文化的なにほひは、この大きな景観に接してから、日本人には特に強く、そして東洋を感じ直す眼が一変してくる。」(15)
吉川英治は城壁を見たことで心に動きがあった。このような大きな城壁をみたことのない李太郎も相当刺激を受けただろう。日本人の東洋観がこの大きな城壁により変わって行くと彼は述べた。

（3）入沢達吉
入沢達吉（1865 － 1938）は医学博士、内科医、東京帝国大学教授である。李太郎の友人でもある。1923年外務省に嘱託された文化事業の仕事のため、北京の大学、病院などを参観した。彼の紀行文は行った場所を羅列し、カメラのように客観的に訪問先を記録した。
「北京の秋はまた格別で、天高く気清く、如何にも居心地がよい。殊に余は早起し、北京飯店の四階の「バルコン」に出でて、曙色を眺めて居ると、彩霞がだんだん晴れ渡るにつれて、先ず天壇の尖端が現れ出る。続いて宣武門や、正陽門やはっきりと見えてくる。」(16)
彼は李太郎と同じ医者である。入沢達吉は医者としての冷静さを発揮し、コメントをせず忠実に見た風景を文字化した。彼は李太郎の個人趣味の旅行とは違い、仕事のためでもあったので、紀行文には個人の感想は見られなかった。

〔3〕木下李太郎の経歴との関係
列車で北京城内に入ると、他の人にとって大きな感動とはならない城壁や駱駝に関して李太郎はアラビアまで連想し、異国情緒を感じ、心を打たれた。

（1）浪漫派詩人―李太郎
李太郎が東京にいた時期は異国情緒を好む浪漫派詩人として知られていた。美術家であり文学者でもある李太郎は、若い芸術家と文学者が集まって定期的に行う文芸サロン「パンの会」でたいへん活躍した。「パンの会」はパリのセーヌ川沿いのカフェで行うヨーロッパの文芸サロンへの憧れの産物である。李太郎は会場の予約から「パンの会」の雑誌『屋上の庭園』の編集まで力を入れた。『屋上の庭園』に彼は異国情緒の詩作も載せた。会場を探した時に、彼はセーヌ川の両岸にあるカフェのようなところを意識し、東京の下町を歩き回って探したことがあった。しかし、当時の東京ではカフェといえる場所がなかった。彼は北京で茶館を見ると、そのあり方はまさに西洋のカフェのような存在で、一般庶民の生活にも浸透し、話し合いの場にもなることにたいへん感動した。

（2）西域と印度への注目
奉天に行ってまもなくの間に、李太郎は友人の斎藤茂吉に対する手紙の中で以下のように述べた。
「わたくしの頭は今支那西域に対する空想で一杯になつて居ます。二三年以内―少なくとも五六年以内に、一度、あのえらい玄奘三蔵が通つた道を通つて、北京から印度へ抜けて見たいといふ考へです。」(17)
その時期の李太郎は、西域と仏教美術に強い関心を示した。駱駝の隊商を見た途端、李太郎の頭には西域やインドのことが浮かび上がったのだろう。

（3）北京と奉天の違い
李太郎は仕事の関係で奉天に在住した。時代の背景を考えれば、当時の奉天と北京の差異は大きかったと推測できる。
①武力的勃興時代の遺跡
「然し個個には、唯清朝の国家がまだ文化上の體裁を整へない、武力的勃興時代の遺跡を残すのみであるから、清朝興国の歴史に趣味を有するものには面白からうが、我々の如き、偏に文化の様式と文化の感情とを興味の對象となすものには、甚だ物足りぬ心地のする處である。」(18)
奉天は北京と異なり、清朝の発祥地として、文化より尚武の地だったと言える。そこの文化は満族

の影響が大きく、李太郎が知っていた漢族の歴史とはかなり異なっていた。彼は奉天で文化について満足することはなかったと考えられる。

②日露戦争後の中国東北部の実情

日露戦争後、満州は事実上日本の殖民地となった。日本円流通の地域となり、日本語も通じた。李太郎が仕事した南満医学堂では日本語で仕事ができたし、生活も日本円で解決できた。彼は実際の中国の生活に詳しくなかったはずである。

「一旦満州の日本貨流通区域を離れると、支那の銀貨は馬鹿に有り難いものに感じられて来ます。その中で最も袁世凱の首が一番結構です。図案も中々好い。」(19)

彼は北京まで出て、初めて中国のお金を使う機会を持って、中国の平均的な物価も知った。それで、中国に来た実感が生まれたと言う。

浪漫派詩人の李太郎は、「パンの会」の会場を探すために苦労したことがあったからこそ、北京の市街地にあるカフェや酒家は注意を引いた。彼は西域への関心があったからこそ駱駝や隊商の風景に心が打たれ、西域のアラビア世界まで連想した。仕事先の奉天は彼が知っていた歴史の中の中国とかなり異なっていたため、北京に来て初めて彼が知った中国に来たと考えたのである。すべての原因は李太郎の経験と経歴にある。

3　李太郎の京劇鑑賞と研究

彼は北京に着いた初日から、一刻も無駄にしないように、来燕の目標を一つずつ実現していった。

「劇は辻聴花といふ人があり、「順天時報」に據つて、その劇評を発表し、支那の操觚の者の間にも有名であるといふ。」(20)

李太郎の北京に行った目標は明晰で、それはつまり芸術品や京劇を鑑賞すること、書籍を集めることであった。彼は『順天時報』の都甲氏から情報をたくさん得た。その日の夕方、李太郎はまず、予約せずに辻聴花の家を訪ねた。当時、「劇通」と呼ばれた辻氏は、中国の劇界でも高く評価され、劇の役者の何人かと交際が親しかった。

「辻聴花（つじ　ちょうか）は 1868 年― 1931 年、熊本県出身、本名は辻武雄。大正・昭和期の中国文学者、劇評家。明治 31 年教育事情視察のため訪中、38 年再訪中。上海で「教育報」の編集に携わり、のち江蘇師範学堂、江南実業学堂の教習となる。大正元年日本人経営の華字新聞「順天時報」の招きで北京に移り、同紙に京劇評論や俳優論を執筆、中国人より「劇迷（芝居狂）」とあだ名された。著書に『中国劇』、『支那芝居』がある。」(21)

李太郎は辻氏の家まで訪ねたが、それは北京の胡同の中にある普通の中国人の家とほぼ変わらなかったという。劇通の辻氏は熱心に李太郎を招待し、劇のことを詳しく紹介し、梅蘭芳のことも話した。ちょうどその日、京劇の役者である呉彩霞、呉少霞、王少芳も辻氏を訪ねたので、李太郎は非常に近い距離で役者と接した。

辻氏の話で、その日の夜（北京について初日）螺馬市の第一舞台梅蘭芳の劇があると知り、見に行くことにした。後に「梅伶唱蘇三」を題とした詩を作って、「梅蘭芳」「支那の劇」などの評論も書いた。

『言はでもよきこと』の中に「梅蘭芳」を題とした評論がある。

「梅蘭芳の「黛玉葬花」を看て心うたれた。（略）この役者は天性の美貌や典雅な姿態の他に、舞台上の賢さを持つてゐる。「紅楼夢」の中の一節「牡丹亭」を演ずるのに、怠惰な少女が老師匠をごまかすといふだけの事に一時間を費し、一分のだれ気分を醸さない。」(22)

李太郎は梅蘭芳のことが好きで、京劇を熱心に鑑賞に行った。彼が京劇に示した姿態を以下の部分で明らかにしたいと思う。

〔1〕木下李太郎の京劇に示す姿態

李太郎の日記等を調べると、彼は北京にいた短い期間に、頻繁に京劇を見に行った。しかも、彼は京劇を楽しく見ていたのではなく、批判的な目線を向けていた。それに対する改良の意見を出し、しかもその改良案に基づき京劇の脚本を翻訳した。

（1）頻繁に劇を見る

彼は 1916 年 12 月 31 日、北京に到着した初日、螺馬市第一舞台梅蘭芳の「女起解」を見た。

「来燕以来予は宮殿の古物陳列所と第一舞台とに最も繁く足を運んだ。」(23)

1920 年 8 月、南満医学堂の仕事を辞任した李太郎は、木村荘八と共に、朝鮮半島を旅行した後、8 月 27 日に北京に到着した。これは李太郎にとって 4 度目の北京である。到着した翌日の夜、彼はまた京劇を見に行った。「北京及び其附近」には次の記録がある。

1920年 (大正9年)	8月	28日	「夜は大柵欄の廣徳楼で芝居を見ました」
		29日	「たつた今、前門外の中和園から戻つて来たところです」
	9月	1日	「今日は午後また出かけて琉璃廠をひやかし、また肉市の廣徳楼で富連成社の芝居を見ました」
		4日	「大柵欄三慶園で『上天台』『百涼楼』『双五花洞』『閙府』等の戯を見ました」
		7日	「三慶園で『清官册』『六王殿』『絨花計』『得意像』『双泗洲城』『南天門』等を見ました」
		28日	「夜梅蘭芳にゆく」
	10月	6日	「梅：六月雪」

北京に滞在した間に、9月5日と6日の2日間は八達嶺に行き、9月12日から9月25日山西省の雲岡石窟に足を運び、9月27日北京に戻っている。北京に滞在した限られた時間の中で頻繁に京劇を鑑賞したことが分かる。

（2）脚本の翻訳と翻案

『戯考』により、「捉放曹」「蘇起解」「黛玉葬花」を翻訳した。日本の舞台に合うように、その標本を作って、まず「捉放曹」（『戯考』第1冊、1915年）を「曹操殺父執」（『雄辯』大日本雄辯会第10巻第5号、1919年4月）に改作した。

『戯考』とは、1915～1925年の間、王大諾氏編集の京劇脚本集であり、上海中華図書館より、計40冊が刊行された。「捉放曹」のあらすじを要約する。

後漢末期、曹操は董卓を刺殺できず、仮装して逃げたが、中牟県で捕まえられた。曹操は中牟県県令であった陳宮を説得し、2人で一緒に逃げた。成皋というところで曹操の父の旧友呂伯奢に会った。呂は2人にぜひ家に来るように誘い、ご馳走を作るために、家畜を処理するよう包丁を磨いた。その音を聞いた曹操は非常に不安になり、呂はきっと自分を殺すために刀を磨いているに間違いないと思い、先に呂の一家全員を殺し、呂の家を燃やして逃げたという話である。中国ではよく知られ、曹操という人物の性格をよく描いた物語である。『戯考』では4部から成っている。

杢太郎の訳では、第1部分、つまり曹操が陳宮に捕まえられ、陳宮を説得する内容を全部省略した。第2部分、呂伯奢に会ったところから訳した。ここでは、第2部分の始めのところの、原文、筆者訳、杢太郎訳を比較していく。

原文（『戯考』第1冊、上海中華図書館、1915年）

呂伯奢　（念白）夜梦不详，叫人难防。
老汉吕伯奢，乃陈留人氏。承父兄之业，颇有家财，一生广交好友。昨晚三更，偶得一梦，也不知主何吉凶。朝晨已过，午膳将近，并无应验，我不免庄前庄后，闲游散步一回。
（西皮慢板）昨晚一梦大不详，
只见猛虎赶群羊。
绵羊遇虎无逃处，
大小俱被虎来伤。
清晨起来鸦鹊噪，
吉凶二字人难防 (24)。

筆者訳

呂伯奢　（言う）夜不祥な夢を見た、吉凶の予測はできない。
わしは呂伯奢と申す、陳留の人である。ご祖先のお蔭様で、豊かな日々を過ごし、友達もたくさんできた。昨日の夜、夢を見た。吉か凶かも知らない。そろそろ午前中が過ぎてしまい、昼食に近づき、何の変わりもないので、家の近くでぶらぶら散歩することにした。
（西皮の歌い方でゆっくり歌う）
昨日の夜非常に不吉な夢を見た
猛虎が大きな群れの羊を追い駆ける
羊は逃げるところがなく
全部虎に食べられた
朝起きてカラスやカササギが鳴き交わし

吉凶の予測ができない

杢太郎訳

時：後漢獻帝の時

処：河南中牟県の田舎

人物：曹操、陳宮（中牟県県令）、呂伯奢（曹操が父の友）、呂伯奢が家の人々

第一場　呂伯奢が家の門、木立。晩秋の斜陽。

呂伯奢（老年。有福なる百姓の風俗。手に煙管を携へながら門前を歩む。）俺(わし)は呂伯奢と云ふ者で、陳留の生れぢや。御先祖様のお蔭で、どうやら気楽に日も送れる。生得客を好むに由つて交遊(つきあひ)も廣い。（間。）さても今朝(けさ)暁(あかつき)は不思議な夢を見たものぢや。吉か凶か気に懸るわい。午前(ひるまへ)は幸ひ事もなく午後(ひるすぎ)もまづ無難であつた。はて此分なら、今宵(こよひ)も大した事はなさ相ぢや。いや、一つ家(うち)の廻りを見廻つて来よう。（西皮慢板にて唱ふ。）昨(ソウ)晩(ワン)一(イイ)夢(モン)大(ダア)不(プ)詳(シャン)、只(ツウ)見(ヂェン)猛(マン)虎(ホウ)赶(ガン)群(チュン)羊(ヤン)、綿(メン)羊(ヤン)遇(イウ)虎(ホウ)無(ウ)逃(タオ)處(チョ)、大(ダア)小(シャオ)俱(チュウ)被(ペェ)虎(ホウ)来(ライ)傷(シャン)、清(チン)早(ザオ)起(チイ)来(ライ)鴉(アア)鵲(チェュ)噪(ザオ)、吉(チイ)凶(シュン)二(アアル)字(ツウ)人(レン)難(ナン)防(ファン)。（去る）(25)

杢太郎は訳の始めのところで、『戯考』に明記していない時間や場所及び人物をはっきりさせた。しかも、話の具体的な場所と夕方という時間帯も設定した。原典では、前日の昼頃から始まり、翌日の朝までの時間設定である。杢太郎訳は全て一日の夕方から月の出までに短縮した。場所も伯奢の家の門にした。後に紹介する杢太郎の京劇改良案に「三単一」のことがある。杢太郎はこの「曹操殺父執」の脚本を三単一規則に合わせて訳した。

歌の歌い方も「西皮慢板にて唱ふ」と訳したが、「西皮慢板」についての解説がない。夢の内容については、原文の上に片仮名で中国語の読みを表記しただけである。ここでは、杢太郎が京劇を訳す時に、構造の変更、つまり「三単一」に重点を置いたと考えられる。

（3）京劇についての評論

杢太郎は京劇を鑑賞し、それをどう考えたのかを、彼の評論から取り上げたいと思う。

「また、北京其他の都会で実演する所に就いて見るに、支那の劇は、之より其唱歌を除けば殆ど觀るに堪へない。」(26)

「概して云ふに、異国人たる我々は、支那の劇から比較的僅かな快感を受くる為に、可なり大きな退屈を忍ばねばならなかつた。三單位統一のない上に、旗を以て馬を表はし、よごれた藍色の布を以て城門を暗示し、又はグロテスクな隈取を施すことなどは、我々には不愉快なことと思はれた。唯説白と唱歌とを別ち、我々の「さはり」に當るところを、甲高の歌に唱へるのは甚だ効果を大にした。」(27)

「若し支那に於て、人特に此点に注意して古来の伝習を改め、其演劇に改良を施せば、現在の支那戯曲も必ず見るに足る効果を結ぶならむと。」(28)

実は、杢太郎は京劇に対し、良いコメントを滅多にしなかった。京劇の唱歌以外評価できるところがなく、京劇をみるのは不愉快な場合が多く、改善すべきだという評論を残した。

（4）京劇改善に関する考え

杢太郎は京劇に対する良いコメントは少なかったが、京劇を日本に紹介すべだと主張していた。そのために、改良の提案もした。「曹操殺父執」は、杢太郎が京劇を日本の舞台に適するように標本として訳したものである。その序言に改良のアドバイスを書いた。

① 時、所、人物等の単位を合理に按配し、自己のしぐさを自ら説明するのを廃するべき

② 車馬等を旗又は杖等を以て象徴することを廃するべき

③ 唱歌に伴ふ楽器は、之を舞台の上ならぬ一定の場所に於いて弾奏せしむべき

杢太郎は京劇の中に三単位統一のないことを指摘をした。「三単一」はフランス古典演劇における規則の一つである。3 つの一致「時の単一」「場の単一」「筋の単一」を言い、劇中の時間で 1 日のうちに、1 つの場所で、1 つの行為だけが完結するべきであるという劇作上の制約である。京劇では、時間の設定が何日間も続く場合があるし、場所も複数である。

京劇では車輪が書かれている旗で持ち車を、長い槍で持ち馬を表現したが、外国人にとって理解しがたいと杢太郎は思った。それを廃するべきと主張する。

〔2〕他の文学者の京劇への姿勢

（1）芥川竜之介

芥川龍之介も中国の各地を遊歴し、「戯迷」であった。彼の『支那游記』などに京劇や昆曲などの紹介、俳優の紹介が見られる。芥川龍之介は中国に行った時に、同じ辻氏の紹介で、中国南方の昆曲を観賞した。芥川の『北京日記抄―「胡蝶夢」』によると、

「波多野君や松本君と共に辻聴花先生に誘われ、昆曲の芝居を一見す。京調の芝居は上海以来、度々覗いても見しものなれど、昆曲はまだ始めてなり。（略）先生は劇通中の劇通たるは支那の役者にも先生を拝して父と倣するもの多きを見て知るべし。（略）と言えば劇評位書けそうなれど、実は僕には昆曲の昆曲たる所以さえ判然せず。唯どこか京調劇よりも派手ならざる如く感ぜしのみ。」(29)

芥川は主に以下のことを記録した。

① 同楽茶園の様子
② 劇場で出会う有名人―詩人の樊半山、「劇通」辻聴花及び辻氏の著書の紹介
③ その夜見た昆曲「胡蝶夢」のあらすじ、訳者の略記
④ 評論「唯どこか京調劇よりも派手ならざる如く感ぜしのみ」

そして、芥川も京劇改良についてのアドバイスを述べた。

芥川は北京滞在中、胡適（1891 － 1962）に会い、京劇の改良について自分の意見を述べた。『胡適日記』（1921 年 6 月 27 日）(30) の内容によると、次のようになる。

芥川さんは、中国の旧式の舞台は改良する必要があると言った。

① 背景幕は色柄が地味なものを用いるべきで、紅や緑の緞帳は不適切である。
② 舞台に敷く絨毯も色柄が地味なものにすべきである。
③ 音楽伴奏楽は幕の中に隠れて坐るべきである。
④ 舞台上の助手は、色柄が地味な同じ服を着るべきで、舞台上を駆け回らないこと。

（2）谷崎潤一郎

京劇が好きな日本の文学者と言えば、谷崎の名前を挙げないわけにはいかない。彼は上海・北京・奉天で、数多くの劇場を回って中国劇を多く鑑賞し、「支那劇を見る記」を書いた。

谷崎は最初に中国に行った時に、朝鮮から入り、奉天の杢太郎の家に 10 日間泊まったことがある。彼を奉天の劇場に案内したのも杢太郎であった。しかし、杢太郎は谷崎に奉天で劇を見ても意味がない、北京まで行き、梅蘭芳を見ないとだめだとアドバイスした。

谷崎も最初から中国の劇には良いイメージがなかった。奉天と天津の劇場は不潔で、役者も舞台に唾を吐いたりして、不思議だったという。

しかし、彼は北京で毎日京劇を見て、『戯考』の中の脚本の内容を呑み込んでいるうちに京劇を理解できるようになった。

「俄然としてそれを開いたやうに分かり出して来たのである。（略）支那のメロデイ―には西洋のそれと違つて、日本人にも共通な感情の流露があるのだから、悲しいところは悲しく感ぜられ、勇ましく感ぜられるのである。」(31)

谷崎は最初に京劇に示した態度から変化が見られる。京劇のことを理解し、その共感もできた。彼は京劇の役者にも詳しく、梅蘭芳の後輩である尚小雲は前途ありと予言し、彼の予言の通り、後に尚小雲は京劇の「四大名役」になった。

〔3〕京劇に示した姿態の原因

以上から分かるように、日本人の杢太郎、芥川、谷崎にとって、京劇を理解するのはかなり難しいことであった。時間をかけてそれを乗り越え、好きになった谷崎がいれば、最初から研究の目線で見て、早い段階で改良案を出した杢太郎と芥川もいる。

杢太郎は芥川より 2 年も早く京劇改善のアドバイスを出した。2 人とも伴奏楽隊の設置場所について問題意識を持ったのである。

それだけではなく、芥川は舞台の背景、絨毯、助手の服や背景の幕の色など、観戯側のみの視点に対し、杢太郎は「三単一」「旗で車馬を象徴すること廃棄する」「しぐさを自ら説明するのを廃棄すべき」などと提案し、どうすればこの伝統芸能が観衆にスムーズに伝わるか、ということを考えている。ではなぜ杢太郎は真剣に京劇の改良を考えたのか。

（1）劇作家としての木下杢太郎

杢太郎は多少辛抱強く我慢して、京劇を見ていると言えよう。彼が他の観衆のように楽しめないのは、外国人であり、言葉の問題もあるほか、劇作家として劇に厳しい目線があったからである。

杢太郎は東大時代に、既に『和泉屋染物店』(1912 年)、『南蛮寺門前』(1914 年) を出版した。劇作集を出す前でも、彼が創作した劇作品は高く評価され、歌舞伎脚本として公演する場合も多かった。彼はよく歌舞伎を鑑賞しに行き、それにより、脚本と演劇の接点を考えたのだろう。小山内薫は 1909 年に自由劇場を造り、杢太郎の劇脚本もそこで使われた。杢太郎自身も自由劇場に参加し、新演劇運動に高い関心を示した。

彼は京劇を見る時も、観客よりむしろ脚本作家、監督の立場に立って見ていたと言えよう。

(2) 杢太郎の読者論

京劇の改良案は有名な「絵画の約束論争」と関連がある。

「絵画の約束論争」は、1911 年から翌年 2 月まで、木下杢太郎・山脇信徳・武者小路実篤によって交わされた芸術観をめぐる論争である。

杢太郎が定義した「絵画の約束」は以下の通りである。

> 「予は決して貴君の所謂「既成の絵画より得る普遍的な美の概念」のみを以て「絵画の約束」としたものではありません。(略) 予とても美といふものが結晶のやうに固まつて居るものとは思ひません。美とは人の心の一種の状態だと思つてをります。けれどもこの状態を惹き起す外的所縁として芸術品が必要になります。(略) といつて無知なる多頭の怪物たる公衆に、最大公約数的に分らせやうとすると、芸術が堕落する。予とても決してそれまでは言はぬ。そこで両者の間の関係を熟く理解して、其間に処して、一方には十分自己の内的生命を発表し得、一方には成る可く多くの鑑賞者に了解 (同感) せしむる事を得る方法が必要になる。之を予は仮に名付けて「絵画の約束」と言つたのであります。」(32)

杢太郎が主張したいのは、なるべく多くの鑑賞者に了解 (同感) せしむる事を得る方法が必要になる。京劇を熱心に翻訳・研究した上で提案した改善方法は、まさに観衆を念頭に入れ、伝統芸能をなるべく多くの大衆に理解してもらう方法を探したのである。

まとめ

北京は、杢太郎の心の中で、特別な町だと考えていた。彼の眼に映った北京は、異国情緒が溢れ、中国の伝統文化を十分に味わえるところであった。

他の作家と比べると、杢太郎は北京の街の同じ風景に何度も心が打たれ、カメラのように客観的に記録するのではなく、その場の気持ちや思い付いたことをありのままに文章にしたところに特徴が見られる。これは彼が自身の趣味のために、休みを利用し、1 人で自由に北京を回れたこともあるが、杢太郎の詩人としての審美と繊細な感情にも関わっていることを見逃すことができない。

彼自身は劇作家であるため、常に観客を念頭に入れていたからこそ、他の作家とは顕著に異なる京劇に対する厳しい批判の態度が見られ、京劇改良に対して深さと重みのある提案ができたと言える。

注

1 木下杢太郎『支那南北記』改造社、1926 年、208 頁
2 木下杢太郎『木下杢太郎全集』第 9 巻、岩波書店、1981 年、251 頁
3 木下杢太郎『木下杢太郎全集』第 10 巻、岩波書店、1981 年、79 頁
4 木下杢太郎『木下杢太郎全集』第 9 巻、岩波書店、1981 年、321 頁
5 「北京見聞録」『美術之日本』第 9 巻第 4、5 号 1917 年 4 月 15 日、5 月 15 日、21 頁
6 木下杢太郎『木下杢太郎全集』第 10 巻、岩波書店、1981 年、76 頁
7 木下杢太郎『木下杢太郎全集』第 9 巻、岩波書店、1981 年、251 頁
8 木下杢太郎『支那南北記』改造社、1926 年、286 頁
9 木下杢太郎『木下杢太郎全集』第 9 巻、岩波書店、1981 年、250 頁
10 木下杢太郎『木下杢太郎全集』第 10 巻、岩波書店、1981 年、77 頁
11 木下杢太郎『支那南北記』改造社、1926 年、288 頁
12 木下杢太郎『木下杢太郎全集』第 10 巻 岩波書店 1981 年 94 頁
13 伊藤整『伊藤整全集』第 23 巻、新潮社、1974 年、512 頁
14 伊藤整『伊藤整全集』第 23 巻、新潮社、1974 年、513 頁
15 木村毅編集『支那紀行』第一書房、1940 年、46 頁
16 『世界紀行文学全集 11 中国編 I』修道社、1959 年、137 頁
17 木下杢太郎『木下杢太郎全集』第 9 巻、岩波書店、1981 年、312 頁
18 『美術之日本』第 9 巻第 4 号、1917 年 4 月 15 日、21 頁
19 木下杢太郎『支那南北記』改造社、1926 年、283 頁
20 木下杢太郎『木下杢太郎全集』第 10 巻、岩波書店、1981 年、78 頁

21 『20世紀日本人名事典』日外アソシエーツ、2004年、1640頁
22 木下杢太郎『木下杢太郎全集』第12巻、岩波書店、1982年、115頁
23 木下杢太郎『木下杢太郎全集』第10巻、岩波書店、1981年、93頁
24 王大諾『戯考』第1冊、上海中華図書館、1915年、、21頁5頁
25 木下杢太郎『木下杢太郎全集』第19巻、岩波書店、1982年、25頁
26 木下杢太郎『木下杢太郎全集』第9巻、岩波書店、1981年、345頁
27 木下杢太郎『木下杢太郎全集』第10巻、岩波書店、1981年、93頁
28 木下杢太郎『木下杢太郎全集』第19巻、岩波書店、1982年、23頁
29 『世界紀行文学全集11　中国編Ⅰ』修道社、1959年、249頁
30 沈衛威編集『胡適日記』山西教育出版社、1997年、133頁
31 谷崎潤一郎『谷崎潤一郎全集』第22巻、中央公論社、1983年、73頁
32 『白樺』第2巻第11号、白樺社、1911年11月、50頁

「夢浮橋」の論理
―『源氏物語』末部における文と「浮橋」をめぐって―

水野雄太

1　はじめに

『源氏物語』第三部のうち、いわゆる宇治十帖は「心と言葉の交通と不交通を主題としている」と言われる (1)。そうした物語の掉尾を飾る巻が「夢浮橋」という名を冠するのは、ごく自然なことのように思われる。「夢」は離れた人と人とをつなぐ回路となりうるものであり、異界とのメディアでもあった (2)。そして「橋」もまた離れた空間をつなぐ交通の場として、やはりメディアであると言える (3)。「夢浮橋」という巻名は謎めいたものとして古来注目されてきたが、離れたものをつなぐという主題を抜きにして語ることはできないように思われる。

とはいえ、「夢浮橋」ということばを、単になにかをつなぐことの象徴として片づけるのではどうにももものたりない。本稿の主眼は、「夢浮橋」ということばが、いかなる理路を通過することによって『源氏物語』最後の巻名となったのかという点にある。『源氏物語』に語られた主題と、歌ことばの伝統とが結びつく地点に、「夢浮橋」ということばの裏に隠された表現の論理を見定めてみたい。

2　先行研究と本稿の立場

この節では「夢浮橋」ということばをめぐる先行研究を概観する。

まずは古注から見てゆく。「夢浮橋」をめぐる注記として、現在まで最も強い影響力を保っている古注は『河海抄』であると言ってよい。しかし、その『河海抄』は『紫明抄』の記述を多く踏まえているため、まずは『紫明抄』を見ておく必要があろう (4)。

『紫明抄』の「夢浮橋」という巻名に関する注記は、次のような疑問から始まる。すなわち、『源氏物語』の巻名は通常「詞の字」、あるいは「哥の心」をとることによってつけられているが、「夢浮橋」ということばは「詞」にも「哥」にも見られない。それなのに、なぜ「夢浮橋」という巻名なのかという疑問である。

この疑問に対する『紫明抄』の答えは、次のようなものであった。『源氏物語』は「詞をやはらげ、心をかざりて、いつはれることをさきとせず、たゞ有為無常のことはりをあらはし、生者必衰のいはれをのべつくせる物」である。そしてその最後に位置する「夢浮橋」という巻名は、「幽玄の儀をもとゝして、かたはらに菩提の縁をむすばしめんがために」つけられたものであるとし、その根拠をイザナギ・イザナミの神話に求め、「陰陽をさだめ、男女をわかつ事」は「天の浮橋」のうえでなされたことであるのだから、「いろをこのみなさけを思はん人」は必ずこの「浮橋」に心が通うものだと説く。そして、『涅槃経』や世俗のことわざに見えるように、「現当」も「善悪」も「是非」も、そして「始終」も「夢」であることから「夢」ということばが冠せられたとし、「穢土のうきはしに法性の夢をあはせて、をはりの巻に夢浮橋となづくるなるべし」と結論づける。要するに『紫明抄』の解釈における「夢浮橋」とは、現世におけるあらゆるものごとは「夢」にすぎず、この世は有為無常、生者必衰のものだということを思い知らしめるべくつけられた巻名だということになる。「紫雲寺隠侶」を自称する素寂が記した注釈書にふさわしく、仏教的な教理によって「夢浮橋」が解釈されているのだ。が、『源氏物語』の内容がすべて有為無常、生者必衰という主題に貫かれているとは思えず、「浮橋」の説明もいかにも苦しいものと思わざるをえないところがある。

こうした『紫明抄』の記述を引いたのちに、『河海抄』は自説を展開してゆく。それによれば、「真実の儀は夢の一字の外に別の心なし。うきはしはゆめにひかれて出来詞」であるという。すなわち、「夢浮橋」にこめられた真意は「夢」の語のみであって、「浮橋」は「夢」に導かれて出てきたことばにすぎないとするのである。『河海抄』は「夢浮橋」の「夢」の語を重く見て、『荘子』の「胡蝶夢」で「物化の謂」が述べられ、また「斉物論」で「且有大覚而後知此其大夢」と言われていたことと結びつけながら、「漢家の寓言も百年の夢に化し、和国の寓言も一部の夢にきはまる也」と結論づけるのである。

こうした『河海抄』の記述は、特に「夢浮橋」を単に「夢」として解釈するという点で、現在に至るまで多大なる影響を持っていた。たとえば、岩波大系において夢浮橋巻の巻名を解説した部分では、「浅ましかった、夢のような浮舟の浮沈の、憂く悲しくあった話の一端」を「夢浮橋」という巻名で示していると推測する。「夢」ということばを重く見て、「夢浮橋」は浮舟の夢のような半生を象徴する巻名として捉えられてきたのである。

しかし近年の論考では、「夢」ということばのみによって「夢浮橋」の意味を捉えることに対して批判的なものが多い。益田勝実は「夢」のみに注目すると実体としての「浮橋」のイメージが捉えられないことを主張し、「夢浮橋」とは神話に見いだされる「天の浮橋」と『文選』における「高唐の賦」を踏まえたものであり、薫の側から「夢の中での、もしくは夢のようであったところの、二人の交情、愛の永遠の喪失の嘆きが、托されたもの」と解釈する (5)。また、森朝男は夢浮橋巻の「帖名の意味を説くのに、「夢」の方にばかりこだわって、「浮橋」の「橋」の方を説くことが看過されている」ことを批判したうえで「浮橋」の用例を調査している。その結果から、「どうやら「夢の浮橋」は「浮橋」をもとにした歌ことばであって、その「浮橋」には男と女の間に懸け渡される関係という意味がある」とし、「源氏物語の帖名としては、この帖の物語の筋そのもの、すなわち薫大将と浮舟の男女両主人公の間に通じそうで通じぬ、恋の通い路を指し示している」と述べている (6)。さらに、夢浮橋巻内に「しるべ」の語が多用されていることに注目した鷲山茂雄は、薫を浮舟へとつなぐ「しるべ」としての横川の僧都こそが「橋」の役割を担っており、「「夢の浮橋」の巻名は、横川僧都によって薫と浮舟の間に架けられた〝橋〟、その〝橋〟がきわめて不安定な状況のままあるのを象徴的に示すもの」であるという (7)。近年に至って、『河海抄』が説いた「夢」を重視する解釈は、ようやく疑問にさらされるようになったということが確認できよう。

以上に整理した先行研究の動向を踏まえ、本稿も特に「浮橋」ということばに注目して「夢浮橋」という巻名について考える。具体的には、和歌で詠まれた「浮橋」ということばがいかに用いられているかをあきらかにし、「浮橋」ということばと、『源氏物語』末部における物語内容との関係を探ってゆく。

3 「浮橋」と文

先行研究を整理しながら述べておいたように、「浮橋」ははかないつながりを表現することばである。そもそも「橋」ということばは、平安期の和歌において男女の途絶えを意味するものとして詠まれていた (8)。

そして『源氏物語』においても、薫の詠んだ「宇治橋の長きちぎりは朽ちせじをあやぶむかたに心さわぐな」(浮舟 6 - 145) と、それに対する浮舟の返歌「絶え間のみ世にはあやふき宇治橋を朽ちせぬものとなほたのめとや」(同 - 146) が、「橋」の途絶えのイメージを詠んだものとして注目される。この贈答歌が置かれた場面において、薫は亡き大君に思いを馳せ、浮舟は匂宮と通じてしまったことを心に秘めている。二人の男女は同じ空間で同じ宇治橋を見ながらも、その心は遠く隔たっているのだ。薫は「宇治橋」に託して「長きちぎり」を強調するが、浮舟が「世にはあやふき宇治橋」と切りかえしたように、「橋」は男女の仲の途絶えをイメージさせることばでもあった。「宇治橋」という歌ことばは、薫の愛の誓いがいかに空虚なものであるかを暴きだしてしまう (9)。薫と浮舟の断絶が、「宇治橋」という歌ことばによって象徴されているかのようだ (10)。この贈答歌を筆頭として、『源氏物語』の宇治十帖には「橋」の途絶えのイメージをたびたび見いだすことができる (11)。

以上のような「橋」をめぐるイメージから、今井源衛は「夢浮橋」が『源氏物語』末尾の巻名とされたことについて、「宇治十帖の大尾が、ということは源氏物語全体の結末が、ついに、男女の道の「とだえ」を意味するものであった」とする (12)。なるほど、たしかに「橋」ははかない回路であり、男女の途絶えを示すものであった。が、そうであるとして、いかなる道筋を通って「夢浮橋」ということばが『源氏物語』末尾の巻と結びついたのか、その論理はよくわからないままである。

問題の所在をより明確にすべく、渡部修の論考を見ておく (13)。渡部は『万葉集』から平安期までの「橋」の用例を吟味し、『後撰和歌集』の「へだてける人の心のうき橋をあやうきまでもふみみつる哉」(巻 15 雑一) において勅撰集ではじめて「浮橋」の用例があらわれ、「相手への思いを担いつつも厳しい断絶感を生む場という当時の和歌における「橋」のあり方を、極めて有効に担うものとして選択された歌語」が「浮橋」だったとする。そして、『源氏物語』の末尾で「夢浮橋」が巻名として用いられたことについて、「宇治十帖はそれまで個々ばらばらの形で提示され、その総体として進んで来た和歌における「橋」の展開に、一つの物語という具体相を与えた」のであり、「その際、具体的に中心となっているのは「宇治橋」ということになるのだろうが、象徴的な形で全体を締めくくるのは「夢浮橋」」であって、その意味で「「夢浮橋」とは単に物語の悲劇的結末の象徴というだけ

でなく、和歌における「橋」の集約的表現であった」と論じている。
渡部の論考は「夢浮橋」ということばが生まれる契機を和歌の表現史から説明してみせており、示唆に富む。しかしそれでもなお、なぜ『源氏物語』の巻名として「夢浮橋」ということばが用いられねばならなかったのか、その点には不安が残る。「夢浮橋」ということばが、人と人との、あるいは心と心とのはかないつながりを意味し、それが薫と浮舟の関係を象徴するものだということは疑いようもない。しかし、それがどのような理路をたどって『源氏物語』最後の巻名となりおおせたのかは、現在のところ説明されていないと言わざるをえない。和歌史の中で「夢浮橋」ということばが創造される契機を捉えるだけでなく、それが『源氏物語』の巻名とされた理由をあきらかにしなければならない。そのためには、和歌の表現史と『源氏物語』の主題とが結びついた地点を見定める必要がある。
「夢浮橋」ということばと『源氏物語』とがいかにして結びついたのかを考えるにあたって、「浮橋」の用例としてよくとり上げられる次の歌を、あらためて見ておきたい。

へだてける人の心のうき橋をあやうきまでもふみみつる哉（『後撰和歌集』巻15　雑一）

渡部も述べる通り、右の歌は勅撰集においてはじめて「浮橋」が詠まれた歌である。男がほかの女からの文を隠したことを見てしまった妻が詠んでいる。「ふみ」には「うき橋」と縁語の関係にある「踏み」と、手紙の意の「文」とが掛かる。ほかの女からの「文」を見たことが発端となり、「うき橋」＝男との不安定な関係に「踏みみつる」＝足を踏み入れてしまったことが嘆かれている歌である。
右のように、文の問題と関連づけて「浮橋」のような男女関係の不安が詠まれる例は、『源氏物語』成立と同時代に詠まれた歌に散見される。以下にいくつか例をあげてみよう。

A　そこふかくあやふかりけるうきはしのただよふえをもなにかふみみむ（『一条摂政御集』）

B　うきはしのうきてだにこそたのみしかふみみてのちはあとたゆなゆめ（『朝光集』）

C　世の中のうきにわたせるうきはしをいとかくばかりふみやたゆべき（『為信集』）

D　しらざりつわがふみなれしうきはしにこぼるばかりになりわたるとや（『為信集』）

E　うき橋のしたのふかみをよよみつつふみかへしてはわれしづめとや（『匡衡集』）

F　たれとまたふみ通ふらんうき橋のうかりしよひもうき心かな（『赤染衛門集』）

AからFの歌では「浮橋」と「ふみ」がともに詠みこまれるとともに、「ふみ」が「踏み」と「文」との掛詞となっている。Aでは、「うきはし」が漂っている入江までは踏み入らないことと、文通をしないこととが「ふみ」の掛詞によって表現されている。Bはまれに手紙の返事をよこす女に対して、「うきはし」のように頼りない関係であっても頼りにしてきたのだから、「ふみみてのち」＝文のやりとりが一度成立した以上は、もう文通を途絶えさせてはならないと詠みかけている。CとDは贈答歌である。女のもとにたくさんの人がくるようになったため、男がしばらく訪れなかったところ、女は壊れた橋の作りものを贈るとともに「ふみやたゆべき」と恨みを詠みかける。対して男は、自分が通い慣れていた「うきはし」が、多くの人々が通るようになって壊れていたとは知らなかったと切りかえす(14)。Eは、ある女が男に贈っていた文を、男が別の女に見せていると知り、文をかえして絶交したいと言ってきたときに男が詠んだ歌。二人の仲をつなぐ危うい「うき橋」、その下の深い心を長きにわたって見てきた仲なのに、「文かへして」＝「踏みかへして」沈めというのかと詠んでいる。Fは、詠者の息子と関係を持っていた女がほかの男のもとに贈った文をめぐって、詠者が息子の代わりに詠んだ歌。女からほかの男に贈ったはずの文が、間違えて息子のもとにきたという状況で詠まれている。文の誤配がもととなって、「うき橋」のようにはかない、そして「憂き」＝つらい男女の仲が嘆かれている歌である。
以上のように、「浮橋」という歌ことばの背景には、たびたび文をめぐるトラブルが存在している。「文」は「踏み」と掛詞になるために、「踏み」と「浮橋」の縁語関係から「浮橋」とともに詠まれることが多かった。今井源衛や渡部によれば、和歌の表現史における「橋」は『後撰和歌集』のあたりから男女の途絶えをイメージさせるものとして詠まれるようになったが、そのイメージがはじめて「浮橋」という語で表現されるようになった『後撰和歌集』の「へだてける」歌が、文のトラブルをもとにして詠まれたものであるという事実は、もっと注意されてよいのではないか。「浮橋」は「踏

み」と縁語関係で結びつき、同時に「文」との掛詞を導きだすことで、文の問題と男女の不安定な関係を表現するという特質を持ったことばなのである。

4　浮舟物語の文と「浮橋」

さて、問題は「浮橋」と『源氏物語』の主題とがいかに結びついているかであった。「浮橋」が「ふみ（踏み／文）」と関係の深いことばであることを勘案するとき、夢浮橋巻において文の問題が印象深く描かれているという事実に気づかされる。夢浮橋巻において、薫が浮舟との再会を望む際、まず選択した方法は文によるやりとりであった。途絶を迎えようとする薫と浮舟の関係が、最後には文のやりとりによって描かれていることには注意しておいてよい(15)。

> さらに聞こえん方なく、さまざまに罪重き御心をば、僧都に思ひゆるしきこえて、今は、いかで、あさましかりし世の夢語をだにと急がるる心の、我ながらもどかしきになん。まして、人目はいかに。
> と、書きもやりたまはず。
> 法の師とたづぬる道をしるべにて思はぬ山にふみまどふかな
> この人は、見や忘れたまひぬらむ。ここには、行く方なき御形見に見るものにてなん。
> （夢浮橋 6 - 392）

薫から浮舟に贈られた文の中に書きつけられた歌は、『源氏物語』に見いだされる最後の歌として名高い。この歌は、仏道の縁を求めて尋ねた道だったはずなのに、それをしるべとして思わぬ山、すなわち恋の山路に迷いこんでしまった、という意を持つ。仏道を希求しながらいつも恋路に迷いこんでしまう、そうした薫のありようを象徴する一首である。

しかしこの歌には、そうした表層の意をこえたレトリックが仕組まれているのではなかろうか。ここで問題にしたいのは、右の薫の歌の傍線部「ふみまどふ」には、「踏みまどふ」と「文まどふ」とが掛けられているのではないかということだ。『源氏物語』成立と同時代に詠まれた歌の中から、「ふみまどふ」の用例をあげてみる。

G　道知らぬ物ならなくにあしひきの山ふみ迷人もありけり（『後撰和歌集』巻 17　雑三）

H　白樫の雪も消えにし葦引の山地を誰か踏み迷べき（『後撰和歌集』巻 17　雑三）

I　いづことてふみまどはせるたまづさぞここはたなべのいそならなくに
（『古今和歌六帖』第 5　雑思　ふみたがへ）

J　はま千どりあとたえぬればあふさかをふみまどはせる心ちこそすれ
（『古今和歌六帖』第 5　雑思　ふみたがへ）

GとHは贈答歌であり、男から女に贈った文が異なる場所に届けられた状況で詠まれている。「道」や「あしひきの山」が縁語として「踏み迷」と結びつき、そこに「文迷」が掛けられることで、山道で迷うことによせて文が誤配されたことを詠んでいる。また、ＩとＪは「ふみたがへ」の歌として分類されている。「ふみまどふ」ということばは、「踏み」と「文」とを掛けることによって文が誤配されることを示すものだと言えよう。

また、『蜻蛉日記』や『うつほ物語』にも「ふみ（は）まどふ」の用例が見いだされる。

水まさりうらもなぎさのころなれば千鳥の跡をふみはまどふか（『蜻蛉日記』）

いく度かふみ惑ふらむ三輪の山杉ある門は見ゆるものから（『うつほ物語』）

『蜻蛉日記』の例は、兼家が不在の際に章明親王から文が届き、二日後に兼家が文を受けとったものの、返事をしなかったときに章明親王から贈られた歌。「千鳥の跡」は鳥の足跡に筆跡の意をこめたもので、そこから「ふみ」を導く。「ふみ」には足跡と関係する「踏み」と、筆跡と関係する「文」とが掛けられている。兼家から返事がないことを受け、章明親王は文がどこかをさまよっていることを「ふみはまどふ」と表現している。

『うつほ物語』の例は、あて宮に求婚する平中納言の歌である。この例でもやはり「踏み」と「文」

とが掛けられている。いくら恋文を贈ってもあて宮からの返事がこないため、「文惑ふらむ」＝文がどこかで迷っていて届いていないのではないかと詠んでいる。

以上の諸例より、「ふみまどふ」と詠まれた場合は「踏み」と「文」とが掛けられ、山や道で迷うことと、文が宛先にうまく届かないこととを表現することが確認できよう。さらに、『源氏物語』の中でも「ふみまどふ」と詠まれた次のような歌が見いだされる。

妹背山ふかき道をばたづねずてをだえの橋にふみまどひける（藤袴 3 - 341）(16)

右は柏木が玉鬘に対して詠んだ歌で、やはり「踏み」と「文」とが掛けられている。柏木は、玉鬘が自身の妹だとは知らずに恋文を贈っていたことを「ふみまどふ」ということばで表現し、あらぬ相手に懸想してしまったことを詠んでいる。

『源氏物語』中で、「ふみまどふ」ということばが用いられるのは二箇所しかない。そのうち一つが右に見た柏木の歌である。そしてもう一つの例が、今問題にしている夢浮橋巻の「法の師と」歌に詠みこまれたものだった。「ふみまどふ」がこの二箇所にしか見いだされないことを考慮すれば、「法の師と」歌も右の歌と同様、「ふみまどふ」に「文」の意を見るべきであろう (17)。

もちろん、薫の「法の師と」歌の意味を解釈するうえで、直接的に文の意を読みとることはできない。が、「法の師と」歌が薫の文に書き記されたものであること、そして、その文を見た浮舟が「所違へにもあらむ」（夢浮橋 6 - 393）と述べていることを重く見ておく必要がある。薫は、単に道に迷うことを「ふみまどふ」と詠んだはずだ。しかし、文が誤配されることをも表現してきた「ふみまどふ」という歌ことばの伝統が、薫の意志をこえて作用してしまっているのである。その結果、薫の文は浮舟によって誤配されたものとして処理されてしまう。「踏みまどふ」から「文まどふ」へ、そして浮舟の言う「所違へ」へ。物語は、その背後に歌ことばの連想を敷きつめながら展開されている (18)。

文は、浮舟との再会を実現すべく薫によって選びとられた方法だった。しかし、その文には「ふみまどふ」をめぐる歌ことばの表現性がまとわりつき、誤配のイメージがつきまとってしまう。夢浮橋巻の主題が薫と浮舟の間にある深い断絶であることに疑いの余地はないが、その断絶が文の誤配をめぐる問題によって描かれる点に注意しておく必要がある。

浮舟物語を振りかえってみると、浮舟巻末から蜻蛉巻冒頭にかけて文の問題が語られていたことに気づく。夢を見て不吉な予感を嗅ぎとった中将の君は浮舟に文を贈り、浮舟も辞世の歌を記した文を匂宮や中将の君に届けようとする。しかし、浮舟が自死の決意をほのめかした歌は、使いが「今宵はえ帰るまじ」（浮舟 6 - 196）と言ったことによって届くのが遅延し、結局届かないままでおわる。仮に、浮舟が失踪する前に浮舟の辞世の歌が中将の君へと届けられていれば、浮舟失踪という悲劇は起こらなかったかもしれない。が、文の配達が遅延されることによって、浮舟の救われる可能性を閉ざしてしまったのだ (19)。文は人と人とのつながりを保証することができず、浮舟を救う光とはなりえなかった。人と人とのつながりが主題として浮上している中で、文もまた重要なモチーフとして描かれていると言えよう。

こうした文をめぐる物語の主題と、「夢浮橋」の「浮橋」ということばとは、物語の深層においてつながっている。先に見ておいたように、「浮橋」は「踏み」と縁語として結びつき、掛詞で「文」を導くことによって、文の問題を表現する歌ことばであった。「浮橋」ということばは夢浮橋巻中に見られないが、その「浮橋」とゆかりの深い文の問題は、夢浮橋巻の重要なモチーフとして描かれているのである。薫と浮舟の関係が結び直されるか否か、その結果は文という方法に託された。が、その文には誤配のイメージがつきまとっており、文が薫と浮舟のつながりを修復することはついになかった。こうした文をめぐる物語を象徴するものとして、「夢浮橋」の「浮橋」ということばは導きだされてきたのではなかろうか。物語の表層を見るかぎりでは、「浮橋」ということばが導きだされた理路はよくわからない。しかし、物語の深層ではたしかに「浮橋」と主題とが結びついていたのだ。物語の深層で作動している歌ことばの体系が、「文」から「浮橋」への連想を促し、「浮橋」ということばを導きだしてきたのである。

思いかえしてみれば、すでに古注において、「夢浮橋」ということばと文との関係は注目されていた。『源氏物語提要』には、「僧都の文と大将の文とをそへて小野へ遣しけるに、彼文共を女見ずして返しけるゆへに、夢の浮橋といふ也。心は、うつゝのはしをふみ見しに、夢の浮橋をばふみ見る事なし。よつて、ふみみる事をふみみぬによせて、夢の浮橋といふ也」という説が記されている (20)。「文見ぬ」が「踏み見ぬ」を連想させ、それによって「夢浮橋」ということばが巻名として採用されたというのである。この説は、『紫明抄』にも「世の人おもへらく、薫左大将の艶書をひらくまでもなく

てかへしたりしかば、ふみ見ぬゆへになづけたる歟、といふは、さもありぬべきにや、如何」という形で紹介されており、ある程度流布した見解であったようだ。もちろん、のちに『河海抄』が批判したように、浮舟は薫の文を見たうえで再会を拒絶しており、「文見ぬ」という行為が物語上で具体的に語られているわけではないため、この説は牽強付会と言わざるをえない。

しかし、夢浮橋巻で文の問題がとり上げられているということは、疑いようもない事実である。浮舟物語における人と人とのつながりは、「ふみ（踏み／文）」という歌ことばのレトリックを基底に置いて描きだされている。人と人とがつながろうとしてもつながりえない、そうした物語の主題の基底には、橋を踏む、あるいは文をめぐる歌ことばの体系が敷きつめられており、そのことを象徴することばとして、「夢浮橋」はあったのだ。

5　おわりに

夢浮橋巻で薫に詠まれた「ふみまどふ」ということばは、直接的な意味では恋の山路に迷うことを意味しているにすぎない。しかし、その裏では「ふみまどふ」ということばに付随した誤配のイメージがひそかに稼働しており、それによって薫の文そのものが誤配したものとして片づけられてしまう。和歌史の伝統の中で育て上げられた歌ことばのレトリックが、薫の意志を裏切りながら物語の主題を形成してゆくのだ。薫の歌をめぐるこうした構造は、物語の深層において歌ことばのレトリックが機能し、それによって主題が形づくられてゆくという『源氏物語』末尾のありようを象徴していよう。物語の深層においてたしかに機能していた歌ことばの体系は、「夢浮橋」という謎めいた巻名によってわずかに表層へと顔をのぞかせていたのであった。

※『源氏物語』の本文引用は小学館新編全集により、『源氏物語』の巻名、新編全集の巻数、頁数を付した。『蜻蛉日記』、『うつほ物語』の引用も小学館新編全集による。和歌の引用については、八代集からの引用は岩波新大系により、その他の和歌集からの引用は『新編国歌大観（DVD-ROM版）』による。

注

1　松岡智之「多弁と寡黙、あるいは沈黙」（『源氏物語　宇治十帖の企て』おうふう、2005年）。
2　異界との回路として「夢」を考察したものとして、甘利忠彦「物の怪・夢」（『新 物語研究　1　物語とメディア』有精堂、1993年）などがある。
3　安藤徹「境界のメディア」（『源氏物語と物語社会』森話社、2006年）。
4　『紫明抄』『河海抄』の引用は玉上琢彌編『紫明抄・河海抄』（角川書店、1968年）により、適宜濁点や句読点を補った。
5　益田勝実「夢の浮橋再説」（『源氏物語の鑑賞と基礎知識43　夢浮橋』至文堂、2005年）。
6　森朝男「夢の浮橋」（『古代和歌と祝祭』有精堂、1998年）。
7　鷲山茂雄「「夢の浮橋」考」（『源氏物語の語りと主題』武蔵野書院、2005年）。
8　今井源衛「「宇治橋」の贈答歌について」（『紫林照径』角川書店、1979年）は、『万葉集』では単に恋人のもとへの通い路として詠まれていた「橋」が、『後撰和歌集』以後は男女の仲が絶えることへの不安を表現するものとなったと指摘する。また、渡部修「「夢の浮橋」考」（『日本文学論究』49、1990年2月）も「『万葉集』の「橋」がある甘美な結ぶ抒情を生み出すものであるのに対し、『後撰集』の「橋」は厳しい断絶感を生み出すことに主眼があった」と述べる。
9　伊藤博「宇治橋の長き契り」（『講座　源氏物語の世界〈第9集〉』有斐閣、1974年）は、「宇治橋」が中絶えのイメージと親和することばであることを踏まえ、薫の贈歌について「この詠み口自体に薫の浮舟にのぞむ態度のなおざりさが露呈している」と指摘する。
10　注9伊藤前掲論文は薫と浮舟の贈答歌について、「「なか絶え」を「心の断絶」と読みかえるなら、まさにこの薫と浮舟の向かい合う風景こそ「宇治橋」のイメージに相即しているというべきだろう」と論じる。
11　高橋亨「宇治物語時空論」（『源氏物語の対位法』東京大学出版会、1982年）は、宇治十帖にたびたび見られる「橋姫」もまた、恋の中絶えのイメージを持つと指摘する。
12　注8今井前掲論文。
13　注8渡部前掲論文。
14　『為信集』の贈答歌において、詞書の記述のみでは「ふみ」に「文」の意がこめられているかは断定できない。「ひさしくまからで」とあるのは、直接的に訪れないことを言うのみならず、手紙による連絡も絶えていたことを示すか。笹川博司『為信集と源氏物語』（風間書房、2010年）において、「ふみ」が「踏み」と「文」の掛詞であることが指摘されているため、それにしたがっておく。
15　なお、清水婦久子「源氏物語の巻名の基盤」（『源氏物語の巻名と和歌』和泉書院、2014年）は、和歌で「浮橋」が多く「文」とともに詠まれることに注目し、夢浮橋巻の中でも文のやりとりがたびたび描かれていることを指摘する。本稿の問題意識と近いが、本稿ではより具体的に物語内容と「浮橋」の関連を論じた。
16　ただし、この歌における「ふみまどひ」には本文異同がある。青表紙本系統の諸本では「ふみまどひ」であ

るが、小学館新編全集をはじめとする多くの注釈書で底本として採用される大島本には「ふみまよひ」とある。「ふみまよひ」とする大島本が特殊で、ほかの諸本は多く「ふみまどひ」としていることから、「ふみまどひ」でとる。なお、今井上「踏み惑う蕉と夢浮橋」(『源氏物語　表現の理路』笠間書院、2008 年）はこの本文異同について、「まよふ」と「まどふ」の語義の違いから「ふみまどひ」でとるべきだとする。

17　なお、注 16 今井前掲論文は、柏木の「妹背山」歌と蕉の「法の師と」歌の表現が整然と対応していることを指摘する。また、末沢明子「「橋」の記憶と「夢の浮橋」」(『福岡女学院大学紀要（人文学部編)』17、2007 年 2 月）も柏木の歌と蕉の歌の類似性を指摘する。

18　ツベタナ・クリステワ「宇治の橋姫の詩学」(注 1 前掲書）は、『源氏物語』第三部の宇治十帖が、背景に「橋」をめぐる詩的連想を隠し持っていることを示唆する。歌ことばの体系は物語の深層においてひそかに稼働し、物語の展開を導いている。

19　篭尾知佳「手紙はどう読まれるか」(『物語研究』16、2016 年 3 月）は、浮舟の辞世の歌には中将の君に対する SOS のサインがこめられていたが、使者がすぐに届けなかったことで、届かぬ母への思いへとすり替わってしまったことを指摘する。

20　引用は稲賀敬二編『源氏物語提要　源氏物語古注集成　第 2 巻』(桜楓社、1978 年）により、適宜濁点や句読点を補った。

『太平記』三種神器考
―「似せ物」をめぐって―

安松拓真

1　はじめに――三種神器からみる『太平記』

『太平記』が描く南北朝の動乱において、両陣営による三種神器の奪い合いという側面は小さくない。稿者は別稿において、三種神器のうち源平合戦において水没した草薙剣の伝承を整理しながら、『太平記』の、特に西源院本にみる宝剣の論理は、三種神器が実体とはかけ離れて観念化していることを指摘した (1)。本稿では作品世界全般にわたる問題として、改めて三種神器の問題を捉え直してみたい。

南北朝の対立構造が成り立つまでの経緯を単純に捉えるならば、『太平記』が扱う時代以前に定められた、二つの皇統から交互に天皇を擁立するという両統迭立方式を受け継いで、各勢力がそれぞれ天皇を立てようとした時代であると言い得る。持明院統は、はじめは鎌倉幕府に利用され、そののちは足利尊氏らによって再び天皇が擁立された。一方の大覚寺統は、一貫して「官方」を自称しながら、圧倒的なカリスマ・後醍醐とその周辺の人物たちによって一時は天皇親政を執ることになるが、後醍醐なき後は求心力を失っていく。両統がともに複雑な問題を抱える中で、血筋が天皇家の正統性を示すものとして機能しない以上、三種神器は必然的に天皇家の正統性を示すものとして扱われるようになる。三種神器が「王の王たることを保証する宝物であった」という理解は、半ば定説化しているといってよいだろう (2)。

『太平記』において三種神器が登場する 10 の場面について精査した堀井純二氏は、作中世界の三種神器は「古くからの伝統的な神器観の継承」と呼ぶべき観念によって支えられているのだと述べた (3)。こうした論理は、『太平記』に「作者」を想定する読み方のもと、作品を統一的に括る思想として論じられてきた (4)。しかし、果たして『太平記』における三種神器は、正統性を示すレガリアとしての性質を、自明のものとして与えられているのだろうか。

右のような解釈を支えてきたのは、巻 27「雲景未来記事」において、天狗・太郎坊が語る三種神器観であっただろう。この章段については、既に小秋元段氏が詳細な検討を加えているが (5)、太郎坊は三種神器が「国を守る」ものであること、安徳天皇と共に宝剣が水没したことで王法が衰滅したことを述べたうえで、三種神器が吉野に渡っている現状を問題視している。世の動乱が治まらない理由を、「微運の君」たる南朝の天皇の資質、あるいは三種神器が正しく伝わっていないことに求めているのである。

天狗の言葉から窺えるのは、「三種神器」の性質には、象徴性／機能性という二つの性質が含蓄されているということである。象徴性とは、天照大神以来代々伝えられてきた神器を保有することによって、皇位を象徴する性質である。南北朝という時代においては、この象徴性の側面が取り沙汰された結果、正統性をあらわす道具としての性質を担わされてきた。太郎坊が南朝に向けたのは、神器が伝わるべき天皇に伝わっていないという非難である。

一方の機能性は、中世以前から伝統的な性質として認識されてきた、「君／国の御守り」としての性質である。天皇が神器を所有することで、天皇自身の守りとなり、あるいは国を守護するという機能を発揮する。鶴巻由美氏が述べるように、三種神器は「天皇の御まもり」という伝統的な機能から、天皇の正統性を示す象徴的な意義が見出されるようになったことと合致するが (6)、『太平記』の作品世界においては、この二つの性質は完全に分断されているわけではなく、相即的なものとして三種神器を支えている。本稿では三種神器の性質を静的なものとして捉えるのではなく、作中においてどのようにその性質が変容していくのかを論じることとしたい。

また、『太平記』における観応の擾乱の時期において、集中的に王法や三種神器のことを問題視する傾向があることが指摘される。三種神器をめぐる言説の運動を追うことで、なぜ観応の擾乱のなかでこうした伝統的な「三種神器」観が要請されるのか、という問題と接続することも可能なはずである。

2　後醍醐の神器観――実体性をめぐる言説

まず、後醍醐が隠岐に流される直前に、三種神器を幕府側に受け渡す場面について取り上げたい。この場面で注目すべきは、一旦は後醍醐が神器の引渡しを拒み、その際に言い放った言葉である。

> 主上藤房を以て仰せ出されけるは、「三種の神器は昔より継体の君位を天に受けさせ給ふ時、自らこれを授け奉るものなり。四海に威を振ふ逆臣あつて、暫く天下を掌に握る者ありと云へども、未だこの三種の重器を自ら専にして新帝に渡し奉る例を聞かず。その上内侍所は、笠置の本堂に捨て置き奉りしかば、定めて戦場の灰塵にぞ落ちさせ給ひぬらん。神璽は山中に迷ひし時、木の枝に懸け置きしかば、遂にはよもわが国の守とならせ給はぬ事あらじ。宝剣は武家の輩天の罰を顧りみずして、玉体に近付き奉る事あらば、自らその刃に伏させ給はんずるために、暫くも御身を放さるまじきなり」と仰せ出されければ、東使両人も（六波羅も、言なくして退出す。）……（中略）……同じき九日、三種の神器を持明院の新帝の方へ渡さる。堀河大納言、日野中納言、これを請け取つて、長講堂へ送り奉る。（巻3「先帝六波羅の事」）

この言葉ののちには、結局のところ神器を引き渡したとの記述が続くため、後醍醐の発話は一種の方便と見做すのが妥当である (7)。しかし、ここで後醍醐が拒否する理由として挙げている三種神器の性質は、注視すべきものである。

まず前半では、三種神器とは天皇自らが次世代の天皇に受け渡すべきものであり、武家の恣意によって天皇に渡すのは前代未聞であることが述べられる。続けて、三種神器の一つ一つをどのように扱っているかについて語っている。「内侍所」＝鏡は笠置の本堂に置いたままにしていたために、戦火によって跡形もなく燃え尽きたとし、「神璽」＝曲玉は山中を彷徨っていたとき、木の枝に懸けてきたとする。またその機能にも言及しており、いつまでも「わが国の守」となるに違いない、と言い放つ (8)。最後に「宝剣」＝草薙剣については、今も保有しているとするものの、その性質について、極めて独特な神器観を提出している。

宝剣を武家に渡すことができない理由は、常に玉体に肌身離さず保持していなければならないからだという。それは、武家がもし天皇に対して反逆を行ったあかつきには、「自らその刃に伏させ給はんずるため」――天皇自らが自刃するためなのだという (9)。代々の天皇に伝えられてきた三種神器が、天皇の身体を傷つけるという禁忌を犯す道具として、見出される。このとき、神器としての宝剣は、その「剣」という実体としての性質を発揮している。後醍醐が携行している神器として、曲玉でも鏡でもなく、宝剣が選ばれることには必然性があるのだ。

後醍醐は神器の引き渡しを拒否する根拠として、象徴性でも機能性でもなく、神器の実体性を挙げている。たとえ方便であるとしても、後醍醐のこうした発言は看過できない。

三種神器という観念と実体、その結びつきは、何ら根拠のあるものではない。天狗の言葉に現れているように、「伝ふるを以て詮となす」のである。三種神器が三種神器であるという根拠は、天照以来代々伝えられてきたという神話にしか求められない。後醍醐は、象徴性や機能性という観念を所与の歴史としてただ受け止めるのではなく、実体性に目を向けた、ただ一人の人物であった。

この方便を聞いた六波羅からの使いは、「言なくして退出」したとある (10)。頑なに天皇制というシステムの枠組みで世を治めようとする幕府勢力にとっては、到底理解不能な言説であることは無理もない。『太平記』において後醍醐が突出した扱いを受けていることは今更述べるべくもないが、神器論という観点からも、希有の発言として捉え直す必要があるだろう。なぜなら、この実体性に迫った後醍醐こそが、三種神器の「似せ物」を用意するに至るためである。

隠岐流罪を経て、後醍醐は再び都に返り咲く。鎌倉幕府からの神器の接収について、『太平記』は事実を述べるのみで、三種神器の性質に対する言及はほとんどない。

3　直義への「似せ物」授受

次に、「似せ物」について考えたい。鎌倉幕府が滅びたのち、尊氏は一時的に後醍醐を都から追い落とすことに成功するが、三種神器を欲していた。後醍醐は、自らの皇子・恒良に譲位し、義貞に北国落ちを命じるとともに、自ら都へと還幸する。後醍醐を待ち受けていたのは、幽閉ともいうべき悲惨な仕打ちであった。この時、足利側の要請に応じて神器を渡すが、『太平記』は次のように語っている。

> 還幸すでに法勝寺に近づきければ、左馬頭直義、五百余騎にて参向し、先づ三種の神器を当今の御方へ渡さるべき由申されければ、主上、かねてより御用意ありけるにや、似物を内侍の方へ

ぞ渡されける。（巻 17「還幸供奉の人々禁獄せらるる事」）

ここにいう「似せ物」の「似せ」という言葉は、「実物に似せ」ることを意味しており、したがって「似せ物」とは「実物に似せて作ったもの」「本ものに見せかけて作ったもの」という意味を持つ言葉である (11)。似ても似つかないような、いわゆる贋物の意味に必ずしも一致せず、本物との類似性こそが問題となる表現であることが理解できる (12)。その点では、「似せ物」とは、実体性は酷似しているが、機能性や象徴性を持たないもの、とも捉えることができる。偽器が渡されたことが足利側にとって一切問題視されないのは、本物か「似せ物」であるかの区別がつかない状態にあったことを意味しており、まさに観念の一人歩きと呼ぶべき事態を露呈している。

しかし、神器の実体性に迫る行為とは、禁忌にも等しいものであった。平素から唐櫃に入っていることからも窺えるように、たとえば壇ノ浦合戦において鏡が収められた唐櫃を開けようとしたとき、武士たちは「目くれ鼻血たる」状態になったという (13)。『太平記』の中にも鏡の禁忌性が窺える場面が存在しており (14)、凡人には決して辿り着けない禁忌性の果てに、三種神器の実体は位置しているのである。この「似せ物」が北朝の神器として機能している期間に、崇光天皇が即位するが、「剣璽を渡して」という践祚の儀礼が疑問視されずに述べられる（巻 26「持明院殿即位の事」）。

こうして「似せ物」が足利側に渡り、暫くの間、北朝には偽物の神器が用いられるようになるが、一方の後醍醐の元には、相変わらず本物の三種神器があり続けた。それは吉野へ脱出する際の場面において、霊験を伴って証明される。

> 合図の刻限になりければ、三種の神器を新勾当内侍に持たせられて、童部の踏み開けたる築地の崩れより、女房の質に出でさせ給ふ。景繁、かねてより用意したる事なれば、主上を寮の御馬に舁き乗せまゐらせ、三種の神器を自ら荷担して、まだ夜の内に大和路に懸かりて、梨間の宿までぞ落としまゐらせける。……（暗闇を照らす光に遭う。景繁が吉水法印に尋ねると、僉議の結果）「この所に、古へ清見原天皇、大友皇子に襲はれて幸なりしも、程なく天下の泰平を致されき。その先蹤に付いて、今千蹕を廻らされん事、衆徒何ぞ異議に及ぶべきや。就中、昨夜天に光り物あつて臨幸の道を照らす。これ当山の鎮守蔵王権現、小守、勝手明神、三種の神器を擁護し、万乗の聖主を鎮衛し給ふ瑞光なり。暫くも猶予あるべからず」とて、若大衆三百余人、皆甲冑を帯して御迎ひにぞ参じける。（巻 18「先帝吉野潜幸の事」）

この場面について、内田康氏は「明確に、ニセモノを差別化した上での三種の神器の宝器のレガリア化が行われている」と述べている (15)。ただし、北村昌幸氏が『太平記』叙述の混乱を指摘しているように、後醍醐は三種神器を持ってはいるが、所詮「吉野の主上」に過ぎないわけだ (16)。暗闇を照らすという霊験は、逃避行を援助し、「天皇の御守り」としての機能性を十全に発揮している (17)。しかし同時に、後醍醐は「吉野の主上」にしか成り得ず、『太平記』にとっては天皇でなくなってしまう。つまりは、象徴性はこの時に影をひそめてしまうのである。

確かに真器は偽器との差別化が図られているものの、「似せ物」が出現したこの瞬間に、その性質に大きな変化が訪れる。天皇の正統性を示す象徴性は後退し、「守り」としての機能性がそれを補うかのように前面化するのである。こうして、南朝側が保有し続けることになる三種神器は、真器でありながらも象徴性を持たないという、その存在意義が疑われる状態に置かれることになる。

4　揺らぐ真器

三種神器の「似せ物」と本物が出会うことになるのは、観応の擾乱の最中、いわゆる正平の一統において、足利尊氏が直義追討のために京都を留守にしている最中、足利義詮が南朝側と和睦し、南北朝体制が一時的に解消された頃の事である。直義が没したのち、京都を攻めて奪還した南朝勢は、「似せ物」の神器を接収する。さらには、北朝側の天皇・親王らを賀名生まで連行してしまう。神器の接収をめぐる場面は、『太平記』が史実と大幅に異なる、劇的な場面設定を取っていることが指摘されている (18)。

> 同じき二十三日、中院中将具忠を勅使にて、都の内裏におはします三種の神器を、吉野の主上へ渡し奉る。「これは、先帝山門より武家へ御出でありし時、①あるもあらぬ物を取り替へて、持明院殿へ渡されたりし物なれ」とて、②璽の箱をば捨てられ、宝剣と内侍所をば、近習の雲客に下されて、衛府の太刀、装束の鏡にぞなさる。
>
> 「げにも誠の三種の神器にてはなけれども、③すでに三度大嘗会に逢うて、毎日の御神拝、清暑堂の御神楽、廿余年になりぬれば、神霊もなどかなかるべき。余りに恐れなく凡俗の器になさ

れぬる事、いかがあるべからん」と、申す族も多かりけり。（巻30「三種神器閣かるる事」）

①では後醍醐が「似せ物」を渡したときのことが振り返られ、②では偽器の処置について述べられ、③では偽器をぞんざいに扱うことへの非難が述べられている。

①にある「あるもあらぬ物」とは、「あり」の打消形「あらず」を強調した言葉で、「ありもしない。見当外れである。全く異なっている」といった意味の語である(19)。この時偽器は、「似せ物」＝実体性の類似したものという扱いを離れ、真器との類似性の一切を失ってしまったことになる。この言葉は、勅使である具忠や「吉野の主上」、すなわち後村上天皇を含む南朝勢力の認識が反映したものとみてよいだろう。後醍醐が「似せ物」として用意したものが、後醍醐亡き後には「あるもあらぬ物」へと変容してしまっている。

この認識は、②偽器の処置とも通ずるところがある。曲玉は（役に立たないものなので）捨ててしまい、宝剣と鏡は、「衛府の太刀」「装束の鏡」、すなわち宮中の一般貴族の日用品として用いられることになるというのである。後醍醐亡き後の南朝勢力にとって、後醍醐が用意した「似せ物」は、その実体性を認識できないばかりに「あるもあらぬ物」として捉えられてしまう。その結果、日用品程度の実用性を認めることになるが、そこにはある種の危うさがつきまとう。すなわち、本物の神器の実体さえも、日用品程度のありふれたものでしかないという危うさである。

③の非難は、たとえ偽物であったとしても、3度にもわたる大嘗会において用いられているうえ、20年以上にもわたって神器として用いられているのだから、「神霊」が宿っているのだとするものである。3度目の大嘗会は『太平記』においては不吉なものとして描出されていたが、ここで取り沙汰されるのが践祚の儀でなく大嘗会なのは、天皇の霊が問題となるからであろう(20)。

日用品と大差ないものであっても、神霊＝天皇の霊が宿る可能性がある。偽器への対応をめぐる非難の言であるが、真器の意義を問いただす非難と表裏一体のものである。たとえ北朝で伝えられた神器であるとはいえ、それは最早「凡俗の器」ではありえない。そもそも神器が神器である理由は、それが神器として用いられてきたことにこそ求められるのであって、真器が象徴性を果たし得るのもまた、天照以来伝わってきたから、であった。ここに至って、真器／偽器の別はなく、その境界が攪乱されてしまう。

正平の一統がもたらしたのは、真器と偽器の出会いであった。後醍醐なき後の南朝にとっては、偽器は退けられるが、そのことは三種神器そのものの同一性を問う事態にまで発展してしまう。これ以後、『太平記』の作中世界において、三種神器についての言及は、内侍所の無事を賛美するものと、北朝に神器がなくなってしまうことを問題視するものがある程度で、みられなくなっていく。史実としてはこの後、嘉吉の変や南北朝動乱の真の意味での平定が行われるときなどに問題になるわけだが、『太平記』は、三種神器について語ることをやめてしまうのだ。

5　三種神器の失効

神器の実体性を唯一捉えることのできた後醍醐は、それゆえに三種神器の「似せ物」を作るという前代未聞の手段を取ることができた。しかし、その後醍醐亡き後の南朝勢力にとって、「似せ物」は、似ても似つかない「あるもあらぬ物」へと変容してしまう。神器を渡すことを拒む後醍醐が方便として言い放った言葉は、正平の一統において真器の存在そのものが揺さぶられる契機をはらんでいた。

巻26「伊勢国より宝剣を進す事」、巻27「雲景未来記の事」において三種神器が特に問題となるのは、いずれも後醍醐が「似せ物」を作成してから、南朝が接収するまでの間、北朝において偽器が用いられている期間においてであった。

三種神器は機能性と象徴性を備えたものであったが、『太平記』の作中世界において、後醍醐の言葉によってその実体性に到達されてしまう。禁忌とされていた実体性に到達すること、それは三種神器とはなんであるのか、という存在意義そのものを問うラディカルな行為に等しい。「似せ物」作成後の三種神器は、後醍醐が「吉野の天皇」に成り果てるように象徴性を失う結果を呼ぶ。「似せ物」と真器が分離している時期において、天狗たちのような外部の者たちは、象徴性を取り戻すことを希求して、語り続ける。それは、はじめに述べたように、観応の擾乱の記事付近で三種神器についての言及が数多く行われることとも深くかかわっている。「似せ物」と真器が出会うまでの限定的な期間にこそ、『太平記』は三種神器を問い続けるのだ。

しかし、その願いは空しく、後醍醐を欠いた後の南朝勢力によって、三種神器を三種神器たらしめる確固たる根拠は、誰一人として発見することはできない。三種神器は「凡俗の器」に等しいものであり、一方で神霊さえ宿る継承の過程を経てさえいれば、それは三種神器という観念を埋めるモノに成り得るのである。後醍醐の死によって、三種神器が正統性を表すという所与の神話は解体され尽く

し、三種神器はその意義を失うことになる。だからこそ、『太平記』は三種神器について語ることをしなくなる。三種神器が、あるべき所に収まるべきだという天狗たちの言葉は空転し、三種神器の自己同一性はもはや失われてしまうのである。

6　おわりに――〈偽器〉という発明

最後になるが、本稿の核を成す「似せ物」の位置付けについて、その意味をもう少し述べておきたい。後代、南北朝という時代を考えるうえで、三種神器を保有しているのは南北どちらの王朝であったか、という検討は必要不可欠なものであったことはいうまでもない（いわゆる南北朝正閏論争）。その際に、三種神器を持っていながらもその正統性を無化する思想、それこそが〈偽器〉であった。本物か偽物か、すなわち真器か偽器か、という二項対立が持ち込まれるとき、『太平記』はテクストを離れて読み替えられていく。

先にも触れた場面であるが、後醍醐は「似せ物」を北朝に渡す前に、宮方再起のために一旦は和睦するのだとして、東宮・恒良を新田義貞に奉じさせ、北国落ちを命じる。その際に、『太平記』は次のように綴っている。

> （後醍醐の言葉）但し朕京都へ出でなば、義貞却つて朝敵の名を得つと覚ゆる間、春宮に天子の位を譲つて、同じく北国へ下し奉るべし。天下の事小大となく、義貞が成敗として、朕にかはらずこの君を取りたて進らすべし。朕已に汝がために勾践が恥を忘る。汝早く朕がために范蠡が謀を廻らせ」……（中略）……九日は事騒がしき受禅の儀、還幸の粧ひに日暮れぬ。（巻 17「儲君を立て義貞に付けらるる事」）

この時、東宮であった恒良に「受禅の儀」を行ったのだという。これを受けて、北国へ下った義貞は、義鑑房義治を説得する際に、後醍醐が恒良に「三種の神器を東宮に渡しまゐらせられ」たことを述べている（巻 17「義鑑房義治を隠す事」）。先にも述べたように、「似せ物」を渡したあとにも後醍醐は未だ三種神器を携行していた。恒良がこの時即位したのかどうか、いわゆる「北陸王朝」を認めるかについての議論があるが (21)、今は『太平記』では恒良を「東宮」と呼び続けるうえに、あくまで後醍醐を天皇として扱っているという事実に従っておきたい。

また、三種神器を恒良に渡した記述はしばしば、『太平記』の本文が誤りであると処理される。だが、後醍醐は恒良に一旦三種神器を渡したのち再び携行したとみるのが、『太平記』の記述に忠実な読み方だろう。義貞は、恒良が現在も三種神器を携行しているとは一言も言っていない。

こうした『太平記』テクストに加えられた〈読み〉の足跡を浮かび上がらせるのは、後世に成った『太平記評判秘伝理尽鈔』である。該当の記述について、義貞が強引に譲位を迫ったという改変が施されたうえで、後醍醐が渡した神器は「似せ物」であったとの記述がみえる (22)。なるほど、『太平記』の展開に沿うならば、ここで恒良に三種神器を渡したとするのは不都合が生じるのであろう。こうした説を受けてか、現代の認識においても、この際に譲渡された神器が〈偽器〉とする解釈は少なくない。

しかし、ここにいう「似せ物」は『太平記』のそれとは大きく異なっている。「似せ物」は〈偽器〉として機能するべくして、真器を支えるために編み出された。そうしてはじめて、恒良の即位を無化することができるのである。近世、あるいは近代の南北朝の議論に対して、三種神器を無化する『太平記』のテクストがどのように読み替えられていったのか。その享受の一端を『太平記評判秘伝理尽鈔』のレトリックにみることができる。

〈偽器〉という発明は同時代の人間たち以上に、あるいは『太平記』のテクスト以上に、二つの王統をどのように評価するかという問題をめぐって、後代の人々にとって重要な問題を提起している。しかし、『太平記』における「似せ物」が見失われたことと呼応するかのように、後世の読者たちはそこに〈偽器〉を見出だし、皇統を否定するための根拠とする。「似せ物」から〈偽器〉へ――その変容は、近代にまで連なる問題としてなおも考察を要するだろう。

※『太平記』の本文引用は西源院本（岩波文庫）によった。

注

1 拙稿「「しるし」としての神器――『太平記』における宝剣のゆらぎ」（『学芸古典文学』第 10 号、2017 年 3 月）。

2 阿部泰郎「中世王権と中世日本紀――即位法と三種神器説をめぐりて――」（『日本文学』第 34 巻第 5 号、1985 年 5 月）。

3　堀井純二「太平記に於ける三種の神器観」（日本文化大學編『柏樹論叢』第5号、2006年3月）。
4　たとえば、『太平記』研究の先駆者である鈴木登美恵は、「雲景未来記の事」における天狗を「一回限りの登場で歴史・政治を論じ未来を見通す人物は、しばしば、太平記作者の分身といへる存在であり、その登場人物のことばに作者自身の思ひが託されてゐる」とする（「『太平記』における歴史論――山伏雲景と天狗太郎房との問答――」『中世文学』第42号、1997年6月）。
5　小秋元段「『太平記』観応擾乱記事の一側面――「雲景未来記事」を中心に――」（『『太平記』と『梅松論』の研究』汲古書院、2005年←初出1991年）。甲類本のうちで、増補記事とみられる当章段を有しており、神器にまつわる記述を欠巻なしで追うことができるのは西源院本のみである。また、西源院本の場合は、太郎坊の言葉が正平の一統以後までを見渡したものであることを指摘している。
6　以上の議論は、鶴巻由美「「三種神器」の創定と『平家物語』」（『軍記と語り物』第30号、1994年3月）、新田一郎「継承の論理」（『岩波講座　天皇と王権を考える　第2巻　統治と権力』岩波書店、2002年）、山本幸司「王権とレガリア」（『岩波講座　天皇と王権を考える　第6巻　表象と芸能』岩波書店、2003年）、内田康「〈「三種神器」神話〉の生成と『平家物語』」（『筑波大学平家部会論集』第10集、2006年1月）など先学諸氏による多くの指摘がある。
7　『花園院宸記』には、後醍醐が神器譲渡を拒んだ由（元弘元年10月4日条別記）と、そののちに譲渡したことが記されている（同5日条）。このとき、やはり後醍醐は神器を渡したものと思われる。ただし天正本は、ここで後醍醐が三種神器を渡したとの記述を欠き、正中の変においても後醍醐は天皇であり続けたとの理解を示している。『太平記』は鎌倉幕府を倒したのちの建武の親政において、後醍醐が重祚したとするが、『増鏡』や『皇年代略記』ではこの重祚を認めていない。後世の〈歴史〉にとっては、この時期に光厳天皇が擁立されたとの理解はなされていなかったと思われ、天正本も同様の理解に基づくものかと考えられる。
8　この発想は、天皇の実存を疑問視する言説という点でいえば、高師直の発言として有名な「もし王なくて叶ふまじき道理あらば、木を以て作るか、金を以て鋳るかして、生きたる院、国王をば、いづくへも皆流し捨てばや」（巻27「秦の趙高の事」）に近接している。尤も、この発言は『太平記』中においては、師直に悪意を抱く吉侍者の讒言として紹介されたものである。しかし、王の身体を後醍醐自らが「木」に譬えながら、「わが国の守り」としての機能を果たすと述べているのは、神器の機能性を取り立てるとともに、天皇と共にあることを必然化しない言葉であると受け取れる。
9　内侍所が基本的に温明殿に置かれるのに対して、剣璽＝宝剣と曲玉は、基本的に天皇が携行するのが慣例であった（藤原重雄「源平合戦のなかの〈三種の神器〉」『歴史読本』第131号、2008年6月）。後醍醐はここで曲玉を置いてきたと述べるのであり、宝剣携行の理由をこうした伝統的な価値観に求めないのである。
10　西源院本は該当する本文を欠くが、神宮徴古館本により補った。なお、同じく甲類本である玄玖本は東使の反応を「舌を振て恐怖（オチオノノキ）し」と描き、天正本も類似している。後醍醐の発言の異質性を際立たせているといえよう。甲類本の一本たる玄玖本において、こうした表現が採られることの意味は軽くない。一時は拒んだが三種神器を譲渡した、という結果論からでは見えないものが、後醍醐の「語り」にはある。
11　「にせ」:「本物ににせて作ること。また、そのもの。にせもの。」「【偽】いつわり。うそ。本物まがい。【贋】似ているが真の価値がないもの。にせもの。【似】似ていること。似たもの。」、また「にせもの」:「実物に似せて作ったもの。模造品、また、本ものに見せかけて作ったもの。まがいもの。ぎぶつ。がんぶつ。」（いずれも『日本国語大辞典』による）。
12　なお、『太平記』中には「似せ」という言葉は他に2例みられるが、いずれも「似せ絵」という用例である。「似せ絵」とは無論、ある人物や場面を模した絵であることから、以上の説を裏付ける。また、正平の一統における「似せ物」の接収について、『園太暦』観応2年12月22日条には「京都に御坐は虚器の条勿論也」との表現がみえる。偽器のことを指す言葉には、「虚器」と呼ぶこともできるのである。それを敢えて「似せ物」という言葉で説明する『太平記』のあり方を見定めるべきであろう。
13　『平家物語』巻11「能登殿最期」にみられ、源氏に生け捕りにされていた平時忠が「凡夫は見たてまつらぬ事ぞ」と誡める。『吾妻鏡』元暦2年4月21日条にも類似の表現がみえる。
14　巻31「八幡落つる事并宮御討死の事并公家達討たれ給ふ事」には、「内侍所の櫃」を荷担した伯耆太郎左衛門長生が、背中に雨の如く降る矢を受けながら、身には矢を受けることなく、辛うじて逃げることができたとする逸話がある。この矢は唐櫃に13本も刺さっていたが、檜の板を貫通した矢は一本もなかったという。長生は、「内侍所にも矢や立たせ給ひたるらん」と思い唐櫃に目をやるが、矢が刺さりもしない、つまり開ける必要もないという霊威によって、神器そのものへの到達が阻まれているのである。他に慈円の『慈鎮和尚夢想記』などにも神器披見の記録がみられるが、やはり神器の実体が見られることはそう多くはない。稲田智宏「「三種の神器」を披見した記録」（『歴史読本』第131号、2008年6月）参照。
15　内田康「南北朝正統論と日本の「歴史」――「正当性」という〈物語〉――」（『日本語日本文學』第35輯、2010年7月）。
16　北村昌幸「皇位継承記事の配置」（『太平記世界の形象』塙書房、2010年←初出2002年）。氏は巻17における恒良親王への譲位にも触れながら、後醍醐が「唯一絶対の継承者」としては認められないものの、後醍醐が依然として神器を保有しているという状況を、「所詮「吉野の主上」でしかない」という言葉で説明している。
17　この逸話については、鈴木元「『吉野拾遺』第三話の構想と稲荷明神―「三つの灯」のことなど」（『中京国文学』第10号、1991年3月）にその展開についての検討がなされている。

18　前掲注 5、小秋元論文による。南北の戦端の開かれる前、正平一統の過程で実行された神器回収は、『太平記』では足利軍の都落ち以後に接収されたという虚構になっている。氏は、「神器の運命も北朝朝廷の壊滅に沿うかたちで、できるだけ劇的に描く必要があった」ことを指摘している。

19　『角川古語大辞典』による。「近江とて瀬田とて来れば在りも在らず、由もなき栗太の、淀とて来れば山崎の端へ来んけるは」〔梁塵秘抄・二句神歌〕など。

20　山折哲雄「皇位継承の意味するもの」(『天皇と日本人　「皇室の危機」の本質はどこにあるのか』大和書房、2014 年）によれば、即位式が公開の場でおこなわれる王位継承の宣言であるのに対し、大嘗祭は非公開の密室でおこなわれる天皇霊継承の秘儀であるという。『太平記』がここで大嘗祭をどのように捉えているかは定かではないが、3 度行われたとされる大嘗祭のうち、崇光天皇の大嘗祭のみ、犬が子供の頭を咥えて持ってくるという怪異ののちに、「神道は王道によつて用ゐらる所なりと云へり」との勘状に従って断行されたことが目を引く（巻 26「持明院殿御即位の事」)。この大嘗会は戦乱の最中に行われたものであり、「事騒がしの大嘗会や」という非難の世評が紹介されている。

21　恒良の即位については『梅松論』ほか多くの言及があるが、『大日本史料』は恒良即位を認めない立場をとっている。ただし、『白河証古文書』延元元年 11 月 12 日綸旨や『太平記』西源院本奥書にみられる「京方貞和元年乙酉、南方白鹿元年と号す」（この頃南朝は「正平」の元号を用いている）などをその根拠としながら、田中義成はここに恒良を天皇とする「北陸王朝」があったとする説を唱えた。これらを整理した森茂暁『太平記の群像　軍記物語の虚構と真実』（角川書店、1991 年)、留保付きながらも義貞クーデター説を示唆する海津一朗『楠木正成と悪党――南北朝時代を読みなおす』（筑摩書房、1999 年）なども参照。

22　『理尽鈔』は政道・兵法論・町講釈の種本としての利用が指摘される、『太平記』の評判書である。東洋文庫より校訂本文が刊行中であるが、肥前松平文庫蔵本を参照した（国文学研究資料館デジタルアーカイブ)。今井正之助によれば、『理尽鈔』の描く人物像は固定化しているものといい、義貞は「女色に迷い図を失する」人物であるという（「「伝」の世界」『『太平記評判秘伝理尽鈔』研究』汲古書院、2011 年←初出 1995 年)。「図をはづす」＝予定通りにいかない・機を逃すといった人物像はここでも共通しているが、当該場面では「不忠」「大罪」といった強い語気で義貞を非難している点が注目される。

国語・日本語教育史における神話教材のイデオロギー

石井正己

1 『古事記』と近代

2008年に『図説　古事記』(河出書房新社) を書いた際、いつかのコラムを設けた。そのうち、「神話読み物の流行」は、明治時代のチリメン本や博文館の「日本昔噺」のシリーズの中に、「八頭の大蛇」「因幡の白兎」(「兎と鰐」)「玉の井」が入れられたことに触れた。神話は「昔噺」に包括されるかたちで、児童文学の中に組み込まれていったのである。

その後、明治時代末から国定教科書が編纂されるようになると、その中にも様々なかたちで神話が教材として組み込まれることになる。2001年の入江曜子『日本が「神の国」だった時代―国民学校の教科書をよむ―』(岩波書店) によれば、それは国語・国史・修身・唱歌といった教科の枠を超える動きであり、巧妙に神話教材が配置されていた。

また、帝国日本は戦争の遂行に合わせて国定国語教科書を改訂し、5期に及んだ。「神話教育と教科書」では、太平洋戦争に入る時期に編纂された第5期に、それまで断片的であった神話教材が体系的に構成されていることに触れた。それは天照大御神以来の歴史を学ぶとともに、「神の国」である根拠を理解することを意味した。そこで前面に出て来たのは、『日本書紀』ではなく、『古事記』だった。

一方、コラムでは、戦後の神話研究のことにも触れた。西郷信綱に代表される国文学者が引き受けた神話研究では、天皇制の根拠を示す力学を明らかにした。「吉本隆明の『共同幻想論』」では、『古事記』以前に柳田国男の『遠野物語』を置いた方法の大胆さに言及した。柳田自身は口承文芸から「神話」を再編しようとしたが、国文学では「中世神話」や「南島神話」によって神話の拡大を図った。

また、国際的な学問の動きとして活発化する比較神話学の動きについても、「比較神話学の成果」で取り上げた。天皇制に呪縛されてきた『古事記』を国際化の動きの中で解放してゆく方法を見出だすための可能性を考えた。だが、一方では、世界史から見たときに、8世紀に『古事記』『日本書紀』のような体系化した神話叙述が残るのは稀であることの意味を考えなければならなくなった。

2 出雲神話と教科書

2011年春から、新しい「学習指導要領」にもとづく国語教科書が使用されることになった。この指導要領には、国語科に「伝統的な言語文化に関する事項」が新設され、小学校の段階から古典に親しむ教育を行うようになった。低学年では「神話」が明記され、その導入が必要になった。戦後はタブーになっていた神話教育が、一転して必須のものになったのである。

折しも翌年の2012年は、『古事記』編纂から1300年にあたり、出雲神話の故郷の島根県などでは多彩なイベントが用意された。そこで、以前から交流のあった地元紙の『山陰中央新報』で、2回にわたって「出雲神話と教育」(3月19日、20日) を掲載した。やや遅れて、鳥取県の地元紙『日本海新聞』にも、「「因幡の白兎」と教科書」(2013年2月22日) を掲載した。

まず〈上〉では、かつて国定国語教科書に多くの神話教材が掲載され、最も人気があったのが「因幡の白兎」「八岐の大蛇」であったことに触れた。特に「因幡の白兎」は、5期を通じて一貫して掲載された神話教材であった。しかし、掲載の仕方には変化があり、第1期は『古事記』に忠実にまとめて、出雲大社に結び付けたが、第2期以降は低学年向けの構成に改めて、出雲大社と切り離している。

また、〈下〉では、この年度から全国の小学校で使用されはじめた教科書に触れた。「因幡の白兎」が最も人気があり、「八岐の大蛇」も入ったが、どちらも傍系とも言える出雲神話であり、高天原系の神話は避けられた。教材の内部を分析してみると、同じ「因幡の白兎」でも構成や表現がずいぶん異なることを指摘した。その違いには、国定国語教科書の時代の「因幡の白兎」が影を落としていることに気がつく。現在の神話教材は、思わぬところで帝国日本の教科書と連続している。

この新聞記事を受けて、この年の9月8日、島根県の出雲中央図書館で「出雲神話と教科書」の講演を行った。「因幡の白兎」「八岐の大蛇」ばかりでなく、第4期の国定国語教科書 (1934年) に掲

載された「国びき」(『出雲国風土記』が原典)や、「出雲大社」などの教材について触れた。さらに、「因幡の白兎」がアジアの植民地の教科書にも載り、比較神話学の成果からの読み方についても述べた。

3 「因幡の白兎」の場合

この「因幡の白兎」について取り上げてみると、国定国語教科書で持続的に掲載されただけではなかった。実は、帝国日本が台湾・朝鮮・南洋群島(委任統治領)・満州(後に傀儡国家)に領土を拡大してゆく際に、それぞれの地域で編纂した国語・日本語教科書の中にも、しばしば掲載された。

また、近年、相継いで復刻版が刊行されたことによって、「因幡の白兎」はアジアの植民地ばかりでなく、ハワイ・カリフォルニア・シアトルといったアメリカやブラジルの移民地で編纂した日本語教科書の中にも掲載されたことがわかってきた。植民地の場合は支配した地域住民の教化であったが、移民地の場合は日系子弟の教育のためであった。

しかもそれらの「因幡の白兎」は、地域が違っても、基本的には、第2期以降、国定国語教科書に掲載された教材のコピーと言っていいものだった。本文の表記や仮名遣い・段落に若干の違いはあっても、その内容は挿絵に至るまで一致している。ハワイの『日本語学校読本』(1923年)の「白うさぎ(一)」で、「昔日本のある島の上に一ぴきの白うさぎがいました」(傍点は引用者)というように、僅かな差違が見られる程度である。

やや注意されるのは、カリフォルニアの『日本語読本』(1924年)の「白うさぎ(一)」で、「「この島に来てからもう三年、早くいなばにかへりたい。」/かう言ひながら、白うさぎは毎日のやうに、はまべに来て、海の向ふの大きなをかをながめてゐました」と始まる。こうした言葉には、移民にやって来た日本人の望郷の思いと帰郷の願いが投影されているにちがいない。

これらの教科書には、教授書が見つかっている場合がある。ハワイの『日本語読本教授参考書』(1931年)には、「古事記や日本書紀から出てゐる日本の神話で、大国主命の御仁慈を知らせ、白兎のやうな狡智に長けた者は終にひどい目にあふことを自ら悟らせたい」とある。だが、南洋群島の『公学校国語読本教授書』(1937年)は、「話の中には、島があり、海があり、わにざめが出て来るので、南洋の子供にも親しみ易い話である」とある。採択の意図は微妙に異なっている。

4 帝国日本と神話教材

帝国日本が編纂した国語・日本語教科書については、国定国語教科書のみならず、アジアの植民地やアメリカの移民地を視野に入れなければならない。戦後は「日本」でなくなったからと言って、植民地の歴史がなかったことにしてしまうことは許されないし、日系子弟の日本語学習が希薄になったからと言って、その経緯を忘れていいはずはない。そうした問題については、今年発行した『植民地統治下における昔話の採集と資料に関する基礎的研究』(東京学芸大学)でも述べておいた。その上で「神話教材一覧」の作成に取りかかってみると、いくつか気がつくことがある。

まず第1節で触れた第5期の神話教材の体系化であるが、これは第4期の段階で確立していると見なければならない。神話によって天皇制の根拠を歴史的に位置づけることは、満州事変を受けた第4期の改訂ですでに行われていたのである。それは、満州国建国を見据えて、日本国の来歴を国民に徹底しようとしたことを意味するにちがいない。こうした現象が植民地に浸透したことは、台湾の第4期から第5期、朝鮮の第4期から第5期にも観察することができる。

このような問題はずいぶん早くから自覚されていたらしい。例えば、南洋群島の『国語読本教授書』(1926年)の「鏡ト玉ト剣」には、「南洋群島の児童には、日本の歴史の大要をいかにして教へようかとは、編者がこの読本を編纂するにあたつて、まづ考へた大問題でした。我々日本民族にとつてこそ、三種の神器といつても、歴代の天皇といつても、深い深い親しみを持つことが出来ますが、以前はスペインに、次にはドイツに、今また日本の統治下にある南洋児童は、万世一系の日本歴史を解するとしては、あまりに素養が足らないと思ひます。そこで伝説様の歴史から説かうと考へて、まづ三種の神器から初めました。まづ鏡と玉と剣が神代から伝はつてゐること。三種の神器といつて、万民の尊崇してゐること。即ち鏡は皇太神宮の御神体として伊勢にあること。剣は熱田神宮の御神体として尾張にあること。玉は宮中にをさめてあること。この神器の現存することは、上には万世一系の皇室をいたゞき、下には異動なき日本民族があつたからで、このことによつても、日本の国柄が大凡察せられることを取扱ひたいと思ひます」とある。

ここに示されたような論理は、神話教材がそれだけで独立するものではなく、他の教材と有機的な関連で配置されていることを考えさせる。例えば、第4期と第5期で「天(あめ)の岩屋」の次に「参宮だより」が並び、神話は現実に結び付くことになる。こうした関連は国定国語教科書の中だけでな

く、植民地や移民地の教科書でも強く意識されている。神話教材を有機的に機能させる構造を読み取ることが必要になる。そうした構造によって、教科書は「天皇神話」の創造と普及に絶大な力を持つことになった。そして、それは植民地や移民地にまで深く広く浸透していったと見なければならない。

参考文献

・石井正己『図説　古事記』河出書房新社、2008 年
・石井正己『柳田国男を語る』岩田書院、2012 年
・石井正己『植民地統治下における昔話の採集と資料に関する基礎的研究』東京学芸大学、2016 年
・入江曜子『日本が「神の国」だった時代―国民学校の教科書をよむ―』岩波書店、2001 年

（2016 年 9 月 11 日、早稲田大学で開催された日本宗教学会第 75 回学術大会のパネル「伝統的言語文化としての神話・昔話教育」のための資料）

帝国日本が編纂した内国植民地の教科書
―『北海道用尋常小学読本』『沖縄県用尋常小学読本』―

石井正己

1 「内国植民地」としての北海道と沖縄県の国語教科書

帝国日本では、国定国語教科書を編纂して、国民国家の精神形成を図った。それと並行して、台湾・朝鮮・南洋群島・満洲といったアジアの植民地（委任統治領・占領地を含む）では、土地の児童に向けた国語（日本語）教科書を編纂した。また、ハワイ・シアトル・カリフォルニア・ブラジルといったアメリカ大陸の移民地では、日系の児童に向けた日本語教科書を編纂した。それらの教科書は散佚が激しく、見ることが難しかったが、20 世紀末から 21 世紀にかけて復刻版が刊行され、次第に実態が明らかになってきた。帝国日本はアジアとアメリカ大陸に向けてそれぞれに教科書を編纂したが、現地の児童と日系の児童という違いはあっても、微妙に連動している様子が見えるようになってきた〔石井〕。

そうした状況を顧みるとき、今、改めて考えてみなければならないのは、1903 年に刊行が始まる第 1 期国定国語教科書（いわゆるイエスシ読本。使用は 1904 年度）に先立って、検定教科書制度の時代に編纂された国語教科書ではないか。なかでも、文部省が編纂した『北海道用尋常小学読本』全 8 巻（1897 ～ 8 年）と『沖縄県用尋常小学読本』全 8 巻（1897 ～ 9 年）は、同時期に揃って編纂された「一対の教科書」であった。帝国日本の北域の北海道と南域の沖縄県だけを取り上げて編纂した教科書は、国内向けのものであるが、それは両地域を「内国植民地」と見なしていたことに拠っていると考えられる〔竹ヶ原〕。

ちょうどその時期にかけて、教育制度も整備されつつあった。1870 年に文部省を設置し、1880 年の「教育令」で教育の中央集権化を進め、1896 年の「学校令」で尋常小学校 3 ～ 4 年間の義務教育を明確化した。一方、1889 年には「大日本帝国憲法」を発布して、天皇主権の国家体制を確立し、1890 年には「教育勅語」を発布して、忠君愛国の精神を涵養する教育を強化していた。そのような流れを受け、1903 年発行の国定国語教科書制度から国家で均一の教科書を編纂するようになるが、その前段階として『北海道用尋常小学読本』と『沖縄県用尋常小学読本』は編纂されたことになる。

しかし、日本列島の北域と南域という辺境の地域で、1987 年から限られた期間しか使用されなかったために、二つの教科書は教科書の歴史でも長く顧みられることはなく、本格的な議論が始まったのは 1975 年のことであった〔桑原〕。植民地や移民地の教科書と同じように、これらの教科書も散佚が激しく、復刻版が刊行されて誰でもが読める環境が整備されるには 1982 年を待たねばならなかった。これらの復刻版にはそれぞれに充実した「解題」が付けられた〔竹ヶ原、浅野〕が、その後、さらに研究が進んだかと言えば、必ずしもそうではなかった。むしろ、植民地や移民地の研究が充実してくるのに伴って、今、再び考察の対象にしなければならない時代を迎えていると言っていい。

2 文部省の『尋常小学読本』をもとにした教科書編纂

この『北海道用尋常小学読本』と『沖縄県用尋常小学読本』には先行する教科書があった。文部省が検定教科書制度を実施するにあたって編纂した『読書（よみかき）入門』全 1 巻（1886 年）と『尋常小学読本』全 7 巻（1887 年）である。この 8 巻は尋常小学校 4 学年の各学年に 2 巻ずつあてて編纂したものである。この『尋常小学読本』に関しては、「教材はなるべく多くの分野にわたるように考え、それを生徒の発達段階に合せて学年に配置している。巻一は児童の遊びや昔話をとり、巻二、三は遊戯の話と諺、考え物、庶物の話や友人の行実などを入れ、第四、五には地理や歴史の事実を加え、巻六、七には学術上の内容から農工商の職業に関する教材も入れるように編集してある。従来の教科書にもこのような教材があったが、それを綜合して計画ある配置としたことにおいて本書の性格を示している。またこれらの各課に盛られた教材には国家思想を振起する目的で書かれたものが少くない。また軍隊についての教材も入っていて、当時の教育界の思想の動きを示している」とされている〔海後〕。この教科書は、その後の国語教科書の原型になったと見ていい。

『北海道用尋常小学読本』の起草にあたっては、「先づ北海道は衣食住が他府県と違ひ、又異にすべ

き点がある、将来之が誘導助長を為すべき点も多い、此等に対し児童の観念を確実になし置く必要がある。山川草木花鳥なども主として北海道の実況を写すがよからう。遊戯にしても雪戦・氷すべり・雪達磨などを写し、一二学年用の処に村落の景・通学の有様・遊戯・漁業・穀物・蔬菜などを写すにしても北海道に於ける実況を写すがよからう。明治二十年頃に文部省に於いて編纂した尋常小学校読本を基として取捨すること、此の尋常小学読本は稍文学的に傾いて居るやうであるから、之を実用的に改むるがよからう。明治二十四年に発布になつた小学校教則大綱に準ずること、既に教育に関する勅語も出て居るから之に留意すること、当時は日清戦争が済んだ時であるから此の戦争のことを加へたがよからう」といった注意事項を斟酌したという。また、『沖縄県用尋常小学読本』については、「編纂上の注意も亦北海道用と同様で、沖縄県は内地と違ひ、色々の事物が大に異なつて、北海道より其の差が甚だしいものがあるから、特に沖縄県の言語・風土・気候・農業・漁業其他の事情に留意することにした」とされる〔渡部〕。先の『尋常小学読本』をもとに編纂したことは、この時すでに明言されていたのである。

従って、『北海道用尋常小学読本』と『沖縄県用尋常小学読本』は、(1)『尋常小学読本』から取り入れた教材と (2) 新たに入れた教材から構成されたことになる。(2) のうちには、(A) 北海道と実況を写す教材と沖縄県の実況を写す教材、そして、(B)「教育に関する勅語」(「教育勅語」) に留意した教材や「日清戦争」の教材が加えられたことになる。(1) については、『尋常小学読本』『北海道用尋常小学読本』『沖縄県用尋常小学読本』の比較があり、それぞれ2年の上半期に使う教科書では、巻2は26.7%、巻3は29.2%、巻3は31.8%が共通教材であり、他の巻も概ね20%代になるとする分析がある〔桑原〕。こうした分析よって、同じ文部省が編纂した『尋常小学読本』をもとにして、短時日で『北海道用尋常小学読本』と『沖縄県用尋常小学読本』が編纂できた理由とその実態が明らかにされた。

3　北海道教材と沖縄県教材の関係性

だが、それでも残された70～80%程度の教材は、(2) の新たに取り入れた教材ということになるので、その比率は決して低くない。ここでは (2) にあたる教材を問題にするが、特に (A) (B) について考えてみることにしたい。(A) のそれぞれの地域の実況を写したと考えられる教材についてもすでに指摘がある〔桑原〕。また、その内実としては、『沖縄県用尋常小学読本』の教材には「沖縄固有のテーマを素材にしたもの」と「全国共通の教材に、沖縄の事象を若干加味したもの」とがあるとするが、それは『北海道用尋常小学読本』でも言えることである。「全国共通の教材」としては (1) の『尋常小学読本』から取り入れた教材が含まれることになるが、そうしたことを考慮しつつ、やや広くそれぞれの地域に即した教材を対照すると、次のようになる【下の表参照】。

『北海道用尋常小学読本』の北海道教材	『沖縄県用尋常小学読本』の沖縄教材
シカ、クマ（巻1第5課）	ニラ、ヘチマ、レイシ（巻1第17課）
タラ、サケ、マス（巻1第8課）	わうこてふ（巻3第6課）
カモメ、アミ、ナヤ（巻1第13課）	砂たう（巻4第14課）
ソリ、イヌ、フネ、ヨシ（巻1第16課）	蕃薯大主（巻5第7課）
くま、さけ（巻2第28課）	四季（巻5第13課）
鰊（巻3第7課）	航海（巻5第17課）
麦（巻3第17課）	波之上宮（巻5第22課）
米（巻4第1課）	名ご順則が鶏を助けた話（巻6第6課）
四季（巻4第3課）	陶器と漆器（巻6第12課）
石狩川（巻4第4課）	源為朝　一・二（巻6第16・17課）
冬の日　一・二（巻4第8・9課）	沖縄県（巻6第22課）
鮭（巻4第5課）	儀間真常（巻6第23課）
熊トラッコ（巻4第16課）	那覇（巻7第3課）
馬（巻4第17課）	舜天（巻7第4課）
石炭（巻4第19課）	東京（巻7第9課）
重ナル樹木（巻4第20課）	楠正成　一・二（巻7第12・13課）
鯨（巻4第23課）	雨及雪（巻8第5課）
水産会（巻5第4課）	九州（巻8第13課）
麻ト亜麻（巻5第5課）	台湾（巻8第16課）
夏の夕べ（巻5第10課）	
札幌神社（巻5第11課）	
武田信広　一・二（巻5第12・13課）	

砂糖（巻5第14課） 高田屋嘉兵衛　一・二（巻5第19・20課） 航海　一・二（巻5第21・22課） 北海道（巻6第2課） 移住者ノ話（巻6第3課） もんべつ村（巻6第4課） 間宮林蔵（巻6第15課） 産物の販路（巻7第4課） 手紙（巻7第8課） 五港（巻7第20課） カバフト（巻7第22課） 地球（巻8第1課） ウラジヲストック（巻8第6課） 会社（巻8第7課）	

『北海道用尋常小学読本』には地域に即した教材の採択が多いことが目立つが、それぞれの採択が独自に行われたのでないことはすぐにも気がつく。「北海道」と「沖縄県」、「札幌神社」と「波之上宮」、「カバフト」と「台湾」は対照的に入れられたと見ていい。「カバフト」ではカバフトは千島と交換して露国領になったが、「台湾」では台湾は支那から日本領になったとする。それに呼応するように、「沖縄県」は「沖縄県は我国最南の地なりしが、今は、其の南なるたいわんも、我領地となりたれば、沖縄は、九州とたいわんとの間にありて、甚だ要用なる地となりたり」とある。

北海道では、「武田信広」でアイヌをうち従えた武田信広、「高田屋嘉兵衛」で北海道に海運業を興した高田屋嘉兵衛、「もんべつ村」でもんべつ（紋別）村を開拓した伊達邦成（だてくにしげ）、「間宮林蔵」でかばふと（樺太）を巡検して間宮海峡を発見した間宮林蔵が取り上げられる。一方、沖縄県では、「蕃藷大主（いもおしゆまえ）」で支那から蕃藷を持ち帰った野国総官（ぬぐんそうくわん）、「名ご順則が鶏を助けた話」ではが自分の鶏を料理して食べさせて他人の鶏を助けた名ご順則（程順則）、「源為朝」で沖縄へ渡って舜天をもうけた源為朝、「儀間真常（ぎままさつね）」で沖縄に製糖と木綿織を興した儀間真常、「舜天」で沖縄の島主となった舜天が取り上げられる。北海道と沖縄県とたどった歴史は異なるが、地域の産業や政治に貢献した人物を積極的に入れていることが知られる。

『沖縄県用尋常小学読本』から1903年発行の第1期国定国語教科書に変わったとき、宮古島の教員が寄せた文章に、「沖縄県用の尋常小学校読本は国定の読本にかはつたにせよ全然葬つてはいけないと思ふ元の読本はとくに本県用としてへんさんしたのであるから本県民の是非知らねばならんことや手本となるべき人物などが少なからんのである」と述べた。その際に挙げられた教材は、ここに引いた「わうこてふ」「蕃藷大主」「波之上宮」「名ご順則が鶏を助けた話」「沖縄県」「儀間真常」「那覇」「舜天」の8課であった。おそらく本土から来て7年を過ごしたと思われるこの先生は、「雨天のときの体操時間や課外教授には是非本県の児童にはをしへこんでおきたい思ふ」とも述べている〔藤蔭生〕。こうした思いは、時を経て1930年代に勃興する郷土教育に受け継がれてゆくものと考えられる。

4　『尋常小学読本』との比較から見える地域性と簡易教育

一方、上の表に挙げた教材の中には、全国共通の教材に、北海道あるいは沖縄県の事象を加味した教材が含まれる。『北海道用尋常小学読本』では、さまざまな事象を北海道に結び付けて説く傾向が著しいことはすでに見た。それはそれとして、ここで言う「全国共通の教材」の中で、それ以前に教材になったものとして、先の『尋常小学読本』に含まれている教材がある。そこで、『尋常小学読本』の教材が『北海道用尋常小学読本』と『沖縄県用尋常小学読本』のそれぞれにどのように採択されたのかを見ておきたい。

例えば、「四季」は、『尋常小学読本』の「四季」（巻3第20課）に入っているが、例えば、「春」は「わがひのもとの　あさぼらけ、／かすめるひかげ　あふぎみて、／もろこし人も、こまびとも、／春たつけふをば　しりぬべし。」とあり、四季のそれぞれをこうした七五調の歌で説明する。しかし、『北海道用尋常小学読本』では、「北海道のきこうは、他の地とことなりて、十一月より、雪ふりつもり、山も木も白くなるなり。かくてよく年五月にいたれば、一時に花ひらき、鳥うたふなり」となり、『沖縄県用尋常小学読本』では、「沖縄ノ気候ハ、他国トチガヒ、冬モ、サホド寒クナク、雪ナドノ降ルコトハアリマセヌ。果物ヤ野菜ハ、大テイ、四季トモニアリマシテ、草木モ年中、オヒシゲッテ居リマス」となる。四季の歌がなくなり、それぞれの地域の気候に関する記述に差し替えられている。これなどは三者の違いをよく示していると言えよう。

また、「雨及雪」は、『尋常小学読本』の「雨及び雪」（巻7第21課）に入っていて、水蒸気の仕組みや鉄瓶を使った湯気と水滴の実験、顕微鏡による雪の結晶の観察について説明した理科的な教材になっている。『北海道用尋常小学読本』にも「雨と雪」（巻7第5課）として入るが、鉄瓶の実験は省略されている。それに対して、『沖縄県用尋常小学読本』の「雨及雪」では「沖縄ニハ、雪ノ降ルコトナケレドモ、九州ニテハ之ヲ見ルコトヲ得ベシ。更ニ東北ノ諸国ニ至レバ、毎年冬時、地上ニ五六尺余モ降リツモリテ、野モ山モ、白布ヲ以テオホヒタルガ如キ、有様トナルナリ」となる。雪の降らない沖縄県に配慮したことがうかがえるが、鉄瓶の実験や顕微鏡の観察はなくなり、地理的な教材に変えられている。

こうした採択から見えてくることは、『尋常小学読本』にあった教材の単なる流用ではなく、『北海道用尋常小学読本』と『沖縄県用尋常小学読本』は北海道と沖縄県の風土に即して微妙な改変が行われていることが注意される。「四季」では、『北海道用尋常小学読本』『沖縄県用尋常小学読本』ともに季節が実感しにくいと考えられたのか、四季の歌がなくなった。さらに、「雨及雪」では、『北海道用尋常小学読本』で鉄瓶の実験がなくなり、『沖縄県用尋常小学読本』では顕微鏡の観察までもがなくなっている。それは挿絵が象徴的に示していて、『尋常小学読本』には鉄瓶の実験と雪の結晶（12種）の2点が入るが、『北海道用尋常小学読本』では雪の結晶（6種）の1点になり、『沖縄県用尋常小学読本』には挿絵がない。沖縄県では雪の結晶の観察はできないと考えられたことによるらしい。

だが、それ以上に重要なのは、『北海道用尋常小学読本』『沖縄県用尋常小学読本』がともに鉄瓶の実験をなくしてしまったことではないか。『尋常小学読本』には、「水の、熱によりて、水蒸気となり、又水蒸気の、冷気に逢ひて、再びもとの水となることは、容易に之を試験することを得べし。今、鉄瓶に水を入れ、之を火鉢にかけて沸かす時は、水蒸気は、其口より少し離れたる所にて、湯気となり、煙の如く立つを見るべし。其時、若し湯気の立つ処に、冷かなるものを置く時は、湯気は、之に触れて凝縮し、遂に水滴となりて、したゝるべし。雨の降るは、恰も此れと同じわけなり」とある。科学的な原理を理解するための実験であり、その装置は単純であって、北海道でも沖縄県でも困難なことではないのに、どちらもこれを削除してしまった。

実は、北海道では、モデルとなった文部省の『尋常小学読本』は採択されず、簡易科・尋常科ともに読書科教科用図書として高橋熊太郎編の『普通読本』4編8冊（1887年）が採択されていた。これは簡易読本の系譜に属する教科書であり、『北海道用尋常小学読本』が採択されるまで10年間にわたって使用されていたのである〔竹ヶ原〕。簡易読本とは教育内容の簡易化を行った教科書を意味する。開拓者が入植して新たな歴史が創られはじめた北海道の実情は、琉球王国以来の歴史を持つ沖縄県とはずいぶん違っていたのである。それでも、ここに見たような『北海道用尋常小学読本』と『沖縄県用尋常小学読本』の改変は、まさに教育内容の簡略化を意味するのではないか。これまで沖縄県の教育研究では意識されてこなかったが、地域に即した教科書という名目のもとで簡易教育に組み込まれたことを認識しなければならないと思われる。沖縄県には新たな移住者がいなかった点で、北海道とは大きくことなるが、やはり「内国植民地」としての位置を占めていたと見るべきだろう。

5　帝国日本の北門と南門の教科書

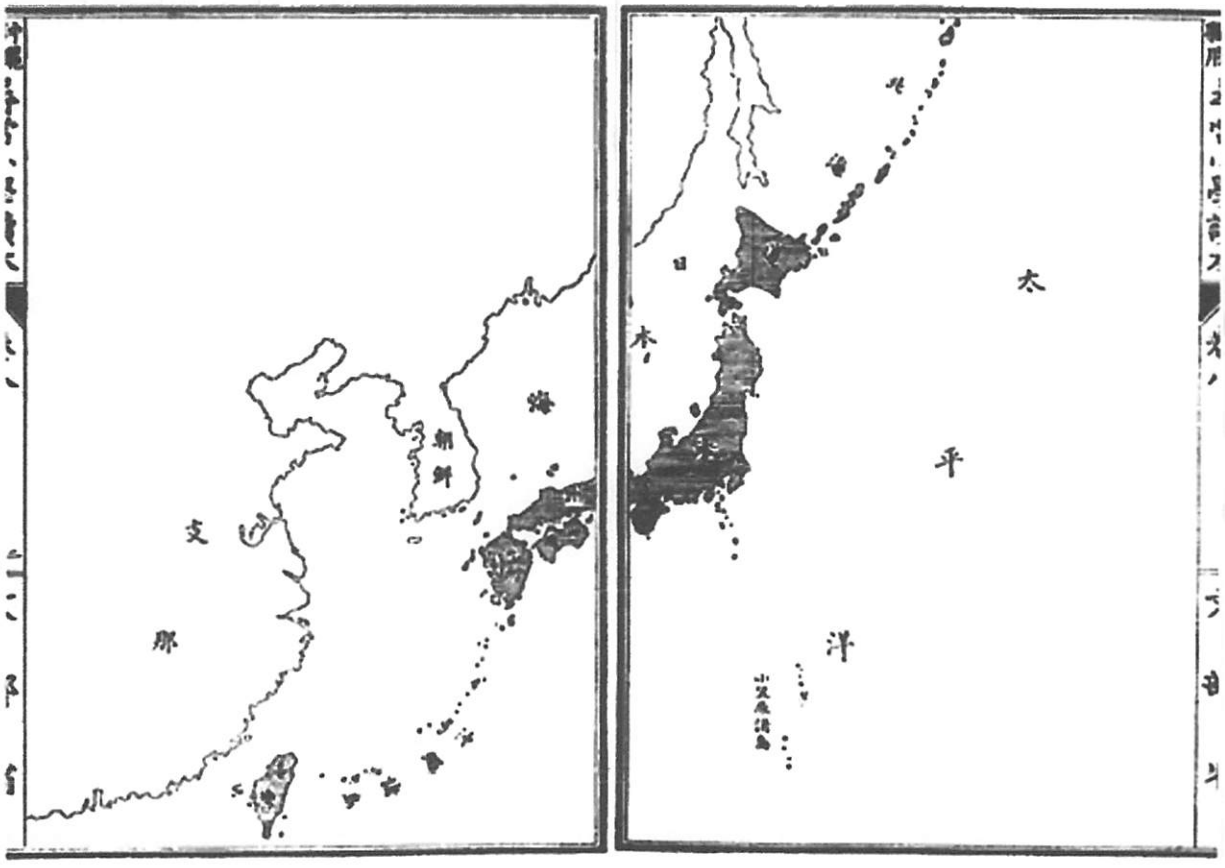
文部省の『尋常小学読本』には、「神武天皇」（巻4第29課）「紀元節の歌」（巻4第30・31課）「日本武尊」（巻5第9課）「仁徳天皇」（巻5第15課）「醍醐天皇」（巻5第25課）「後醍醐天皇」（巻6第25課）「明治維新」（巻7第28課）のように、神武天皇から今上（明治）天皇に至る教材が整然と配列されている(1)。だが、『北海道用尋常小学読本』と『沖縄県用尋常小学読本』が刊行されるまでの10年間には、すでに述べたように、1889年の「大日本帝国憲法」の発布、1890年の「教育勅語」の発布があり、一方、1889年には「徴兵令」の大改正も行われ、国民皆兵制となってゆく。こうした帝国主義の動きをそれぞれの教科書から見ておく必要がある。関連する教材を対照すると、次のようになる【下の表参照】。

『北海道用尋常小学読本』の教材	『沖縄県用尋常小学読本』の教材
ハタ、タマ（巻1第2課）	ヘイタイ、ラッパ（巻2第2課）
ひのまるのはた（巻2第1課）	クワンペイシキ（巻2第14課）
くわんぺいしき（巻2第16課）	きみがよ（巻2第15課）
きみがよ（巻2第17課）	一月一日（巻2第22課）
一月一日（巻2第24課）	日本としなのふないくさ（巻2第32課）
日本トシナノフナイクサ（巻2第34課）	日本（巻3第22課）
天長節（巻4第7課）	天長節（巻4第3課）
勅語奉答（巻4第24課）	従軍キシヤウ（巻5第14課）

神武天皇（巻 5 第 1 課）	勅語（巻 5 第 23 課）
国旗（巻 5 第 23 課）	勅語奉答（巻 5 第 24 課）
我国（巻 5 第 24 課）	神武天皇（巻 5 第 25 課）
かむなめ祭（巻 6 第 1 課）	日本武尊（巻 6 第 1 課）
日本武尊（巻 6 第 8 課）	紀元節の歌（巻 6 第 9 課）
仁徳天皇（巻 6 第 23 課）	新高山（巻 6 第 24 課）
伊勢神宮（巻 7 第 1 課）	楠正成　一・二（巻 7 第 1・2 課）
楠正成　一・二（巻 7 第 18・19 課）	国旗（巻 7 第 20 課）
軍艦（巻 7 第 24 課）	天照大神（巻 7 第 11 課）
大日本帝国（巻 8 第 2 課）	大日本帝国（巻 8 第 1 課）
日清戦争（巻 8 第 13 課）	祝へ我国を（巻 8 第 2 課）
台湾（巻 8 第 15 課）	日清戦争　一・二（巻 8 第 3・4 課）
宮城（巻 8 第 21 課）	台湾（巻 8 第 16 課）
明治維新（巻 8 第 24 課）	今上天皇　一・二（巻 8 第 20・21 課）
君が御代（巻 8 第 25 課）	

『尋常小学読本』の「神武天皇」「日本武尊」は『北海道用尋常小学読本』『沖縄県用尋常小学読本』がともに採択しているが、「紀元節の歌」は『沖縄県用尋常小学読本』で採択し、「仁徳天皇」「明治維新」は『北海道用尋常小学読本』で採択している。しかし、それにとどまらず、新たな教材として、「クワンペイシキ（観兵式）」「きみがよ（君が代）」「一月一日」「日本としなのふないくさ（日本と支那の船戦）」「天長節」「勅語奉答」「国旗」「大日本帝国」「日清戦争」「台湾」をともに採択している。これらは『尋常小学読本』には見られない教材なので、共通に採択したのは偶然ではなく、この二つの教科書の編纂には緊密な連携があったと見なければならない。しかも、よく見ると微妙な異同も見られる。『沖縄県用尋常小学読本』の「大日本帝国」は、『北海道用尋常小学読本』の「我国」と「大日本帝国」を合わせたような教材だが、北海道から台湾まで広がる領土は万世一系の天子が治める国であるとする。その意図は、「我国」に載せた地図と違って、『沖縄県用尋常小学読本』の「大日本帝国」の地図【下図参照】では、領土を斜線で示し、「朝鮮」「支那」まで入れて、大日本帝国を可視化したところに象徴されているように思われる。

「日本としなのふないくさ」は、明治 27 年（1894）9 月 17 日の日本と支那の船戦に勝利したこと



を述べるだけだったが、「日清戦争　一・二」では、海軍が行った豊島沖と黄海の船戦、陸軍が行った仁川・平壌・遼東の進軍（以上、一）、さらに旅順口の奮戦、威海衛の戦いを経て、明治28年（1895）3月に日清講和条約（下関条約）を調印したことを記す（以上、二）。次いで「台湾」では、明治28年に台湾が支那から日本の版図に入り、政府が力を尽くして開進を図っているとする。「従軍キシヤウ（従軍記章）」は、日清戦争の功労者に贈った記章は清国から分捕った大砲を地金にして作ったという。こうした最新の出来事をいち早く教科書に取り込み、国民精神の涵養を図ったのである。

こうした様子は『北海道用尋常小学読本』でもほぼ同様であったが、『沖縄県用尋常小学読本』が末尾に置いた「今上天皇　一・二」は、『北海道用尋常小学読本』の「明治維新」を詳しくしたものである。15代将軍徳川慶喜が朝廷に政権を返上した大政奉還（1876年）に始まり、文明開化を経て（以上、一）、明治22年の（1889）憲法の発布、明治23年（1890）の教育勅語の発布と帝国議会の発足を述べる（以上、二）。そして、「其後我国は、益開け、兵備整ひ、学芸進み、東洋第一の強国となり、各国も皆、其進歩の速かなるに驚くに至れり」とし、「吾等はかゝるめでたき御世に生まれあひて、かゝるありがたき御恵をうけつゝあれば、心を尽してはげまずばあるべからず」と結ぶ。『沖縄県用尋常小学読本』では、清国を破って「東洋第一の強国」になったとするなど、教材を通した国威発揚がいっそう進んでいるように見える。

改めて考えてみるに、北海道では「日本の近代公教育における差別教育制度として位置づけられる簡易教育」が行われ〔竹ヶ原〕、沖縄県では「普通語教育の強調は、沖縄県教育界の第一強調点であり」という状況であって〔浅野〕、両者の置かれた認識は必ずしも一致するわけではない。だが、『北海道用尋常小学読本』『沖縄県用尋常小学読本』は、「日清戦争から日露戦争に至る一時期に限定され、しかも「大日本帝国」の国境線の「北門」と「南門」に位置する北海道と沖縄県のみで使用された事実を考慮するならば、単なる教育史の問題としてだけではなく、政治史的、思想史的意義の追求も必要であろう」と述べるとおりである〔桑原〕。これらの教科書は、日清戦争で勝利した「大日本帝国」がその版図の中に北海道と沖縄県を戦略的に位置づけたことを示している(2)。

6　植民地教科書と国定国語教科書への接続

ここに見てきた北海道と沖縄県は、帝都の東京から見れば辺境の地にあたるが、植民地政策から見ればその最前線に位置している。先の「大日本帝国」の地図はそのことを明確に意識させるものであった。おそらく帝国日本がそうした自覚を抱くようになったのは、他ならぬ台湾を領土に組み込んだことが大きいにちがいない。実は、1903年発行の国定国語教科書に先立って教科書が編纂されたのは、植民地に組み込まれた台湾であり、台湾総督府の『台湾教科用書国民読本』全12巻（1901～03年）が発行されている。北海道・沖縄県の延長上に台湾があったことは、これまでの動向から見れば十分に納得されることではないか。

しかも、『台湾教科用書国民読本』と『北海道用尋常小学読本』『沖縄県用尋常小学読本』の間には、緩やかなつながりが見つかる。「はるのけしき」（巻5第1課）「一月一日」（巻6第15課）「台湾」（巻9第8課）は、それぞれどちらにも見えた「四季」「一月一日」「台湾」から来ていよう。「たこ」（巻2第12課）「キレイニナサイ」（巻3第5課）「メカクシ」（巻3第13課）「ザボントバショオノミ」（巻4第14課）「めんどりとひよこ」（巻5第13課）「砂糖」（巻6第12課）は、それぞれ『沖縄県用尋常小学読本』の「たこ」（巻2第18課）「カラダヲキレイニ」（巻2第27課）「メクラオニ」（巻2第24課）「かご、みかん」（巻1第49課）「ひよこ」（巻2第5課）「砂たう」（巻4第14課）を参考にしているのだろう。「ウオツリ」（巻3第15課）は『北海道用尋常小学読本』の「魚釣」（巻5第8課）を意識しているようだ。

また、『台湾教科用書国民読本』の場合も、帝国主義に関わる教材を熱心に採用していて、「天長節」（巻6第8課）「紀元節」（巻7第1課）「宮城」（巻7第2課。『北海道用尋常小学読本』の「宮城」とはやや異なる）「日本ノ地図」（巻8第1課。『北海道用尋常小学読本』の「我国」に近い）「仁徳天皇」（巻9第1課）「我国」（巻10第1課。『北海道用尋常小学読本』の「大日本帝国」に相当するが、やや異なる）「ダイゴ天皇」（巻10第18課。これは『尋常小学読本』の「醍醐天皇」から来るが、ずっと詳しい）「国旗」（巻11第1課。「国旗」と関わるが、ずっと詳しい）「黄海の戦」（巻12第8課。これは「日清戦争　一」の一部分にあたるが、ずっと詳しい）が見つかる。

さらに、第1期国定国語教科書の『尋常小学読本』（1903～04年）になると、「天長節」（4第4。これは「クワンペイシキ」を取り込む）「紀元節」（4第15）「黄海ノ戦」（5第18。これは「日清戦争　一」より『台湾教科用書国民読本』の「黄海の戦」と似ている。同じ1903年の発行）「明治二十七八年戦役　（一）（二）」（6第18・19。これは「日清戦争　一・二」にあたる）「台湾」（6第20）「わが帝国」（8第14。これは「大日本帝国」にあたる）のように、『北海道用尋常小学読本』『沖縄県用

尋常小学読本』を吸収しているところが見られる。

しかし、地域に即した教材としては、「北海道移住者の話」（8 第 15。これは『北海道用尋常小学読本』の「移住者ノ話」（巻 6 第 3 課）を詳しくする）くらいであろうか。挿絵は老人が野原で子供たちに語る場面から、老人が囲炉裏に向かって屏風を背にして子供たちに語る場面に変わっていて、移住者の生活に対する認識が大きく変化している。ただし、こうした地域に即した教材が入ることは例外的であり、北海道や沖縄県の地域性は帝国日本の中に埋没してしまうことになる。そして、一方では、国内を均一化する国定国語教科書を時代の要請に従って改訂し、植民地教科書や移民地教科書を編纂して帝国日本の国語・日本語が及ぶ版図を拡大してゆくことになるのである。

付記

『北海道用尋常小学読本』『沖縄県用尋常小学読本』の巻 1 と巻 2 には教材名がないので、仮に付けた。引用にあたって、分かち書きは採用しなかった。なお、類似が指摘できる教材は他にも見られるが、ここでは論述に関係する教材にとどめて記述した。

アイヌは文字を持たず、国家を作らなかったのに対して、琉球は漢字と仮名を持ち、王国を創った点で異なるが、これらの教科書を見ると、帝国日本はそれをひとしなみに組み込もうとしたことがうかがわれる。北海道と沖縄県はともに帝国日本では辺境に位置するが、沖縄県は東アジア、北海道は北東アジアの重要な位置を占め、地政学的な意義は大きい。それとともに、これらの教科書はマイノリティーと見なされた人々のアイデンティーの構築にも深い影響を与えたものと想像される。

注

1　この時点では、神武天皇に先立つ神話がないことが注意される。天皇家の起源に遡って、その神聖さを説くようになるのはこの後になる。

2　『北海道用尋常小学読本』におけるアイヌの記述は、「熊トラッコ」の「あいぬハコノミテ熊ヲ狩リ、之ヲ捕フルコト、キハメテタクミナリ」、「武田信広　二」の「北海道は、昔えぞが島と称へて、アイヌの住みたる土地なりしが、信広来りてより、アイヌをうち従へ、次第に山野を開き、道路を通ずるに至れる」とするだけである。この教科書の対象者としてアイヌは特に意識されていない。

引用・参考文献

・渡部董之介「北海道用及沖縄県用尋常小学読本編纂事情」『帝国教育』第 407 号、1916 年 6 月
・藤蔭生「教室のちり」『琉球教育』第 110 号、1916 年 8 月
・海後宗臣編纂『日本教科書大系　近代編　第五巻　国語（二）』講談社、1964 年
・桑原真人「『北海道用尋常小学読本』について―『沖縄県用尋常小学読本』との対比において―」『北海道開拓記念館調査報告』第 9 号、1975 年 3 月
・竹ヶ原幸朗「解題」佐藤秀夫監修・竹ヶ原幸朗解題『地域教育史資料 1　北海道用尋常小学読本』文化評論社、1982 年
・浅野誠「解題」佐藤秀夫監修・浅野誠解題『地域教育史資料 3　沖縄県用尋常小学読本』文化評論社、1982 年
・沖縄大百科事典刊行事務局編『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社、1983 年
・石井正己『平成 23 年度～平成 27 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究報告書　植民地統治下における昔話の採集と資料に関する基礎的研究』東京学芸大学、2016 年
（全南大学校日本文化研究センター編『第 11 回　国際学術ジンポジウム　沖縄文化の伝統と変容』全南大学校日本文化研究センター、2017 年。2017 年 1 月 18 日の講演をもとに修正・加筆した）

井上通泰と柳田国男～兄弟の絆～

石井正己

1 「山桃忌」にちなんだ兄弟の唱和歌

ご紹介賜りました石井でございます。町制60年の記念すべき年に、こうして第37回の山桃忌が開催できることを大変喜んでおります。橋本省三町長はじめ、町の職員の方々の大変なご尽力があったことにも、改めてお礼申しあげます。また、今日は暑い中、町の方々が大勢かけつけてくださったことも、大変ありがたく思います。

今、ご紹介がありましたように、今日の山桃忌は妖怪をテーマにしていますが、井上通泰の生誕150年ということで、私の入口のお話では、井上通泰と柳田国男の2人の兄弟の問題を改めて取り上げてみたいと思います。それはなぜかと言いますと、この山桃忌は2人が亡くなったことにちなんで設けられた行事だからです。

井上通泰は昭和16年（1941）8月15日、76歳で亡くなっています。柳田国男は長命でしたので、昭和37年（1962）8月8日、88歳で亡くなっています。この2人の命日に近い8月最初の土・日に、その偉業を偲び讃えて山桃忌を開催してきて、今年で37回の歴史を重ねてきたことになります。「山桃忌」の名称は、2人がふるさと辻川の氏神、鈴ヶ森神社の境内にあります山桃の木にちなんだ歌を詠んでいることに由来します。

実は私は、「山桃忌」というのが夏の季語になればいいなと、密かに思っているわけです。なぜかと言いますと、例えば、太宰治には『桜桃』という作品があって、「桜桃忌」という行事があり、三鷹の禅林寺で行われています。「桜桃忌」は、辞書で引きますとすでに夏の季語になっています。ですから、私の密かな望みは、「山桃忌」が日本の夏の季語になることです。こうした行事を通して、「山桃忌」を日本人が親しみを感じるような言葉にしてみたいと考えています。

兄の井上通泰の歌は、「うぶすなの杜のやまももふる里ははかなきこともこひしかりけり」です。これは大正7年（1918）、53歳の時に詠んだ歌です。弟の柳田国男の歌は、「うぶすなの森のやまももこま犬はなつかしきかなもの言はねども」です。これは、明治41年（1908）、辻川の大庄屋三木家の三木拙二にあてた書簡に出てきます。柳田国男は34歳でした。

不思議なのは、「うぶすなのもり（杜・森）のやまもも」が2人の歌の初二句に出てくることです。詠んだのは、弟の柳田国男が早く、それに遅れて、兄の井上通泰が詠んでいることになります。弟の柳田国男が詠んだ歌に「うぶすなの森のやまもも」があり、兄の井上通泰がそれに応じるかのように、「うぶすなの杜のやまもも」と詠んでいると考えられます。初二句を同じくする歌ということから考えれば、兄弟が唱和していると読むことができそうです。それは、まさに歌で結ばれた兄弟の絆ではないかと考えられます。井上通泰の歌は、井上家の菩提寺である観音寺に歌碑がありますので、地元の方々には親しみの多いものだと思います。もちろん、柳田国男も、昭和34年（1959）の『故郷七十年』で頻りにふるさとを語りますから、多くの方がご存じだろうと思います。

2 石川啄木や室生犀星のふるさと意識

「うぶすな（産土）」というのは、辞書を引きますと、「その人の生まれた土地」という意味があります。つまり、「うぶすな（産土）」というのは、実は「ふるさと（故郷）」という言葉と意味が重なってくる言葉だということになります。

民俗学者の谷川健一さんは、「うぶすな（産土）」とは何だろうと考えて、日本の各地を調べてゆくと、出産のときの小屋にある「うぶや（産屋）」に「すな（砂）」を敷くことがあり、その砂こそ「うぶすな（産土）」ではないかと言っています。ですから、「うぶすな（産砂）」というのは、誕生の原風景を表すことになります。

出産の場に敷かれた砂が「うぶすな（産砂）」であり、やがてそれが氏神の意味になり、鎮守の森の意味にもなって、日本人の原風景になってきたのだと思われます。従って、兄弟がそれぞれにこうして誕生の原風景を歌に詠むということは、単なる個人の感情を超えて、日本人の精神性に深く突き刺さるところがあるにちがいありません。

では、「ふるさと」とは何でしょうか。例えば、盛岡出身の石川啄木の、教科書にも出てくる歌に、「ふるさとの訛なつかし／停車場の人ごみの中に／そを聴きにゆく」（『一握の砂』）があります。故郷の盛岡の訛りを東北本線の始発駅である上野駅まで聞きに行くわけです。

あるいは、金沢出身の室生犀星は、「ふるさとは遠きにありて思ふもの／そして悲しくうたふもの」（『抒情小曲集』）という詩を詠んでいます。「遠きにありて思ふもの」というように、ふるさとを強く意識するのは、ふるさとを離れていった人のように思われます。

このようにして、大阪なり東京なりに出て行った者たちが、ひときわふるさと思って歌や詩を詠んできたのではないかと思われます。井上通泰や柳田国男の場合も、おそらく例外ではありません。

そういったことは、江戸時代まではたぶんありませんでした。士農工商という身分の束縛の中では、大阪へ出るとか江戸へ出るというようなことは、ほとんど想像できません。ところが、明治になって士農工商がなくなり、四民平等という形になって新しい社会ができます。男性の場合は立身出世、女性の場合は良妻賢母といった原理の中で、ふるさとを離れて学校に行ったり、仕事に就いたりすることが起こってきたはずです。ですから、啄木にしても犀星にしても、通泰にしても国男にしても、たぶんそうだったはずです。彼らはやはり、典型的な明治生まれの男性であったと考えられます。

演歌の世界でもそうですけれども、どうもふるさとをしきりに語りたがるのは、女性よりも男性ではないかと思います。女性というのは、お婿さんを迎える場合もありますが、結婚を考えると生家を離れることは、生まれたときから宿命のように考えていたのでしょう。次男や三男も最初から生家を離れることを考えていますが、長男はそうではありませんでした。しかし、戦後になると、長男までが生家を離れる時代がやって来ます。そうしたことがあったためか、ふるさと意識は男性と女性との間で少し違うのではないかと思います。ですから、演歌の世界でも、千昌夫の歌う「北国の春」のように、父親や兄弟という男同士のつながりがしきりに歌われます。

3 井上通泰と柳田国男の境遇と関係

井上通泰は 15 歳で上京、東京帝国大学医科大学を卒業して、医者になります。柳田国男は 12 歳で上京、東京帝国大学法科大学を卒業して、官僚になります。そういう意味では、2 人ともこのふるさとを離れて行きました。

もう少し気になるのは、井上通泰は 12 歳で井上家の養子になりますが、柳田国男は学業を終えて、27 歳で柳田家の養子になりますので、2 人とも松岡の姓を離れて他家に入っていることです。そういう意味で言えば、他の 3 兄弟が松岡姓でありつづけたのに対して、2 人は同じような境遇にあったと言えます。この 2 人には、生まれたふるさとを離れることと、生まれた松岡の家を離れることの 2 つがあったはずです。

その一方で、2 人は明治の社会の中でも大変なエリートコースを歩みましたけれど、医者と官僚という本業に飽きたらず、二足の草鞋を履きました。生涯にわたって学問を進めて、在野の学者として大きな功績を遺したことでも一致します。井上通泰は古典学を修め、柳田国男は民俗学を興しました。ですから、現在の評価も、医者としての評価や官僚としての評価よりも、彼らが遺した学問の方が遥かに高いと思いますし、私たちに大きな影響を与えてもいるわけです。

今年は 1866 年に生まれた井上通泰の生誕から 150 年になりますので、1 世紀半という歳月が経ったことになります。私たちはこの時間をどう考えたらいいのでしょうか。幸い記念館では、7 月 23 日から 11 月 27 日まで「井上通泰展」を開いています。「歌を詠み愛した眼科医」という副題が付いた図録も無事にできて、入口で売っていますので、ぜひお求めくださり、通泰の偉業を偲んでくだされば何よりです。

さて、柳田国男の『故郷七十年』の中に、この兄のことがしきりに出てきます。15 歳で上京した通泰は、だいたい 2 年に 1 度ふるさとへ帰ってきています。明治の文明開化によって、どんどん近代化が進んでゆきましたので、その動きをふるさとに帰って語り、両親はそれを熱心に聞いたそうです。柳田は、今思っても、両親が一番幸せな時だったのではないかと思うと述べています。井上家に出たとしても、通泰は十分な親孝行をすることができた息子だったと言っていいでしょう。

柳田自身は、通泰から、ドイツ語を通して、初めてグリム童話を知らされたということですから、これが後に昔話の研究を始める機縁になったはずです。あるいは、国粋保存主義を教えられたとも述べています。ですから、そうした動きの中で、日本というものを改めて考える契機を与えられたのだろうと思います。

柳田は少年時代、両親も弱ってきたし、兄の鼎も丈夫でないので、学費を出してもらって学問することは難しいのではないかと考えたそうです。学費がかからないとすれば、まず考えるのは師範学校に行って先生になることでしたが、どうも気が進みませんでした。次に考えたのは、商船学校に行って、船乗りになることだったそうです。船長になれば船の中で本を読めるし、外国にも行けると考えました。子供ながらに、家に負担をかけずにどうするか考えたわけです。でも、鼎と通泰の 2 人の兄が相談して、優秀だった柳田を学校に行かせようと決めたようです。

柳田は 12 歳の時に上京し、やがて第一高等中学校に進みます。学費のいる学校は諦めていたのに、兄たちのお陰で入れたのだから、その喜びも手伝って猛烈に勉強したそうです。通泰から毎月 8 円が送金され、寄宿舎のお金と食費で 3 円 30 銭、月謝が 1 円 20 銭、合計 4 円 50 銭で、あとの 3 円 50 銭を自由に使えたので、古本屋で洋書を買ったと述べています。非常に細かい会計であるのは、この家が決して豊かではなく、その中で学校に行かせて、将来を切り開こうとしたからでしょう。第一高等中学校の生徒はたいていみんな極端に質素な生活をしていたようで、柳田も最小限の額をもらって暮らしたのです。

4 経済的援助と『南天荘集』

今度の図録にもありますけれども、井上通泰にあてた明治 26 年（1893）12 月の年末の葉書があります。通泰が姫路病院の副院長をしている頃で、19 歳の柳田国男は第一高等中学校に入学したてでした。そこには、「例の如く新年休中出寮可仕に付　二十日頃迄に食料だけ三円弱御送り被下度候」と見えます。どうも年末年始はみんなふるさとに帰るのが普通で、寮を追い出されたようです。ですから、12 月 20 日ごろまでに、3 円弱でもいいので、食料費を送ってほしいと頼んでいるのです。

加えて、「洋袴大に破れ候が　新年に新調いたす事出来まじくや　今少し我慢いたすへきや　御返事被下度候」ともあります。洋袴というのはズボンのことです。ズボンが大変破れてしまったので、新年に

新調することはできないか、あるいは、もう少し破れたままのズボンを我慢してはいているべきかと尋ねています。ズボンを新しく買うことすら大変だったのです。決して豊かではない学校生活の様子が、1枚の葉書から伝わってきます。こうした生活を助けたのが兄の通泰だったわけですね。

柳田は『故郷七十年』の中で、こうも言っています。「私自身は今までかなり沢山の本を出したが、いつもそのお初穂は次兄（通泰）に贈呈して来た。長年にわたり学資を出して呉れた恩義を忘れぬため、必ず第一冊に署名をして次兄への貢物としていた。すると兄の方でもすぐ朱筆をもって読んで行き、心附いたこと、誤りと思ったことの上に朱で以て書入れをしてくれた」。

柳田は生涯80冊を超える書物を出していますけれども、通泰が元気なうちは、学費を出してくれた恩義を忘れないために、1冊目を贈ったのです。今展示されている書物の中にもそれが残っています。学問上の交流と思えるものが、実は根深いところで学費を支えてくれた経済的援助にあったということは、この2人の関係を考えるときに注意されることだと思います。

井上通泰は、昭和16年8月15日に腸チフスで亡くなります。このとき柳田国男の日記には、「井上兄絶命。哀悼限りなし」と書かれているそうです。「哀悼限りなし」という一節には、万感の思いがあったはずです。兄の死は「親の亡くなったような深い悲しみであった」とも述べています。このとき柳田国男は67歳でしたが、実の親の松岡操とたけが死んだのは明治29年(1896)、22歳の時でした。早く両親と別れた柳田にとって、兄は両親の代わりだったのだと思われます。

亡くなった2年後の昭和18年（1943）8月、柳田国男は『南天荘集』という井上通泰の歌集を出します。この本の表紙には、見にくいと思いますが、こういう絵があります【図版参照】。「南天荘」というのは、通泰が好んだ南天を植えて、自分の家をこう呼んだことによります。この追悼遺文集の表紙にあるのは赤い南天の実であり、遠景にあるのは、間違いなく、ふるさと辻川の山並みでしょう。

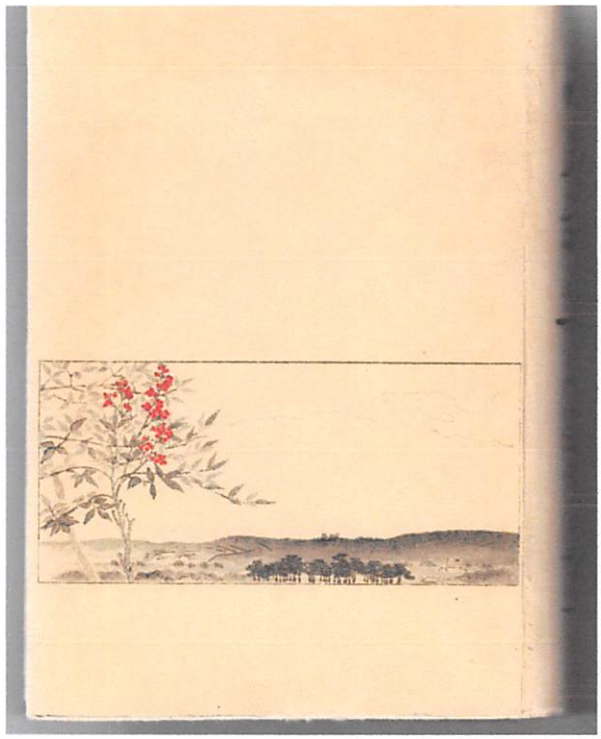
追悼遺文集としてまず歌集を出して、力があればその他の文章も遺しておきたいと、跋文に書いてあります。また、「故舊骨肉の私の情としては、是を一篇の日記に向ふが如く、撫摩し誦吟して永く巻を掩ふに忍びざるの感を抱くのみ」とも見えます。ちょっと硬い文語調で書かれていますが、幼い時から兄を知る弟の思いとしては、この1冊を1篇の日記を見るようにして撫でさすり、声に出して詠い、長くこの本を伏せることができない気持ちを持っているという意味です。

この『南天荘集』は通泰の全歌集といっていいもので、昭和16年から遡るようにして明治21年(1888)まで53年間の歌を載せています。全部で2594首ですから、そう多いわけではありませんが、これらの歌こそ兄の人生であると考えていたはずです。肉親の思いがにじみ出た1冊だと思います。

しかし、柳田は『故郷七十年』では違うことを言っています。兄の歌には題詠が多いことを指摘します。題詠ですから、桜なら桜という題があって歌を詠むので、目の前の出来事と関係がありません。そのため、「文法は正確だが気分が感心しない」と述べるように、形式は整っていても、気持ちが籠もっていてないと批判します。もとは香川景樹流の「折に触れて」と題する歌ばかり詠んでいたのに、御歌所の寄人になり、宮中や青山御所に行くようになって、だんだんそれに束縛されてゆくようになったようです。文法や歌の法則に背かないように心掛けていたので、かえっていけなかったとも述べます。どんなに同情のある人が読んでみても、この1冊から10首と良い歌を拾い出すことは難しかろうが、それにもかかわらず結局威張って暮らしたのだから、個人としてはうまいことしたわけだとまで述べています。

わざわざ歌集を編んでおきながら、良い歌は10首とないだろうと否定しているのは、実に奇妙です。文法の正確さにとらわれながら、題詠で詠むという二重の束縛からは、近代の新しい歌は生まれにくかったのです。肉親の感情と社会的な評価の間に、どうもずれがありそうです。

しかし、その中にも良い歌があるとして、例えば、「捕はれて怖づる鼠の眼を見れば憎きものとも思へざりけり」という歌を引きます。ネズミ捕りに捕えられたネズミの眼というのはかわいらしく、憎いものとも思われない、という意味です。これは明治40年（1907）の常磐会における「鼠」の題詠ですが、このような鼠を詠んだ歌というのはなかなかなく、確かに良い歌であると言っていいでしょう。



5　井上通泰の詠んだ兄弟追悼

『南天荘集』を使って、もう少し通泰の詠んだ歌の世界へ入ってみたいと思います。図録の中にも出てきますけれども、通泰は生前、3人の兄弟を失っています。

まず長兄の松岡鼎は、昭和9年（1934）1月に75歳で亡くなりました。「家人並に外山且正を伴ひて兄

の病を訪ひて帰りしに時もおかず電話にて命終りきと伝へこしかば」という詞書があります。奥さんの里うと弟子の外山且正を連れて兄の病気見舞いに行って帰って来たら、間もなく電話がかかってきて、亡くなったと知らせてきた、という意味です。その時の歌は、「伝へしはあやまりなりき生きて猶ありとつげこむ次だよりもが」です。亡くなったと伝えたのは誤りで、なお生きていると知らせてくる次の便りがあればよいのに、という意味です。大丈夫だと思って帰宅したにもかかわらず、その間に亡くなったという電話があり、自責の念にさいなまれたのでしょう。

さらに、「告別式に列りて」と題して、2 首の歌があります。1 首は、「いつつちふ数はよきかず多からずすくなからずと思ひしものを」という歌です。兄の鼎の告別式に列席して詠んだ歌です。5 つという数は良い数だというのは、松岡五兄弟を指すのでしょう。5 人兄弟というのはなかなかよい、多くもなく少なくもないと思っていたのに、1 人欠けてしまった、という意味です。もう 1 首、「父母のうせしのちには親のごとおとうとどのもつかへしものを」とあります。松岡操とたけが死んでからは、長兄の鼎を親のように思って、4 人の弟たちは慕ってきたのに、という意味です。

次に、弟が先に死にます。松岡静雄は昭和 11 年（1936）5 月に 59 歳で亡くなっています。静雄は軍人であり学者でありました。「弟松岡静雄のつひにうせけるに」という詞書があります。静雄は 47 歳の時に高血圧症で倒れ、病に伏せりながら学問を進めました。「つひに」には万感の思いがあったはずです。その時の歌は、「たぐひこし松のいつ本一もとのまづ枯れしだにさびしきものを」です。連れ立ってきた松の 5 本というのは、やはり松岡五兄弟の比喩ですね。その 1 本がまず枯れてしまったのでさえ寂しいのに、さらになんとあろうことか、弟までが亡くなってしまったことだ、という意味です。年下の弟を亡くすさびしさは一入だったことでしょう。

しかし、さらに一番下の弟の松岡輝夫（映丘）まで失くします。昭和 13 年（1938）3 月、58 歳でした。輝夫は日本画家として活躍しました。「弟松岡輝夫の失せし夜」と題して、2 首の歌を詠んでいます。「よみの路ふみやはじめし屋の上になほやたたずむこの夜この時」が最初です。弟は死んで黄泉の国へ旅立ってゆく死出の道を歩きはじめたが、その人の家の上には、それでもまだ今夜のこの時に魂が佇んでいるだろうか、という意味です。もう 1 首は、「ねぶられぬ耳にぞひびくへだたりて臥したる妻のしはぶきの声」です。弟が死んだその夜、自宅にいたのでしょう、眠れない耳に、隣りの部屋で寝ている妻の咳の声が響いてくる、という意味です。別の部屋で休む妻も緊張していて、やはり眠れずに咳をするのですが、その声がひどく耳に響いてきたのでしょう。弟を失くした特別の思いというのは、妻とはまた別であるという感触が、この歌には出ているように思います。

6　家族史を語った『故郷七十年』

柳田国男は、「月々の題詠」が並ぶと述べましたが、やはり自然を詠んだ叙景歌が多く、恋の歌はまったくありません。その中で、鼎、静雄、輝夫といった兄弟の死を詠んだ追悼歌は異彩を放ちます。松岡五兄弟の絆を伝えるストレートな歌として、私は評価しています。確かに、与謝野晶子、石川啄木、正岡子規が詠んだ明治の新しい歌とは違いますが、4 年の間に兄だけでなく、弟 2 人までも失くした深い悲しみを、こうして歌に詠んでいるのです。そうしたことはもっと評価されていいのではないかと思います。そして、その 3 年半後の昭和 16 年には、彼自身も亡くなるわけです。

長命だった柳田国男は、戦後、昭和 37 年まで生きました。ですから、柳田は最後まで生き残って、松岡五兄弟のうちの 4 人の死を見つめたことになります。『故郷七十年』という本は、明治から昭和の時代を生き抜いた播州人の貴重な証言ですが、最後まで生き残った人間の証言だったと見ることができます。しかも、証言の中核が松岡家の人々にあることは間違いありません。そうした個人的なことと社会的なことが微妙なつながりを持って語られています。家族を見つめて、最後まで生き残った柳田がぜひとも語り遺しておかなければいけなかった家族史が、『故郷七十年』の中核にあります。

何度かこの山桃忌の席でもお話ししてきたように、この『故郷七十年』を、もう一度この福崎から読み直し、そこから未来を考える足場にできないものかと考えています。その気持ちは今もなお強く、こうして 2 人の兄弟の絆や松岡五兄弟の絆を見ても、やはりそう感じます。福崎の町の方々がこの五兄弟の遺したものをもう一度汲み取りながら、時代は違っても、未来を考える指針にしてくだされば と思います。そうしたことのために、こうして大きな行事になった山桃忌は、さらに重要な役割を持つのではないかと思います。今日の入口の講演はこれで終わりに致します。どうもありがとうございました（拍手）。

（2016 年 8 月 6 日、第 37 回山桃忌・基調講演）

井上通泰の華麗な人脈

石井正己

1　細部から偉大な遺産を読み解く

高寄十郎教育長から過分なご紹介をいただき、今日に至った経緯も既にご説明いただきましたので、もうお話に入っていきたいと思います。8 月の山桃忌が井上通泰と柳田国男の事績を偲んで、その命日にちなんで行われていることは衆知のとおりで、30 回を超える歴史を重ねてまいりました。昨年は長兄の松岡鼎の展示を行い、さらに今年は井上通泰の展示を重ねて、松岡五兄弟の事績を具体的にたどることができました。福崎町の皆さまはもちろんのこと、学術研究の上でもとても大きな意味があったと思っています。

ここに持って参りましたのは、平成 4 年(1992)に姫路文学館が「松岡五兄弟」という展示をしました時の図録ですが、それから 24 年が経ったことになります。生誕の地、出身の地などについて議論があるにしても、この五兄弟が福崎町を離れて各界で活躍し、それが大きな刺激になり、貴重な遺産になっています。21 世紀の国際化と情報化の時代に、この遺産をどう生かすことができるのかが課題になります。今、オリンピックで、「レガシー」ということがしきりに言われていますけれども、まさに大きな遺産をこの町は持っているわけです。その遺産を大事に未来へ生かしてゆくことが必要なのではないかと考えます。私は研究者ですので、その面からサポートができれば、顧問をお引き受けしている意義もあろうかと思います。

井上通泰は、慶応 2 年（1867）に生まれて、昭和 16（1941）に 76 歳で亡くなっています。ですから、もう亡くなって 70 年以上が経つことになります。しかし、展示されている資料を見ると、生々しい文字が残っていて、そのときどきの思いを新たにいたします。もちろん、通泰は眼科医として活躍しただけでなく、歌人としても学者としても一流の活躍をしました。今日は、今、展示されている書簡を中心に、リアルな井上通泰とその人間関係を、皆さまと一緒にたどれれば何よりです。細かな資料ばかりですが、そこから大きな歴史の流れをつかまえてみたいと思います。

この五兄弟が偉大だと言っても、どのように偉大なのか、そのあたりをきちんと理解しなければ、偉大だという言葉だけが独り歩きするだけで、内実は空洞化してしまいます。まして、情報化や国際化が進む時代にあって、この方々の遺産がどういう意義を持つのかを検証しなければ、やがて消えてしまうと思います。

2　お政の転地療養を知らせる書簡

最初に、井上通泰の書いたものを紹介しましょう。まず、明治 25 年（1892）5 月 9 日（消印は 25 年 5 月 9 日、武蔵東京下谷と 25 年 5 月 11 日、辻川）の、養父井上碩平にあてた葉書（姫路文学館蔵、図録 7 頁）です。御徒町で眼科医院を開いた通泰が、田原村の養父にあてた書簡です。通泰は明治 10 年（1877）に井上家の養子になって、名を泰蔵から通泰に改めますが、碩平はその養父にあたります。

（葉書表）
播磨国神東郡田原村
　井上碩平様
　　東京下谷御徒町一丁目
　　井上通泰
（葉書裏）
お政帰国云々申上候処　布川の兄の申候には　一旦帰国しては上京の節遠路にて面倒につき　当分布川へ来られ度　保養には田舎でさへあればどこにても同じかるべしとの儀に付　其意にまかせ近日布川へやるつもりに御坐候　先は右申上候

前年の明治 24 年（1891）、通泰が 26 歳の時に結婚した妻お政（まさ）は碩平と小松の養女です。養女と養子が結婚して、家を継いだことになります。この時お政は懐妊中でしたので、子供を身ごもったまま帰省しますが、明治 25 年 9 月、赤痢に罹って亡くなってしまいます。これはその 4 ヶ月前の書簡ということになります。

お政を国に帰すつもりでしたが、布川の兄（松岡鼎）が、「いったん国に帰ったら、また上京する時遠いので、面倒だ。当分の間、私の住む布川へ来られたらいい。保養するには田舎でさえあればどこでも同じだ」と言ってきたので、その気持ちのまま近々布川へやるつもりなので、お父様にもご理解いただきたい、と送ったわけです。結局、帰省中に亡くなってしまうのですから、はかない人生でした。

養父碩平の系譜については、姫路文学館の図録（29 頁）の「井上氏系図より」から引いておきます。

碩平
　諱景鷗通称ハ石平後碩平ト改ム　号ハ澹水又淡水ニ作ル　天保十三年十二月二十八日播磨国神東郡西川辺村ニ生ル　医中川隆運ノ二男ナリ　年二十四ニシテ　同郡吉田村ノ医井上純輔ノ嗣子トナリ　後長女小松（通称ナミ）ニ配ス　医ヲ以テ業トナス　初先生ノ井上氏ニ養ハルヽヤ

純輔既ニ没シ　遺女ナホ幼　家道頗衰フ　先生拮据経営　遂ニ四時ノ盛ニ復ス　明治三十二年二月十三日歿ス　享年五十八　法諡ハ冬日院澹水景唯大居士　子ナシ　同郡辻川村ノ儒松岡操ノ三男通泰ヲ養ヒテ嗣トナス　墓ハ神西郡西治村南山ニアリ
通泰

お政が亡くなった後、通泰は追悼の歌を詠んでいます。「いまはのきざみにあはざりける人の一七日の墓に詣でて」という詞書は、臨終の際に会えなかった妻の初七日の墓参りに詠んだという意味です。お政は福崎に戻っていたので、東京にいた通泰は妻の最期に会えませんでした。その歌は、「折にあひてうらやましきはをみなべし枯れても残る姿なりけり」（『南天荘集』。以下同じ）です。女郎花は秋の七草の一つで、『古今和歌集』にも出てきますけれども、オミナとあるので、女性に見立てられます。枯れたままでもその姿が残っている女郎花を見るとうらやましく感じるが、私の妻はもうこの世にいない、という意味です。

翌明治 26 年（1893）には、「なき人の夢に見えければ」という詞書で、「まのあたり世になき人をみつるかな夢はよみにもゆき通ふらむ」と詠みます。まざまざと亡くなった妻を夢に見たが、夢というのは亡くなった人が行く黄泉の国にも行ったり来たりすることができるのだろう、という意味です。1 歳年上でしたけれど、はかなく亡くなったお政を偲びながら、通泰は生きてゆくことになります。

3　辞職願と、柳田国男に出されなかった葉書

通泰は姫路で勤めた後、岡山に移って、岡山医学専門学校教授になります。しかし、明治 35 年（1902）10 月 14 日に辞職願を出し、それが国立公文書館にあるということで、今度の図録（7 頁）に出ています。これもはっきりしていますから、読んでみます。

辞職願

拙者儀

今春来病気ニ相罹リ　是彼手当モ相加ヘ候ヘドモ病根難抜到底勤務相叶ヒガタク覚ヘ候ニ付　別紙診断書相添ヘ　茲ニ離職ヲ願出候　何卒御許可被成下候様奉願候

明治三十五年十月十四日

岡山医学専門学校教授　井上通泰

文部大臣理学博士男爵　菊池大麓殿

文部大臣の菊池大麓にあてた文書です。春から治療してきたが、病気が治らないので、診断書を添えて辞職を願い出たい、という内容です。「診断書」は確認でいていません。結局、翌 11 月 5 日に辞職し、3 日後の 8 日に上京して、病院を開院しています。この「病根難抜到底勤務相叶ヒガタク覚ヘ」というのは、どこまで本当だったのかわかりません。むしろ、もう岡山を退いて東京へ戻りたいというのが実情だったのでしょう。結局、姫路から岡山を経て、東京へ戻ってきて活躍の場が開けてゆくことになります。

また、井上通泰が柳田国男（1875 ～ 1962）にあてた年次不明の葉書（姫路文学館図録 32 頁）も残っています。消印がないので、おそらく出されなかったのでしょう。その結果、通泰のもとに残ったのだと思います。

（葉書表　消印なし）
牛込区加賀町二丁目
　柳田国男殿
（葉書裏）
エスペラント小冊子難有奉存候　本日静雄の園遊会にてジヤワの王族パンドウ氏夫婦に逢申候　国のプロフエツサーの紹介状を所持致居るに付　一度貴下に逢ひたしと申居候き　右ツイデニ申上候
四月廿一日
　東京麹町区内幸町一丁目
　井上通泰（住所・氏名は押印）

「エスペラント小冊子難有奉存候」とあり、国男が通泰にエスペラントの小冊子を贈り、通泰が国男に贈ろうとして書いた礼状だったと思われます。エスペラント語というのは、ザメンホフという人が作った人工的な言語です。国男は大正期に 2 回、ジュネーブの国際連盟委任統治委員としてヨーロッパに行き、言語の抵抗が非常に大きかったので、誰もが国際社会で平等に話せる言語を学んだ方がいいと考え、エスペラント語に深く傾倒してゆきます。ですから、この葉書は大正の終わりくらいのものだと思います。

「本日静雄の園遊会にてジヤワの王族パンドウ氏夫婦に逢申候」とあり、4 月 21 日、弟松岡静雄（1878 ～ 1936）の園遊会が開かれたましたが、どこで開かれたのかわかりません。静雄は南洋研究をしていましたので、ジャワの王族のバンドウと呼ばれるご夫妻が園遊会に来ていたのでしょう。バンドウ氏も未確認です。この人は、「国のプロフエツサーの紹介状を所持致居るに付　一度貴下に逢ひたしと申居候き」とあり、ジャワの教授の紹介状を持ってきているので、一度国男に会いたいと通泰に頼んだのです。通泰は礼状のついでに伝言を伝えようとしたことになります。

4　関東大震災に遭った井上通泰の葉書

次は、山口たづ子あての葉書で、重要なものですが、十分に読めていません。58 歳の通泰が大正 12 年（1923）9 月 1 日の関東大震災に遭ったことを生々しく伝える葉書（姫路文学館蔵、姫路文学館図録 32 頁）です。消印は「12 年 9 月□日」に見えますが、差出地は不明です。

（葉書表）
播磨国神崎郡田原村古田
　山口たづ子様
　東京芝区伊皿子　牧野子爵邸内　井上
（葉書裏）
前略　南鎌被下度候　扨ては御内方皆様かはりなきや伺度候　□当方事此度の震災の為全部丸やけにてほとほとこまり　つくろうにも店も無　御厚吏外川□□に伺ひさしむき疲　匐匍しこまり候故何卒一生の御願　もし汽車が通じて届くやう相伺

たらは　少しの間はかし行度候□□　只今は芝区桜田本郷町桜田□□□

「南鐐被下度候」とありますが、「南鐐」とはお金のことなので、いきなりこういうふうに言うかどうか、もしかしたら読み間違いがあるかもしれません。「当方事此度の震災の為全部丸やけにてほとほとこまり　つくろうにも店も無　御厚吏外川□□に伺ひさしむき疲　匐匍しこまり候故」とあり、関東大震災で内幸町の家も蔵書も全部焼けてしまいました。姫路文学館で作った年譜には、「六千冊に余る古書を焼失」と出てきます。「御厚吏外川□□」というのは、親切な官僚の戸川という人のようですけれども、うまく読めていません。「さしむき疲　匐匍しこまり候」ですから、今でいうと避難生活ですごく疲れていることを訴えています。「何卒一生の御願　もし汽車が通じて届くやう相伺たらは　少しの間はかし行度候」というのは、東海道線が通るようになったら、少しの間だけでもふるさとに帰りたいというのです。末尾はかすれていますが、この葉書を出した時は、「東京芝区伊皿子　牧野子爵邸内　井上」と表書きにありますので、子爵牧野貞亮の伊皿子の邸宅に住んでいたことになります。年譜を見ますと、「九月十七日、芝区伊皿子二四の牧野貞亮子爵（当時侍従）邸に移り、日曜祭日以外には、毎日桜田倶楽部に出張し、眼科診療を続ける」とあります。内幸町の病院が自宅とともに焼けてしまったため、桜田倶楽部を診療所にして、伊皿子の牧野子爵邸から通っていたのです。

やがて渋谷に住所を移すことになるわけですけれども、それにしても、「震災の為全部丸やけにてほとほとこまり」という言葉はとても重いと思います。関東大震災の被災者の中に通泰もいたことになります。関東大震災の場合には、十数万人の人が亡くなっていますが、両国の北にある被服廠の跡地で、そのうちの3分の1の4万人くらいが亡くなっています。私は東京に暮していますので、土地勘がありますが、下町がほぼ全滅で、山の手はあまり被害がないのですが、皇居から銀座に向かう辺りや、日比谷公園の南の内幸町も火事で焼けてしまい、その中に井上通泰邸もあったのです。

通泰が詠んだ歌の中には、「九月二日作」として、「六千まきにあまるふる書世の人の富にたぐへてほこりしものを」という歌があります。6000巻以上の古書を集めて、それが世間の人の財産に比べてすばらしいものだと誇っていたのに、みんな失くしてしまった、という意味です。また、「こころさへ身さへ尽してつくりてしももちの書も残らざりけり」は、心身を尽くして書いた100巻の書物も残っていない、という意味です。「残る世をいかにかもせむ三十とせにあまるいたづき烟となりぬ」は、30年以上やってきた学問の苦労も煙になってしまい、これからの人生をどうしようか、という意味です。「九月三日作」の、「たつか杖たにぎりもちてやけあとに灰かきをれば秋のかぜふく」という歌もあります。「たつか杖」というのは手で握って持つ杖ですから、ステッキです。ステッキを持って焼跡の自分の家の灰を掻いていると、秋風が吹いてくる、という意味です。9月3日になると延焼も収まってきますが、すっかり灰になってしまった書物を見て、茫然としている様子が出てきます。

柳田国男はこの時イギリスにいて、日本にいませんでした。日本が大変で、家族はみんなだめかもしれないと思って、大急ぎでアメリカ経由で帰ってきました。家族は茅ヶ崎の別荘にいて、竹藪で避難生活をしたことがわかっています。この関東大震災は大都会東京を襲った最大の災害ですが、その中に井上通泰もいたことになります。家を失い、病院を失い、6000巻の古書を失い、どうやって人生を立てなおしてゆくのかが大きな課題だったはずです。数え58歳で、だいたい私と同じような年齢ですので、身につまされる感じがいたします。

5　父松岡操の頼みごとと通泰の支援

次に、親兄弟との交流に移ります。この松岡五兄弟はたいへん絆が強く、昨年の松岡鼎展でもそれを実感しましたけれども、今回も書簡を読んでみて、この家族はこうして結びついていたのかと驚くことばかりです。

まず、父の松岡操（1833～1896）が明治27年（1894）11月30日（消印は27年11月30日、下総木下と27年12月1日、播磨姫路）に通泰にあてた葉書（個人蔵、図録7頁）です。

（葉書表）
播磨国姫路市坂元町
　井上通泰殿
　同同龍子殿
　　下総国南相馬郡
　　布佐町凌雲医院にて
　　松岡みさを
（葉書裏）
昨廿九日小包着改落手たし候　毎度勝手の注文いたし　いつもなから早速御送り忝御礼申出候　輝夫え御遣し候画稿は又同人より御礼申上候　通泰殿より家兄えの封書参候頃　正に落手し候　御伝へ被下度　可祝
　廿七年十一月三十日認

「龍子」は通泰が明治26年に再婚した妻の里うです。通泰は再婚して、姫路病院の院長として赴任しますので、この時の住所は姫路市坂元町です。操が熊川舎に勤めていたときに姫路で生まれただけでなく、こうして姫路で仕事をしていますので、直接的には2回、通泰は姫路と縁があるわけです。

鼎は前年に布川から布佐へ転居して、凌雲堂医院を開業していましたので、これはそこから父の操が通泰に送った葉書です。それまで父母や弟たちは通泰の家にいたはずですが、通泰が姫路に行くことになったので、鼎の家に移ったと思います。父の操は明治29年（1896）9月に、妻のたけを追うように亡くなりますので、それはこの葉書の2年後ということになります。

まず、「昨廿九日小包着改落手たし候　毎度勝手の注文いたし　いつもなから早速御送り忝御礼申出候」というので、操は通泰にいろいろお願いごとをして

いて、この時も何かを送ってくれと頼んだようです。一緒に暮らす鼎には頼みにくいことがあったのかもしれません。

「輝夫え御遣し候画稿は又同人より御礼申上候」からは、通泰が弟の輝夫のために画稿を送ったことがわかります。やがて輝夫は日本画家になってゆくわけですから、その支援をしていたのです。その後、輝夫本人から礼状が届いたはずです。「通泰殿より家兄え封書参候頃　正に落手し候」というので、兄の鼎にあてた封書が届き、同じ頃この画稿を受け取ったのです。「通泰殿より」という言い方をするのは、妻の龍子を意識しているからでしょう。通泰は、遠く姫路から、父や弟たちを支えていたようです。

6　通泰の弟柳田国男に対する学業支援

一方、弟の柳田国男は筆まめですから、たくさんの書簡を送っていて、昨年、鼎のところに、通泰あての明治 41 年（1908）と明治 42 年（1909）の葉書が 2 通ありましたので、珍しいなと思ってご紹介しました。これらも含めて取り上げてみます。

まず明治 27 年 11 月 26 日（消印は 27 年 11 月 26 日、武蔵東京駒込と 27 年 11 月 27 日、播磨姫路）、国男が通泰にあてた葉書（個人蔵、図録 7 頁）があります。

（葉書表）
播磨国姫路阪元町
　井上通泰様
（葉書裏）
御封書正に落手仕候
為替正にうけとり申候
　東京第一高等学校
十一月二十六日　　松岡国男

姫路にいる通泰に、第一高等学校から出した葉書です。国男は、明治 26 年に第一高等中学校に入学しますが、学校は第一高等学校に改称され、明治 30 年（1897）に卒業します。国男は寄宿舎生活をしていましたが、その時、兄の鼎と話し合って、国男の経済的な支援は通泰がすることになり、学費を出していたのです。

「御封書正に落手仕候」というので、封書が確かに届き、「為替正にうけとり申候」というので、別に為替でお金が送られています。

さらに明治 27 年 12 月 11 日（消印は 27 年 12 月 11 日、差出地不明）の通泰あての葉書（個人蔵、図録 7 頁）はおもしろいものです。

（葉書表）
播州姫路市阪元町
　井上通泰様
　　東京
　　松岡国男
十二月十一日
（葉書裏）
例の如く新年休中出寮可仕に付　二十日頃迄に食料だけ三円弱御送り被下度候　洋袴大に破れ候が　新年に新調いたす事出来まじくや　今少し我慢いたすへきや　御返事被下度候

「例の如く新年休中出寮可仕に付」というので、例年のように、新年の休みには寄宿舎から出なければならず、多くはふるさとへ帰ったはずです。「二十日頃迄に食料だけ三円弱御送り被下度候」というのは、食費だけ 3 円弱送ってほしいということです。「洋袴大に破れ候が　新年に新調いたす事出来まじくや」とある「洋袴」というのはズボンのことです。ズボンがたいそう破れてしまったので、新調することができないだろうかと頼んでいます。破れたズボンを新しく買い換えるのに困って、兄に頼んでいるのです。「今少し我慢いたすへきや」とあって、破れても我慢しなくてはいけないかと尋ねています。柳田国男にもこんな時代があったことが、この書簡からわかります。

7　柳田国男が旅先から送った絵葉書

やがてエリート官僚になった柳田国男は、日本中を旅しました。明治 41 年 5 月から 8 月にかけて、長い九州旅行をして、宮崎県の椎葉に入って猪狩や焼畑の習俗を調べ、明治 42 年に『後狩詞記』を残しました。その旅の途中、明治 41 年 6 月 14 日（消印は 41 年 6 月 15 日、差出地は不明）、内幸町にいる通泰に、熊本県の人吉から葉書（個人蔵、図録 11 頁）を送っています。

（絵葉書表）
東京麹町区内幸町一ノ三
　井上通泰様
（絵葉書裏　「（熊本百景）人吉大橋の実景」）
昨日いよいよ人吉へまゐり申候　浜山の風光は想像以上に候　町はたゝの町に候故　これより今一層の深山をもとめ申候
――
右手の丘の麓　相良氏館趾　形勝此上もなく候
　六月十四日　柳田国男

「昨日いよいよ人吉へまゐり申候　浜山の風光は想像以上に候」とあり、海や山の風景のは思った以上にすばらしかったのです。しかし、「町はたゝの町に候故　これより今一層の深山をもとめ申候」とあって、人吉は普通の町だったので、もっと山深い場所に入って行きたいとします。九州山地への誘惑にとらわれています。

年譜を見ますと、6 月 14 日には、「熊本の弁護士広瀬某から日向奈須の話を聞き、興味をいだく」とあります。日向奈須というのは宮崎県椎葉村のことで、そこでは今もなお猪狩や焼畑が行われていると聞いたのでしょう。それが「今一層の深山をもとめ申候」という感慨につながっていることがわかります。この後、椎葉に入って 1 週間ほど滞在することになります。

絵葉書は「（熊本百景）人吉大橋の実景」で、その写真について、「右手の丘の麓　相良氏館趾　形勝此上もなく候」と解説します。右のこんもりとした丘の麓が中世の相良氏の館跡だというのです。相良氏は人吉藩の藩主です。

柳田国男は熱心に旅をしましたが、井上通泰は病院に勤務していましたので、あまり旅をしたことがありませんでした。ですから、弟の国男から送られてくる絵葉書は、新しい世界を開いてくれるものだったにちがいありません。

翌明治42年には、木曾から飛騨・北陸路を旅しています。今で言えば、長野県から岐阜県・石川県・富山県へ歩いた旅です。途中、飛騨高山から通泰にあてた葉書（個人蔵、図録11頁）があります。消印は「42年6月3日」ですが、差出地は不明です。

（絵葉書表）
東京麹町区内幸町一ノ三
　井上通泰様
（絵葉書表　下）
川上君の故土は多分此度の道の外かと存候　明後日は白山の東の大谷白川の山村に入り　流にそひて越中加賀境へ出申つもりに候　日数六七日程
こゝよりも越の山は見え申候
　高山にて
　　柳田国男
（絵葉書裏　「飛騨高山国分寺ノ景」）
木曾の大滝川にそひて御嶽の南麓をめくり　飛騨の東南端御厩野と中山村へ下り申候　山川の源頭には却りて平地多く　一望はてもなき檜の原始林ものふかき限に候ひき　未だ御歌に入らさる二物　曰石楠花曰駒鳥

「川上君の故土は多分此度の道の外かと存候」という川上という人は、通泰と国男の間では了解していたはずですが、誰だかわかりません。川上のふるさとは今回歩いた道から外れたところだと思うと知らせます。

「明後日は白山の東の大谷白川の山村に入り　流にそひて越中加賀境へ出申つもりに候　日数六七日程」というので、明後日の6月5日には、白山麓を通って、富山・石川両県の境へ出てゆく予定で、その日数は6～7日かかると見ています。

裏側には「飛騨高山国分寺ノ景」とあって、飛騨国分寺の三重塔が見えています。「木曾の大滝川にそひて御嶽の南麓をめくり　飛騨の東南端御厩野と中山村へ下り申候」とあり、木曾福島から御嶽山の南の麓を巡って下呂の方へ入ってきたわけです。「山川の源頭には却りて平地多く　一望はてもなき檜の原始林ものふかき限に候ひき」とあって、山中の川の源流にはかえって平地が多く、木曾の銘木檜が深かったと述べています。

末尾にある「未だ御歌に入らさる二物　曰石楠花曰駒鳥」というのは、まだ和歌の題材に入っていない植物と動物に、石楠花と駒鳥があるという指摘です。

8　父松岡操の墓碑に寄せる柳田国男の書簡

さらに明治45年（1912）でしょうか、1月23日に、柳田国男が井上通泰にあてた封書の一部（姫路文学館図録17頁）が知られています。写真には前後が載っていませんが、読めるところを読んでおきます。

御目ニカケラレシニヤ
一、翁ノ好学実ニ天性ニ出ツ　始テ国学ノ書ヲ読マレシハ　既ニ儒者トシテ世ニ立チテ後　三十五六ノ頃ヨリナリ　和歌モ四十ヲ越エテ始テヨマレタレト　優ニ一家ヲ為シ　明治十年前後ニハ　地方ノ神官ヲ集メテ講義ナトセラレタリ　而モ知識ヲ広ムルノ熱心ナルハ　一芸ニ秀テタル人ニ逢ヘハ必ス不審ヲ質問シ　之ヲ「シガラミ」ニ筆記セラレシヲ　傍ニアリテヨリ知レリ　晩年史論ニ潜心シ　再ヒ国史ヲヨミ始メラレタリ　其業ハ完成セサリシモ　新ナル見解多ク　小生ナトハヨホト其為ニ感化セラレタリ

明治29年に父の操が亡くなって、明治45年5月、布佐の勝蔵院に墓石を建てます。今もお墓がありますけれども、父の事績を墓石に彫るとき、その中に加えてほしいと要望した書簡と考えられます。

「翁ノ好学実ニ天性ニ出ツ」という翁は操のことで、天性の学問好きだったことを述べます。「始テ国学ノ書ヲ読マレシハ　既ニ儒者トシテ世ニ立チテ後　三十五六ノ頃ヨリナリ」とあり、国学の書物を読んだのは中年になってからでした。「和歌モ四十ヲ越エテ始テヨマレタレト　優ニ一家ヲ為シ」というので、和歌を詠んだのはさらに遅れました。国学を始めたのは35、6歳、和歌を詠んだのは40歳というのですから、かなり遅かったことは確かです。

しかし、それでも一家をなすほどで、「明治十年前後ニハ地方ノ神官ヲ集メテ講義ナトセラレタリ　而モ知識ヲ広ムルノ熱心ナルハ　一芸ニ秀テタル人ニ逢ヘハ必ス不審ヲ質問シ　之ヲ「シガラミ」ニ筆記セラレシヲ傍ニアリテヨリ知レリ」とあって、知識欲はすごく、わからないところを一芸に秀でた人に聞きました。「シガラミ」というのは、川をせき止める設備や障害・束縛をいいますが、不審を質して答えを書いたというのですから、備忘録のようなものでしょう。そのような備忘録を「シガラミ」と呼んだようです。国男は、父がそこに書くのを傍で見て知っていたことになります。質問して、その答えを書くという聞き書きですから、後の民俗学の方法につながってゆくことがわかります。

さらに、「晩年史論ニ潜心シ　再ヒ国史ヲヨミ始メラレタリ　其業ハ完成セサリシモ　新ナル見解多ク　小生ナトハヨホト其為ニ感化セラレタリ」ともあります。父操は国学、和歌、晩年には史論に入っていき、それは完成しませんでしたが、その中には新しい見解がたくさん含まれ、それに大きく感化されたというのです。父の遺産がやがて民俗学につながってゆくことがわかります。柳田国男は明治43年（1910）の『石神問答』などいくつかの本で、父の志を受け継いだということを書いています。

こういったことを墓碑に書いてほしいと兄に頼んでいる書簡だろうという説明がありますが、前後がないので、その状況はよくわかりません。いずれ書簡の全体を通して見たいと思います。

9　播州のお墓参りに歩いた柳田国男の書簡

次の書簡は福崎にとって重要です。通泰は震災後、

青山北町に転居していましたが、大正 15 年（1926）と推定される 10 月 31 日（消印は□年 10 月 31 日、差出地不明）、柳田国男が井上通泰にあてた封書（個人蔵）があります。

（封筒表）
青山北町七ノ二
　井上通泰様
　　侍史
（封筒裏）
牛込区加賀町二ノ一六
　　柳田国男
　井上大人　御次
去二十一日播州へ参り　本日
〔大阪にては輝夫に逢ひ申候　新興〕
漸く帰り参候　此度は孝を
〔大和絵会展覧会にてまゐりをり候〕
伴ひ北条生野なども墓参
〔播広鉄道にては竜野の医師三宅と〕
それそれ寺僧に世話を頼み置申候
〔申人にあひ申候〕
故山の秋色四十年ぶりにて
追懐非一候き　尚近日の伺可申上候
諏訪史料叢書四巻御文庫
に無之候はゝ　拝呈可仕候は如何にや
御返事電話にて承り度候　頓首
　十月卅一日

「去二十一日播州へ参り　本日漸く帰り参候　此度は孝を伴ひ北条生野なども墓参　それそれ寺僧に世話を頼み置申候」とあります。10 月 21 日、播州に向かい、31 日にようやく帰ってきました。この時の旅はプライベートだったようで、妻の孝を連れて、母の実家の北条、さらに生野を回って、この福崎にも来て、それぞれのお寺のお坊さんにお墓の世話を頼んだのです。

「故山の秋色四十年ぶりにて　追懐非一候き」というのは、10 月末ですから、今より半月くらい後になりますので、もうちょっと色づいてくるはずです。辻川山の秋の景色が 40 年ぶりというのは、ふるさとを離れて 40 年ということですから、感慨一入だったはずです。「尚近日の伺可申上候」とあり、近いうちに通泰に会いに行って、直接話したいほどだったのです。

「諏訪史料叢書四巻御文庫に無之候はゝ　拝呈可仕候は如何にや　御返事電話にて承り度候」とあります。『諏訪史料叢書』は全 4 巻で、大正 14 年（1925）から 15 年に出ています。通泰は震災で蔵書を焼失して、新しく文庫を構築していましたので、その中にまだ入っていなければ差し上げたいけれども、どうかと尋ねています。すでに買ってあれば二重になってしまうので、電話がほしかったのです。

行間には、追記で、まず、「大阪にては輝夫に逢ひ申候　新興大和絵会展覧会にてまゐりをり候」とあります。新興大和絵会展覧会があって大阪に来ていた弟の松岡輝夫（映丘）（1881 ～ 1938）に会ったのです。この時期の大阪の新聞を見れば、どのような催し物なのか確かめられるでしょうが、まだできていません。年譜には出てこない事実です。

また、「播広鉄道にては竜野の医師三宅と申人にあひ申候」ともあります。「播広鉄道」というのは、播州と広島を結ぶ鉄道のことでしょうか。竜野の医師の三宅という人に会ったので、同じ医者である兄ならば知っているだろうと尋ねたのです。

10　松岡静雄・柳田国男の葉書、松岡映丘の絵葉書

また、松岡静雄と柳田国男の連名の古い葉書があります。今、展示されていますけれども、明治 28 年（1895）1 月 1 日（消印は 1 月 1 日、1 月 2 日）の年賀状（個人蔵、図録 11 頁）で、姫路にいる井上通泰あてです。

（葉書表）
播磨国姫路市阪元町
　井上通泰様
（葉書裏）
新年の御慶めてたく申納候
　　東京牛込区水道町三十一　中川かた
二十八年一月一日
　　松岡静雄
　　松岡国男

「中川かた」とあるので、2 人は雑誌『文学界』を編集・刊行していた中川恭次郎宅で正月を迎えていたことがわかります。両親は健在ですけれども、松岡静雄は 18 歳で、この 1 月のうちに海軍兵学校に入学します。国男は 21 歳で、第一高等学校在学中でした。

また、末弟の松岡輝夫（映丘）が明治 44 年（1911）9 月 18 日（消印は 44 年 9 月 19 日、和歌山高野）に出した葉書（個人蔵、図録 11 頁）が残っています。

（絵葉書表　上）
東京麹町区内幸町
　井上通泰様
　　高野山宿坊にて
　　松岡輝夫
（絵葉書表　下）
大和地方の研究を了り　去る登山いたし　明日和歌浦にあそび　両三日中に京都へ向ひ申候
　　九月十八日
（絵葉書裏　「大和竜田竜田川」）

大和地方の研究を終えて、高野山に登ったのです。今は簡単に登れますが、当時はやはり徒歩で山に登ったのでしょう。高野山の宿坊に泊まって、『万葉集』に出てくる和歌の浦に遊び、京都に回る予定です。やはり旅先からの絵葉書です。

父や弟たちがこうして通泰とやり取りをしたことがわかります。この家族の親兄弟の細やかなやり取りと言っていいでしょう。我々はもう年を取って大家になった柳田国男をイメージしますけれども、ズボンが破れて新しくしたいけれども、我慢した方がいいのかどうかという切実な葉書からは若さを感じます。これから世の中に出てゆく柳田国男の姿が、こういう葉書を見るとよくわかります。それととも

に、松岡家の暮らしが決して裕福ではなかったことも知られます。けれども、そこから自分の人生を切り開いていったのです。

11　高浜虚子が息子の診察を頼んだ書簡

そろそろ華麗な人脈の方に入っていかなければいけませんが、まず古いところからと思って、高浜虚子（1878 ～ 1959）という俳人を挙げておきました。この人が通泰に出した書簡が展示されています。年次不明で、12 月 11 日、井上通泰あての封書（個人蔵、図録 8 頁）です。

（封筒表）
□幸町
　井上通泰様
（封筒裏）
十二月十一日
　富士見町四ノ八
　高浜虚子
（書面）
拝啓　先日は鷗外先生宅にて御目にかゝり失礼仕候　乍恐生愚息右眼時々いたきやう申候　子供の事とて曖昧なる点も有之候へど　一度御診察相受置候ば安心と存　御多用中とは存候へど御面倒御願申上度存候　万事は下婢に申付け置き候につき同人より申上候事と存し候　御願迄匆々不一
　十二月十一日　　清
井上先生
　侍史

虚子が富士見町にいた時代というのは明治 35 年から明治 43 年で、明治 43 年 12 月に鎌倉に転居していますので、それ以前の書簡です。『定本高浜虚子全集　第 15 巻』（毎日新聞社、1975 年）にはありませんので、世の中には知られていない書簡だと思います。時期がはっきりすれば、森鷗外（1862 ～ 1922）と高浜虚子と井上通泰と 3 人の出会いの場がわかってくると思います。

「先日は鷗外先生宅にて御目にかゝり失礼仕候」というので、数日前、虚子は通泰に森鷗外の観潮楼で会ったのです。「乍恐生愚息右眼時々いたきやう申候　子供の事とて曖昧なる点も有之候へど　一度御診察相受置候ば安心と存　御多用中とは存候へど御面倒御願申上度存候　万事は下婢に申付け置き候につき　同人より申上候事と存し候」というので、眼科医である通泰に息子の診察を頼んだのです。虚子の息子は年尾と友次郎ですので、どちらかでしょう。さらに調べれば、もう少し時期が詰められそうですが、今のところまだ課題です。なお、封筒には切手も消印もありませんので、この「下婢」に持たせた可能性が高いと思います。

12　山県有朋を見舞う森鷗外の歌と書簡

びっくりしたのは次の森鷗外からの書簡で、今回展示されていますので、ご覧ください。大正 8 年（1919 年）2 月 21 日（消印は 8 年 2 月 21 日、駒込）の封書（個人蔵、図録 9 頁）です。鷗外が団子坂の観潮楼から内幸町の通泰に出しています。これは『鷗外全集』に載っていない書簡です。

（封筒表）
市内麹町内幸町
　井上通泰様
（封筒裏）
団子坂
　森林太郎
（書面）
拝啓　先日ハ辱奉存候　兎角健康スグレザルタメ会ニモ不出久候　拝芝不仕徒ニ風平（ママ）ヲ想見スルノミニ候　不出廬ノ高作再三吟誦仕候　去十三日新聞ヲ見テ力疾小田原ニ参候　車中為紙ノ代有之候チト生イキナル詠ロトハ存候ヘドモ　御一見御示教被下度奉願候
　二十一日　森林太郎
井上大人
　　左右

「先日ハ辱奉存候」とあり、先日 2 人の間に何かあったのでしょうが、具体的にはわかりません。「兎角健康スグレザルタメ会ニモ不出久候　拝芝不仕徒ニ風平ヲ想見スルノミニ候」というので、体調が悪くて常磐会も長い間欠席し、直接会うことができずに、噂で想像するだけだったようです。それでも「不出廬ノ高作再三吟誦仕候」とあり、家から出ず、高作というのは通泰の歌でしょうか、それを何度も口ずさんでいたようです。

重要なのは、「去十三日新聞ヲ見テ力疾小田原ニ参候」という一節です。2 月 13 日の新聞を見て、大急ぎで小田原に行ったというのです。昨日大学に行って、大正 8 年 2 月 13 日の新聞を図書館の職員に探してもらうと、『東京朝日新聞』に「山県公重患」という記事が見つかりました。鷗外がびっくりして小田原に行ったのは、この記事を見たからでしょう。「山県公重患」の後に、「感冒に肺炎を併発」「八十二歳の高齢とて／容体頗る気づかはる」「◇聖上入沢博士を御差遣」とあり、元老山県有朋が小田原の別荘古稀庵で風邪に肺炎を併発し、82 歳の高齢なため容態がひどく心配なので、天皇陛下が入沢達吉博士を遣わしたことがわかります。山県は常磐会を森鷗外や井上通泰にさせた政界の大物でした。

山県はいくつかの山荘や別荘を持っていて、有名なのは東京の椿山荘ですが、小田原にあったのが古稀庵という 1 万坪の別荘でした。2 月 1 日、降雪にもかかわらず明治天皇霊廟に参拝し、雪掻きをして風邪をひき、肺炎を併発したようです。「十一日夜は更に九度七分に上り脈拍百二十を数へ呼吸の逼迫を感じ俄に重体に陥りたれば家人の驚き一方ならず急電を在京城の令嗣伊三郎氏及び東京本邸並に近親の人々に発せり」とあります。82 歳で 39 度 7 分の熱というのは大変なことで、それを知った天皇陛下は入江達吉を派遣したのです。

また、「カンフル注射を行ふ」「心臓に衰弱を来す」とあり、心臓に衰弱を来したので、カンフル注射をしています。「夫人のみ枕頭に詰め」「二令嬢は室を隔てゝ警戒」とも見えます。カンフル注射を試みたら、それが功を奏して元気になり、一命を取り留め

ました。もう少し長生きをして、亡くなったのは大正11年（1922）2月1日のことです。

この新聞記事を読んだ鷗外は小田原に向かいますが、「車中為紙ノ代有之候　チト生イキナル詠ロトハ存候ヘドモ　御一見御示教被下度奉願候」とあり、東京から小田原まで行く車中なので、紙の代わりの物に歌を書き付けたのです。山県有朋が大丈夫だということになって帰宅し、小田原に向かう車中で作った歌の添削を通泰に依頼したことになります。

『鷗外全集　第19巻』（岩波書店、1973年）を見ますと、次のような歌が見つかります。

二月十三日
君がよまむすなはち病いえぬべき詞もかなとおもへどおもへど　　己未・庚申存稿
（大正八年、九年）

大正8年と大正9年（1920）の短歌の草稿が残っている中に、「二月十三日」という詞書のある歌があります。これは2月13日に詠んでいるので、小田原に行く車中で紙の代わりの物に書き留めた歌と見ていいでしょう。この書簡1通で、新聞と全集が結びつき、その時の様子がよくわかります。これは、あなたが歌を詠むなら、すぐに病が癒えるだろうが、そういう言葉があればいいと思うけれども、果たしてどうだろうか、という意味です。歌の力によって病気も回復するだろうと詠むのですが、それは山県に言われて常磐会をやってきた通泰との関係を踏まえています。生意気にこんな歌を詠んだけれども、添削してくださいと頼むのですから、鷗外は通泰に一目置いていたのでしょう。従って、この封書の中には、歌を書いた駅弁の包み紙か何かが入っていたはずですが、添削して戻されたのかもしれません、なくなっています。

13　森鷗外が知らせた博物館と図書寮の内情

その次は、大正9年4月26日（消印は9年4月26日、差出地不明）、森鷗外が通泰にあてた長い書簡（姫路文学館蔵、姫路文学館図録30頁）です。

（封筒表）
市内麹町区内幸町
　井上通泰様
　　御進展
　廿七日着□□更賜一書
　　（この1行、通泰の書き入れかもしれない）
（封筒裏）
上野博物館
　森林太郎
（書面）
拝呈　一昨日ハ桝房御来館無事ニスミ　ホツト一息イタシ候　当館高等官ノ本官ハ総長主事ヲ除キ鑑査官　三
　野村　美術工芸　東京
　溝江　美術
　田中（京　名高キ勘兵衛サン）
右ノミニテ　跡ハ勅任待遇ガ評議員五人（コレハ空名ト云ツテモ可也）　奏任待遇ガ学芸委員十二人ニ候（東京六人　京、奈良六人）　評議員学芸委員ハ本官ニハアラズ候　図書寮ハ頭主事ヲ除キ編輯官　二（本多　芝）
右ノ分奏任待遇　同下二（李王家実録ノカヽリ浅見、本朝実録ノカヽリ久保得二）アリ　更ニ同待遇ニ申立中（一ハ井上頼国門人田辺ガ上ル筈、一ハ吉田、コレハ漢文専門家）　如此モノニ候　要スルニ本官ノ位置ハ正少クシテ奈何トモナリ難ク候　大口君ノ如キハ小生ニ於テハホシクテタマラヌ人ニ候ヘドモ　本官ニナル道ハ無之候　高本官待遇ノ方ニモ下ヨリ進級ヲ待居ルモノアルユヱナカナカ外ヨリ入ルコトムツカシケレド　此ハ時期ニヨリテハ不可能ニハ有之間敷被存候　コレモ本官問題トハ別ナガラ　古社寺保存会ニ大口君ガ入ルコトハ大イニ意義アル事カト存居候　古文書鑑定ニハ同君ナクテハカナハヌヤウ存居候　先ハ内情大略申上候
　二十六日　　森林太郎
井上通泰様

森鷗外は、大正6年（1917）12月から大正11年7月、亡くなる直前まで帝室博物館総長兼図書頭を勤めています。東京の博物館だけでなく、京都の博物館や奈良の博物館にも行っています。秋には曝涼のために奈良で過ごすことが多かったようです。

「一昨日ハ桝房御来館無事ニスミ　ホツト一息イタシ候」とありますが、「桝房」がよくわかりません。4月24日にその来館が済み、ほっとしたようです。この書簡の前に、通泰が鷗外に出した書簡があったはずで、それは書家で歌人の大口鋼二（周魚）（1864～1920）の就職に関わる問い合わせだったと思います。それに対して、鷗外は帝室博物館と図書寮の職員構成の内情を知らせています。

帝室博物館の高等官の本官は、総長と主事を除くと、鑑査官が野村、溝江、田中の3人でした。東京には野村重治と溝江禎二郎、京都には田中教忠（勘兵衛）がいました。「（名高キ勘兵衛サン）」というとおり、田中は有名な考証家であり、平安神宮の造営に関わった人です。この3人だけで、あとは「勅任待遇ガ評議員五人（コレハ空名ト云ツテモ可也）」とあり、名前だけでした。奏任として機関の長が選ぶ待遇の学芸委員が12人いて、東京に6人、京都と奈良で合わせて6人でした。評議員と学芸委員は本官ではありませんでした。

一方、兼任している図書寮は皇室の書籍を扱う機関です。図書頭と主事を除き、編輯官は2人で、本多、芝でした。本多は歴史学者の本多辰次郎、芝は歴史学者の芝葛盛です。この2人は奏任待遇で、その下に『李王家実録』の係に浅見、『本朝実録』の係に久保得二の2人がいました。浅見は法律研究者の浅見倫太郎、久保は中国文学者の久保天随です。他に同じ待遇に申し立て中の者がいて、1人は井上頼国門人の田辺が上がるはずで、もう1人は漢文専門家の吉田でした。国学者の井上頼国門人の田辺は田辺勝哉、漢文専門家の吉田は吉田増蔵です。

こうして帝室博物館と図書寮の職員構成を長々と述べているのですが、それは「要スルニ本官ノ位置ハ正少クシテ奈何トモナリ難ク候　大口君ノ如キハ

小生ニ於テハホシクテタマラヌ人ニ候ヘドモ　本官ニナル道ハ無之候　高本官待遇ノ方ニモ下ヨリ進級ヲ待居ルモノアルユヱ　ナカナカ外ヨリ入ルコトムツカシケレド　此ハ時期ニヨリテハ不可能ニハ有之間敷被存候　コレモ本官問題トハ別ナガラ　古社寺保存会ニ大口君ガ入ルコトハ大イニ意義アル事カト存居候　古文書鑑定ニハ同君ナクテハカナハヌヤウ存居候」からわかります。おそらく通泰が大口鯛二を帝室博物館または図書寮に正式な職員として採用することはできないかと尋ねたのだと思います。大口は御歌所寄人をしたり、『明治天皇御集』の編纂にも関わったりしていますが、定職ではなかったので、きちんと就職させたかったのでしょう。それに対して鷗外は、役人の世界ですから、外から入って本官になることは難しく、昇進にも順番があることを知らせます。その就職問題とは別に、古社寺保存会に大口が入ることは意義があることで、書家ですので、古文書鑑定にはなくてはならないとも指摘します。これは鷗外と通泰の関係を示す大事な書簡ですが、帝室博物館と図書寮の内情を克明に知らせて、大口の就職は難しいことを述べたために、長文になったのでしょう。

なお、『鷗外全集　第36巻』(岩波書店、1975年)所収の井上通泰あて書簡には、32(明治24年2月25日(転載))、90(明治27年7月23日(推定、封筒欠))、1033(大正6年1月3日)、1384(大正9年6月13日(転載))、1388(大正9年7月19日)、1536(年代不詳、6日)がありますが、この書簡も収録されていません。

14　賀古鶴所の書簡と外山且正との関係

次は賀古鶴所(1855～1931)が井上通泰にあてたもので、昭和2年(1927)と推定される7月3日(切手あり、消印不明)の書簡(姫路文学館蔵)です。

(封筒表)
青山北町七丁目二
　井上通泰様
(封筒裏)
神田区小川町五十一
　賀古鶴所
(書面)
万葉集新考完成紀念の御写真忝く拝受　自ら威厳の備り在りて　殊に病後の老生にとりては大に心を強う致し申候　新考二十巻下恵成直に端書を拝読仕候　先以て御健康にして此の大業を成し給ひたるを拝祝仕候　十八年間恰も一日の如く熟考執筆なかなか以て安易なるわざにはあらず候　此の四月籠したる老家御覧に入れ候　一葉は前に拝送候　先日外山君訪ねくれ候　此の秋には常磐会当時の人々と一会相催し度と存候、老生追々と力づき申候　乍憎御放念下さるへく候　匆卒
　七月三日　賀古鶴所
井上通泰様

賀古鶴所は、森鷗外が臨終の時、遺言を書き留めた人として有名です。やはり医者で、常磐会などで親しくしました。これは通泰が『万葉集新考』私刊本38冊が完成したときの書簡です。『万葉集新考』は、明治43年から取り組んだ『万葉集』の講釈の記録を、大正4年(1915)から刊行しはじめ、昭和2年6月に完成したものです。「十八年間恰も一日の如く」というのはそれを踏まえています。

この書簡は、こうして刊行された『万葉集新考』が完成した記念に撮られた写真に対する礼状でした。賀古は病後だったようで、その返礼として、「此の四月籠したる老家御覧に入れ候」として、彼の家の写真を同封しています。「一葉は前に拝送候」とありますので、そのうち1葉は前にも送った写真だったようです。

賀古の書簡にも名前が出て来る外山且正(?～?)は、井上通泰の早い時期からの門人で、やがて御歌所寄人にもなります。昭和2年9月18日(消印は2年9月18日、差出地不明)、通泰にあてた封書(姫路文学館蔵)があります。

(封筒表)
青山北町七丁目二番地
　南天荘執事御中
　　外山且正
(封筒裏)
九月十八日
　東京牛込□□七十
　　外山且正
(書面)
拝啓　御親書落有忝しけなく拝見感涙にむせひ申候　度々御こゝろをいためまつり　実に申わけこれなきことに御座候　おわひ申上候　今朝はすこし気分よろしく候　はやく回復いたし御機嫌を奉伺いたし度とたのしみをり候　つゝしみて御礼申上度如斯御座候　恐々
　九月十八日
　　外山且正
先生
　函丈

外山が病気で療養しているところに、通泰がお見舞いの書簡を出したので、感激の涙に浸っているという内容です。

15　満洲から帰った与謝野鉄幹の書簡

歌人の与謝野鉄幹(寛)(1973～1935)からの書簡もあります。与謝野晶子・鉄幹は明治の新しい歌を作った人々で、井上通泰のような旧派の歌人とは違う道を歩きました。しかし、そういう人たちとも深い交流があったのです。昭和3年(1928)と推定される7月5日(切手あり、消印不明)、井上通泰にあてた書簡(個人蔵)があります。

(封筒表)
□外、渋谷町、青葉十
　井上通泰先生
　　御侍史
(封筒裏)
下荻窪、三七一
　与謝野寛

（書面）
□呈　御安泰に入らせられ候御事をおよろこび申上候。支那より六月十七日に帰り参り候。早速御葉書を賜り、忝く奉存候。春来お目に懸からず、おなつかしく奉存候。拝趨致したしと存じながら、久しく慶応の方も休み候ためその方の講義を致候外に、留守中の雅俗の用事堆積致し候て、今猶失礼致しをり申候。御高慮被下度候。新攷の全集次第に御捗り遊ばされ候御事何よりも学界のため奉慶賀候。定めて其れがためにお忙しき御事と奉察上候。おからだを御愛重被下候やう、其れを層一層奉祈上候。満洲各地にて講演の度毎に「新攷」のお噂を申述べ、且つ先生の御歌にも言ひ及び申候。猶其内暑中休みに相成るべく、ひまを得るにつき、拝趨可仕候。

○

九日会の御案内を差出候。何卒おくり合せ被下候て、御出席を賜り度候。妻よりも御芳情に対し、忝く存候旨御申伝候。艸々拝首。

七月五日

寛

南天荘大人

御侍史

鉄幹は晶子とともに、昭和3年5月3日から6月17日まで中国旅行に行きました。「支那より六月十七日に帰り参り候」というのはそのことを指します。この旅行のことは、昭和5年（1930）の与謝野寛・晶子の『満蒙遊記』という本にまとまります。帰京を知った通泰は、早速葉書を出したようで、これはそれに対する返事です。「春来お目に懸からず、おなつかしく奉存候」というので、出発前に会っていたことがわかります。お会いしたいと言いながら、鉄幹は慶應義塾大学の教授でしたので、授業を休んで中国旅行をしたぶん補講をしなければなりませんでした。

「次第に御捗り遊ばされ候御事何よりも学界のため奉慶賀候。定めて其れがためにお忙しき御事と奉察上候。おからだを御愛重被下候やう、其れを層一層奉祈上候」とありますが、「新攷の全集」とは『万葉集新考』のことで、昭和3年3月から公刊本が出はじめたところでした。『万葉集新考』の作業に入っているので、通泰の健康を気遣っています。「満洲各地にて講演の度毎に「新攷」のお噂を申述べ」というのは、満洲旅行で講演するたびに、通泰の『万葉集新考』が私刊本から公刊本になって出始めたことを話したのでしょう。「先生の御歌にも言ひ及び申候」というのですから、通泰の和歌も講演で取り上げたようです。我々は新派・旧派の対立というように単純化してしまいますが、それだけではなかったことがわかります。

また、「九日会の御案内を差出候。何卒おくり合せ被下候て、御出席を賜り度候。妻よりも御芳情に対し、忝く存候旨御申伝候」とあるのは、たぶん中国から帰って来た報告会が7月9日に開かれるのでしょう、その出席を頼んでいます。妻とはもちろん、与謝野晶子のことです。中国旅行から帰ってきた鉄幹が、『万葉集新考』公刊本の刊行が始まった通泰に長文の書簡を出し、帰朝報告会への出席を依頼したことがわかります。

16　通泰の収集に敬服する徳富蘇峰の書簡

さて、こういう作家だけではなくて、通泰は学者たちとの交流がありました。三上参次（1865～1939）は姫路藩士の子供ですから、同郷人と言ってもいいと思います。東京帝国大学の教授を勤めた歴史学者です。この人の明治33年（1900）8月14日（消印は□年8月14日、駒込）の古い書簡（姫路文学館蔵）があります。

（封筒表）
麹町区内幸町一ノ三
井上通泰殿
親展
（封筒裏）
駒込林町一六九
三上参次
（書面）
拝啓　連日陰晴不定に候折　扨如何御□光に候哉近年稀有之候雨水の溢候へ共　御住居の辺りは御被害無之候哉　今日は藤井高尚伝態々御恵贈被下ありがたく存じ候　早速拝読　多大の利を得申候篤く御礼申候　時々電話にて卅一文字の御比正を願ひ候事　嘸御迷惑の事と恐縮に存じ居り候電話でなくちと緩々と御正しを願ふ様に試み度しと存じながら　未だ十分雅趣味に編成ざるには困り居り候　まづは御礼のみ　匆々拝首
明治卅三年八月十四日
三上参次
井上通泰博士殿
親展

この書簡は、国学者の本居宣長の弟子にあたる藤井高尚の伝記を書いた「藤井高尚伝」を贈った際の礼状です。これは明治32年（1899）5月から7月にかけて、『めさまし草』に載りました。加えて、和歌の添削を電話でしてもらっているのが心苦しいと述べています。

また、評論家の徳富蘇峰（猪一郎）（1883～1957）の書簡が2通あります。まず、大正10年（1921）年12月13日の通泰あての封書（個人蔵、図録17頁）を見てみましょう。

（封筒表）
東京市内幸町
井上通泰殿
親展
（封筒裏）
東京市青山
南町六之三十
徳富猪一郎（住所と氏名は押印）
（書面）
謹啓　万葉新考刊行進捗ノ祝刊トシテ　御蔵幅写真帖洵ニ至極ノ思付と敬服致候　然ルニ右御品〔三百部中ノ第五一部〕贈被成　峰早速披覧　近来ノ快欽不置候　蔵有古紙香川大人ノ詠歌何れも画題

と不即不離ノ間ニアリ　真ニ賛歌ノ体ヲ得タルモノト存候　蕃山先生書簡ハ尋常一類ノ看ヲ做ス可ラス　仔細ニ読来レハ史氏ノ闕文ヲ補フ資料かと存候　何レモ珍什ノミニテ　流石ニ南天荘ノ御収儲と驚嘆仕候　先ハ不取敢御礼申上度候　不一

大正十十二月十三夕

猪一郎

井上先生

玉几下

近来我国ノ思想界腑ニ落ヌ事ノミ多ク　孤憤漏ラス所ナク　只修史三昧ニ候　ホーツマース条約ニサヘ焼打シタル人気ハ　米国ニ面皮ヲ蹴ラレテ尚四国協商ニ謳歌致候　御奈印ニモ世ノ変遷□□□事ニ存候

「万葉新考刊行進捗ノ祝刊トシテ　御蔵幅写真帖洵ニ至極ノ思付と敬服致候」とあるのは、今展示されていますけれども、大正10年2月発行の『南天荘蔵幅写真帖』という和本です。これは、『万葉集新考』38冊の半分にあたる19冊が出たお祝いに作ったものです。この『南天荘蔵幅写真帖』は、掛け軸を写真にして載せ、それに解説を入れています。蘇峰が受け取ったのは、限定300部のうちの51部でした。蘇峰は早速開いてみて、ものすごくうれしかったのです。

「蔵有古紙香川大人ノ詠歌何れも画題と不即不離ノ間ニアリ 真ニ賛歌ノ体ヲ得タルモノト存候」とあり、通泰が歌人の香川景樹を研究したことはよく知られていますが、絵に付いている賛の歌が絵とぴったりだと褒めています。また、通泰は熊沢蕃山という岡山の藩主に仕えた儒学者の研究をしていますが、蕃山の長い書簡が最後に載っています。「蕃山先生書簡ハ尋常一類ノ看ヲ做ス可ラス　仔細ニ読来レハ史氏ノ闕文ヲ補フ資料かと存候」とあり、歴史家の資料の欠落を補う書簡だと思うと述べます。「何レモ珍什ノミニテ　流石ニ南天荘ノ御収儲と驚嘆仕候」とあって、さすが通泰が集めたものだと褒めています。これは大正 10 年のことですから、『南天荘蔵幅写真帖』に載った20数幅の掛け軸は関東大震災で全部焼けてしまったはずで、そういう意味でも貴重です。

香川景樹も熊沢蕃山も、通泰が関心を持った研究テーマでした。従って、その掛け軸を集めて持っていたわけですが、通泰の唯一の道楽はこういう書画の収集だったのです。しかし、粗末に取り扱われて屑になりそうな物の中から、貴重な資料を捜し出すのが目的だと言っています。例えば、「なんでも鑑定団」に出ても、香川景樹や熊沢蕃山の掛け軸は歴史資料としての価値はあっても、骨董品として高額になるようなものではありません。蘇峰は、通泰のそのような収集に敬服しているのです。今、添書きについては読みません。

なお、消印は「15年9月3日」に見えますが、差出地不明です。ひょっとしたら封筒と書簡が入れ替わった可能性も考えられますが、今後の検討課題にしておきます。

もう1通は南天荘絵葉書に対する礼状で、大正11年7月5日（消印は11年7月6日、差出地不明）、通泰にあてた書簡（個人蔵）です。

（封筒表）

東京内幸町

井上通泰様

（封筒裏）

相州逗子

桜山

壱龍菴

徳富（住所・氏名は押印）

（書面）

啓上　永々南天荘絵ハカキ頂戴　不残所持候　長く〔佳伴トシテ〕卓上珍重可致　茲に取束御礼申上候　不一

大正十一年七月五日夕

猪一郎

南天荘先生

大人

万葉新考も偖々進行為　斯る十□□に□存候

17 『大日本史料』の分担者に関する書簡

辻善之助（1877 ～ 1955）も姫路生まれの歴史家です。昭和4年（1929）と推定される4月23日（消印は4月24日、差出地は本□）の井上通泰あての封書（姫路文学館蔵）があります。

（封筒表）

市外渋谷青葉十

井上通泰様

（封筒裏）

四月二十三日

辻善之助

（書面）

芳翰拝誦致候　平素は御無沙汰に打過申訳なく候扨大日本史料各編各冊に編纂分担者の名を録して其功績と責任とを明にすべしとの御示論難有存候之については実は同僚間にも夙く其議起り候処史料原簿は修史局時代より其大体の基本となるべきもの編成せられ　明治二十八年以後三十三年に至る間に一たび修正を加へられ　三十三年以後出版を始むるに当りて　更に大修正を加へ候により其間之に従事せるものは数十百の多きに及び　担任の時代も屢変更せられ　各編各冊について誰々が之に関係せしかを究むることは頗困難に御座候現在之に与かるものゝ名のみを録するは不公平の嫌なきに非ず　さればとて其関係者の名を全く没するは気毒に有之　且責任も明かならざるにより近頃は別に記録を作り　一冊出来毎に其関係者の名を留め置くことに致し　同時に明治二年修史事業の始まりて以来の事績を集録して　「史料編纂始末」なるものを編し　古くこの事業に携はりたる人々の名を後代に伝へ度　既に其稿本十数冊を編成し　尚今後も年々追補いたし候て　各編各冊の出版に与かりたる人の名を録上及度罷居候　尤もこの「史料編纂始末」は其稿本たゞ一部を存するのみにて　未だ世に公にすべき見込も無之　随て関係者の氏名発表せられざるは多少遺憾にも有之候により　何か妙案なきかと平素考へ居り候次第に御座候　今般御注意をいたゞき候については尚同僚とも更に相談いたし度存候　先は乍遅御礼

申上度　匆々如斯由　敬具
　四月二十三日　辻善之助
井上通泰先生
　　研北

『大日本史料』は、明治になって、平安時代から幕末までの日本の歴史資料を編年体で集めたものです。明治34年（1901）から刊行するのですが、通泰はそれに編纂分担者の名前がないので、ちゃんと名前を入れた方がいいという書簡を送ったにちがいなく、これはそれに対する返事です。辻は、今までの経緯があってなかなか載せられないが、「史料編纂始末」なるものを作って対応していると述べます。三上参次も辻善之助も、姫路のふるさととつながる歴史学者たちで、そういった人との交流が続いてゆきます。

18　鈴木貫太郎の書簡、山県有朋との関係

もう時間になりますので、まとめなければなりません。やはり井上通泰の人脈を考えるときに、政治家と皇室を抜きに語れないところがあります。今回展示されているものの中に、鈴木貫太郎（1868～1948）の書簡があります。鈴木は軍人・政治家であり、2つのことで歴史上大きな事件に遭っています。1つは、昭和11年（1936）の二・二六事件の時に襲撃されて重傷を負いますが、助かったことです。もう1つは、42代の内閣総理大臣になって、昭和20年（1945）の敗戦に対応したことです。

鈴木は南天荘同人会の会員で、通泰の弟子でした。大正8年1月23日（消印は8年1月24日、江田島）、江田島兵学校から通泰に出した書簡（個人蔵、図録16頁）が残っています。鈴木は海軍兵学校長でしたので、江田島にいたのです。

（封筒表）
東京市麹町区内幸町
　　井上通泰殿
（封筒裏）
広島県江田島兵学校
　　鈴木貫太郎
　　孝子
（書面）
拝承仕候へは　御母堂様御養生の御甲斐なく御逝去遊され候御事誠に驚き申候　定めし先生にも御悲痛の御事と奉拝察候　甚た軽少なから別封ご神前に御供へ被下度奉希上候
　一月二十三日
　　鈴木貫太郎
　　同　　孝子
井上通泰先生

最初の「御母堂様御養生の御甲斐なく御逝去遊され候御事」というのは、通泰の養母の小松が大正8年1月11日に死去したことを指します。そのことを伝え聞いて、鈴木が通泰にお悔やみ状を出したのです。「別封」というのは、もちろん御香典でしょう。

また、先に触れた山県有朋が大正11年2月1日に亡くなりました。山県は第3代、第9代の内閣総理大臣を務めましたが、葬式は雨の中で参列者がなくて非常にさびしかったそうです。山県伊三郎（1858～1927）は官僚ですが、養子になっていましたので、法要の案内を通泰に送ったのです。大正11年3月25日（消印は□年3月30日、差出地不明）の封書（姫路文学館蔵）です。

（封筒表）
麹町区内幸町三ノ一
　博士　井上通泰殿
（封筒裏）
東京麹町区五番町一四
　　山県伊三郎
（書面）
拝啓　時下愈御清康奉賀候　陳は来四月九日午前十時より　京橋築地本願寺に於て　亡父報国院釈高照含雪大居士の一座法要偖行仕　引続き粗齋差上度候間　御枉駕被成下度　此如御案内申上候
敬具
　大正十一年三月廿五日
　　山県伊三郎
　博士井上通泰殿
追て乍御手数　四月五日迄に　麹町区五番町十四番地山県伊三郎宛御来電の程　御一報願上候

4月9日、京橋築地本願寺で父の法要を行い、その後で食事を出したいので、出席してほしいという書簡です。伊三郎は、法要に際してずいぶん苦労したにちがいありません。

山県は元老として日本をリードしてきましたので、国葬でしたが、大隈重信の葬儀に比べてさびしかったそうです。通泰も、「山県公薨去せられしをり」という詞書で、「目さめずやいかに世のひとふたつなき国の柱のをれしひびきに」という歌を詠んでいます。2人といないこの国を支えた人が亡くなったのに、世間の人はその意味を考えないのか、という不満を述べます。世間の冷たさに対する憤りがあったにちがいありません。

山県は、明治39年（1906）6月、明治の短歌を旧派と新派の隔てなくしたいと考えて、通泰に常磐会を開かせました。しかし、大正11年2月に山県が亡くなると、常磐会は16年の活動を終えて解散してしまいます。16年以上にわたる付き合いは、こういう形で幕を閉じたのです。

19　『明治天皇御集』の編纂と『万葉集』の進講

今、大正11年刊行の『明治天皇御集』が展示されています。これは大正元年（1912）から編纂が始まって、大正8年、井上通泰はその功で勲三等旭日中綬章を受けて、やっと刊行されました。宮内大臣子爵の牧野伸顕（1962～1949）が大正11年8月29日、通泰にあてた封書（姫路文学館蔵）が残っています。

（封筒表）
元臨時編纂部委員　井上通泰殿
（封筒裏）
宮内大臣子爵　牧野伸顕
（書面）
臨時編纂部編纂

明治天皇御集　　壱部
右
天皇陛下　　思召ヲ以テ
下賜相成候間此段申入候也
　大正十一年八月二十九日
　　宮内大臣子爵　牧野伸顕
元臨時編纂部委員　井上通泰殿

大正天皇の思し召しで、『明治天皇御集』が下賜されたときに添えられた書簡です。それに添えられた封書なので、封筒には住所の記載はなく、切手もありません。通泰には「明治天皇御集の編纂について」という長い文章がありますので、それをご覧くださると、編纂の経緯がわかります。

通泰は『昭憲皇太后御集』も編纂していますが、これが出るのは大正 13 年です。『明治天皇御集』が大正 11 年、『昭憲皇太后御集』が大正 13 年ですので、通泰は明治天皇とその皇后であった昭憲皇太后の 2 人の御集の編纂に関わったのです。常磐会を主宰し、御歌所寄人になり、天皇・皇太后の歌集を編纂したというのはたいへん名誉なことだったはずです。今の「歌会始」を見てもわかるように、天皇家と和歌の関係は今日まで続いています。ですから、井上通泰は、近代日本の和歌を考える上で非常に重要な役割を果たしたと言っていいでしょう。

最後に、昭和 4 年 5 月 14 日（消印は 5 月 14 日）、井上通泰が片山経治（？～？）にあてた封書（兵庫県立歴史博物館蔵、図録 16 頁）を取り上げます。

（封筒表）
奈良県磯城郡川西村結崎
　　片山甚右衛門殿
（封筒裏　印刷）
東京府渋谷町青葉十番地
　　南　天　荘
（書面）
御書状拝見致し　御示の第二案に撰ひ候て　鷲家に一泊と定め申候　皇后陛下より万葉集進講を命せられ候て　本日より開講致候　右は善を分つべき人々にはお話し被下候てよろしく候　尤新聞などに出で候事はおそれ多く候
　五月十四日　　南天荘

片山経治は通泰の弟子と思われますが、未確認です。2 人の間で旅行のコースの相談があったようで、第 2 案の鷲家 1 泊を選んでいます。鷲家は奈良県吉野郡東吉野村鷲家（わしか）かと思います。

「皇后陛下より万葉集進講を命せられ候て　本日より開講致候」とあり、昭和 4 年 5 月 14 日から、昭和天皇の香淳皇后に『万葉集』の進講を始めています。昭和 6 年（1931）には大正天皇の貞明皇太后に『万葉集』の進講を命ぜられ、それも始めています。昭和天皇の皇后と、亡くなった大正天皇の皇太后に『万葉集』の進講をしているのです。通泰の万葉集研究はこうして皇室につながっています。

今、5 分過ぎてしまったので、言葉が足りませんけれども、ここまでにします。通泰は松岡家の家族から作家・学者・政治家・皇族に至るまで、特に和歌を詠み、和歌を研究することで関わりました。そのようにして日本の近代和歌に深く関わったところに存在感があったと言えましょう。もちろんそれとは別に、南天荘同人会という全国に広がる弟子たちがいて、そのことは 11 月に井上舞さんが話してくださるはずです。またここにお集まりいただいて、お話をお聞きくだされば幸いです。

こうして書簡を読むことで、井上通泰の華麗なる人脈が見えてきましたが、近代日本で果たした役割を、私たちはまだ十分に捉えることができていないという思いを新たにしています。ですから、改めて展示をご覧になって、今日のお話を思い出してくだされば何よりです。そして、この福崎とゆかりの深い井上通泰の功績を顕彰しながら、この町の町づくりの中に生かしていただければいいと思います。思えば、山桃忌では、やはり柳田国男に光が当たることが多く、井上通泰にはあまり光が当たってきませんでした。改めて通泰のことをしっかりと把握したいと思いますので、姫路とも手を組んで、日本に発信していきたいと思います。ご清聴ありがとうございました（拍手）。

20 『播磨国風土記』に関する会場からの質問

質問者　最後に兄弟揃って、『播磨国風土記』の研究に入っていったんですけれども、それはなぜまたそういうふうに。

石井　『播磨国風土記』のことは、前に山桃忌でお話し申し上げたことがあります。柳田国男は千束の巨人伝説を引いたりしながら、『播磨国風土記』を民俗学の視点で研究します。井上通泰は『播磨国風土記』の三条西家本を元に『播磨国風土記新考』を著して、国文学や歴史学の視点で読み解きます。きちんとした本文校訂をしたので、今でもその基礎研究は意味を持ちます。松岡静雄は『播磨風土記物語』という小さな本を書きました。それは風土記の中からいくつかの要素をピックアップしてまとめます。簡単に言ってしまうと、人類学の視点で、『播磨国風土記』から昔の生活や習慣・信仰を取り上げたのです。ですから、柳田国男は民俗学、井上通泰は歴史学・国文学、松岡静雄は人類学で読んだのです。通泰が震災で蔵書を失くした後、柳田国男は風土記の研究をしたらどうかと励ましたそうです。それで、通泰は『播磨国風土記』をはじめとする風土記の研究に入ってゆくのです。この兄弟たちにはライバル心があったと思いますが、相互に刺激を受けながら独特の研究を生み出したのだと思います。

司会　ありがとうございました（拍手）。

参考文献

・姫路文学館編『松岡五兄弟』姫路文学館、1992 年。
・福崎町立柳田國男・松岡家記念館編『井上通泰展』福崎町教育委員会、2016 年。

付記

福崎町立柳田國男・松岡家記念館、姫路文学館、兵庫県立歴史博物館の諸機関ならびに松岡祐之、山口紀子の両氏に掲載の許可をいただきました。新聞の調査にあたっては、東京学芸大学附属図書館の高

橋隆一郎氏にお世話になりました。ご関係の皆様に御礼申し上げます。

翻刻にあたっては、旧漢字を新漢字に改めました。紙幅の関係で、多くの書簡について、原文通りの改行をせずに送り込み、意味の切れる箇所で 1 字あきにして、読みやすくしました。

柳田国男の字体は 20 年以上草稿や書簡で見てきましたが、今回は井上通泰あての書簡が主であり、各人の字体に慣れてないため、翻刻はなお不十分です。御修正をお願いします。

（2016 年 10 月 15 日、神崎郡歴史民俗資料館にて講演）

編集後記

本報告書は、平成 28 年度の広域科学教科教育学研究経費に採択された「国際化時代を視野に入れた歴史・文化・教育に関する戦略的研究」のプロジェクトの報告書である。石井正己を研究代表者として、君塚仁彦、橋村修、大澤千恵子の 4 人で構成して行ったものである。
申請時の「研究の概要」は次のとおりであった。

かつて帝国日本は台湾・樺太・朝鮮・南洋群島・満洲などのアジアに植民地を拡大し、ハワイや南北アメリカに移民を送り出してきた歴史がある。しかし、植民と移民の双方を視野に入れた帝国日本の研究はまだ始まったばかりである。現在、急速な国際化が進む時代を迎えて、そうした歴史と向き合うような研究と教育を進めてゆくには、世界を視野に入れた研究が必要であり、日本にはそれを直視しなければならない責務がある。そこで、このプロジェクトでは、歴史・文化・教育が交差する領域を対象として戦略的な研究を展開したいと考え、重要度の高い 4 つのテーマに絞って研究を進めることにした。1 つは、実学から最も遠いとされてきた〈文学研究と文学教育の意義〉を考え、再構築する契機を探る。2 つは、ナショナリズムの台頭と連動して重要視されはじめた〈伝統的な言語文化に対する実践〉を比較し、その実態を把握する。3 つは、国民教育をつくる機能を持つ博物館のあり方について、〈アジアの戦後博物館〉という視点から検討し、認識の差違を明らかにする。4 つは、アジア・モンスーンの気候にめぐまれた日本の〈海と山からなる文化の特性〉を把握し、教育への展開を考える。これらのそれぞれについて、国内外で活躍する研究者を招聘して国際研究フォーラムを実施するとともに、その成果を報告書または出版物として刊行し、広く周知することを目指す。

また、「研究を実施するための要求理由」は次のとおりであった。

今年、石井正己編『博物館という装置―帝国・植民地・アイデンティティ―』を勉誠出版から刊行し、日本・アジア・ヨーロッパを視野に入れた論考を集約した。この 1 冊が生まれるにあたっては、それまで植民地主義と帝国主義について重ねてきた研究の蓄積があった。この研究成果は国内外で高い評価を得はじめており、ここで休止するわけにはいかない。急速に国際化が進み、リスクを負った時代にあって、学界はもちろん、社会に対して発言力のある研究と教育を進めるには、こうした歴史認識の形成が不可欠である。今回のプロジェクトの企画は、日本における教育の基幹大学である本学が国際的に果たすべき役割の中でも、特に重要な意義を持つと考えられる。しかもこの研究は、教科を越えた学校教育のみならず、それと連動する国民教育に広げようとするもので、国境を越える国際交流を視野に入れている。こうした研究を実現するには、異なる分野に属する研究者の協働が必要であるが、それは広域科学教科教育学のような場所でなければ難しい。この規模のプロジェクトを実現するには 2 カ年にわたる研究が必要であり、この成果が公開されれば、国内はもとより、アジアの諸国からも信頼を得られるにちがいない。

本年度は 2 年計画の 1 年目と考えたので、「研究の概要」に従って、研究計画の前半を次のように実施した。

①東京学芸大学フォーラム　昔話の歴史と現代―教科書を中心に―
日　程　2016 年 11 月 19 日（土）　13:00 ～ 17:00
会　場　東京学芸大学　W110 教室
内　容　記念講演　現代語りの可能性―女性の視点から―
國學院大學栃木短期大學非常勤講師　野村敬子
基調講演　海を渡った日本の昔話―アジアの植民地・アメリカの移民地の教科書―
東京学芸大学教授　石井正己
シンポジウム　アジアの教科書に見る昔話
日本の教科書と昔話　東京学芸大学准教授　大澤千恵子
中国の教科書と昔話　新潟大学名誉教授　馬場英子
韓国の教科書と昔話　國學院大學非常勤講師　金廣植
司会　東京学芸大学教授　石井正己
後　援　日本民話の会

---

②東京学芸大学フォーラム　アジアの歴史・文化・教育
日　程　2016 年 12 月 3 日（土）　10:00 ～ 12:00
会　場　東京学芸大学　W110 教室
内　容　研究発表

翻訳における異民族の文化受容についての思考
—蒙古族の本森(ベンセン)・烏力格尓(ウリゲル)を事例に—
一橋大学大学院博士課程　巴特尓
『官話指南』の編者について　東京学芸大学大学院博士課程　楊鉄錚
通州師範学校に勤めた日本人教習について　東京学芸大学大学院博士課程　劉佳
杢太郎の北京—『満州通信』と『支那南北記』を中心に—
東京学芸大学大学院博士課程　范文
司会　東京学芸大学大学院修士課程　安松拓真　水野雄太

③東京学芸大学フォーラム　文学の研究と教育
日　程　2016年12月4日（日）　11:00～12:00
会　場　東京学芸大学　W110教室
内　容　研究発表
『太平記』三種の神器考　東京学芸大学大学院修士課程　安松拓真
「夢語」を求める蕉　東京学芸大学大学院修士課程　水野雄太
司会　東京学芸大学大学院修士課程　安松拓真　水野雄太

④東京学芸大学フォーラム　文学研究の再構築
日　程　2016年12月4日（日）　13:00～17:00
会　場　東京学芸大学　W110教室
内　容　趣旨　文学研究に未来はあるか　東京学芸大学教授　石井正己
研究発表　韓国語版『今昔物語集』の翻訳をめぐって—鬼を中心に—
韓国・崇実大学校教授　李市埈
講演　東アジア文学研究の未来に向けて　小峯和明
講演　古態論のさきには—平家物語研究をひらくⅡ—　松尾葦江
講演　和歌の帝国—菅江真澄・林子平・古川古松軒—　錦仁
共同討議　文学研究の再構築のために
李市埈　小峯和明　錦　仁　松尾葦江　韓国・全南大学校教授　金容儀
司会　石井正己

本報告書には、このうち、①の金廣植氏の論文、②③の大学院生の研究発表をそれぞれ収録し、他にも関連する論文や講演を収録した。なお、①については、新たなエッセイや論考を加えて、石井正己編『教科書と昔話』（仮称）と題して三弥井書店から秋に刊行する予定である。また、④については、再び、1月28日に、私の個人研究費を使って、小峯和明・松尾葦江・錦仁と4人で「緊急共同討議　文学研究に未来はあるか」と題したフォーラムを開催したので、これを加えて、石井正己・錦仁編『文学研究の再構築』（仮称）と題して笠間書院から秋に刊行する予定である。

なお、本年度配分された金額は450,000円であった。この経費では報告書を印刷することができないので、本報告書は私の個人研究費を使って印刷する。（2月10日、石井正己）

平成28年度広域科学教科教育学研究経費報告書

国際化時代を視野に入れた歴史・文化・教育に関する戦略的研究

平成29年（2017）3月15日発行（100部）

研究代表者　石井正己
発行所　東京学芸大学
郵便番号184—8501
東京都小金井市貫井北町4—1—1
東京学芸大学　石井正己研究室